

ひこ ざき かい づか  
彦 崎 貝 塚 3

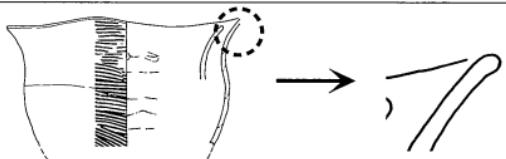
—範囲確認調査報告書（縄文晩期）—

2008年3月

岡山市教育委員会

# 『彦崎貝塚3』正誤表

読者の皆様、お手数ですが、訂正箇所にシールの貼替えをお願いします。

ページ	行	誤	正
1	2	第1節 立地	第1節 遺跡の立地
3	5	(香川県仁尾町)	(香川県三豊市)
7	11	盾築弥生墳丘墓	楯築弥生墳丘墓
38	第24図	土器番号28	
62	26	いるのはなかろうか。また、	いるのではなかろうか。また、
70	第44図	(S=1/10.000)	(S=1/10,000)
79	26	児島含めた	児島を含めた
87	97 口径	0	—
	104 <small>累最大径</small>	0	—
報告書抄録	特記事項	確かめかめられた。	確かめられた。

巻頭図版 1



彦崎貝塚俯瞰

巻頭図版 2



彦崎貝塚近景（ハイガイの散布状況）

ひこ ざき かい づか  
彦 崎 貝 塚 3

—範囲確認調査報告書（縄文晩期）—

2008年3月

岡山市教育委員会

## 序

岡山市の南部、灘崎地域はかつて吉備の穴海と通称された内湾を扼する児島の一角をなしていました。現状では、陸地と海域の境が広大な水田や畠地によって見分けがつきませんが、かつてはそのほとんどが海中にあったといいます。現在の姿は、児島湾の継続的な干拓によってもたらされたといっても過言ではありません。

県南における干拓事業は、戦国期末期の宇喜多に始まり明治後期の児島湾開墾事業を経て昭和33年の締め切り堤防の完成、そして昭和38年に七区が完成し天然の内湾から人造湖－児島湖－となりました。

豊富な魚介類をはぐくんだ吉備の穴海は貝塚としてその存在をしめしてくれます。最も早いものは、内湾ができる前の縄文時代早期のものがありますが、本格的な貝塚は縄文時代前期から作られ、中近世まで規模の大小はあれ継続されます。

縄文時代の貝塚の位置を地図に落としていくと不思議なことに似たような地形のところに集まります。それは、丘陵の先端や谷奥、小島といったところです。つまり、そこが当時の彼らの生活の拠点であったようです。その点を結んで何もないところを広義の吉備の穴海といえそうです。まさに、内湾を見渡す格好の位置に貝塚が作られています。

また、全国的にみましても瀬戸内海は縄文貝塚が多い地域だといわれています。しかし、開発の波によってそのほとんどが消滅してしまってきています。それは、原始・古代の一等地が現代の一等地と相違ないことを示しています。

そのような中にあって、彦崎貝塚は、平成15・16年度の調査によって保存状態が良好であることが確認されました。また、マダイ・クロダイ・サワラ・ママカリ等現在も岡山では馴染みのある魚介類が約6000年前の貝層から出土しています。このように多くの先人たちの英知を教えてくれる彦崎貝塚は、国指定と保存活用を目的にして多くの専門分野の先生方により幅広く総合的に解析されています。本作は、その第三冊目となるものです。あわせてご活用いただければ幸いです。なお、彦崎貝塚は平成20年3月に国指定重要文化財(史跡)に指定されました。

最後になりますが、発掘調査から報告書作成にいたるまでに多くの関係者の皆様方にご協力を賜り、深甚の謝意を申し上げます。

平成20年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 山根 文男

## 例　　言

1. 本書は、彦崎貝塚の範囲確認調査報告書のシリーズ3である。調査地は、岡山市灘崎町彦崎3209-1番地である。
2. 範囲確認調査は、国指定及び保存活用に先立つもので、岡山市教育委員会が調査を実施した。
3. 範囲確認調査は、平成18年10月25日～平成18年11月9日まで実施した。10m×1.5mの試掘溝一本を設定した。調査面積は15m<sup>2</sup>である。
4. 範囲確認調査は、彦崎貝塚確認調査対策委員会の指導のもと、田嶋と西田が担当した。
5. 報告書作成にあたっては、遺物、図面整理を岡山市埋蔵文化財センターにおいて田嶋と西田が実施した。遺物整理の過程で岡山市埋蔵文化財センターの木村真紀、石井亜希子、山元尚子の協力を得た。
6. 遺物の分析、鑑定、同定については、調査及び報告書作成期間中、下記の諸氏、機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、報告文を頂戴した。

胎土分析	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）
貝・動物遺存体鑑定	石丸恵利子（京都大学大学院博士後期課程）
石器石材鑑定	竹広文明（広島大学） 白石　純（岡山理科大学自然科学研究所） 村田裕一（山口大学） 中越利夫（時悠館） 藤原好二（倉敷埋蔵文化財センター）
7. 附章3は、学史的に重要であるため書式以外は原文のまま転載した。なお、図版は再トレースした。
8. 本書の編集、構成は田嶋が担当した。
9. 本書の執筆は、第3章第2節3(C)と第3章第2節4(D)・(E)を西田が執筆し、それ以外は田嶋が執筆した。附章は、執筆者を別に明記している。
10. 遺構及び遺物の写真撮影は、西田と田嶋が行った。
11. 出土遺物及び実測図・写真等の記録資料は、すべて岡山市埋蔵文化財センター（岡山市網浜834-1）において保管している。
12. 英訳は、田嶋が行った。また点検修正を金田善敬氏（岡山県教育庁文化財課）に依頼した。

## 凡　例

1. 本報告書の高度値は海拔高である。
2. 掲載図に用いた北は、特別な断りがない限りすべて真北である。
3. 本報告書の遺構、遺物実測図の縮尺については明記しているが、特殊なものについては、一部例外はあるものの、以下のように統一している。  
遺構：竪穴住居（1/30・1/50・1/60）、土坑（1/20）、柱穴・柱穴状遺構（1/20）、土器だまり（1/20）  
遺物：土器（1/3）、石器・石製品（1/2・2/3）、金属製品（2/3）、土製品（S=2/3）
4. 本書に掲載した遺物の実測図の表記については、土器については番号のみを付し、その他のものについては、下記の通り表記した。  
土製品：C 石製品：S 金属製品：M
5. 本報告書に掲載した第2図は、倉敷市役所作成の50,000分の1都市計画図を縮小複写し、加筆したものである。
6. 土器、石器の観察表における色調は『新版標準土色帖(2001年度後期版)』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所票監修）によっている。

# 本文目次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境（田嶋）	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 発掘調査の経緯と体制（田嶋）	1 7
第1節 経緯	1 7
第2節 体制	1 8
第3節 彦崎貝塚発掘調査等日誌抄	2 0
第3章 発掘調査の概要（田嶋）	2 4
第1節 調査区の設定と調査方法	2 4
第2節 トレンチ40の調査	2 4
1 概要	2 4
2 基本層序	2 9
3 縄文時代の遺構と遺物	3 6
(A) 遺構	3 6
(B) 包含層出土の土器	4 0
(C) 石器(西田)	4 4
4 弥生時代とそれ以降の遺構と遺物	4 8
(A) 遺構	4 8
(B) 弥生時代の遺物	5 3
(C) 弥生時代以降の遺物	5 3
(D) 弥生時代の石器（西田）	5 4
(E) T 8・T14の石器（西田）	5 4
第3節 小結（田嶋）	5 8
1 トレンチ40の調査成果	5 8
2 縄文晚期前半の彦崎貝塚	6 0
3 土器溜まり1出土の土器について	6 5
第4章 まとめ（田嶋）	6 8
第1節 3次（平成15・16・18年）にわたる範囲確認調査のまとめ	6 8
第2節 土地利用と遺跡構造の変化	7 1
附章1 彦崎貝塚出土の動物遺存体－水洗選別によって得られた試料について－ (石丸恵利子)	9 5
附章2 彦崎貝塚出土縄文時代早期・前期土器の胎土分析（白石 純）	1 1 1
附章3 昭和十年十二月 備前児島郡灘崎村大字彦崎貝塚調査概報（佐藤美津夫）	1 1 3
観察表	8 1
SUMMARY	
報告書抄録	

## 挿入図目次

第1図 遺跡位置図

第2図 彦崎貝塚周辺の縄文時代の遺跡 (S = 1 / 100,000)

第3図 彦崎Z1土器分布図

第4図 彦崎貝塚・木目遺跡採集土器 (S = 1 / 3)

第5図 後期古墳と製塩遺跡 (S = 1 / 10,000)

第6図 彦崎天神社出土須恵器 (S = 1 / 3)

第7図 天王池出土円面硯 (S = 1 / 3)

第8図 迫川大池採集遺物 (S = 1 / 3 • 2 / 3)

第9図 彦崎貝塚出土縄文中期鳥嘴形土器

第10図 彦崎貝塚ほか採集土器 (S = 3 / 4)

第11図 昭和24年1月例会プリント

第12図 彦崎貝塚出土サヌカイト製石器

第13図 新聞掲載記事 (1)

第14図 新聞掲載記事 (2)

第15図 彦崎貝塚周辺の微地形(1) (草原原図、田嶋  
製図トレース) (S = 1 / 2,500)

第16図 彦崎貝塚周辺の微地形(2) (草原原図、田嶋  
製図トレース) (S = 1 / 500)

第17図 彦崎貝塚トレンチ別北壁基本層序模式図  
(S = 1 / 80)

第18図 調査地点位置図 (S = 1 / 1,000)

第19図 T40土層断面図・遺構全体図 (S = 1 / 60)

第20図 T40縄文時代遺構全体図 (S = 1 / 50)

第21図 T40弥生時代遺構全体図 (S = 1 / 50)

第22図 土器溜まり1平・断面図 (S = 1 / 20)

第23図 土器溜まり1出土土器(1) (S = 1 / 3)

第24図 土器溜まり1出土土器(2) (S = 1 / 3)

第25図 土器溜まり1出土土器(3) (S = 1 / 3)

第26図 土坑32平・断面図 (S = 1 / 20)

第27図 縄文晚期包含層出土土器(1) (S = 1 / 3)

第28図 縄文晚期包含層出土土器(2) (S = 1 / 3)

第29図 縄文晚期包含層出土土器(3) (S = 1 / 3)

第30図 T40縄文時代の石器(1) (S = 2 / 3)

第31図 T40縄文時代の石器(2) (S = 2 / 3)

第32図 T40縄文時代の石器(3) (S = 1 / 2)

第33図 壁穴住居2平・断面図 (S = 1 / 30)

第34図 壁穴住居1平・断面図 (S = 1 / 30)

第35図 土坑及びピット平・断面図(1) (S = 1 / 20)

第36図 土坑及びピット平・断面図(2) (S = 1 / 20)

第37図 弥生時代の遺物 (S = 1 / 3)

第38図 弥生時代以降の遺物 (S = 1 / 3) 第39図

T40弥生時代の石器(1) (S = 2 / 3)

第40図 T40弥生時代の石器(2) (S = 2 / 3 • 1 / 2)

第41図 T8・T14出土の石器 (S = 2 / 3 • 1 / 2)

第42図 縄文晚期前半の彦崎貝塚 (S = 1 / 800)

第43図 縄文晚期前半における彦崎貝塚周辺の生態  
系と生業活動

第44図 彦崎貝塚時期別遺構分布及び旧海岸線推定  
図 (S = 1 / 10,000)

第45図 彦崎貝塚出土繊維土器の種子圧痕

第46図 彦崎貝塚における縄文時代土地利用の変遷  
(S = 1 / 2,000)

第47図 周辺遺跡の時期別石器組成

第48図 彦崎貝塚の時期別石器組成

第49図 彦崎貝塚の貝種組成の変化

第50図 彦崎貝塚における動物遺存体の時期別最小  
個体数変化

## 表目次

- 第1表 T40縄文時代石器石材組成表  
第2表 T40弥生時代石器石材組成表  
第3表 彦崎貝塚縄文時代遺構一覧表  
第4表 彦崎貝塚出土骨角貝製品組成表  
第5表 彦崎貝塚出土の縄文時代石器組成表

## 図版目次

### 巻頭図版

- 図版1 彦崎貝塚俯瞰  
図版2 彦崎貝塚近景（ハイガイの散布状況）

### 巻末図版

- 図版1 埋まり行く吉備の穴海（昭和21年）  
図版2 彦崎貝塚周辺の地形（明治43年）  
図版3 1. T40調査前状況（北東から）  
2. T40調査風景（西から）  
図版4 1. T40土器溜まり1検出状況（北東から）  
2. T40土器溜まり1掘り下げ状況（北から）  
図版5 1. T40縄文土器検出状況（西から）  
2. T40土坑32検出状況（北東から）  
図版6 T40北壁セクション（南西から）  
図版7 1. T40弥生時代遺構検出状況（北東から）  
2. T40土坑、ピット群検出状況（南東から）  
図版8 1. T40住居2  
2. T40住居1  
図版9 1. T40土坑8検出状況（北から）  
2. T40土坑8調査状況（北から）  
図版10 1. T40埋め戻し風景（東から）  
2. T40埋めも戻し後のひと時  
図版11 1. 土器溜まり1出土土器(1)（表）  
2. 土器溜まり1出土土器(1)（裏）  
図版12 1. 土器溜まり1出土土器(2)（表）  
2. 土器溜まり1出土土器(2)（裏）  
図版13 1. 土器溜まり1出土土器(3)（表）  
2. 土器溜まり1出土土器(4)（表）  
図版14 1. 縄文時代の石器(1)石鎌・削器(表)  
2. 縄文時代の石器(1)石鎌・削器(裏)

- 図版15 1. 縄文時代の石器(2)石核(表)  
2. 縄文時代の石器(2)石核(裏)  
図版16 1. 縄文時代の石器(3)剥片(表)  
2. 縄文時代の石器(4)凹石ほか（表）  
図版17 1. 縄文時代の石器(5)水洗選別資料（表）  
2. 縄文時代の石器(5)水洗選別資料（裏）  
図版18 1. 弥生土器  
2. 弥生時代の石器（表）  
図版19 1. 彦崎貝塚戦前採集資料（1）  
2. 彦崎貝塚戦前採集資料（2）

# 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

## 第1節 立 地

彦崎貝塚は、岡山市南部の岡山市灘崎町彦崎2994ほかに所在する（第1図）。遺跡周辺は、基本的に花崗岩基盤であるが、遺跡東岸にあたる明石山は閃緑岩やフォルンフェルスを部分的に形成している。また、遺跡背後の三方（東・西・南方向）には標高約150～160mの明石山、とんきり山、稻荷山等が鼎立している。そのため北に向かって伸びる丘陵によって天然の瀧過された伏流水が遺跡に北面する酒屋付近（現在は営業をしていない）で湧水地点となり天然の恵みとして供与している。

また、彦崎貝塚は稻荷山から伸びる痩せた丘陵先端の標高約6mの海岸段丘上に形成された遺跡で、狭いながらも児島では、懐深い開析谷を形成するという最も好条件を備えた立地の一つといえる。

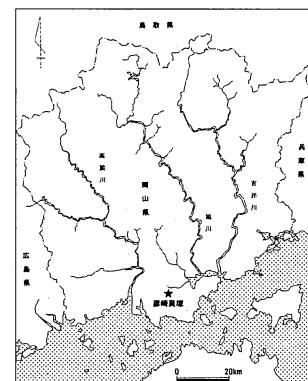
同様の地形は、当遺跡から東に約3kmの位置にある倉敷市舟津原貝塚、磯の森貝塚、船元貝塚周辺でも認められる。また、当時児島はより小さい島も縄文人の一連の生活圏として形成しており、その小島にも貝塚を形成する場合がある（羽島貝塚、船倉貝塚、大内田貝塚など）。このことは、海中の島である児島が先天的な地形的制約を受けながらもそこを利用した人間が遺跡として多数の痕跡を残していることからも衣食住の面で比較的好条件であったことがうかがい知れるのである。しかし、児島において彦崎貝塚以東に前期以降も継続して縄文貝塚が営まれないのは、狭い児島の中あっても複雑な地形的、生態的な要因が作用した結果を示しているだろう。このことは、出崎船越南遺跡の調査で縄文時代前期の泥炭層が検出されたことからもその複雑な環境の存在を予想できる（松本2007）。

現状でこそ丘陵部と旧海域部が近世以降の干拓と市街化によって判別できなくなっているが、明治39年竣工の第一期児島湾干拓事業以前の地形測量図をみると往時の海岸線の状況がおよそ標高1～1.5mラインと推定される。しかし、急速な市街化にともなう交通網、住環境の整備は、少なからず彦崎貝塚周辺でも直接・間接的に影響を蒙りつつあるのが現状である。

## 第2節 歴史的環境

彦崎貝塚形成以前の周辺の環境はどのようなものだったのだろうか。灘崎地域で最も古い人間活動の痕跡は、彦崎地区の左古谷遺跡と迫川地区の迫川大池遺跡で知ることができる（田嶋2001）。前者では、遺構として炉址、遺物としては尖頭器、スクレイパー類の石器や剥片（全てサヌカイト製）、後者では、削器や剥片（頁岩、サヌカイト製）が検出されている。いずれも湧水地点が付近にあることが共通点である。遺構や遺物の量から推定して、一時的なキャンプサイトとして利用されたと考えられる（田嶋2001・2006・2007）。

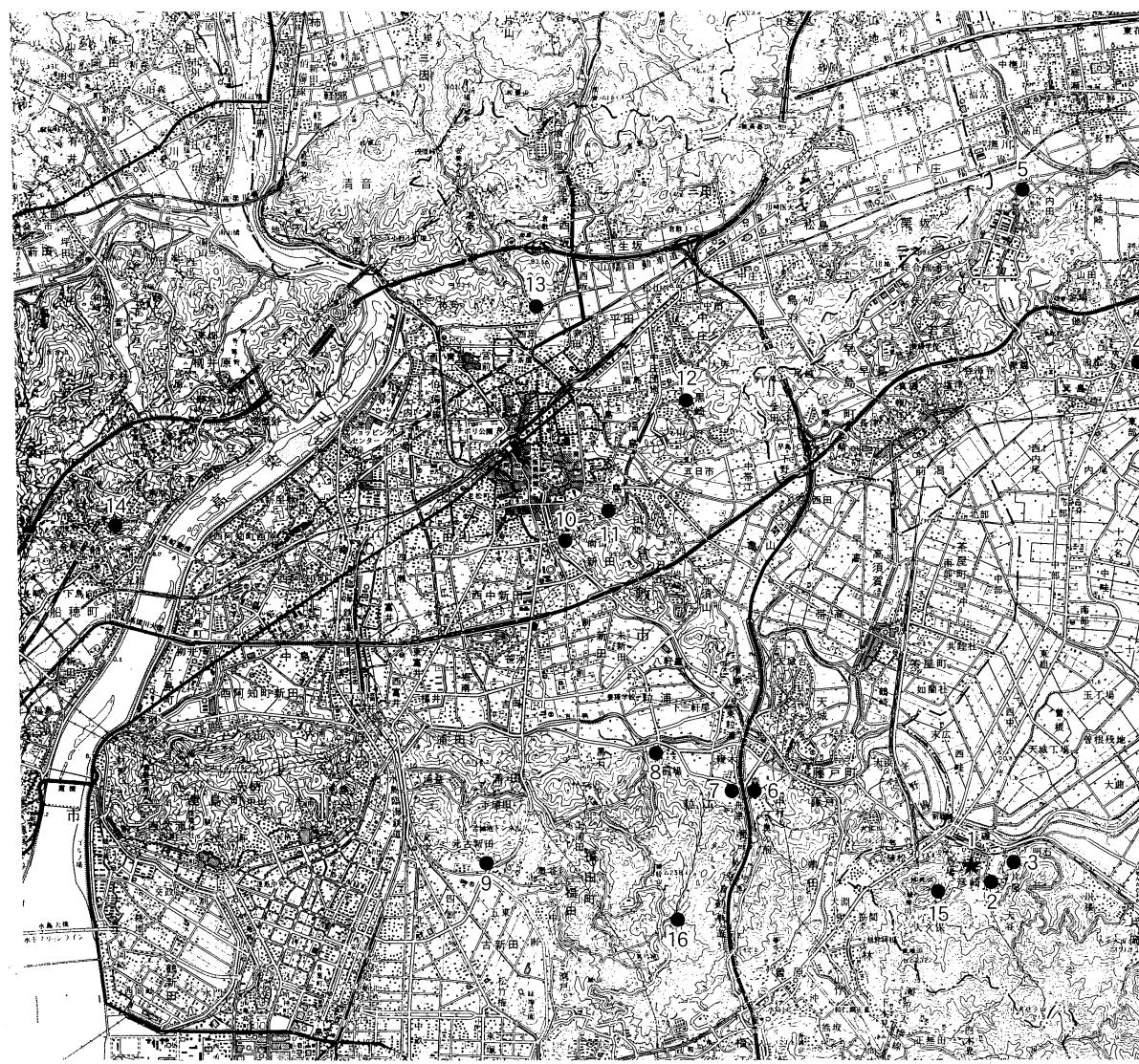
同時期の後期洪積世（約20,000～23,000年前）の遺跡としては、周辺では鷺羽山遺跡や宮田山遺跡、宮山遺跡、王子ヶ岳南麓遺跡等が著名である（間壁1996）。また、当該期に瀬戸内海は形成されて



第1図 遺跡位置図

おらず、現在の島嶼部付近にラグーンや小河川の河口部が形成されており、陸化した地点を基点にして四国側まで徒歩で移動可能であったと推定される（安川1987）。また、当時の生態系を知ることができるものに、瀬戸内海の底引き網漁等で引き上げられた大型動物の化石がある。ナウマンゾウやニホンムカシジカ等が検出されている。こうした動物化石は、大陸と日本が陸橋で連結していたことを示す貴重な資料であり、こうした動物群が採捕できる植物群も植生していたと考えられる（山本ほか1988）。しかし、彦崎貝塚が面する児島北岸では干拓地のため検出される事例が少ないが、曾原遺跡では細石器が採集されている（藤原1992）。

灘崎地域では、現時点では明確な縄文時代草創期の遺物は検出されていない<sup>(1)</sup>。児島の南側に位置する倉敷市児島下津井等では槍先形尖頭器という特徴的な石器が検出されている。帝釈峠馬渡岩陰遺跡（広島県庄原市）や上黒岩岩陰遺跡（愛媛県久万高原町）等の例から、隆起線文土器や無紋土器に伴



1彦崎貝塚 2彦崎保育園遺跡 3東土井遺跡 4妹尾住田遺跡 5大内田貝塚 6舟津原貝塚（遺跡）7磯の森貝塚 8船元貝塚  
9福田貝塚 10船倉貝塚 11羽島貝塚 12黒崎貝塚 13西岡貝塚 14里木貝塚 15左古谷遺跡 16一尺谷上池遺跡

第2図 彦崎貝塚周辺の縄文時代の遺跡(S=1/100,000)

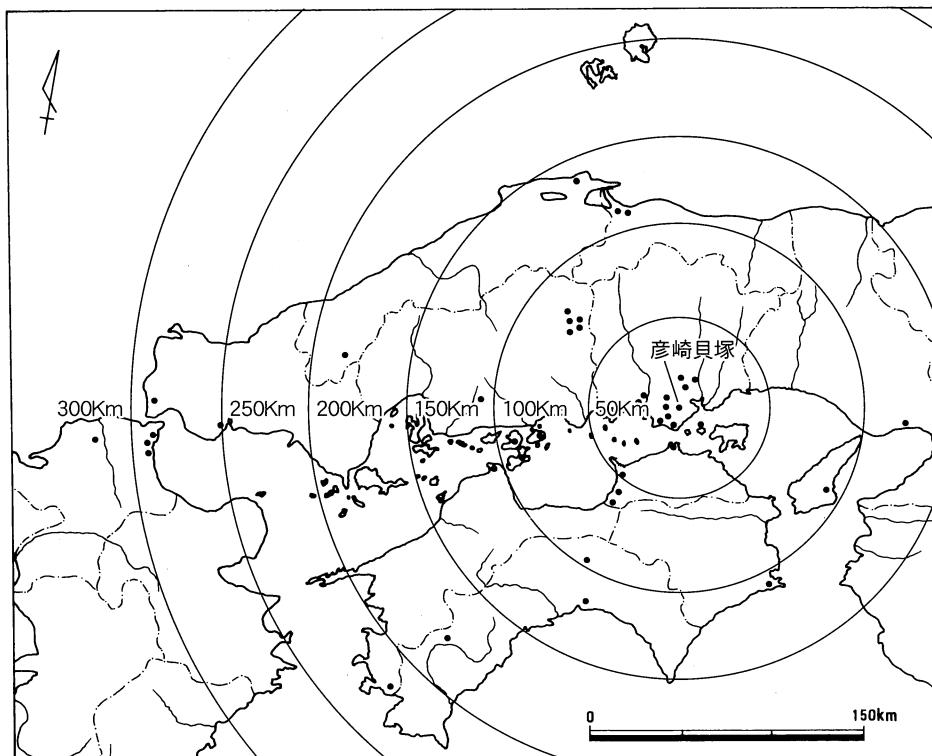
うらしい。しかし、隆起線文土器より無紋土器が古いという見解もあり未だ底は見えない（遠部2006）。県内では、大河内遺跡（勝央町）で有舌尖頭器と神子柴型石斧が纏まって検出され<sup>②</sup>、東遺跡（真庭市）でも神子柴型石斧が出土している<sup>③</sup>。約1万数千年～1万年前のこととされる。

さて、現在の瀬戸内海はいつごろ形成されたのであろうか。縄文時代早期中頃の黄島貝塚（瀬戸内市牛窓町黄島）ではハイガイの炭素14年代で約8,400前頃を、また、小鳶島貝塚（香川県仁尾町）、礼田崎貝塚（香川県土庄町）のヤマトシジミは、約8,800年前を示した（遠部2007）。少なくともこうした時期に瀬戸内海が形成され始めたと考えられる。しかし、早期貝塚は、基本的に短期遺跡（一型式）であり、その内容は前期以降のものと質的に異なる。遺跡数は、県内では増加傾向にある（平井1987）。しかし、この時点でも瀬戸内海は満水ではない。出崎船越南遺跡（玉野市出崎）の調査で縄文時代前期の泥炭層が検出され、年代測定の結果、6,500年～6,200年前の年代が得られた。背後の花崗岩基盤が海進で洗われた後に、出崎周辺は低湿地状の環境を呈していたらしい。したがって、出崎船越南遺跡は最高海面上昇期（約6,500年前）の直後の時期に形成されたと考えられている。この泥炭層に含まれていた土器は羽島下層式に帰属する（松本2007）。また、年代測定値に時間幅が見られることから鎌木氏が分類された羽島下層式（鎌木他1955）には年代差が認められると思われる。

一方、児島北岸、現在の岡山市街地でも縄文海進の状況証拠が検出されている。それは南方釜田遺跡の発掘調査等によって確認されたものである。G L - 2.5mの生痕中から九州の喜界カルデラ広域火山灰であるアカホヤ火山灰が検出された（扇崎1989）。南九州での火山灰編年学の研究から約7,300年前頃に降下したものとされており、その降下後に海面が上昇したものと考えられる。当該期の遺跡の立地は中部瀬戸内においては、標高10m以下の砂州や海岸段丘上に占地する傾向にあり、遺物は基本的に砂層中から検出される（田嶋2007 b）。中部瀬戸内の遺跡では、羽島下層式期から継続する遺跡が多いが当該期に貝塚は形成されない。このことは瀬戸内海の塩分濃度がまだ魚介類の生息には適していない状態の海域が多かったことを示唆している。羽島貝塚の羽島下層式土器遺物包含層である砂層の標高は0.5mである（藤田他1975）ことを考えると基盤の沈降等を加味しても、関東地方のような大規模な海面上昇を想定できることになる。つまり、地域的に程度の差があったと考えられる。

中葉になると磯の森貝塚（倉敷市）、大橋貝塚（瀬戸内市）、彦崎貝塚（岡山市）等が形成される。しかし、貝塚を形成する遺跡は限定的な様相である。それは、やはり海水の塩分濃度と海水温の影響によるプランクトンの発生等で魚介類の生息域が限定されていたためであろう。また、当該期以降比較的骨角貝製品の需要が高まり、一遺跡での出土点数も増加する傾向にある。北白川下層式土器様式に見られるように類似した土器が広域で使用される。

後葉になると海浜部や島嶼部に進出し貝塚や墓地を形成する遺跡や山間部に展開する遺跡が見られるようになる。彦崎貝塚（岡山市）や里木貝塚（倉敷市）、船倉貝塚（倉敷市）では規模の大きな貝塚や墓地が形成され、一般的に呼称される拠点的性格を持つ集落が出現していく（田嶋2006）。また、当該期には、土器型式や集落形態を異にしながらも内容的に広域に共通した祭祀行為が認められる。例えば、関東地方に分布の中心がある諸磯b式土器には、当該期に限ってイノシシを模った突起を口唇部に持つ土器が出現する（群馬県西部が出現地域）（荻谷2007）。そして、次の諸磯c式期には全く認められないという。一方、彦崎貝塚では、ベンガラを塗布した彦崎Z1式土器にイノシシの頭蓋や下顎を祭祀後に埋納して廃棄した遺構が検出された。彦崎Z1式土器と共に伴した異系統土器には西進してきた諸磯b式土器のモチーフをもつものも認められた（田嶋2006）。彦崎貝塚では、次の彦崎Z2



第3図 彦崎Z1式土器分布図

式にもベンガラが塗布される土器が認められる。両者は、分布域を異にしながらもイノシシ祭祀という共通認識が存在したことを示唆する具体的な事例として重要である。このように動物を具体的に模ったモチーフをもつ土器は関東地方では中期になってより立体的なものへと発達していくが、西日本では全く継承せず素朴な深鉢形土器に終始する。その中にあって、彦崎貝塚出土の中期の鳥嘴状突起を持つ土器は極めて特異である（第9図）（平田1956）<sup>(4)</sup>。こうした前期後葉の一時期（東部九州の曾畠Ⅲ式、西部瀬戸内・山陰の月崎下層Ⅱ式、中部瀬戸内の彦崎Z1式、近畿の北白川下層Ⅱb新・Ⅱc式、関東の諸磯b式に並行関係を認める）に前時期まで見られなかった小地域性が認められるようになるのは、各々在地集落間での広域的な交渉等が比較的頻繁にあり、そうして得た情報や技術等を好意的に受容・咀嚼し、なんらかの形で可視化（具現化）しようとしたことを暗示している。このことは、従来彦崎Z1式土器の分布域は狭いという見解に修正を要するものである（第4図）。そして、こうした接触には海浜部の集落と内陸部の集落が互換的にフレキシブルに媒体となったものと予想される<sup>(5)</sup>。そしてこの動きは、結果として西日本で言えば彦崎Z2式土器の広域分布という再編に到達する。さらに、この彦崎Z2式土器の成立と展開は、中期初頭土器群成立への嚆矢でもある。

中期になると遺跡数は、前時期にくらべ増加傾向になる。また、一つの特徴として鷹島式、船元式、里木式の各土器が中部瀬戸内以外でも、主体・客体的に広範囲に分布するようになる。また、土器形式も深鉢が基本になり、伝統的に当該期全般に踏襲される。鷹島式から船元Ⅱ式にかけては沿岸部での遺跡で比較的よく認められるが、船元Ⅲ式以降になると内陸部や山間部でも認められるようになる。

当該期の代表的な遺跡として、船元貝塚（倉敷市）、里木貝塚（倉敷市）、西岡貝塚（倉敷市）、矢部貝塚（倉敷市）、彦崎貝塚（岡山市）、朝寝鼻貝塚（岡山市）、大橋貝塚（瀬戸内市）、宮下貝塚（瀬戸

内市)、長縄手遺跡(備前市)などがある。縄文海進後の前期後半には海浜部や島嶼部に遺跡が進出したが、それ以降は緩やかに海退に転じ、その後は現海水面になるまでに小海進や小海退を繰り返し、沖積化が漸進的に進行し続けたものと考えられる。したがって、津島岡大遺跡(岡山市)等のように沖積地や幾分低位部に遺跡が展開してくる状況も認められ始めるが遺跡数は少ない。中期も後半になると東からの影響を受け、堅穴住居に石囲炉を採用する遺跡も認められる(長縄手遺跡、彦崎貝塚等)<sup>(6)</sup>が抜きとられる場合も多く(亀山2005)、児島地域では遺跡が減少する傾向になる。船元貝塚(倉敷市)、里木貝塚(倉敷市)、大橋貝塚(瀬戸内市)、彦崎貝塚(岡山市)等では墓地が形成される。

後期は、華麗な磨消縄文土器である中津式土器で開始を告げる。遺跡数は増加傾向を示し、前時期に引き続き、沖積地や低位部、山間部、内陸部に遺跡が進出してくる。一般に斎一的とされる中津式土器や福田K2式土器にも小地域性が存在するようである。また、貝塚を形成する遺跡は依然として限定的であるが、それを形成しない遺跡のほうがかなり多い。この傾向は、縁帶文土器群の津雲A式・彦崎K1、K2式期も同様である。当該期は、東日本からの影響で、福田貝塚のように土偶をもつ遺跡が見られ始める。また、一遺跡で釣針等の骨角器を多量に持つ遺跡も増加する(田嶋2007)。当該期の遺跡の調査事例が増えたため、集落の構造が具体的に知られるようになった。津島岡大遺跡では、堅穴住居1~2棟、作業区、貯蔵区を一つの単位とすることが想定されている(山本2004)。また、県北の久田原遺跡でも同様の構造を示すことがわかっている(山本2004)。児島地域においても彦崎貝塚(田嶋2006・2007)や舟津原遺跡(下澤1988)等で同様の構造が判明しつつある。こうした状況は、現在の山間部集落と構造的な類似性があるという(高橋2001)。当該期は、それぞれの土器型式が一定の個性を持ちながらも他地域との接触によって集団が情報を受容し、互換的に作用していたことが土器の上でも認めることができる。そして、彦崎K2式以後は、原体としての縄文が消失し、九州地域の影響をうけて無紋土器の組成比率が高まる。凹線文土器群の展開から晩期土器群が成立する。近年、県北の堀坂遺跡群(津山市)の調査で、後期初頭から当該期の良好な資料がえられた(豊島編2004、2006)。津雲貝塚(笠岡市)や里木貝塚(倉敷市)、舟津原遺跡(倉敷市)、彦崎貝塚(岡山市)では、後期から晩期にかけての墓地が形成された(平井1987、間壁1996)。

凹線文土器群の遺跡数は、縁帶文期よりは幾分減少するが、晩期になっても大きく変わらない。貝塚を形成する遺跡は、彦崎貝塚(岡山市)、原貝塚(岡山市)や舟津原貝塚(倉敷市)等があり、後期に比べて少ない傾向で規模も小さい。沖積地や山間部、内陸部に遺跡が展開している状況が窺える。児島湾北岸地域では、前半の旭川西岸にある南方釜田遺跡(岡山市)、足守川東岸の吉野口遺跡(岡山市)で良好な一括資料や堅穴式住居、南九州系の管玉、腰岳産黒曜石等が検出されており、その立地からは当時、遺跡近辺まで内湾が入込んでいたことがわかる(草原1997)。中葉では、原尾島遺跡(岡山市)や南溝手遺跡(総社市)があり、後者のように内陸部に遺跡が形成されることも多くなる。後半には、原遺跡(岡山市)、南方前池遺跡(赤磐市)、津島岡大遺跡(岡山市)、百間川沢田遺跡(岡山市)で、良好な一括資料や貝塚、堅穴住居や貯蔵穴が検出されているが検出遺構数は多くはない(平井1987)。

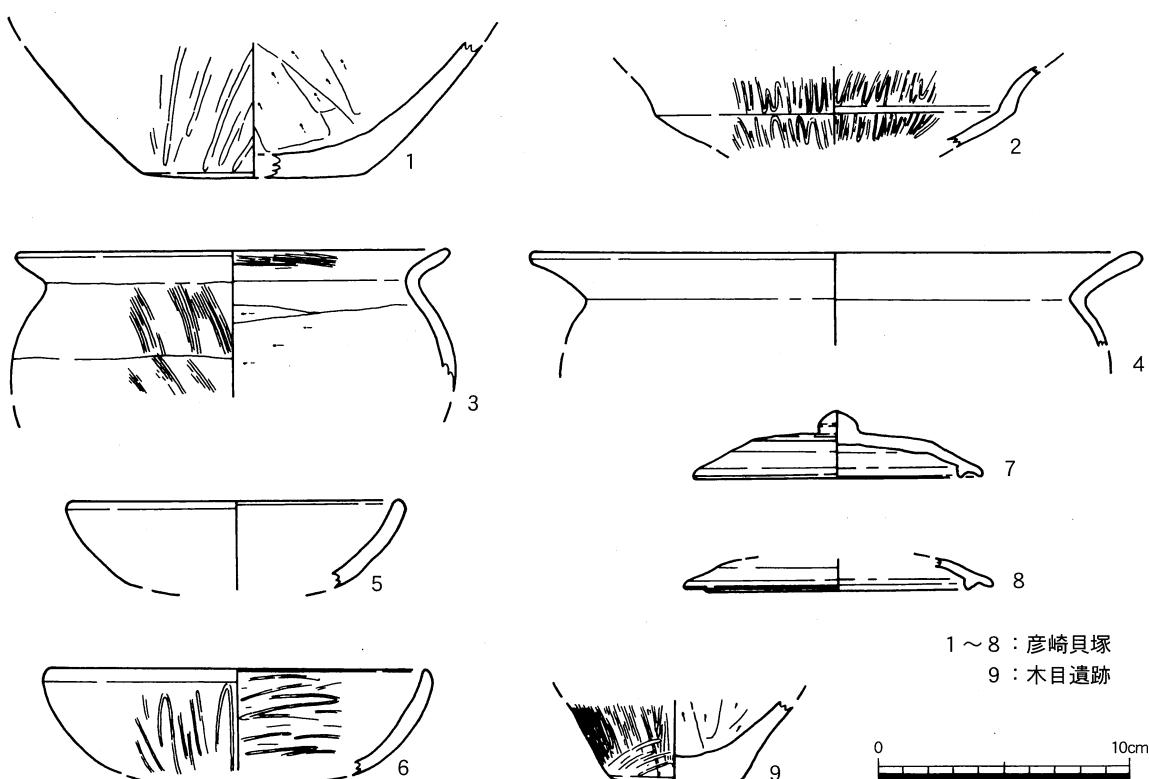
一方、児島湾南岸では、複合遺跡が多い。前葉では、広江・浜遺跡(倉敷市)でヘラ描沈線の素朴な装飾を施す有紋土器や所謂、樅原文様をもつ浅鉢形土器が出土している。砂州上にある遺跡である。また、前葉から中葉では、福田貝塚(倉敷市)、舟津原貝塚(倉敷市)、彦崎貝塚(岡山市)、でも良好な遺物とともに貯蔵穴や土坑群、居住区の可能性があるもの等が検出されている。しかし、後葉には、

遺跡数が減少する傾向である。また、当該期の遺跡からは、弥生前期（木葉文）の土器も出土する傾向が強い。また、津島江道遺跡（岡山市）では、突帯文土器に伴う水田址が検出された。このことは、極めて重要な意味をもつ。しかし、中部瀬戸内では刻目突帯文土器と遠賀川式土器が共存した遺構検出の事例はない。

津島岡大遺跡南池地点（岡山市）では、遠賀川式土器と弥生化した突帯文土器が検出されている（藤田1984）が類例は多くない。弥生時代前期には、津島岡大遺跡（岡山市）、百間川原尾島遺跡（岡山市）、津島江道遺跡等で水田址検出されている。前期後半には環濠をもつ遺跡が出現する。百間川原尾島遺跡（岡山市）、南方遺跡（岡山市）（扇崎2007）、清水谷遺跡（矢掛町）（藤江2001）等。また、清水谷遺跡や窪木遺跡（総社市）では、朝鮮半島系無紋土器や松菊里型住居も検出されていて、立地の面から交通基点としての重要性が窺われる。こうした朝鮮半島系遺物は地域的に限定的に検出される。そして、当該期でも門田貝塚（瀬戸内市）、関戸貝塚（岡山市）、高尾貝塚（岡山市）のように貝塚が集落内に形成される事例がある。貝種は主に酸性のハイガイを主体とした組成である。

中期前半には、南方（済生会）遺跡（岡山市）、津島岡大遺跡（岡山市）が旭川西岸に出現する。旭川東岸の百間川遺跡群とともに当該地域の中核的集落である。津島岡大遺跡から立地が南へ下がるということは、沖積化が進行し安定した土地ができてためで、それは気候の寒冷化に伴う海退の影響の可能性が高い。また、鉄製品の鍛冶遺構も県内では当該期になって初めて検出される。

児島湾南岸では、中葉から後半にかけて前山遺跡（倉敷市）、菰池遺跡（倉敷市）、仁伍遺跡（倉敷市）等が形成される。城遺跡（倉敷市）、彦崎貝塚（岡山市）では、中期後半から終末にかけての竪穴住居等が検出されている（伊藤ほか1977・田嶋編2008）が後期のような大型住居や複数回の建替え



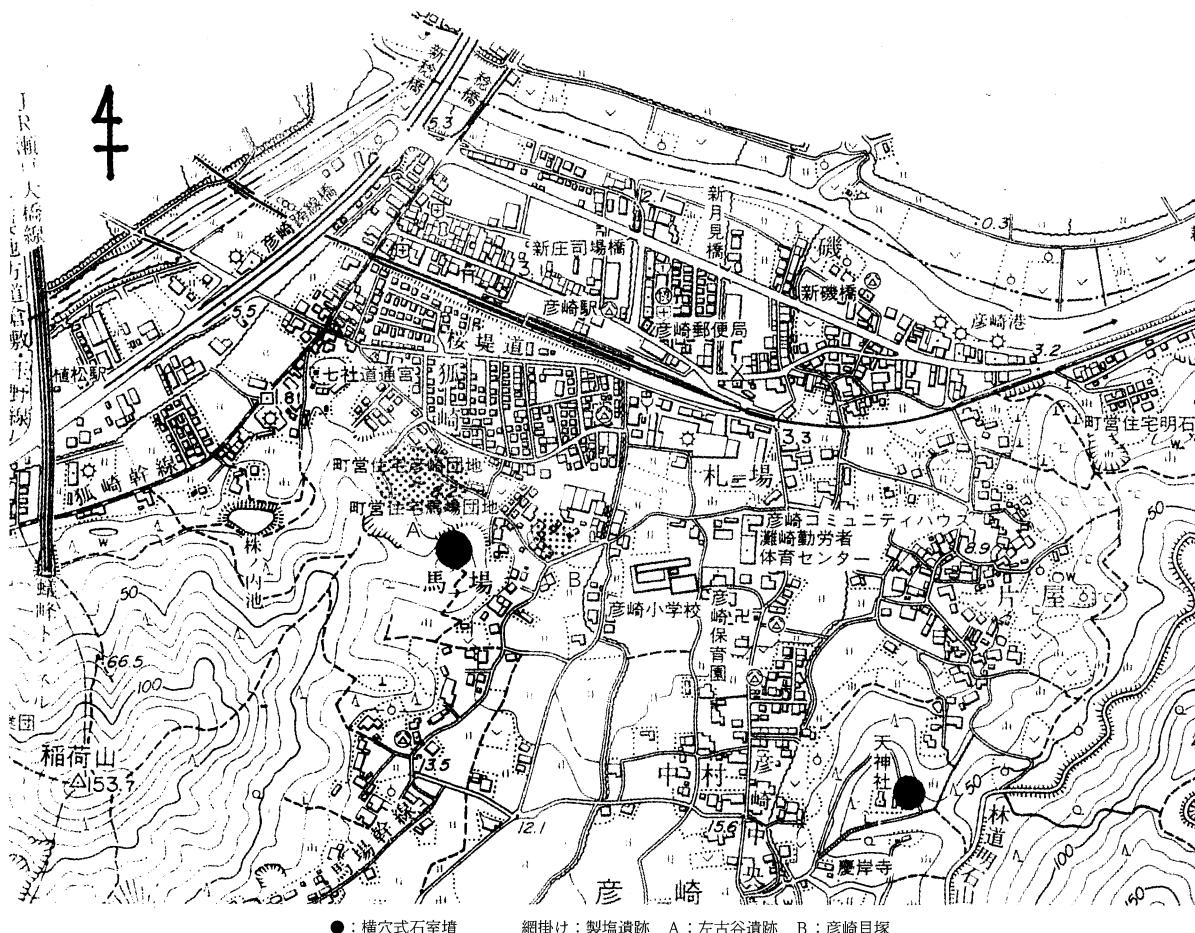
第4図 彦崎貝塚・木目遺跡採集土器 (S=1/3)

等は行われることが少ない<sup>⑦</sup>。また、この時期から後期前半にかけては、児島の貝殻山遺跡（岡山市）、種松山遺跡（倉敷市）のように所謂、標高の高い地点（高地）に居住区等を移動させる現象が認められる。このことは、当地のみにみられる現象ではなく汎西日本の現象とされている（重根2002）。ただし、安芸地域のように大田川の氾濫等によって沖積地が形成されず、よって先天的に微高地や低丘陵に遺跡を展開できない地域もあり高地性集落の認定には厳密な前提作業が必要である。

後期になると、児島湾北岸や南岸でも遺跡数は増加する。南岸で言えば、植松散布地（岡山市）、曾原遺跡（倉敷市）、広江・浜遺跡（倉敷市）が形成されることから水島へ抜ける逐道が沖積化したことがわかり、常山城址東麓の莊内平野とともに児島では貴重な平野を形成する。また、県内で検出される水田址も当該期が最も多い。沖積地の積極的な利用と谷水田の拡大も促進されたことだろう。しかし、後半期には、各集落間を統合するようより大きな組織が編成されてくる。こうした編成と歩調を合わせるように、現時点では特定個人墓されているが盾築弥生墳丘墓などの墳墓が出現していく。そこには、特殊な壺や器台とよばれる葬送具が墳頂部に備えられる。この遺物自体が吉備や出雲と大和東南部などの限定的な出土分布を示す。

児島地域でも彦崎貝塚から一山南西にある向木見遺跡（倉敷市）で検出されている（高橋1960）。特殊器台の第二段階である向木見型特殊器台形土器の名祖遺跡である。検出遺跡数はやや増加する。

古墳時代前中期の児島地域の様相はあまりはっきりしない。土器的には在地系以外に近畿系、讃岐



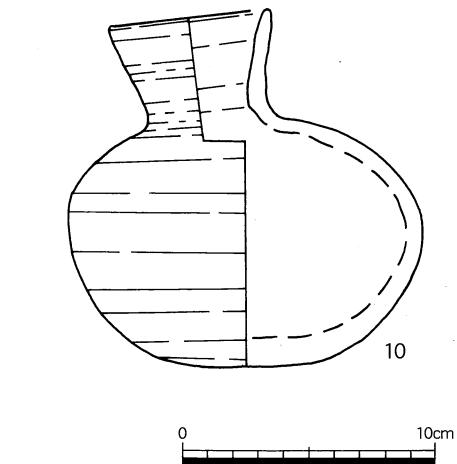
第5図 後期古墳と製塩遺跡(S=1/10,000)

系も出土する。前方後円墳が一基も築造されていないことからも積極的なアプローチの痕跡は少ない。日本書紀によると6世紀前半から中頃の児島地域には、大和政権の直轄領である屯倉が置かれていた。いわゆる児島屯倉である。その設置位置は不明であるが、大和政権と親しい関係を示唆する金銅製品等多量の遺物を持っていた八幡大塚2号墳が所在した岡山市郡付近であると推定する意見もある（吉田2005）。当時、大和政権は海上交通の要衝であった児島を抑え、内海行路（児島湾南岸行路）の通行権を掌握していたものと思われる。また、基本的には水田経営による米収奪が目的であったが、当地は弥生時代以来製塩が盛んに行われその生産と管理にも関与したものと推定される。

児島湾沿岸の縄文貝塚の上層からは、しばしば製塩土器が検出される場合があることからも古墳時代には製塩遺跡として利用された（間壁1996）。一般的に後期には遺跡数は前時期と相違ないが、生産時の効率化と容器の大型化により生産量が増大したといわれている（大久保1992）。児島地域では、こうした集落の様相を知ることができる事例が多い。例えば、彦崎貝塚の南方にある左古谷遺跡（岡山市灘崎町彦崎）では、生産区と居住区及びその統括者の墳墓である横穴式石室が遺跡を見下ろす位置に二ヶ所築造されていた（第5図）。両古墳とも神社や祠の建築の時に石室を破壊されたようであるが、周辺には石室の残骸が認められる。その内、彦崎天神社（古墳）からは完形の須恵器平堤等が出土している（第6図）。左古谷遺跡からは1万点以上の製塩土器のほか、鉄鎌、ヤリガンナ、鉄滓や

カマド付竪穴住居や炉址等が検出され、居住して農耕と鍛冶、製塩を行っていたようである（田嶋2001）。

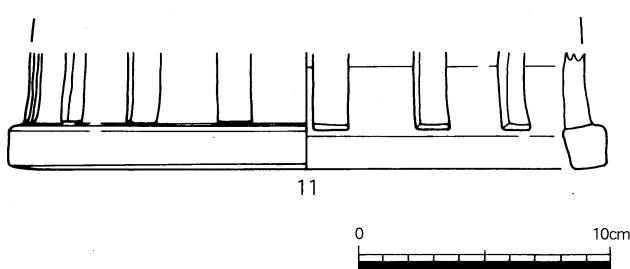
また、竪穴住居から出土した製塩土器の胎土分析によれば足守川下流域の津寺遺跡（岡山市）の竪穴住居出土のそれと一致した（白石・田嶋2003）。さらに、児島中部、東部の沖須賀遺跡（玉野市）の製塩土器が旭川右岸の藤原光町遺跡（岡山市）の製塩土器と一致することが判明しており、児島地域でも、西部と中部、東部の製塩遺跡は供給先が限定的であった可能性が高い（田嶋2003）。また、尾上氏の研究（尾上1993）によれば鉄製品、特に鉄鎌の形態分布に地域性が見られ、児島地域と備中東南部域が共通するようである。こうしたことから、児島地域の西部は、備中東南部の集団と中・東部は、旭川右岸の集団と交易をもっていたことが推定される。つまり、古墳時代後期の塩の生産集団は、児島に屯倉が設定されたことによって、畿内政権の



第6図 彦崎天神社出土須恵器  
(S=1/3)

直轄領となり直接支配を形式上は受けることとなったが、実働的な面では在地の有力な勢力の影響が及ぶ範囲を分担管理させていたと考えられる。このような製塩集団とその統括者の墳墓と考えられる遺構は、近隣の倉敷市金浜古墳と金浜遺跡でも確認されている（間壁1979）。古墳時代後期の児島における海浜集落は製塩と農耕を営みながら、時に帰属する上層部からの指令が下れば海上交通の警備や戦闘の一部に借り出されることもあったことだろう。

古代でも児島地域は前代に引き続き製塩を行っていたことが木簡等で知ることができるが、その内容から収奪体制はかなり過酷であったようである。当時児島地域は、東から加茂郷、児島郷、三宅郷があり、旧灘崎地域は三宅郷に属していたようである。灘崎地域では当該期の遺構・遺物は少ない。



第7図 天王池出土円面硯 (S=1/3)

常山城跡東麓の玉野市の莊内平野には、政所（まどころ）や天王池（てんのういけ）などの地名が残る。また、天王池周辺では、和鏡や骨蔵器、円面硯（第7図）が見つかっており、公の施設の存在が推定される。

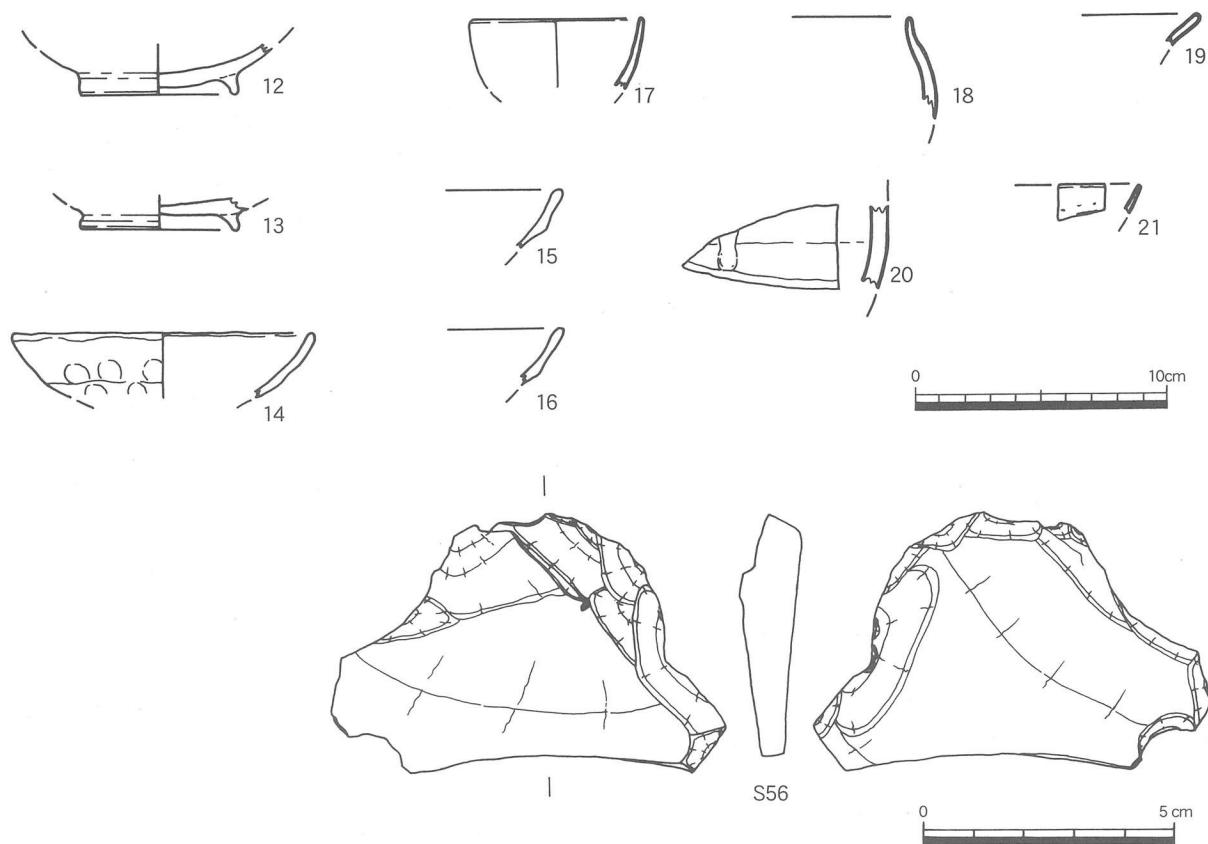
中世前半（12世紀～14世紀）の児島は、児島五流修験と権門、貴族等に分割統治されていた。灘崎地域は児島五流修験の支配

下にあったものと推定される。当該期の遺構と遺物は、左古谷遺跡や迫川大池遺跡（第8図）、大久保散布地等で確認されている（田嶋2001）。児島湾南北岸航路の寄港地としての小島でも遺跡が検出されている。特に妹尾住田遺跡（岡山市）は注目される。越州窯青磁や多量の緑釉陶器等一般集落からの出土品とは異なるものも多く検出され、その立地から備中国府に関連する港湾的機能を有していたと推定されている（草原2003）。また、当該期は児島湾沿岸で貝塚や遺構内貝塚が形成され、遺構や遺物の内容から非專業的鍛冶や漁業、農業を行う一般的な海浜集落の様相が想定されている（小林2003・草原2003）。こうした中でも、内湾の浅海化は進行し続け、藤戸合戦（12世紀後半）時には騎馬で渡島できるほどになっていたようである（平田1956）。

中世後半（15世紀～16世紀）も児島地域は分郡支配下にあった。西部から中央部までが児島五流修験、東部が阿波細川家の支配領域である。応仁の乱（1467）後も灘崎地域は児島五流修験の支配化にあつたことが彦崎天神社の宝物である碑伝に陽刻されている。文明13年（1483）の上棟の際に児島五流修験の僧正が関与したことがわかる。また、同じく文明年間に備中での政争に敗れた上野肥前守が児島五流修験の領地を押領して常山山頂に常山城を築城した（平田1956）。後の上野（三村）高徳の祖父にあたる人物である。上野高徳は備中の雄、三村家親の長女を娶り姻戚関係を結び毛利傘下に入った。しかし、永禄9年（1566）に宇喜多直家の刺客によって家親が興禪寺で暗殺された。翌永禄10年（1567）の報復戦、明善寺合戦では三村方が大敗北を喫した。その後、毛利と宇喜多が和睦したため毛利離反を決意した。最終的に援軍と見込んでいた織田軍は播磨で足止めされて到着しなかった。天正3年（1573）5月毛利軍の総攻撃を受け、備中松山城は陥落し、最後の三村方居城の常山城も落城し三村一族は滅亡した。爾後、交通と戦略上の重要拠点である常山城を巡り毛利と宇喜多の争奪戦が展開されるが、天正13年（1583）、秀吉による備中高松城の水攻め後の国切りで宇喜多支配となった。

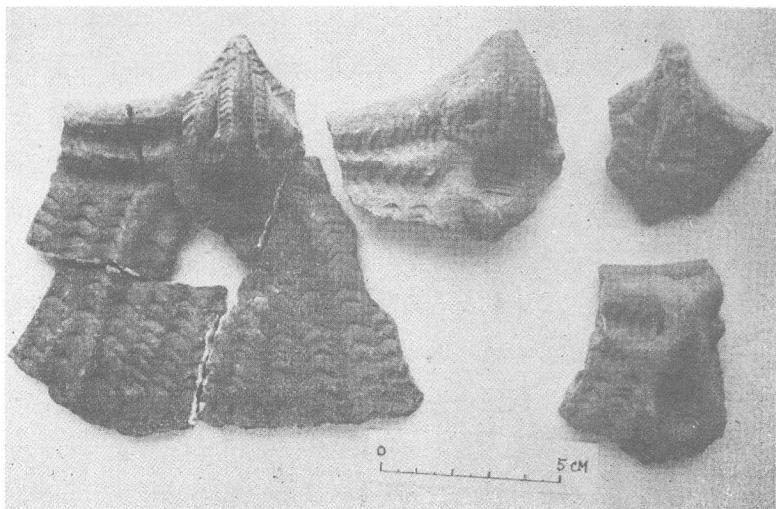
児島周辺の干拓は戦国末期の宇喜多に始まる。その後江戸期は、備前池田藩の藩営干拓も財政的に行き詰ると豪商が代替わりをするようになった。現在の広大な沃野や交通網、住環境の整備は明治後期の児島湾開墾事業に負うところが大きい。しかし、干拓事業を実施した藤田組（社長藤田伝三郎）は、岡山県のために行ったのではなく当初から政界、財界との太いパイプを己のためだけに利用し、県民の存在を無視した私利私欲の追求を行ったのである。それは、岡山県会や漁撈民、県民を巻き込んだ反対運動や裁判の長期化によって起工が大幅に遅れたこと、大正期の藤田闘争（自由民権運動）にわかるように入植した農民さえも体制としての会社が己が都合のよいように利用した証左である。しかし、結果的に見れば民衆（入植者）側の敗北と決したが。現在の広大な平野は、常山山頂からの眺望ではそのあまりにもその穢れたおぞましい過去を垣間見ることができない。

最後に彦崎貝塚の発掘調査の歴史に触れる。詳細は（田嶋2007a）に譲る。その中で昭和24年1月

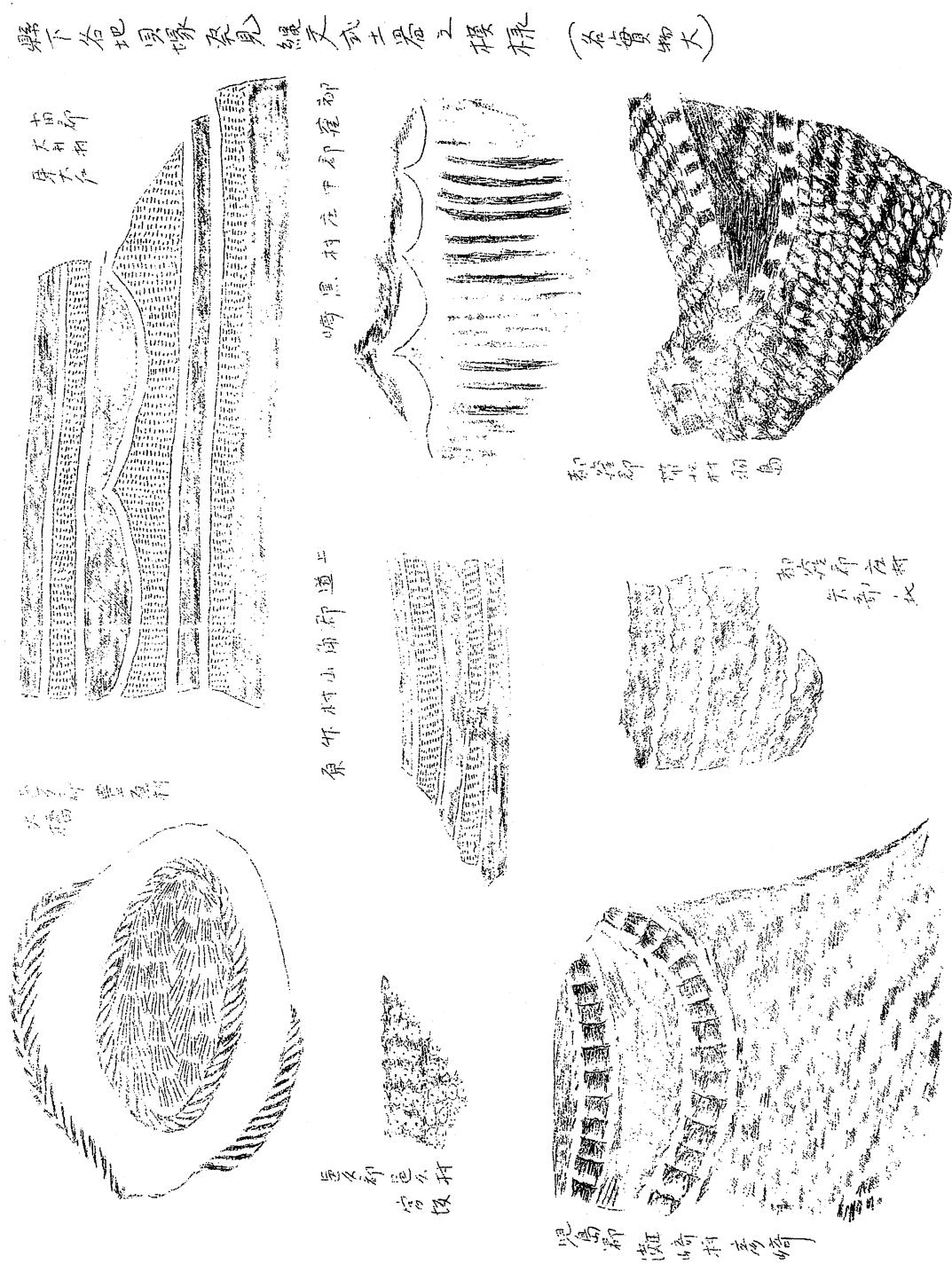


第8図 迫川大池遺跡採集遺物 (S=1/3・2/3)

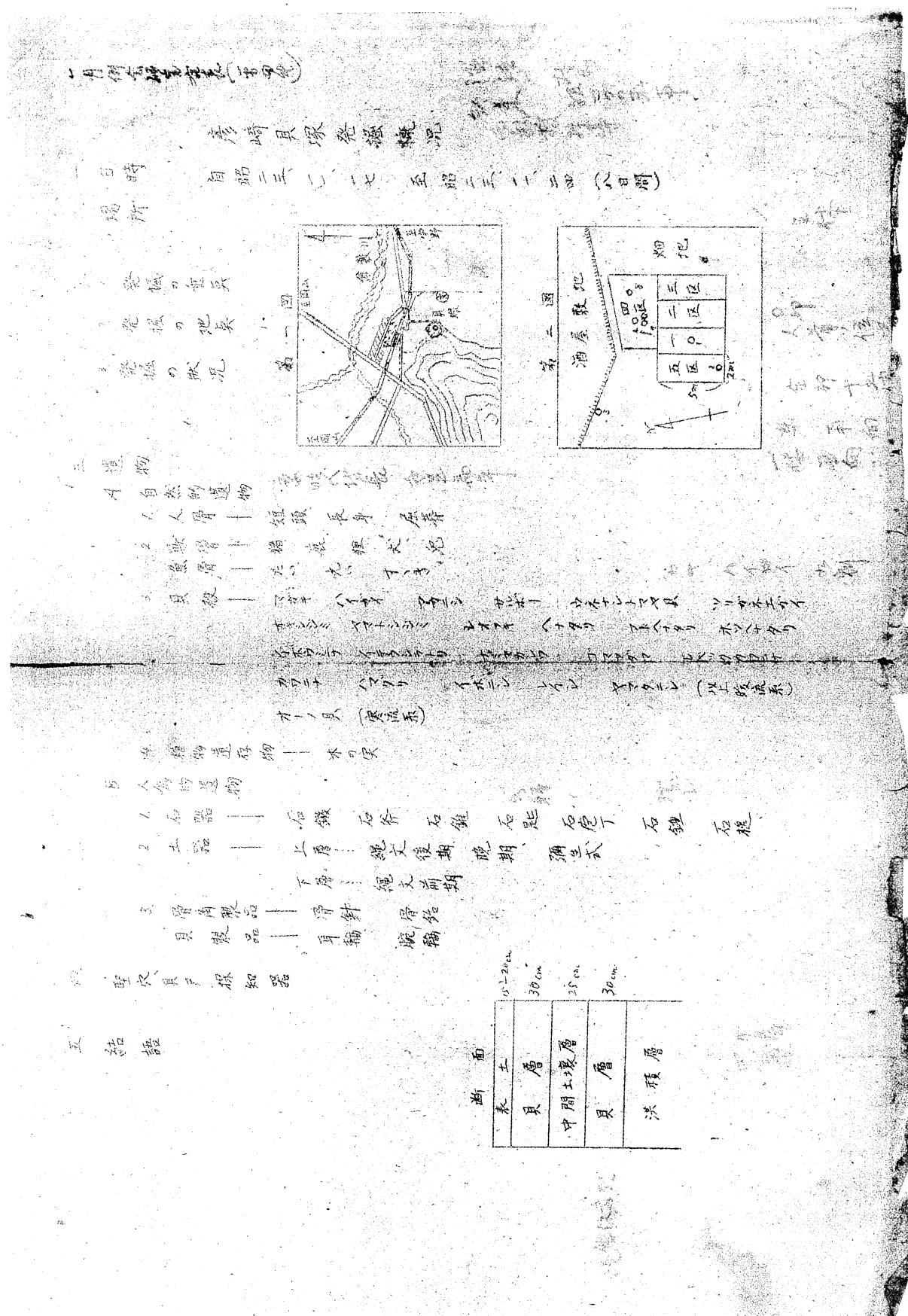
に玉井伊三郎宅で実施された吉備考古学会例会で平田英文が発表した彦崎貝塚発掘調査の概要プリント（第11図）（平田1949）と同じく（平田1953）の彦崎貝塚採集の石器（第12図）、昭和13年（1938）吉備考古会発行『吉備考古』第36号 - 貝塚特集号 - に掲載された佐藤美津夫により彦崎貝塚において採集された船元Ⅱ式土器模写図（第10図）を転載した。



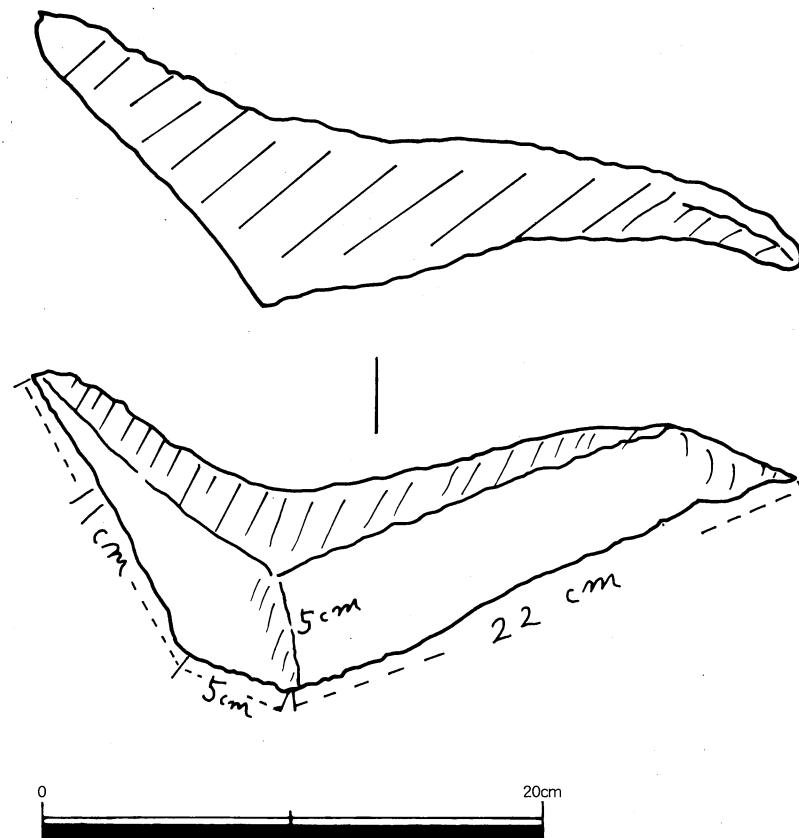
第9図 彦崎貝塚出土縄文中期鳥嘴形土器 (平田1956)



第10図 彦崎貝塚ほか採集土器（佐藤1938）(S=3/4)



第11図 例会プリント (平田1949)



第12図 彦崎貝塚出土サヌカイト製石器（平田1953）

## 第1章注

- (1) 児島の南側に比べ、北側では後期旧石器や草創期の遺跡や遺物の検出事例は少ない。食料獲得の上で条件的に恵まれなかったことを推測させる。
- (2) 岡山県古代吉備文化財センター岡本泰典氏のご好意で発掘調査期間中に実見させていただいた。
- (3) 真庭市教育委員会の新谷俊典氏のご教示による。
- (4) 中村友博氏によると西日本では類例が見当たらず、むしろ関東地方の勝坂式土器系統に類似性が認められるという。
- (5) こうしたことを可能にしたのは、海上交通の要であった丸木舟の存在が大きかったことが予想される。しかし、私は当該地域の前期段階では長距離の移動には陸路を選択する場合が多かったのではないかと考えている。
- (6) 発掘調査では、人頭大の角礫、円礫、亜角礫の一部分がよく二次的に被熱したものが見られるが、こうしたもののが抜き取られたあとの石囲炉の一部分であった可能性がある。
- (7) こうした中期と後期の堅穴住居の違いは、同一地域における集落経営期間の長短及び生産性と収穫性の規模の相異を示している可能性がある。

## 参考・引用文献

- 伊藤 晃ほか1977「倉敷市児島 城遺跡発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘報告』19岡山県教育委員会  
 扇崎 由1989「岡山平野発見の火山灰」『古代吉備』第11集 古代吉備研究会  
 扇崎 由2007『南方(済生会)遺跡2－介護老人保健施設たちばな苑建設に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会  
 大久保徹也1992「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究』(下)山陽新聞社  
 萩谷千明2007「イノシシの文化史」『第43回企画展図録』岩宿博物館

- 尾上元規1993「古墳時代鉄鎌の地域性－長頸式鉄鎌出現以降の西日本を中心として－」『考古学研究』第40巻1号考古学研究会  
遠部 慎2006「縄文土器のはじまりを探る－西日本における上黒岩遺跡の位置－」『歴博』No.139国立歴史民俗博物館  
遠部 慎2007「瀬戸内海における縄文海進の様相」『日本考古学協会第73回総会研究発表要旨』日本考古学協会  
鎌木義昌・木村幹夫1955「縄文式土器－中国地方－」『新版考古学講座』雄山閣出版  
亀山行雄2005「長縄手遺跡 県立備前高等学校教育施設改築・体育館整備に伴う発掘調査』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』189岡山県教育委員会  
草原孝典ほか1997『吉野口遺跡』岡山市教育委員会  
草原孝典ほか2003『妹尾住田遺跡－古代の公的港湾施設関連遺跡の発掘調査報告書一』岡山市教育委員会  
小林園子2003「妹尾住田遺跡の動物遺体」『妹尾住田遺跡－古代の公的港湾施設関連遺跡の発掘調査報告書一』岡山市教育委員会  
佐藤美津夫1938「児島地方の縄文土器」『吉備考古』第36号－貝塚特集号－吉備考古会  
重根弘和2002「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』(上巻)古代吉備研究会  
下澤公明ほか1988「舟津原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘報告』71岡山県教育委員会  
白石 純・田嶋正憲2003「県南における製塩土器・須恵器の胎土分析」『岡山市埋蔵文化財センター年報2 2001(平成13年度)』岡山市教育委員会  
高橋 譲1960「児島市向木見遺跡発見の二三の遺物」塙田光編『考古学手帳』10  
高橋 譲2001「西日本における縄文時代の生業と集落」『島根考古学会誌』第18集(特集:山陰縄文時代研究の現状と課題)島根考古学会  
田嶋正憲2001『左古谷遺跡』灘崎町埋蔵文化財発掘調査報告書1岡山県灘崎町教育委員会  
田嶋正憲2003「古墳時代後期の生業と流通－小地域間交易の一例－」『近藤喬一先生退官記念考古学論文集』同実行委員会  
田嶋正憲2006『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会  
田嶋正憲2007a『彦崎貝塚2－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会  
田嶋正憲2007b『縄文海進と先史遺跡群の動向－中部瀬戸内を中心に－』『2007年度総会発表要旨集』日本第四紀学会  
田嶋正憲・西田和浩2008『彦崎貝塚3－範囲確認調査報告書(縄文晚期)－』岡山市教育委員会  
豊島雪絵編2004「堀坂地区試掘調査報告書」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第74集津山市教育委員会  
豊島雪絵編2006「堀坂地内遺跡－経営体育成基盤整備事業堀坂地区に伴う発掘調査－」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第76集津山市教育委員会  
平井 勝1987「第三章縄文時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館  
平田英文1949「彦崎貝塚発掘概況」『吉備考古学会昭和24年1月例会資料』  
平田英文1953「彦崎貝塚発見石器について」『遺跡』第14号岡山県学生考古学会  
平田英文1956『灘崎町史』灘崎町  
藤田憲司ほか1975「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第11号倉敷考古館  
藤原好二1992「倉敷市曾原西表採の細石器」『古代吉備』第14集古代吉備研究会  
間壁忠彦ほか「金浜古墳」『倉敷考古館研究集報』第14集倉敷考古館  
間壁忠彦編1996『新修倉敷市史』1考古 倉敷市  
松本直子編2007『出崎船越南遺跡発掘調査報告書』岡山大学文学部考古学研究室  
山本悦世2004「第2節 津島岡大遺跡の研究」『研究紀要2003』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
山本慶一ほか1988『備讃瀬戸海底算出の脊椎動物化石－山本コレクション調査報告書 I－』倉敷市立自然史博物館  
吉田 晶2005「児島と海の道」『古代を考える 吉備』吉川弘文館

## 「彦崎貝塚」(岡山市) 史跡指定など答申

文化審、新たに20件

文化審議会（石沢良昭  
会長）は十六日、真庭市  
の「大谷・定古墳群」、  
岡山市の「彦崎貝塚」、  
香川県まんのう町の「中  
寺廃寺跡」など、新たに  
計二十件を史跡、名勝、  
天然記念物に指定するよ  
う渡海紀三朗文部科学相  
に答申した。広島市の平  
和記念公園は、名勝の指  
定範囲の拡大となる追加  
指定に盛り込まれた。(25  
面に関連記事)

また、重要文化的景観  
に「遠野物語」で知られ  
る「遠野」で知られ

文科相は近く答申通り  
指定などを行う。これで  
史跡は千六百二十一件、  
名勝は三百四十九件、天  
然記念物は九百八十二  
件、重要文化的景観は七  
件、登録記念物は二十八  
件となる（重複含む）。  
日本の近代産業の発展  
と公害対策の歴史を示す  
史跡に、岡山県内では真  
庭市上中津井の「大谷・  
定古墳群」、岡山市灘  
崎町彦崎の「彦崎貝塚」  
の二件が含まれた。(3  
面関連)

鉱石の搬出入口で、明治期  
の掘削状況が分かる通洞  
坑と火薬庫を指定する。

る岩手県遠野地方の景観  
「遠野—荒川高原牧場」  
(岩手県遠野市)など三  
件の選定を求め、登録記  
念物に枯れ山水の主庭園  
と複数の露地庭からなる  
「梶原氏（西梶原）庭園」  
(兵庫県姫路市)など三  
件を登録するよう答申し  
た。

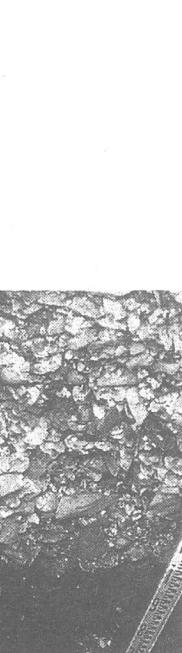
山陽新聞社提供

# 国史跡、名勝へ文化審答申

## 生活、生態系伝える

彦崎貝塚(岡山・灘崎)

岡  
山



カイト（讃岐の特産石）  
の石器などが確認されて  
いる。当時の生活様式や  
生態系、瀬戸内海を越え  
た交流などを知る上で、  
西日本の中でも特に重要  
な貝塚と位置づけられて  
いる。

二件を加え、県内の国  
指定史跡は四十七件とな  
る。(影山美幸)

彦崎貝塚の縄文時代前期の貝層  
(2004年の発掘調査時に撮影)

彦崎貝塚は縄文時代前  
期から晩期の数千年間、  
同一の場所に重層的に形  
成された。貝類や土器を  
はじめ、埋葬人骨、サヌ

構からなる。このうち銅  
鉱石の搬出入口で、明治期

の掘削状況が分かる通洞  
坑と火薬庫を指定する。

第13図 新聞掲載記事 (1)

## 文化審答申、中四の新史跡と天然記念物④

### 彦崎貝塚 繩文時代に形成

「彦崎貝塚」（岡山市灘崎町）は、瀬戸内海に面した旧尾島湾南岸に位置し、縄文時代前期から晩期にかけての貝塚で、最長で1万年もの長期間にわたって形成された。出土した縄文時代の土器は「彦崎式土器」と呼ばれ、全国の同時期の土器の標準とされている。

南北100m、東西80mの大規模な縄文時代前期の貝塚を確認さ

### 岡山

れている。

出土した貝を調べた結果、貝類の採取地が、縄文時代前期は干潟、中期は岩礁、後期は干潟と岩礁、晩期は再び干潟へと変遷していることも判明した。

そのほか、25体の屈葬埋葬の入骨やドングリを貯蔵した穴なども出土しており、西日本でも特に重要な貝塚と位置づけられている。

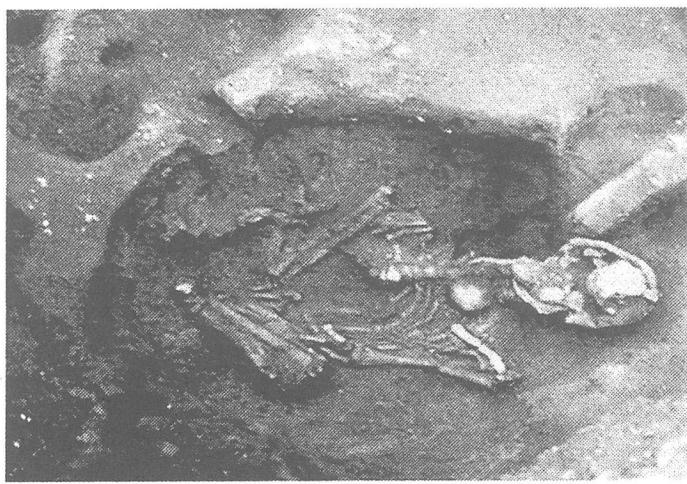
### 国指定史跡に

### 彦崎貝塚

文化審議会（石沢良昭会長）は16日、真庭市上中津井の大谷・定古墳群と岡山市灘崎町彦崎の彦崎貝塚を国指定史跡に指定するよう文科相に答申した。これで県内の国指定史跡は47件になる。

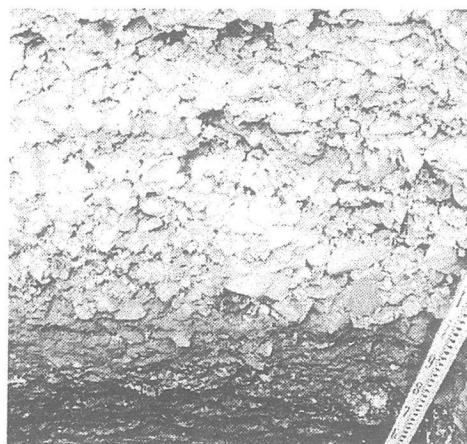
彦崎貝塚は約6180平方mの広さで県内最大級。縄文時代前期～晩期にかけての貝塚で、25体の屈葬埋葬人骨が発見されている。石器などの遺物から瀬戸内海を越えた交流など当時の生活様式が分かるという。

【石川勝義】



彦崎貝塚で見つかった縄文時代中期の人骨—県提供

毎日新聞社提供



幾重にも貝が積み重なった彦崎貝塚の縄文時代前期の貝層

産経新聞提供

第14図 新聞掲載記事（2）

## 第2章 発掘調査の経緯と体制

### 第1節 経緯

彦崎貝塚は、岡山県岡山市灘崎町彦崎2994ほかに所在する縄文時代早期から晩期にわたる貝塚遺跡である。昭和23年と24年に東京大学理学部人類学教室の鈴木尚、酒詰仲男らを中心にして3回の発掘調査が実施された。その結果、遺構とともに20体以上の状態良好な縄文人骨や膨大な土器、石器、骨角器等が出土した。そして、その土器が瀬戸内地方の基準資料として山内清男に認定されたことによって、全国的にその名を知られることとなったが残念ながら、正式な調査報告書は刊行されていない。しかし、岡山市の調査（田嶋編2006・2007・2008）や池葉須の概報（池葉須1971）、山崎による昭和23年と24年に調査された遺物のみの報告（山崎編2007）が公開されており、全体像が明瞭になりつつある。また、保存状態が極めて良好であること、地元に愛され学術的価値が高いことが多くの学者や研究者によって再確認され学際的に大きく貢献をしていることは周知のとおりである。

この度の範囲確認調査は、平成15年度・平成16年度に実施した際に諸事情から許可を得ることができなかった地点で実施したものである。また、平成18年3月に二ヵ年にわたる範囲確認調査の成果報告書である『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』を、平成19年3月に『彦崎貝塚2－範囲確認調査報告書－』を刊行した。配布後、彦崎貝塚の史跡指定等に向けて関係機関と協議を開始した。平成18年9月28日(水)に文化庁文化財部記念物課水ノ江和同文化財調査官の現地視察・指導があった。その際に、先の地点が彦崎貝塚を面的に理解した場合に立地的に重要と考えられるため、地権者や地元との協議了承の上是非、縄文時代の遺構や遺物の有無の確認を実施されるべきとの指導を受けた。

その指導をうけ、岡山市役所へ持ち帰り部署内で意見を交わした。そして岡山県教育委員会と協議しつつ彦崎貝塚対策委員の先生方に意見を諮ったところ地元、国、県と市が建設的な協議の上、範囲確認調査を実施すべきとのことであったため、地元の窓口である岡山市役所灘崎支所へ出向き、先の調査官の指導内容の報告と調査への協力を依頼し、快諾された。国指定は行政手続き上時間を要するため、範囲確認調査は、平成18年度内か平成19年度入って早々に実施する必要があった。その結果、調査担当者の事務分掌を調整してどうにか年度内に実施できる見通しが持てた。

その後、地元彦崎自治会の若松勲氏の協力を得て、地権者の発掘調査の承諾をえることと作業員の確保が実現した。また、発掘調査に関して地元への周知広報を灘崎支所へ依頼し、市の広報誌と回覧版で周知徹底をはかった。こうして平成18年10月25日（水）から平成18年11月9日（木）まで範囲確認調査を実施した。平成18年11月20日付岡教文第706号で埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。また、平成18年11月28日付岡教文第730号で、岡山南警察署に発見通知を提出した。

平成19年5月2日（水）に文化庁文化財部記念物課坂井秀弥主任文化財調査官の現地視察・指導があった。遺跡周辺の景観と旧児島湾沿岸の貝塚群としての有効性を指摘された。

平成19年11月16日（金）文化審議会により国指定重要文化財（史跡）に答申された。

平成20年3月、官報に告示され正式に国指定重要文化財（史跡）となった。

## 第2節 体制

事業に関する一切の事務については、岡山市教育委員会文化財課が行った。また、発掘調査及び報告書作成についても同様である。なお、事業推進にあたり、彦崎貝塚確認調査対策委員会、文化庁記念物課、岡山県教育庁文化財課にご指導いただいた。

彦崎貝塚確認調査対策委員会(平成17年4月1日から)五十音順

委 員	稻田孝司(岡山大学教授)
同	亀田修一(岡山理科大学教授)
同	肥塙隆保(独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所保存修復科学研究室長兼任京都大学大学院人間科学部教授)
同	小林博昭(岡山理科大学教授)
同	西川 宏(日本考古学協会会員)平成19年1月31日逝去
同	間壁忠彦(倉敷考古館長)

指導・助言

文化庁文化財部記念物課文化財主任文化財調査官	坂井秀弥
同	文化財調査官 水ノ江和同
岡山県教育庁文化財課	課 長 高畠知功 藤井守雄
同	総括副参事 光永真一
同	主任 小林利晴 小嶋善邦

事業主体	岡山市
岡山市長	高谷茂男

事業事務	岡山市教育委員会
教育長	山根文男
審議監	森田誠治
文化財課長	平松省三
参 与	出宮徳尚
文化財副専門監	神谷正義
同	乗岡 実
主 任	草原孝典
文化財保護主事	田嶋正憲(発掘調査・報告書担当)
同	西田和浩(発掘調査・報告書担当)
主 事	柿本貴子(経理)
嘱 託	木村真紀
同	石井亜希子

発掘調査作業員：小池清志 大山豊年 長名繁春 納富英雄 平田英治 山本卓司 若松 勲  
遺物整理作業員：山元尚子

確認調査にあたっては、地権者・関係者を始め地元彦崎地区の方々、特に若松勲彦崎区長には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。なお、調査開始前、発掘調査及び報告書作成期間中には、遺物の同定等において、職場の先輩、同僚、下記の先生方・諸氏・機関より有益なご教示を頂くとともに、文献及び資料実見等に便宜を図っていただきました。重ねてお礼申し上げます。

(順不同・敬称略)

馬場昌一 若松拳史 福本 明 鍵谷守秀 小野雅明 藤原好二 杉山一雄 山本悦世 松本直子  
岡山県古代吉備文化財センター 岡山大学文学部考古学研究室 岡山理科大学人類学教室 池葉須藤  
樹 間壁葭子 諏訪 元 網谷克彦 加藤賢二 千葉 豊 富井 真 近藤喬一 中村友博 村田裕  
一 出原恵三 古瀬清秀 竹広文明 広島大学大学院文学研究科考古学研究室 幸泉満夫 三吉秀充  
矢野健一 大野 薫 高橋 護 中村 豊 小濱 学 鈴木康二 久保脇美朗 湯浅利彦 柳浦俊一  
今田秀樹 吉田昌彦 犬飼徹夫 澤下孝信 遠部 慎 荒木幸治 泉 拓良 山崎真治 富岡直人  
大塚達朗 松島義章 松下まり子 小南裕一 松井 章 小倉徹也 立岡和人 渡辺今日子 大下  
明 岡田憲一

#### 参考文献

- 池葉須藤樹1971『岡山県児島郡灘崎町大字彦崎貝塚調査概要』(私家版)
- 田嶋正憲編2006『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会
- 田嶋正憲編2007『彦崎貝塚2－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会
- 田嶋正憲編2008『彦崎貝塚3－範囲確認調査報告書（縄文晩期）－』岡山市教育委員会
- 山崎真治・高橋 健2007「彦崎貝塚の考古学的研究」『東京大学総合研究博物館研究報告』第43号東京大学総合研究博物館

### 第3節 彦崎貝塚発掘調査等日誌抄

平成18年2月3日（金）晴れ。気温5℃。

岡山市灘崎町合併特例区協議会勉強会で彦崎貝塚の国指定と公有化事業について理事等に説明。田嶋参加。（会場）灘崎支所第一会議室。質問等多数受ける。

平成18年3月20日（金）晴れ。気温12℃。

岡山市灘崎町合併特例区「彦崎貝塚確認調査及び史跡としての公有化事業」第一回彦崎貝塚地元関係者説明会開催。平成17年3月22日（火）に合併後、初めての説明会。（参加者）難波弘市議、三竿季彦合併特例区長、若林弘合併特例区協議会会长、波多野文士同副会長、平田孝明同委員、山本英雄同委員、若松勲彦崎区長、地権者9名、土井文男灘崎支所次長、前野廣志灘崎支所主査、草原、田嶋、景山洋灘崎分室長。（会場）灘崎町公民会彦崎分館。写真パネル、出土遺物の展示を行う。質問等多数受ける。

平成18年5月20日（土）晴れ。気温25℃。

岡山市文化財保護審議会。旧灘崎町指定文化財の再指定関連で彦崎貝塚を視察。地表に大量の貝の散布があるのをみて驚嘆する委員が多くった。

平成18年7月14日（金）晴れ。気温35℃

彦崎貝塚に隣接する酒造会社の蔵の件について協議。（参加者）三竿季彦灘崎支所長、藤原正志新市建設推進局次長、土井文男灘崎支所次長、山神一正補佐官、祇園敬治総務課長、前野廣志主査、草原、田嶋、景山洋教育灘崎分室

長。（会場）灘崎支所第二会議室。状況をしばらく見守ることで見解一致。

平成18年9月28日（水）晴れ。気温28℃。

文化庁文化財部記念物課水ノ江和同文化財調査官の彦崎貝塚現地視察及び指導。

彦崎貝塚を見下ろす、貝塚上面からの比高差約1.2mの狭小な台地部にトレンチを入れ縄文時代に属する関連遺構の有無を早急に確認すべきとの指導を受ける。現地視察後、岡山市立灘崎町歴史文化資料館にて、平成15・16年度に国庫・県補助事業で調査し、出土した遺物等を視察。（参加者）光永真一、小林利晴（岡山県教育庁文化財課）、出宮、草原、田嶋。

平成18年10月3日（火）晴れ。気温28℃。

灘崎支所へ出向き、先の文化庁調査官の指摘事項基づいて、トレンチ調査の実施説明と地元への連絡調整等の協力依頼をする。（参加者）三竿季彦灘崎支所長、藤原正志新市建設推進局次長、土井文男灘崎支所次長、山神一正補佐官、祇園敬治総務課長、前野廣志主査、草原、田嶋、景山洋教育灘崎分室長。（会場）灘崎支所第二会議室。

平成18年10月13日（金）晴れ。気温27℃。

彦崎地区自治会会长若松勲氏の立会いで草原、田嶋が確認調査の地権者の元へ承諾のお願いに伺い、了承を得た。

平成18年10月18日（水）晴れ。気温26℃。

広島大学大学院文学研究科考古学研究室に収蔵されている池田次郎氏調査分彦崎貝塚出土遺物の資料調査（田嶋）。古瀬先生、竹広先生に

お世話になった。

平成18年10月19日（木）晴れ。気温26℃。

午前中、草原、田嶋で地権者を訪ね、必要書類の説明を行う。

平成18年10月24日（火）晴れ。気温24℃。

午前8時30分から田嶋、西田は、公用車2台で発掘調査の資材運搬作業を行う。午前10時前に地権者へ挨拶を済ませ、調査地点に資材等を搬入する。午後4時30分公用車を入庫し資材等搬入作業終了。

平成18年10月25日（水）晴れ。気温24℃。

8:30~17:15

本日より、彦崎貝塚範囲確認調査を開始。地権者に調査開始と駐車場の件で挨拶に行く（草原、田嶋、西田）。若松区長、作業員5人に草原主任が趣旨説明。発掘調査担当者は、田嶋と西田。トータルステーションを使用して、幅1.5m、長さ10mの調査区を設定し、測量用木杭を打ち、3級測量水準点から高さを出す。

トレンチ名をT40とする。調査前の状況を写真撮影し、早速表土剥ぎにかかる。

見学者は、市民数人。

平成18年10月26日（木）晴れ。気温25℃。

8:30~17:15

表土、中世の各包含層を下げる。遺構はない。遺物は、中世土師器等。最下層より須恵器出土。さらに下げるに弥生時代後期の土器が出始めるが主体は中期末ということが判明。包含層は南から北へ層厚を増す。包含層を除去すると直下に遺構群が検出され始めた。北側遺構面（住居

床面の一部あることが後にわかった）で有柄の石鏃1点検出。土器や石器等出土し始める。明日、精査して遺構の検出写真撮影。見学者は、市民数人。

平成18年10月27日（金）晴れ。気温25℃。

8:30~17:15

昨日の包含層の残存部を掘り下げる。調査区北側部分で平坦面が検出され始め、遺構検出の結果、ピット群と住居跡が見つかった。遺構群を平板測量し、その後遺構を半裁して掘り下げる。土層断面図を作成する。各ピットから弥生土器やサヌカイト出土。週末に天気が崩れそうなので雨対策を入念に行う。見学者は、市民6人。

平成18年10月30日（月）晴れ。気温23℃。

8:30~17:15

新たに検出した遺構と杭P1~P4を平板におとす。その後レベルを入れる。そ。土器だまりとP8の平面図と断面図を作成。終了後レベルを入れる。弥生の住居より新しいピット等の掘り込みを下げる。調査区全景を清掃して、弥生時代の遺構面1の完掘写真（全景）を撮影する。P8と土器だまりの接写。P8の下層より縄文晩期の大型土器が検出された。縄文晩期の遺構の存在が予想された。遺物は、石鏃、打製石斧、土器が検出された。見学者は、市民7人。

平成18年10月31日（火）晴れ。気温23℃。

8:30~17:15

若松区長朝現場に見える。住居2の床面の清掃をする。ピット群を検出し平板測量をしたあと、レベルを落とす。同様にアゼとして残していた東側の覆土を除去する。弥生土器、打製石

包丁（スクレイパー？）やサヌカイト片出土。住居2の壁体溝を掘り上げる。サブとレンチを入れた東壁の縄文晚期包含層に叩き石か石斧と思われるものが検出された。弥生時代の遺構は完掘すること。晚期の遺構面はサブトレンチをいれ確認しながら調査すること。包含層より大量の晚期の粗製土器が出土し始める。見学者は市民3人。

平成18年11月1日(水) 晴れ。気温22℃。  
8:30~17:15

東壁にて検出した縄文晚期土器だまりの検出写真撮影。南壁の土層断面図の作成。基準杭No.1~No.4、トータルステーションを使用して国土座標に落とす。サブトレンチを掘り下げる。縄文晚期の遺構面を検出。平板測量を行い、レベルを落とす。11:00頃岡山理科大学小林博昭氏、白石 純氏、元ノートルダム清心女子大学教授高橋 護氏視察。土器だまりには、粗製の深鉢、精製浅鉢が数個体分認められた。また、石鏃等も検出された。見学者は市民数人。

平成18年11月2日(木) 晴れ。気温22℃。  
8:30~17:15

若松区長見える。東壁のサブトレンチを抜いて地山を確認する。結果的にGLから-2m位で花崗岩の基盤が検出された。基盤層からは何も遺物は検出されない。トレンチの壁面を清掃し、線引きし写真撮影を行う。その後、北、西、東の土層断面図の作成に入るために基準線の水糸を張る。実測と平行して、縄文晚期土器だまりの面出しを継続する。連休中の雨対策を入念に行って作業終了。見学者は、地権者等市民6人。

平成18年11月6日(月) 曇り時々雨。  
気温19℃。8:30~17:15

先週よりやや肌寒い。本日は、終日実測のため発掘作業員は休み。縄文晚期土器だまり平面図作成。その後レベル落とす。北、東、西壁土層断面図作成。若松区長見える。北壁に沿ってL字状にサブトレンチを入れる。見学者は、市民5人。

平成18年11月7日(火) 晴れ。気温15℃。  
8:30~17:15

縄文晚期土器だまりの平面図作成とレベル落としが完了したので、ナンバーリングして遺物を取り上げる。取り上げの途中で、粗製深鉢の全体が検出されたので、掃除して平面図に追加したあと写真撮影を行う。遺物を全て取り上げたのち、T40の完掘写真を撮影するためにトレンチ内外を清掃する。清掃中に晚期の遺構を確認したので図面に追加してレベルを落とす。土坑になると思われる。半裁して断面図を作成。写真撮影を行う。ちょうどお昼に完掘写真を撮影し終わる。昼食後は北側のサブトレンチの最終確認をしながら南から埋め戻しを開始する。基盤層上面から遺構が掘り込まれているのを確認。精査の結果各遺構面の掘り込み開始面を確認できた。トレンチ半分まで埋め戻し作業終了。見学者は、市民7人。

平成18年11月8日(水) 晴れ。気温17℃。  
8:30~17:15

午前中、サブトレンチをいた北壁土層断面の写真撮影。北壁と西壁にサブトレンチ分の図面を追加。包含層にかかっている遺物を層位ごとに回収。その後、埋め戻し作業再開し、15:00過ぎに完了する。トレンチ周辺と道具置き場、駐車場の清掃と荷造り。発掘調査終了。草原、田嶋、西田は地権者に挨拶に行き、お礼を言っ

て解散。若松区長が夕方トラクターで調査地点  
を元の畠の状態に戻す作業を行ってくださいる。  
見学者は、地権者等7人。

平成18年11月9日（木）晴れ。気温20℃。  
8:30~17:15

搬出・収納作業を行う。資材道具の一部を岡  
山城三之外曲輪跡発掘調査事務所（中央中学校  
内）へ運搬。17:00作業終了。公用車を返却し、  
埋蔵文化財センターへ戻る。

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 調査区の設定と調査方法

今回の調査地点は、平成15年度・平成16年度に実施した範囲確認調査の際に諸事情から調査の許可を得られなかった地点である。調査地点は、T28の西約25mにあたり、貝塚本体のある中区の最も南側、一段高い丘陵裾部分に位置する。(第15・16・18図)。調査区の区割りの呼称は(田嶋編2006)に準じ、以下本文で述べる。調査地点付近は、現地表高約8.5mで東西約50m、南北約25mの狭い平坦面である。南側には花崗岩基盤が大きく露出しており、そこへ接するように民家が2軒並ぶ。近接するT28やT29では縄文時代の遺構は全く検出されていない。調査区は、遺構が検出された場合を想定し、狭い平坦面のほぼ中央に東西幅1.5m、南北長10mの試掘溝を設定した。設定した試掘溝(トレンチ)は、先の調査時に設定したトレンチの通し番号を踏襲し、トレンチ40とした(以下T40と略す)。

発掘調査は、基本的に貝層と縄文時代の遺構の有無確認を目的とし、検出した場合にはその位置を国土座標に落とすことで正確に記録することを心がけた。したがって、調査方法は、まずサブトレンチを入れ、層位を確認しながらトレンチ幅まで広げ、遺構の検出と遺物のとりあげを行った。縄文時代の遺物包含層と遺構は、サブトレンチで半裁状にした場合にかかった部分の半分だけを掘り下げた。同様に遺物包含層も必要最小限の発掘にとどめ全掘はしていない。

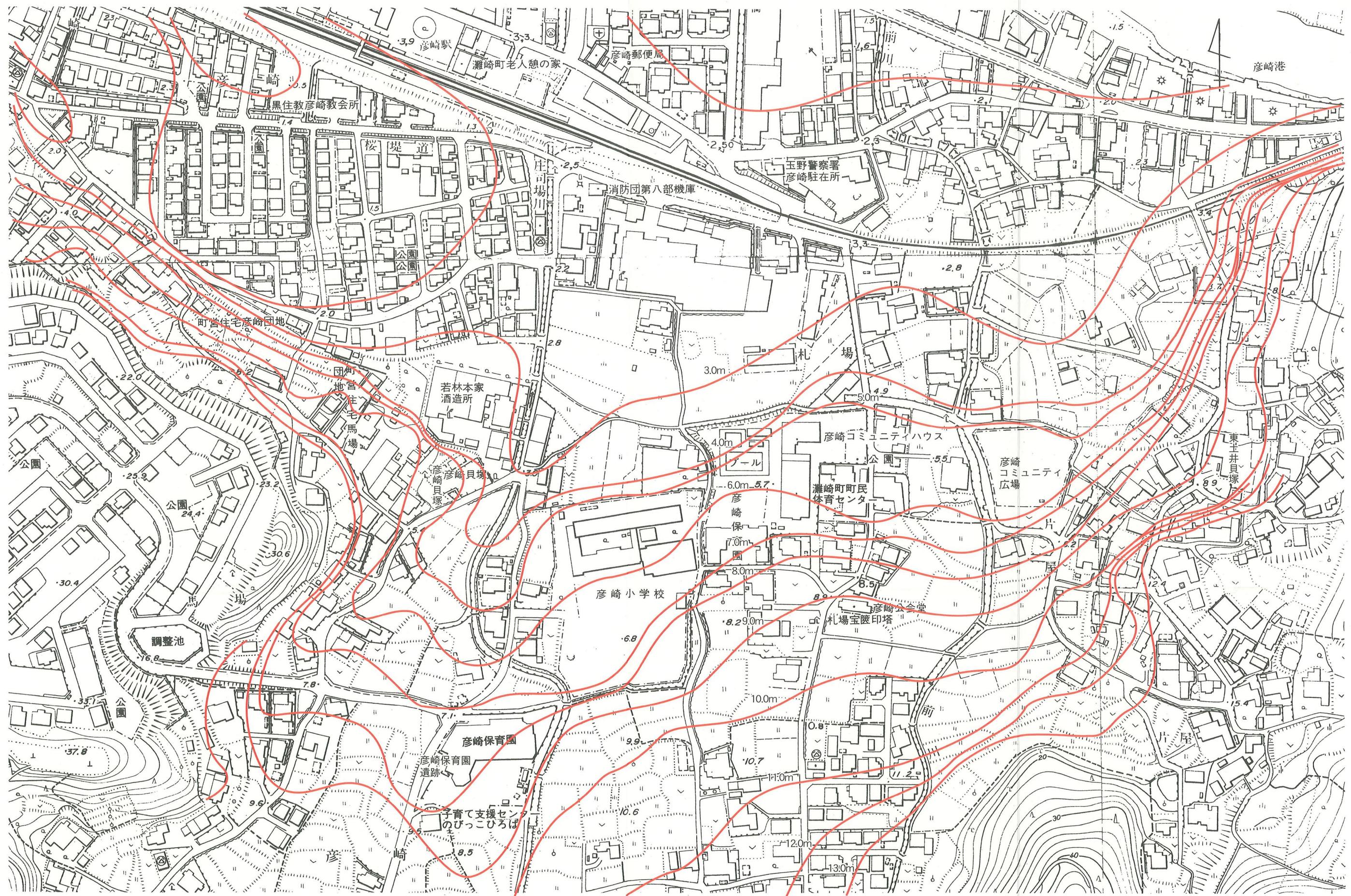
調査は、トレンチ調査を手掘りで実施した。調査後は、埋戻しを層位毎に行って現状復帰をした。最終的に、現耕土はトラクターを使用して耕耘した。遺構は、面検出と半掘を心がけた。炭化物、炭化材が検出された場合には、出土地点を記録・測量し専門家の指示に従いサンプリングした。

### 第2節 トレンチ40の調査

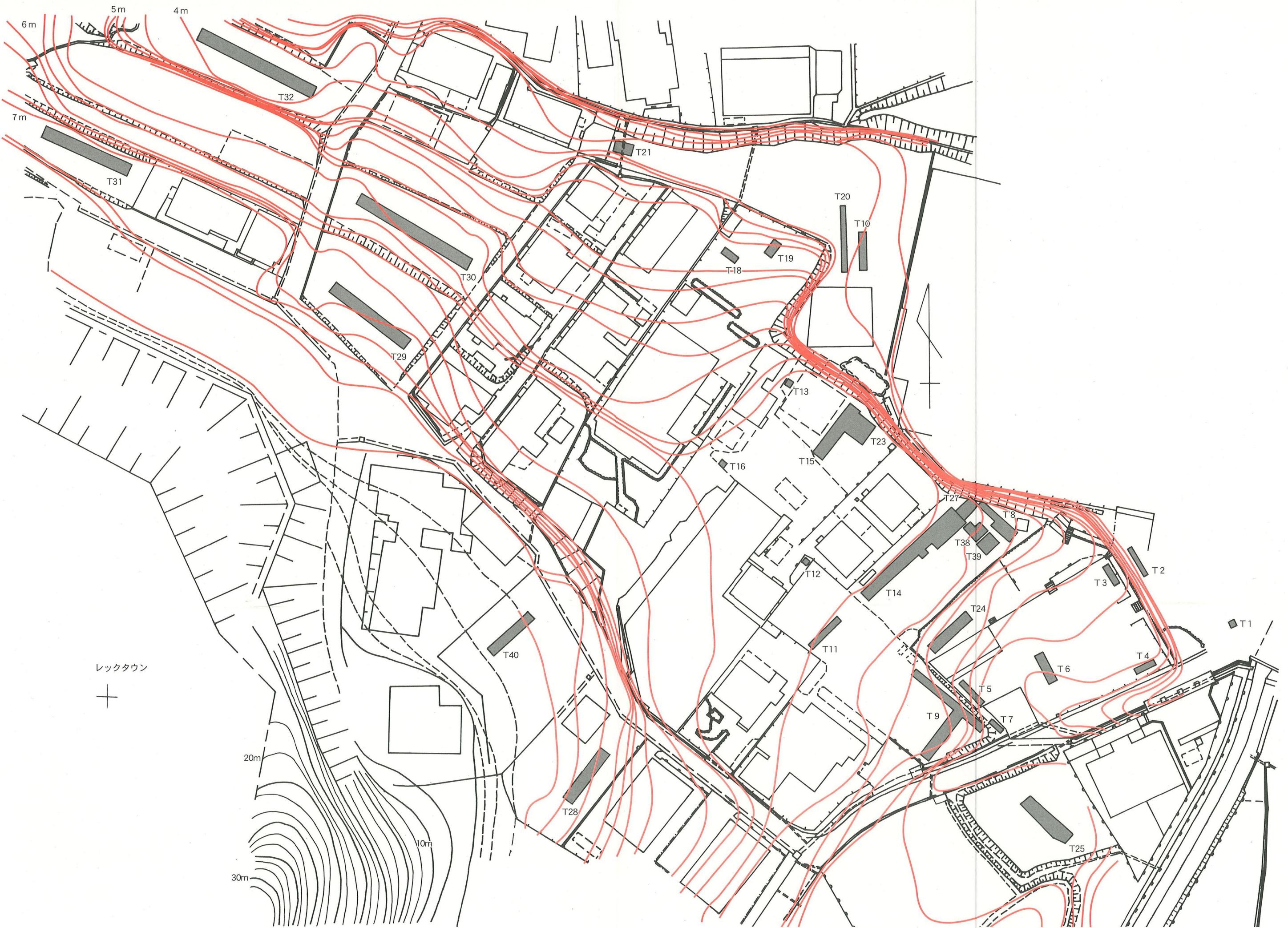
#### 1. 概要

発掘調査によって、縄文時代から中世までの遺構と遺物を確認した。縄文時代の遺構は、全て晩期に帰属する。地山面に掘り込まれる形で土坑、ピット群及び土器溜まり、包含層を検出した。トレンチの北側のややフラットな面に遺構が集中する傾向が認められる。また、トレンチ中央部付近で南北にやや浅く落ちの部分がある。縄文時代の遺物は、テンバコ3箱分である。主体となる遺物の時期は縄文晩期前半である。他に若干の縄文前期と後期の土器片が認められた。石器類は、一器種に集中することは無く、ほとんどの器種が認められるとともに石核、剥片、碎片も比較的多く検出された。

弥生時代の遺構は、竪穴住居2棟、土坑、ピット群を確認した。竪穴住居の平面形態は、隅丸方形もしくは円形と推定される。壁体溝のカーブの具合から推定すると前者の可能性が高いと思われる。住居1は、1辺が推定4m、住居2は1辺6~7mのやや大型の住居に復元される。しかし、住居1を拡幅、あるいは修復したものが住居2となるものではない。時期の異なる全く別の住居である。住居2の壁体溝は深さ60cmを測るしっかりしたものである。土坑の中には角礫とサヌカイト石核を含むものも認められた。弥生時代の遺構群は、縄文時代の遺物包含層から掘り込みを開始している。住



第15図 彦崎貝塚周辺の微地形（1）（草原原図、田嶋製図トレース）（S=1/2,500）



第16図 彦崎貝塚周辺の微地形（2）（草原原図、田嶋製図トレース）(S = 1 / 500)

居の床面はフラットを意識している。弥生時代の遺構と遺物の時期の主体は弥生時代中期後半～終末である。住居1が終末、住居2が後半である。包含層出土遺物も後者である。また、同層位最上部付近では若干の弥生時代後期末の土器が認められた。不明鉄器が2点、弥生時代の包含層から検出されている。

古墳時代から古代の遺構は検出されなかった。検出された遺物は、土師器、須恵器である。時期的には古墳時代前期～中期の土師器と、後期～古代の須恵器、土師器である。包含層の厚さとその上面が比較的揃っているので各々の時代に何度か整地されているものと考えられる。

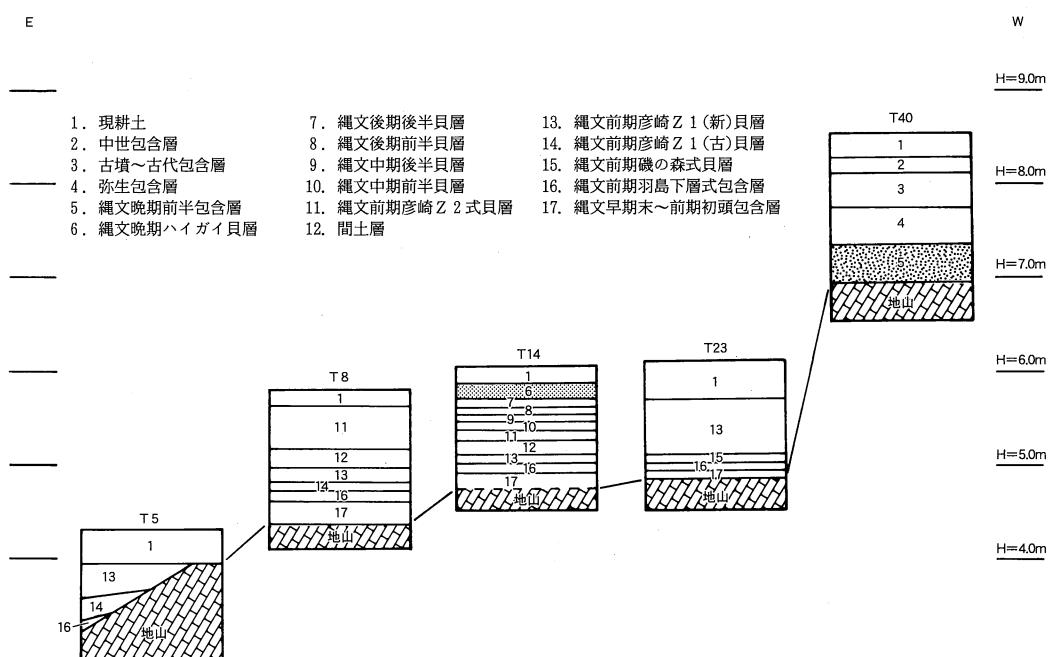
中世の遺構は溝1本である。トレンチの壁面で確認できた。東西に走るもので幅50cm、深さ35cmの比較的小さい溝である。遺物は、13世紀～14世紀の土師器碗のほかに若干の陶磁器が検出された。

中世の包含層の上面は火花が出るほど硬く叩き占められた現耕土の底台である。

縄文時代晩期の貝塚（ハイガイ主体）からT40の遺構検出面の比高差は約1mである。晩期貝塚から検出された土器もT40で主体の土器と同じものが検出されていることから同一要因で形成された遺跡と認定され、居住区を想定することができる。

## 2. 基本層序

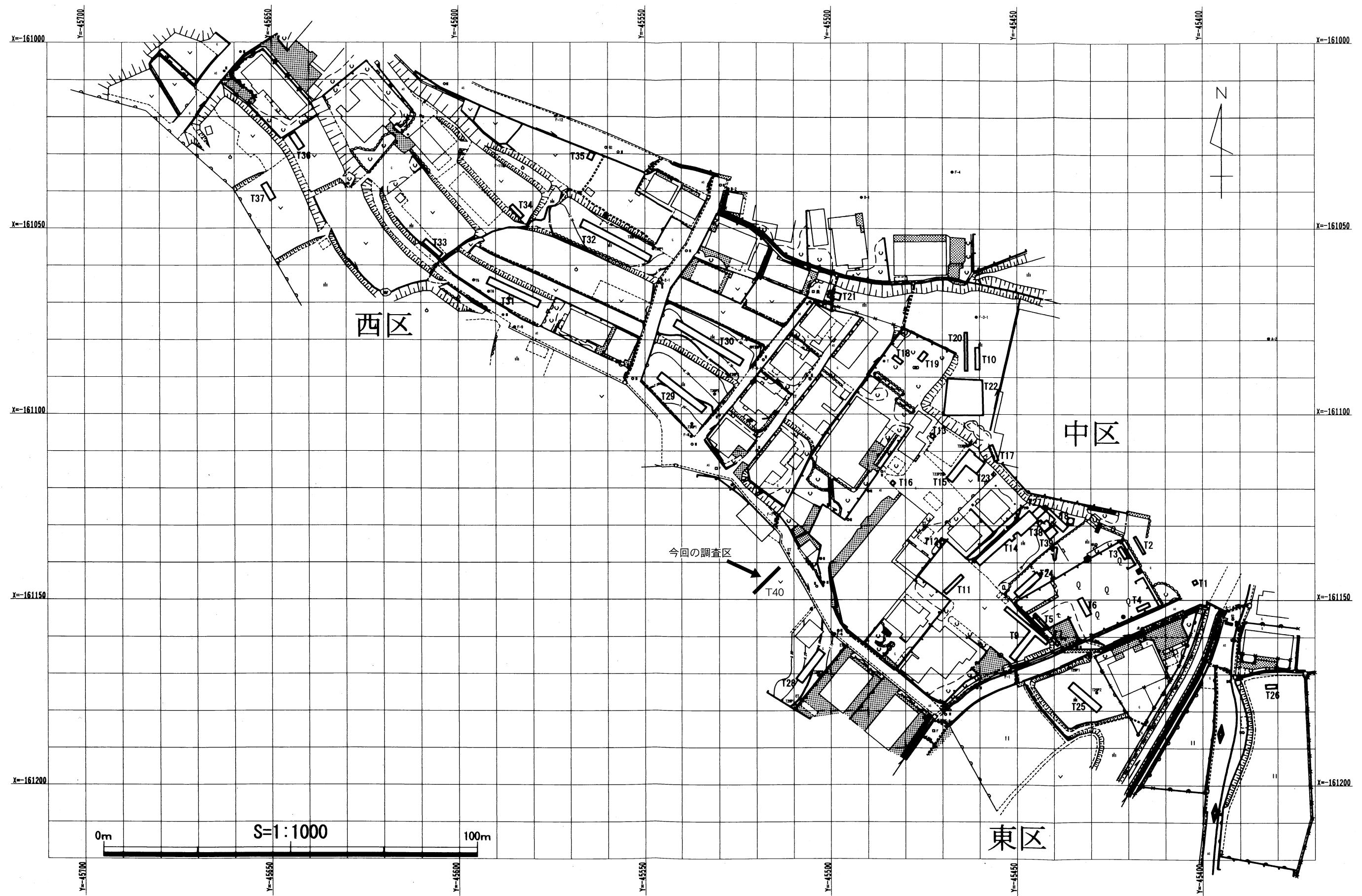
T40では、貝層の検出はなかったものの台地上の調査で検出された遺構群と有機的な関係が確認された。ここでは、こうした観点から台地上の土層断面図を模式化したものを相対的に対照できるよう第17図の土層断面図を作成した。次に具体的に土層の説明に移ろう。



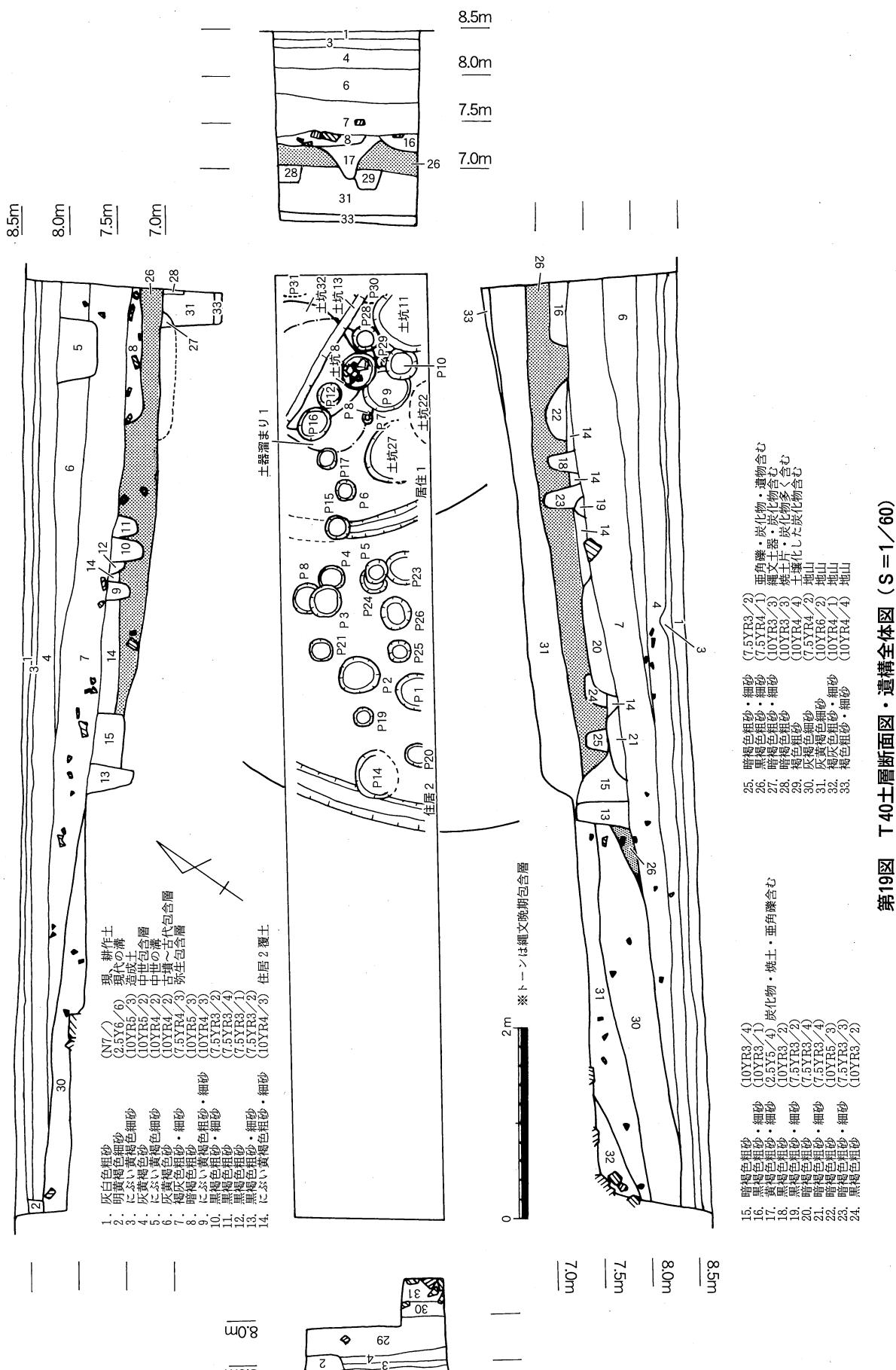
第17図 彦崎貝塚トレンチ別北壁基本層序模式図 (S = 1 / 80)

1層は、現耕土である。若干のハイガイ小片、マガキの碎片が観察される。中世以降の土師器や陶磁器の小片が若干含まれる。2層は、厚さ約20cm中世の包含層である。暗褐色微細砂である。比較的良好く締まっている。遺物は、高台がやや退化し断面が三角形ぎみになった土師器碗のほか亀山焼、備前焼の小片が認められた。遺物量は比較的少ない。小さい溝は3層から掘り込みが開始されている。3層は、厚さ約20cmの褐色細砂で、古墳時代から古代の包含層である。時期幅が広いことを示すように出土する遺物に違いが認められるが。遺物は全体的に磨耗が少ない。焼土片や炭化材を含む。4層は、厚さ30cmの暗褐色細砂土で弥生時代の包含層である。土器、石器、鉄器のほか焼土、炭化材、炭化物を比較的多く含む。遺構は、5層から掘り込みを開始している。5層は、厚さ約60cmの暗灰褐色細砂で縄文晩期前半の遺物包含層である。土器、石器のほか炭化物を多く含む。包含層は標高7.5m付近が最も高位である。遺構は地山（基盤層）（暗灰色微砂・細砂）より掘り込みが開始されている。地山レベルが南西から北東に傾斜しているが、トレンチ中央付近の標高7.3m付近で傾斜変換点が認められ、標高6.8m～7m付近に狭い平坦面が形成されている。地山は縄文時代の生活面がのっている。晩期前半の遺構が掘り込みを開始している面である。

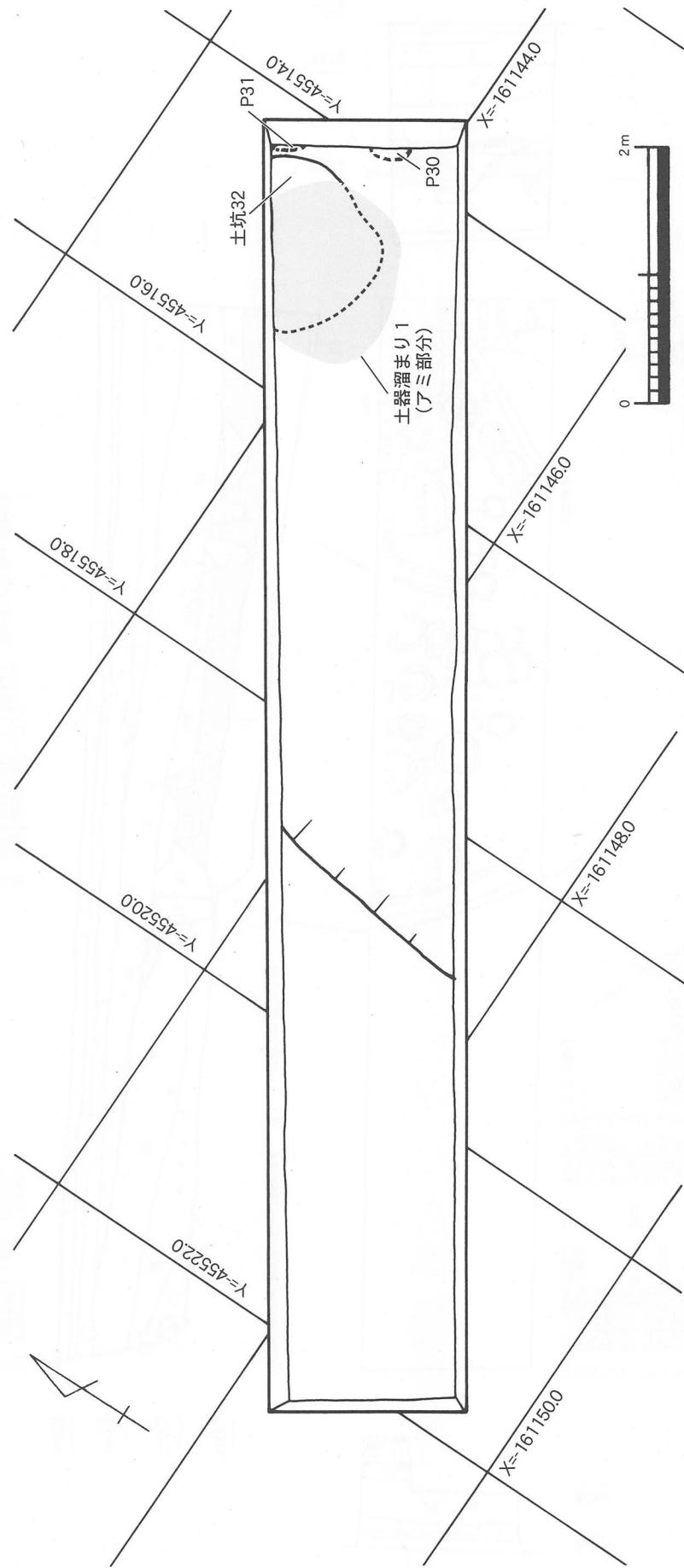
6層は、厚さ約20cmの晩期ハイガイ貝層（混貝土層）である。貝層上面は標高5.8～5.9mである。T40の遺構検出面との比高差は1m～1.3mである。貝塚本体の北側へは貝層は伸びず、南西から北西にかけて残存するものと推定される。そのことは、東大調査の1区～9区で土器が1点も出土していないことと同10区～13区、池田次郎氏調査区、池葉須調査区で晩期の土器が検出されていることからも肯定される。また、凸帶文土器の検出量が少ないので貝塚の大半は縄文時代前半から中葉にかけて形成されたものと推定される。7層は、縄文後期中葉から後葉の混貝土層である。部分的にハイガイやヘナタリの純貝層ブロックを含む部分が認められる。T14では、A区からH区までが後期中葉が主体でH区からJ区は後期後葉土器が主体を占める傾向にある。8層は、後期前半の混貝土層である。東大調査、池田氏試掘、池葉須氏試掘で彦崎K1式土器が多く検出された貝層である。貝層は上面で標高約5.5mである。南西方向に未掘部分が残存している。9層は中期後半の混貝土層である。トレンチの場所の貝層の厚さが薄いことから端部が当たったと推定される。遺物量は多くない。10層は、中期前半の混貝土層である。中期初頭の土壙墓や土坑が検出されている。遺構は彦崎Z2式の面から掘りこみを開始されている。11層は、縄文前期彦崎Z2式の混貝土層である。包含する貝類の組成具合によって3つに細分できる。東大調査では、12層の間土層あるいは彦崎Z1式貝層から掘り込みが開始された土壙墓が20体以上検出されている（池葉須1971）。12層は、彦崎Z2式貝層と彦崎Z1式貝層のあいだに入る間層でT11までは伸びないものである。T11の北端部で平坦部を形成していた地形がやや緩く落ちる。12層には遺物をほとんど含まないことや土壤学的・植物学的な検討から一時、植物が遺跡全体に繁茂した可能性が指摘されている（田嶋編2006）が防臭剤的效果も現実的である。13層は、縄文前期彦崎Z1式新段階の貝層である。貝層と貝を含まない数ミリ以下の薄い層がある。貝層上面は標高約5mである。彦崎貝塚で貝塚が最も大きくなる時期である。14層は、彦崎Z1古段階の貝層。15層は、小型のハイガイ・マガキを主体とした小規模な磯の森式貝層である。T38・39、T23で確認された。遺物量は少ない。16層は、褐色細砂層である。羽島下層式に帰属する。上面は標高約4.7mである。貝層は形成していない。骨針が顕微鏡で検出されており、幾分か波浪の影響を受けたと考えられる<sup>(1)</sup>。17層は暗灰色微細砂層である。同層の上位より厚手の纖維混入土器が、下位より粗大橢円押型文、山形文土器が出土する。これらの土器が彦崎貝塚で最も古い土器である<sup>(2)</sup>。



第18図 トレンチ配置図 (S = 1 / 1,000)

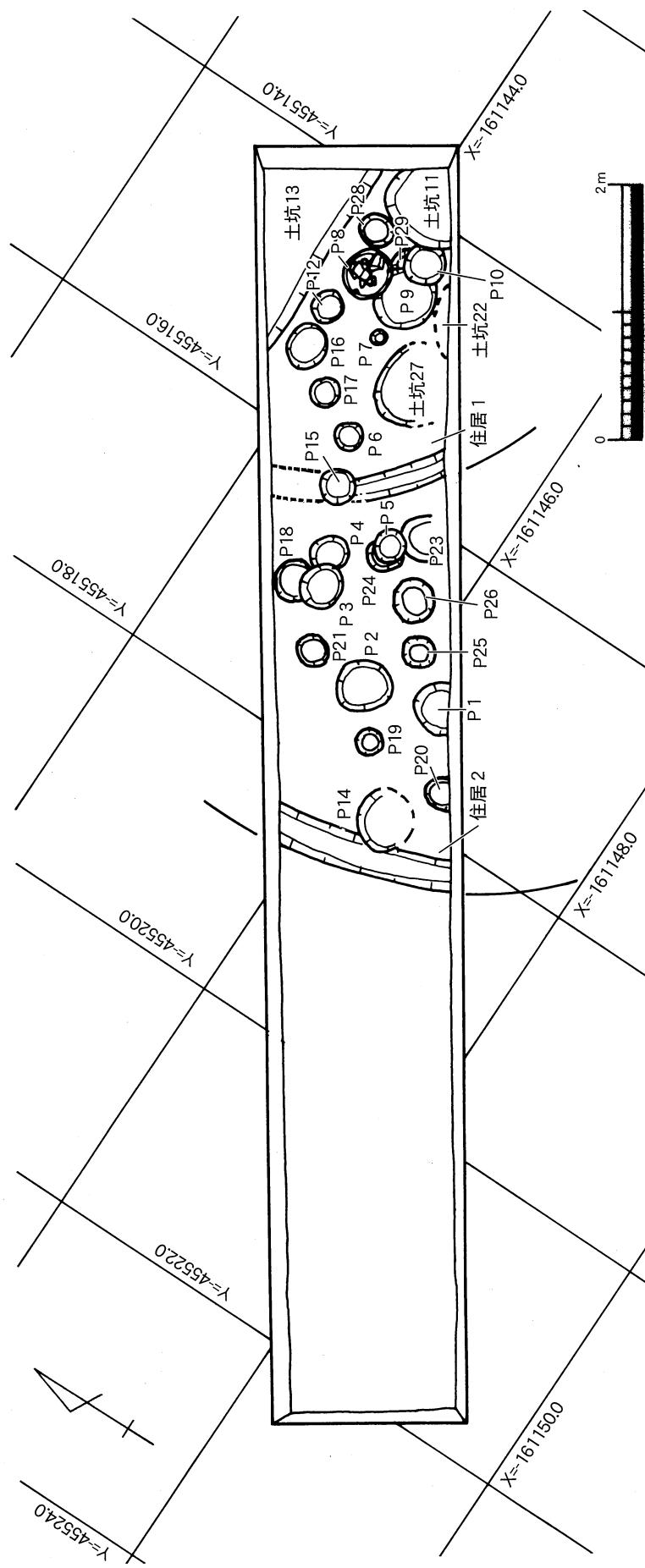


第19図 T40土層断面図・遺構全体図 (S=1/60)



第20図 T40縄文時代遺構全体図 (S=1/50)

第21図 T40弥生時代遺構全図 (S= 1 / 50)



### 3. 縄文時代の遺構と遺物

#### (A) 遺構

##### 1) 土器溜まり 1

(第21図～第25図)

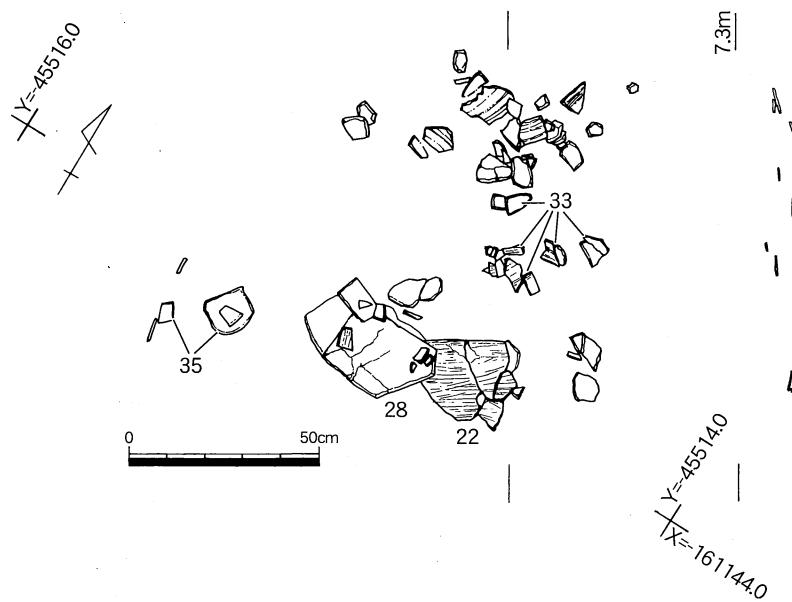
土器溜まり 1 は、トレント北端部付近の 1 m～1.5 m の範囲に集中して認められた（第22図）。旧地形は、南西から北東へ向かって若干傾斜している。縄文晩期の包含層は、最も厚いところで約50cmを測り、当該遺構は、トレント北端から1.5mほどのところで包含層底部が緩く傾斜変換し、やや平坦な面をなす地点の標高約7.25m付近で検出され、最下層の土器は7.15mレベルで認められた。

上層の弥生時代の遺構に若干整地されたり、掘り込まれたりしているが良い残存状況を示している。

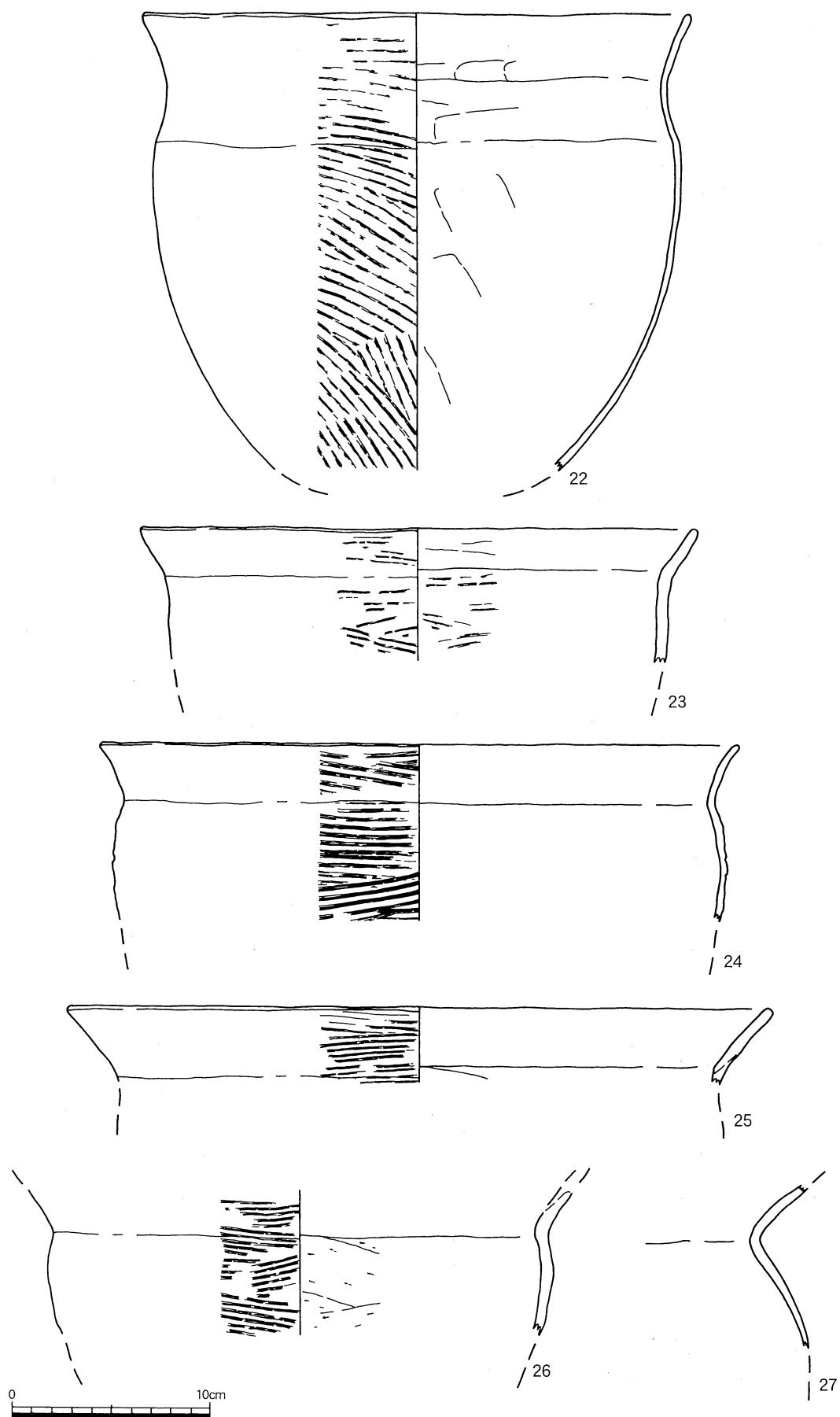
検出状況は、南半で2個体分の深鉢と鉢が検出された。この2個体分の深鉢はいずれも口縁部を北側に向かって、22の外面西端部に28の外面が接した状態であった。22の下部には同一固体の胴部が外面を上にして密着していた。また、22は、外面から内面にかけての方向に後世の負荷（土圧）がかかって本来の方向とは逆に中央付近でV字状に屈曲していた。35は、外面を下にしていた。北半では33、34などの浅鉢と深鉢の口縁部破片や底部のほか石鏃等の石器が検出された。石鏃は、浅鉢の内面に付着した状態で出土している。

北西～北側に口縁部を向けた2個体の深鉢から約30cm離れた地点で浅鉢を検出したが、精査したにもかかわらず掘方等の検出にいたらなかったので、これらは土器棺墓等の遺構ではなく、廃棄された土器の集積つまり、土器溜まりとして認定したのである。検出された土器群のうち、深鉢は全て粗製であり、一方浅鉢は精製土器である。いずれの土器に二次的な器表の摩滅や剥離が認められること、大型の同一個体の破片が集中していることから大きく後世の改変を被っていないものと判断した。しかし、掘方のない遺構のため若干時期の異なるものを含んでしまうことは否めないだろう。

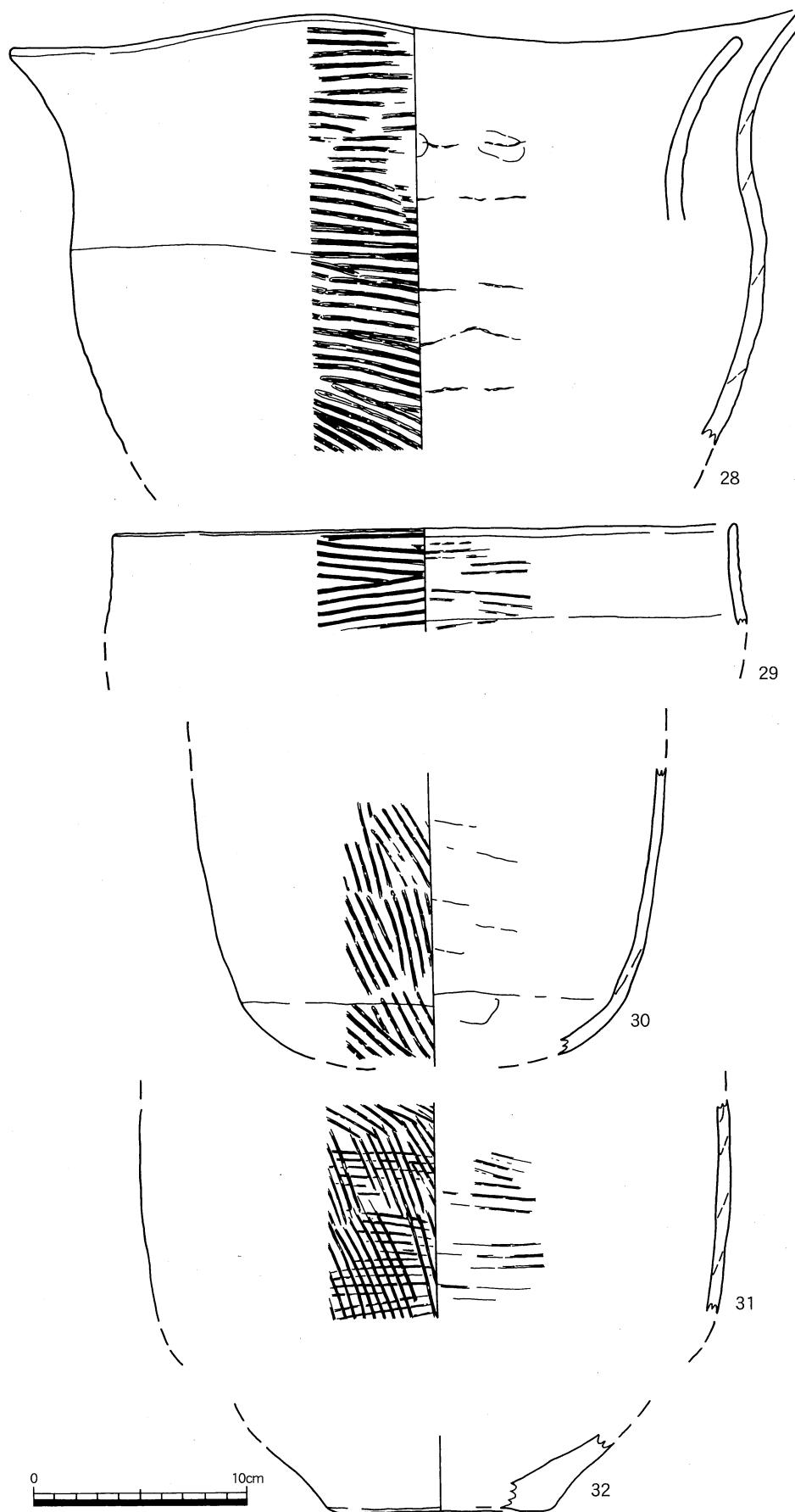
22～31は粗製の深鉢である。口縁部は平口縁（22～25・29）と波状口縁（28）がある。いずれも最大径を口縁部に持つものである。また、器壁も4mm程度のやや薄いもの（22・24等）と7mm～8mmのやや厚ぼったいもの（23・28等）の二種が認められる。器形全体がわかるものはないが、緩やかに立ち上がる胴部から頸部付近でやや内屈し、大きく外反する長めの口縁部をもつもの（22・28）、頸部から直線的に短く外反する口縁部をもつもの（23・25）、外反気味の短い口縁部をもつもの（24）、やや内屈する口縁部をもつもの（29）がある。胴部のプローポーションも緩やかに立ち上がるもの（22・24・28）のほかやや直線的に立ち上がるもの（30・31）がある。32は、平底の底部である。



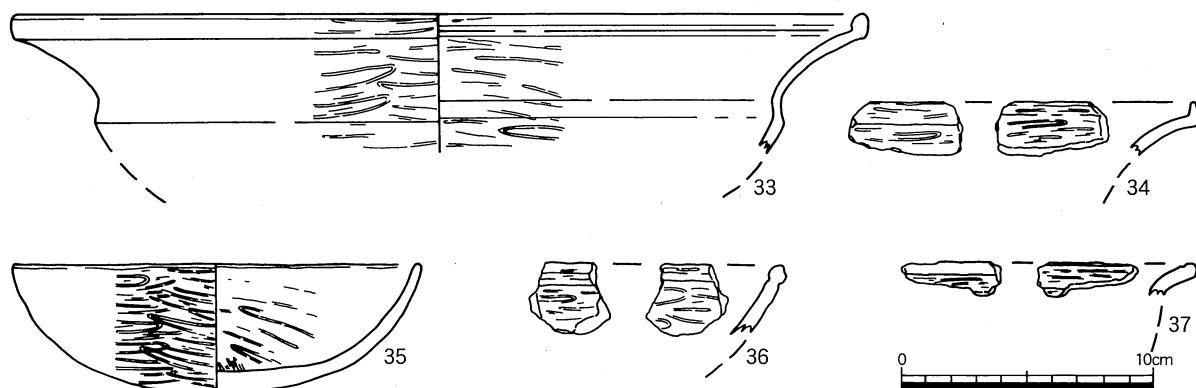
第22図 土器溜まり 1 平・断面図 (S = 1 / 20)



第23図 土器溜まり1出土土器(1)(S=1/3)



第24図 土器溜まり1出土土器(2)(S=1/3)



第25図 土器溜まり1出土土器(3)(S=1/3)

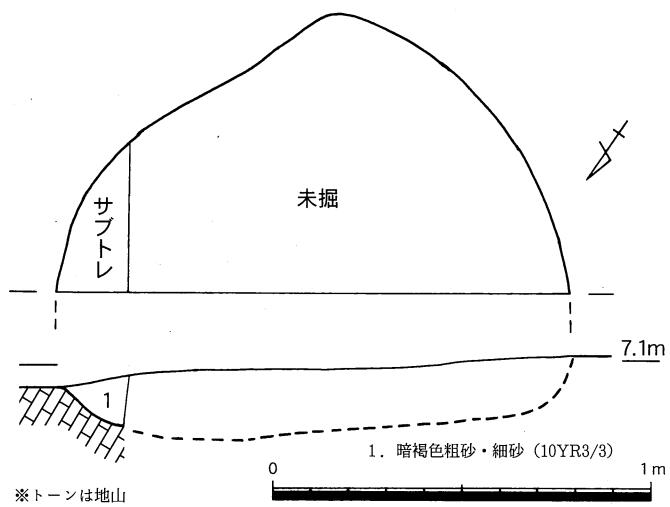
いずれの深鉢も明黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には砂粒、金雲母、角閃石などの鉱物を含む。内外面に黒斑を持つものもある。調整は内外面とも基本的に二枚貝条痕調整であるが、最終的な仕上げに若干の差異が認められる。

外面はほぼ全ての個体で最終調整は二枚貝条痕である。ただ、細かく見ると隣り合う条痕間の幅が広いもの（22・28・30等）と狭いもの（23・25・26等）があり、土器表面の調整に用いた工具としての二枚貝に何種類かあったものと考えられる。例えば、ハイガイ、アカガイ、サルボウガイ等。

内面は外面よりいくらか最終調整にバリエーションが認められる。すなわち、二枚貝条痕調整のもの（23・29・31）、二枚貝条痕を完全にナデ消すもの（24・25・27）、ケズリ・指頭圧のもの（22・26・28・30）である。22は、口縁部径27.4cm、28は39.6cmを測る。28の内面には明瞭に輪積の痕跡が残る。

33～37は、浅鉢である。調整は内外面とも丁寧なミガキである。色調は黄橙色を呈するものが多いが33は、黒色磨研部分より赤化した部分が多いものである。胎土には、砂粒、細砂、金雲母、黒雲母、角閃石などの鉱物を含む。口縁端部の処理は、外面に沈線を持たず内面には、指や工具による沈線およびやや沈線が退化した感のある凹線が施される場合が多いようである。また、口唇部は丸くおさめるもの（33）や若干尖るもの（34）がある。頸部から外反する口縁部の立ち上がりの角度もやや鈍角である。35は椀状の器種である。36は口縁部内外面に凹線が施されるもの、37は内面に細く浅い沈線が一条めぐるものである。33は、口径33.7cm、35は口径16.1cmを測る。36、37はやや後出的な要素を持つ土器といえる。以上の特徴から鑑みると土器溜まり1の時期は、ほぼ縄文時代晩期前半後葉～末に相当すると考えられる。型式名で言えば、ほぼ黒土B I式（中段階）から舟津原式（古段階）に相当する。

## 2) 土坑32



掘第26図 土坑32平・断面図 (S=1/20)

の土坑となろう。土坑は、南側で標高7.1mから地山に掘り込まれ、北側では標高7.06mから掘り込みが開始されている。時期を特定できるような遺物は検出されなかったが、総合的に判断した結果、土器溜まり1より古いが一型式を設定するほどの時間的な隔たりはないと考える。

## 3) ピット

縄文時代のピットはいずれもトレンチ北端部の壁際で僅か2基のみ確認できたにすぎない(第19図)。いずれも標高7m付近から地山に掘り込まれている。P30は、直径0.4m、深さ0.2m、P31は、直径0.4m、深さ0.2mを測る。他の遺構と同様に西側に本体(居住区)が存在するものと考えられる。

## (B) 包含層出土の遺物(第27図～第29図)

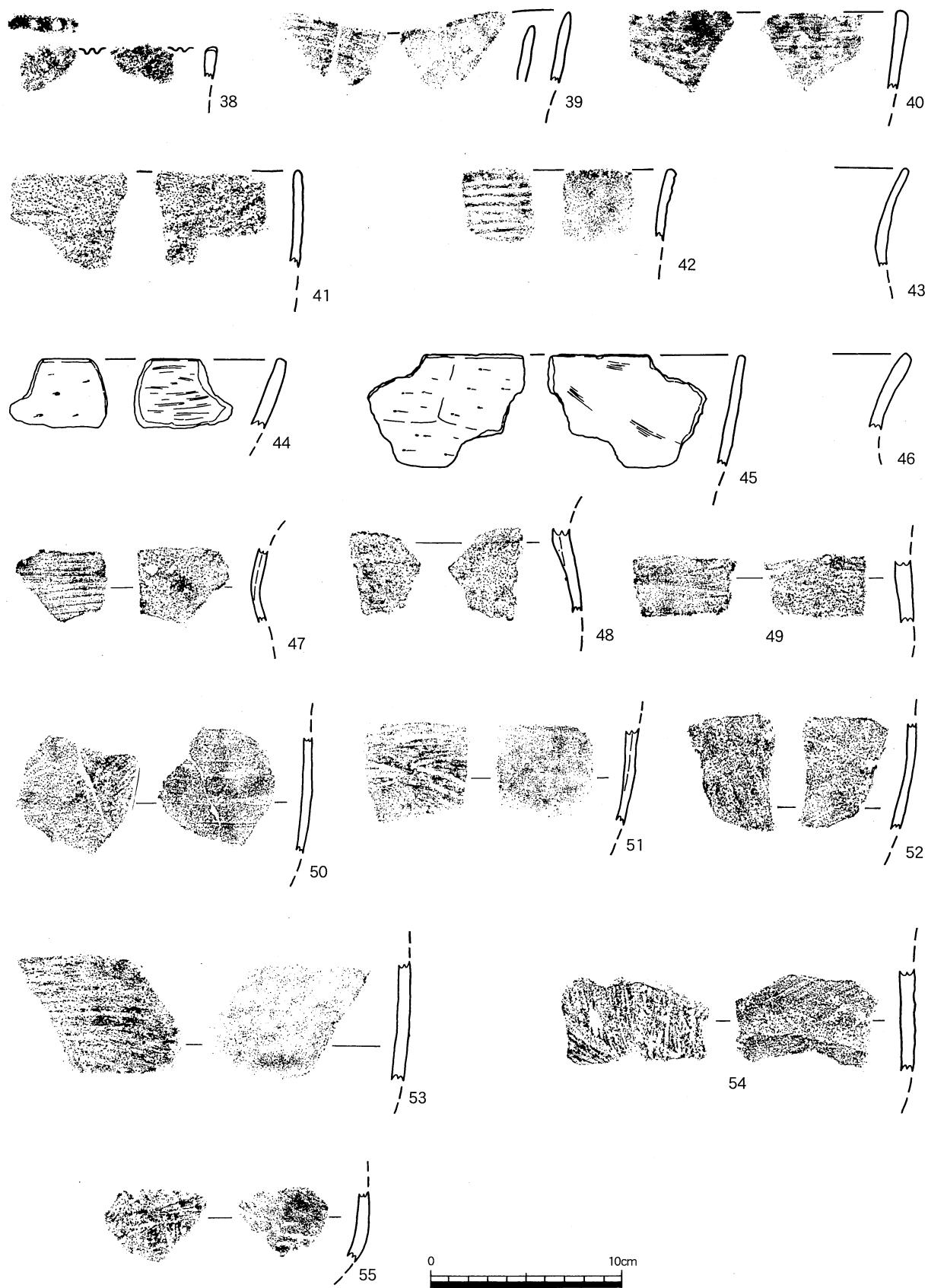
38～55は粗製の深鉢である。破片のため全体がわかるものはない。38は、口唇部にキザミが施される。39が波状口縁のほかは全て平口縁である。口縁部の形態は、ゆるく大きく外反するもの(38～40・43)、若干内湾ぎみに立ち上がるもの(41・44・45)、短く外反するもの(42・46)が見られる。口縁端部の形状には、丸くおさめるもの(38・40～43)、尖るもの(39)、全体あるいは一部に面をもつもの(44～46)がある。

土器内外面の最終調整には、外：二枚貝条痕・内：二枚貝条痕のもの(38～40)、外：二枚貝条痕・内：ナデのもの(41・42)、外：二枚貝条痕のちケズリ・内：二枚貝条痕のもの(44・45)が見られる。

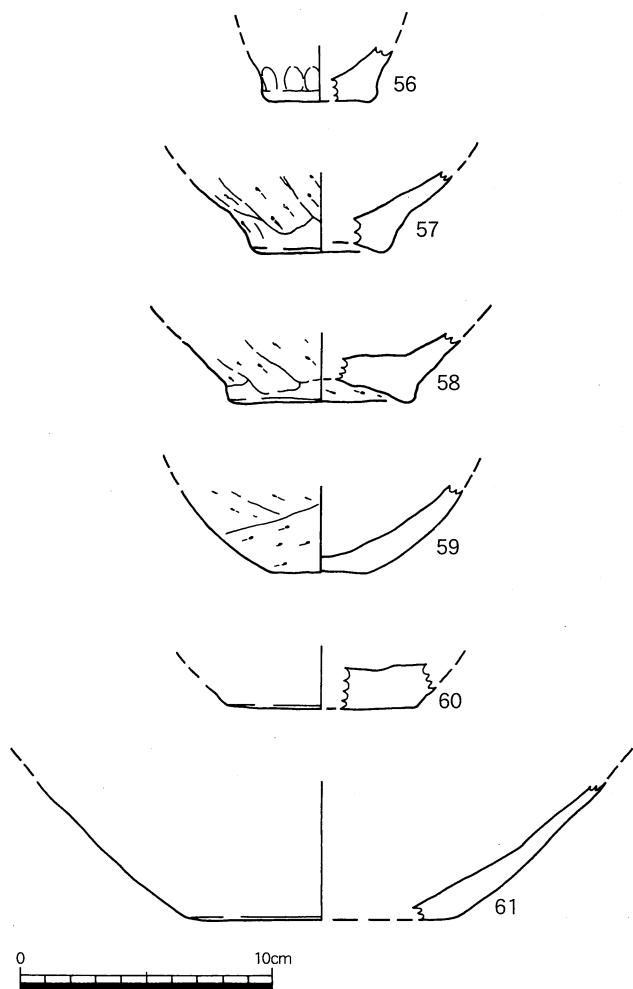
器壁は、4mm～5mmのやや薄手のもの(39・41等)と7mmほどのもの(44・46)の二種がある。47～55は、頸部から胴部にかけての破片である。胴部の内外面の調整も先の口縁部と同様の手法で施されている。

56～61は底部である。粗製の深鉢のものと考えられる。56は、底径4.6cmを測る平底である。外面には胴部下端部と底部の境に指頭圧痕が残る。57・59は底径5.5cm、3.6cmを測る碁笥底である。

土坑32は、トレンチの北端部において土器溜まり1を取り上げたあとに精査して検出した。西側は調査区外に残存しているものと考えられる。検査面で長さ1.36m、幅0.75m、深さ0.15mを測る。平面形は歪んだ半円状をなしている。検査面は、南西から北東へ約四度傾斜している。サブレンチの部分のみ掘り下げたので残りは未掘である。したがって遺構の床面の状況は明確ではないが浅い皿状



第27図 縄文晩期包含層出土土器 (1) (S=1/3)



第28図 縄文晩期包含層出土土器（2）(S=1/3)

、直方体状のもの（68）、小突起状のもの（69）、極めて鈍角のもの（70）がある。

71・78～80は、外反するものである。71はゆったりとした波状口縁である。72～77は直線的に伸びるタイプである。72は口唇部にキザミが施される。77には補修孔が見られる。片側穿孔ではなく両側から穿孔されている。74の内面には圧痕が2ヶ所で認められる。何の圧今痕であるのか同定で来ていない。81は、口縁端部が摘み上げたようになるタイプである。82は胴上部で短く内屈し、そこに内湾する頸部が付いて短くやや外反する口縁をもつタイプである。この両タイプの浅鉢は今回の調査では大変少なかった。84は、口径16.1cmを測る浅い皿状の器形である。いずれの浅鉢も内外面が丁寧にミガキが施されている。85は、縄文土器の破片である。縄文は単節の斜縄文（RL）である。縄の撫りや土器の胎土、焼成からみると彦崎Z2式と思われる。

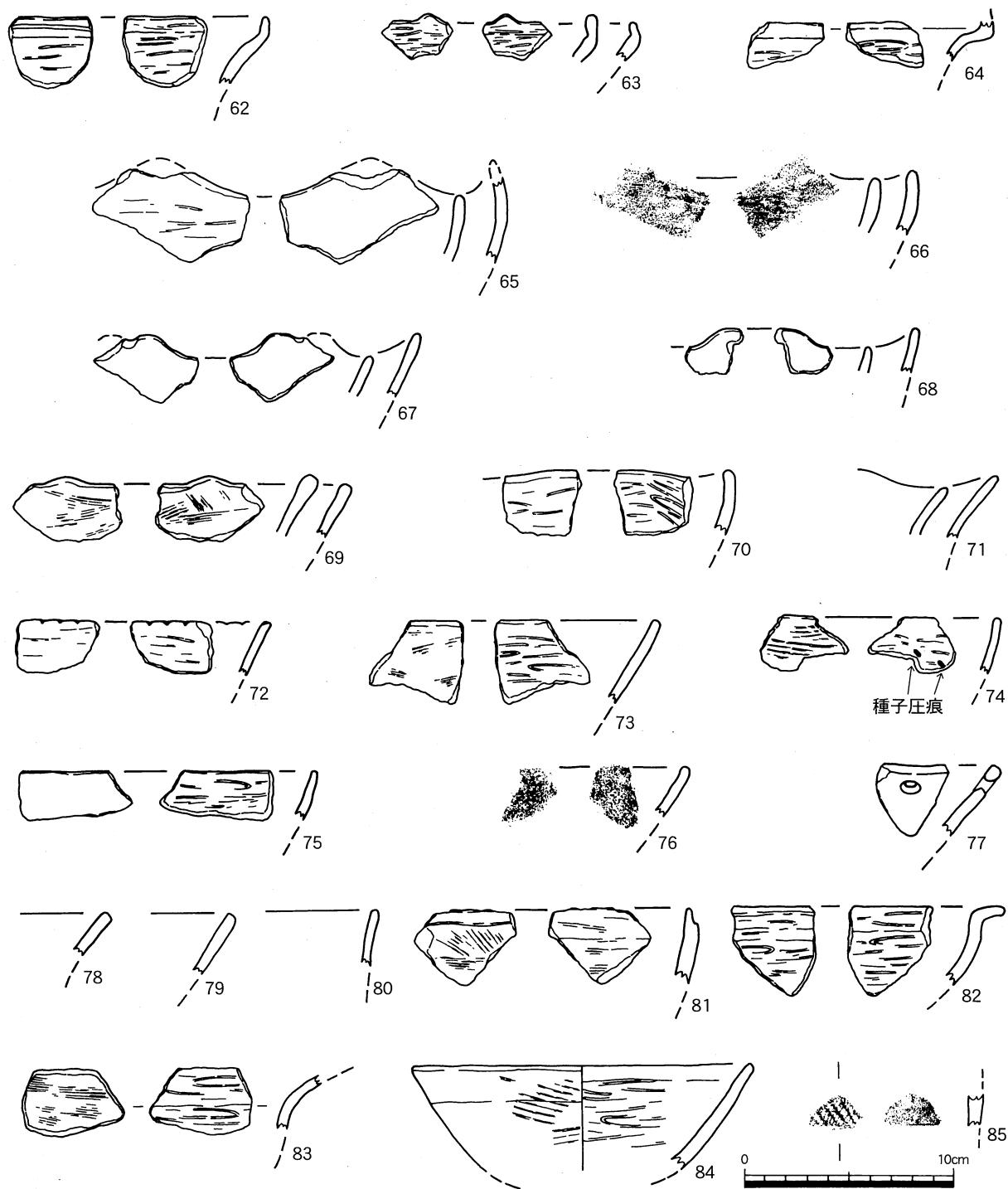
外面には二枚貝条痕後のケズリが残る。58は、底径7.4cmを測る高台状の底部である。

60・61は、平底である。それぞれ、底径7.4cm、9.0cmを測る。61はやや大きめの底部である。内外とも二枚貝条痕後にナデ調整。

62～84は、浅鉢である。62～64は、大きく外反する頸部から垂直あるいは斜め上方に口縁部が短く立ち上がるタイプである。口縁部内面には細い沈線が施されるもの（63）、沈線が退化した浅い凹線が施されるもの（62・64）がある。また、いずれの土器も口縁端部外面に沈線が施されていない特徴があり、この点は先に述べた土器溜まり1出土のものと同様の属性である。口唇部が丸みを持つことも然りである。全体的に内外面とも丁寧なミガキで黒褐色を呈する。63には、口唇部に小突起が認められるので小波状口縁になる可能性がある。

65～80は、斜め上方に外開して立ち上がる胴部に段状の短い頸部が付き、そこから内湾あるいは外反したり直線的に伸びる口縁部になるタイプである。65～70が内湾するものである。いずれも波状口縁であるが若干のバリエーションがある。

すなわち、山形のもの（65・66）、山形の頂部に丸棒状の工具を押し当てたもの（67）



第29図 繩文晩期包含層出土土器 (3) (S=1/3)

### (C) 石器

#### 出土石器の概要

今回調査を行ったT40では、縄文時代・弥生時代合わせて46点の石器が出土した。その内訳は、縄文時代の石器28点、弥生時代の石器18点である。ただし、弥生時代の遺構が縄文時代の包含層を掘り込んで形成されていたり、各包含層の境目が必ずしも明瞭ではなかったため、複合遺跡の宿命にもれずすべての石器の帰属時期が明確だと言い切ることはできない。最後に、すでに報告されているT8・T14から出土したフロテーション資料の石器もあわせて今回報告しておきたい。

#### 縄文時代の石器（第1表・第30図～第32図）

縄文時代に属する石器は、総数30点である。そのうち剥片石器が26点、礫石器が4点である。縄文の包含層からは晚期前半の土器のみ確認されているため、これら石器の時期も縄文時代晚期前半と考えられる。

**石鎌 (S1～S5)** 5点あり、すべてサヌカイトである。すべて平基式とみられる。素材面を残しながら、周縁部を主に調整したもの (S2～S5) が多い。

**スクレイパー (S6・S7)** 2点出土した。すべてサヌカイトである。S6は主に腹面側から調整している。S7は弥生時代の打製石包丁の可能性があるため、帰属時期に不安を残す。打製石包丁に特徴的な磨滅痕や背部の刃潰し加工は施されていない。

**石核 (S8～S12)** 5点出土した。すべてサヌカイトである。すべて残核と考えられ、廃棄直前に小型の素材剥片が剥離されている。

**剥片 (S13～S26)** 14点出土している。すべてサヌカイトである。なお、S22・S23は発掘中に出土したものではないが、発見状況や風化の度合い等を考慮して縄文時代の遺物と判断した。

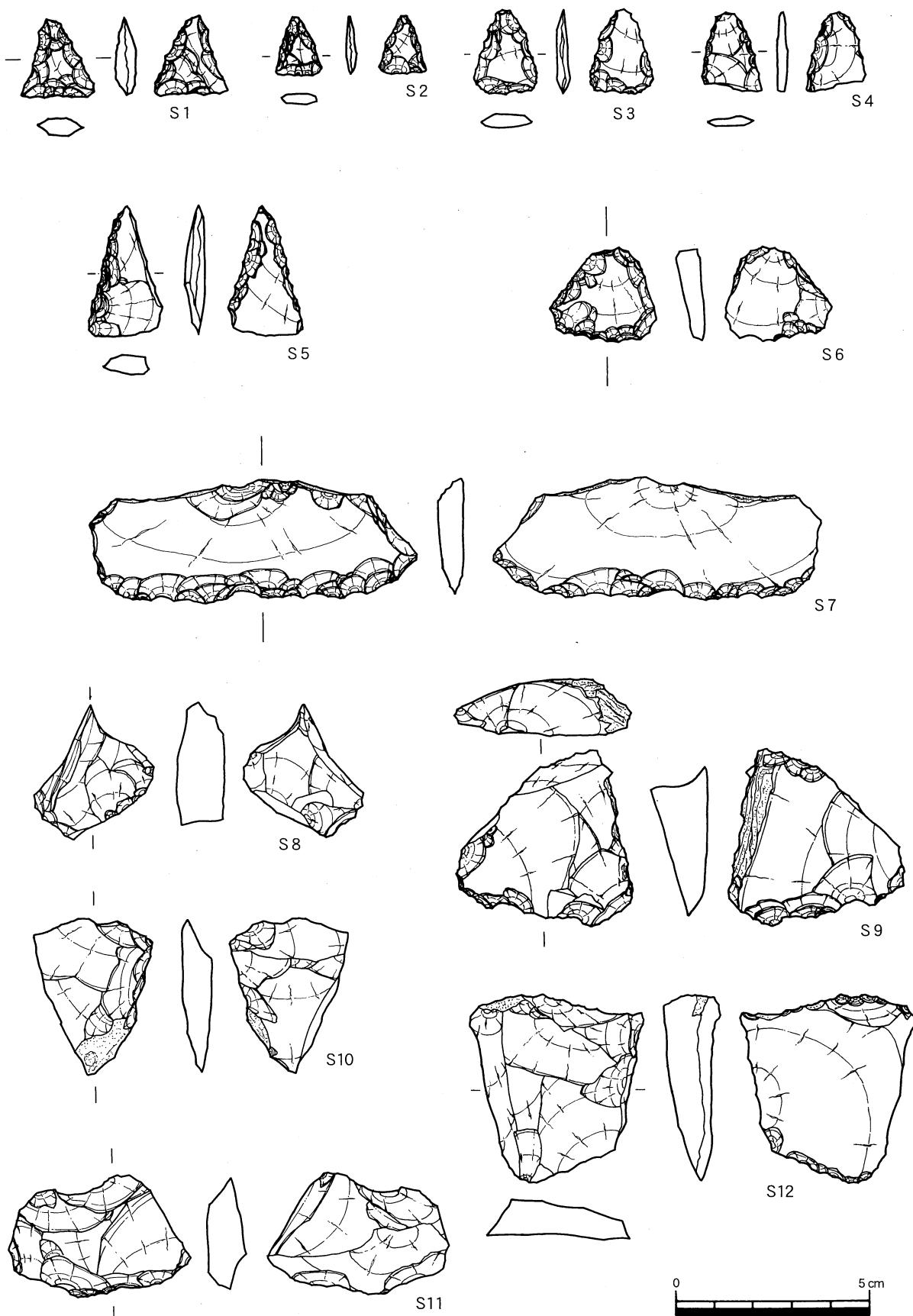
**石斧未製品 (S27・S28)** 2点出土した。2点とも石英ヒン岩製である。刃部は形成されておらず、打剥の途中で欠損したもの (S27) がみられる。

**凹石 (S29)** 1点出土した。流紋岩製である。片面に浅い窪みをもつ。

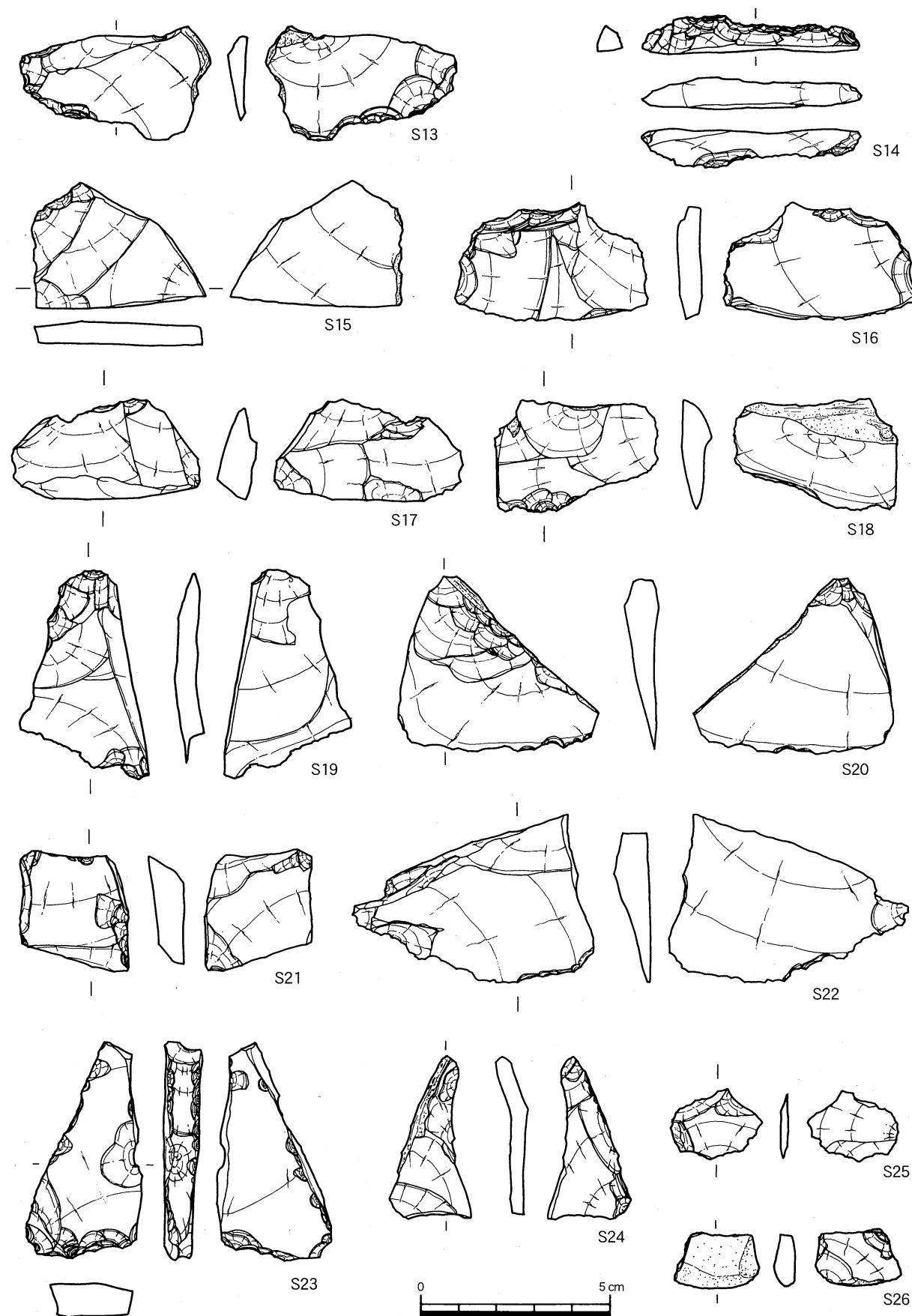
**不明 (S30)** 1点出土した。凝灰岩製である。敲打痕などみられず、用途は不明であるものの、側縁に人為的な線状痕がみられる。

第1表 T40出土の縄文時代石器石材組成表

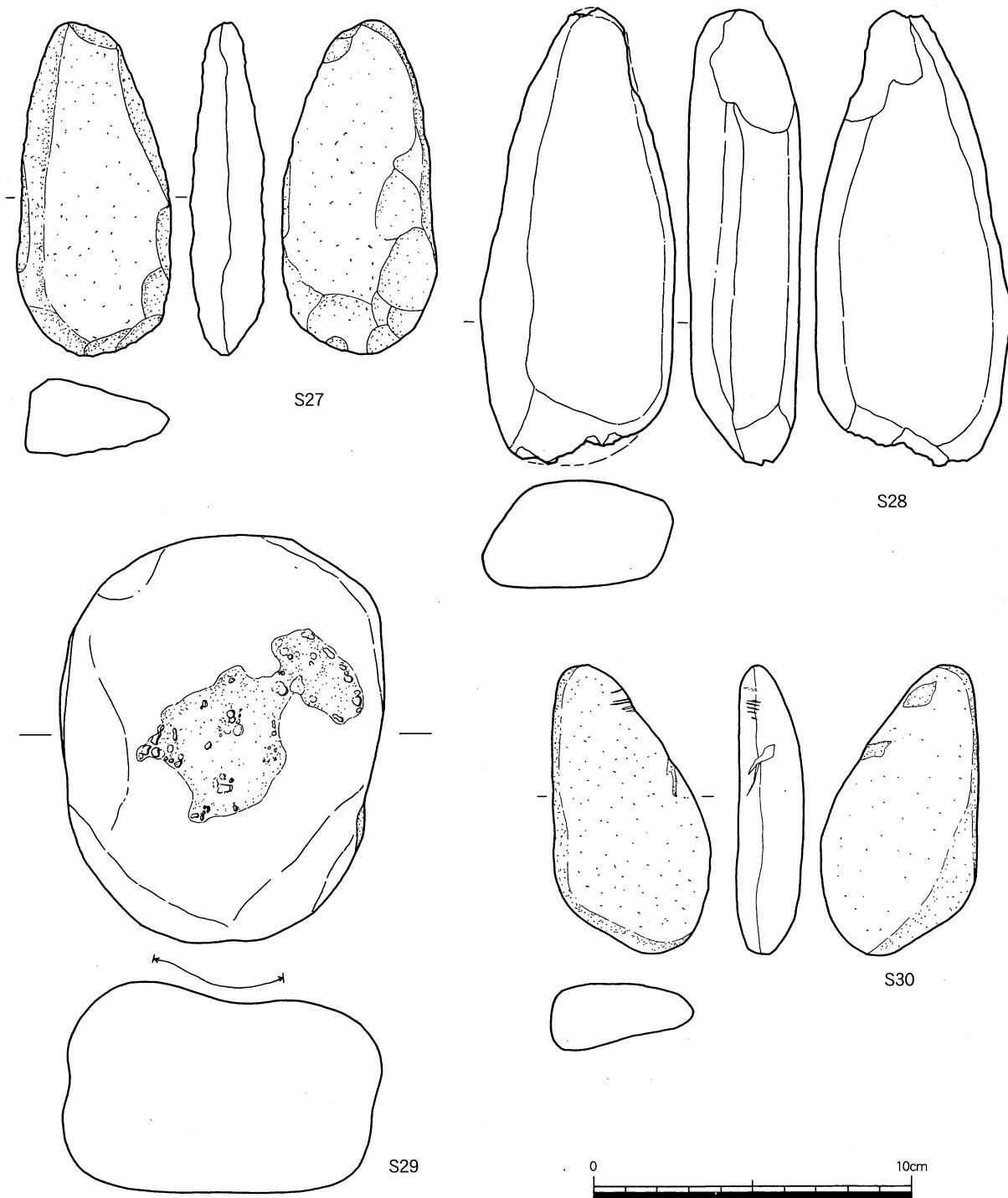
石材 器種	サヌカイト	石英ヒン岩	流紋岩	凝灰岩	合計
石 鎌	5				5
スクレイパー	2				2
石 核	5				5
剥 片	14				14
石斧未製品		2			2
凹 石			1		1
不 明				1	1
合 計	26	2	1	1	30



第30図 繩文時代の石器（1）(S= 2 / 3)



第31図 縄文時代の石器（2）(S = 2 / 3)



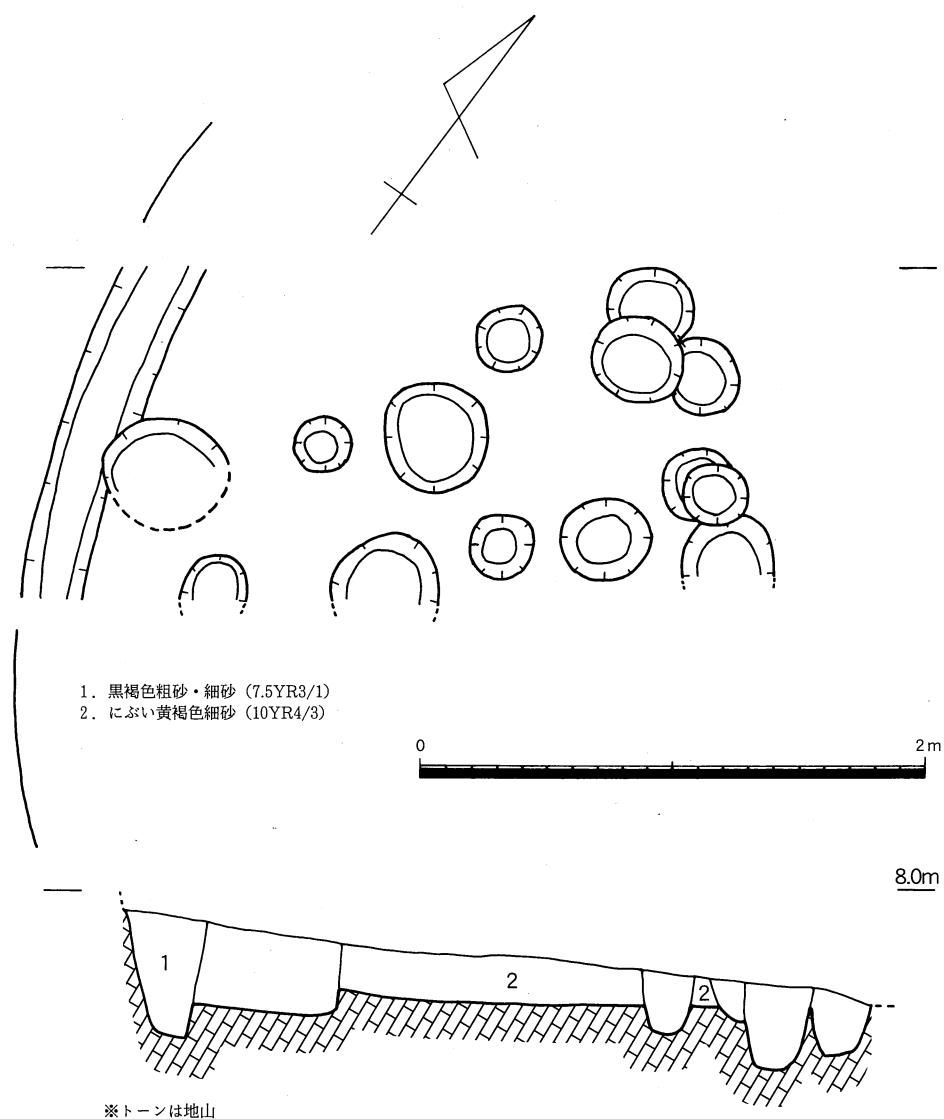
第32図 縄文時代の石器 (3) (S = 1/2)

#### 4. 弥生時代とそれ以降の遺構と遺物

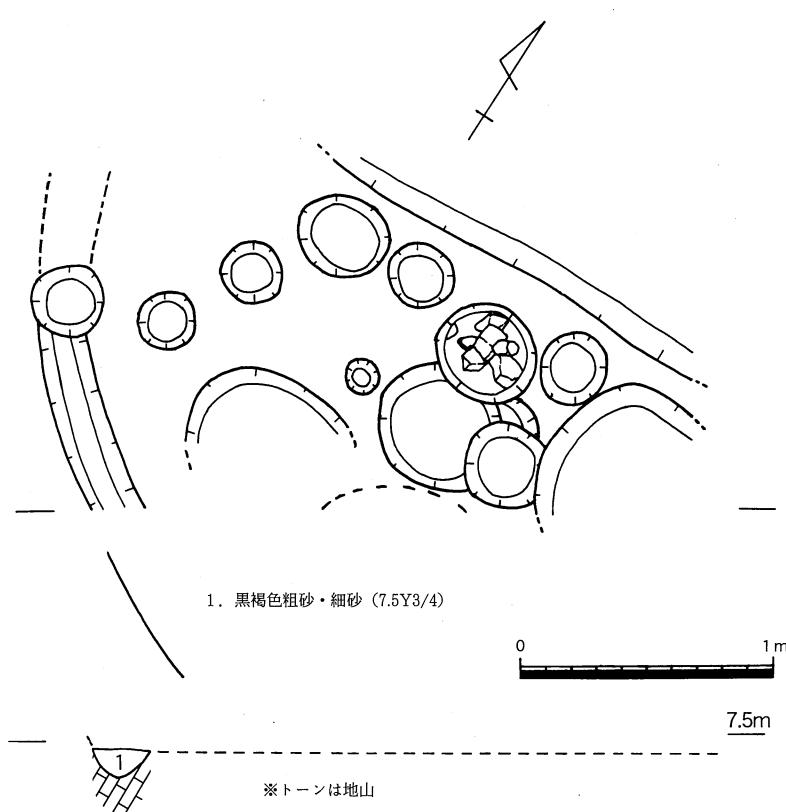
##### (A) 遺構

###### 1) 穫穴住居2 (第33図)

竪穴住居2は、トレンチの中央付近で検出された。住居は、基盤の傾斜変換点となる地点に堆積した縄文晚期の包含層の上面を整地して構築されたものと考えられる。狭小なトレンチではあったがピット群や土坑群が密集しており、竪穴住居の認定には困難を極めた。しかし、壁体溝がトレンチ外に弧を描くように伸びることと床面を確認できたので住居と判断した。主柱穴が何本であるかは、トレンチ調査の限界で確認できなかった。しかし、同時期の児島の遺跡である城遺跡の調査事例から主柱穴は4本で、円形の可能性がある(伊藤1977)。壁体溝は検出部分で長さ1.1m、上端幅0.2m、下端幅0.13m、残存する深さ0.6mである。



第33図 穫穴住居2平・断面図 (S=1/30)



第34図 竪穴住居1平・断面図 (S=1/30)

## 2) 竪穴住居1（第34図）

竪穴住居1は、トレンチの北端部で検出された。縄文時代晚期の包含層の上面をフラットに整地して竪穴住居2が形成された。その廃棄後、竪穴住居2の覆土を切って作られている。後世の改変を受け主柱穴や床面は失っていたが、壁体溝とその立ち上がりが検出され竪穴住居と認定できたのである。残存する部分での壁体溝は、長さ0.6m、上端幅0.2m、下端幅0.15m、深さ0.1mを測る。竪穴住居2と同様にトレンチ調査の限界から明確なプランの復元は不可能であるが周辺遺跡の調査事例から竪穴住居2と同様の構造をとるものと考えておきたい。出土遺物は、廃棄後の移動に伴って持ち去られていたので時期比比定は難しいが、先行する竪穴住居2を切っていることから弥生時代中期後葉以降終末頃としておきたい。

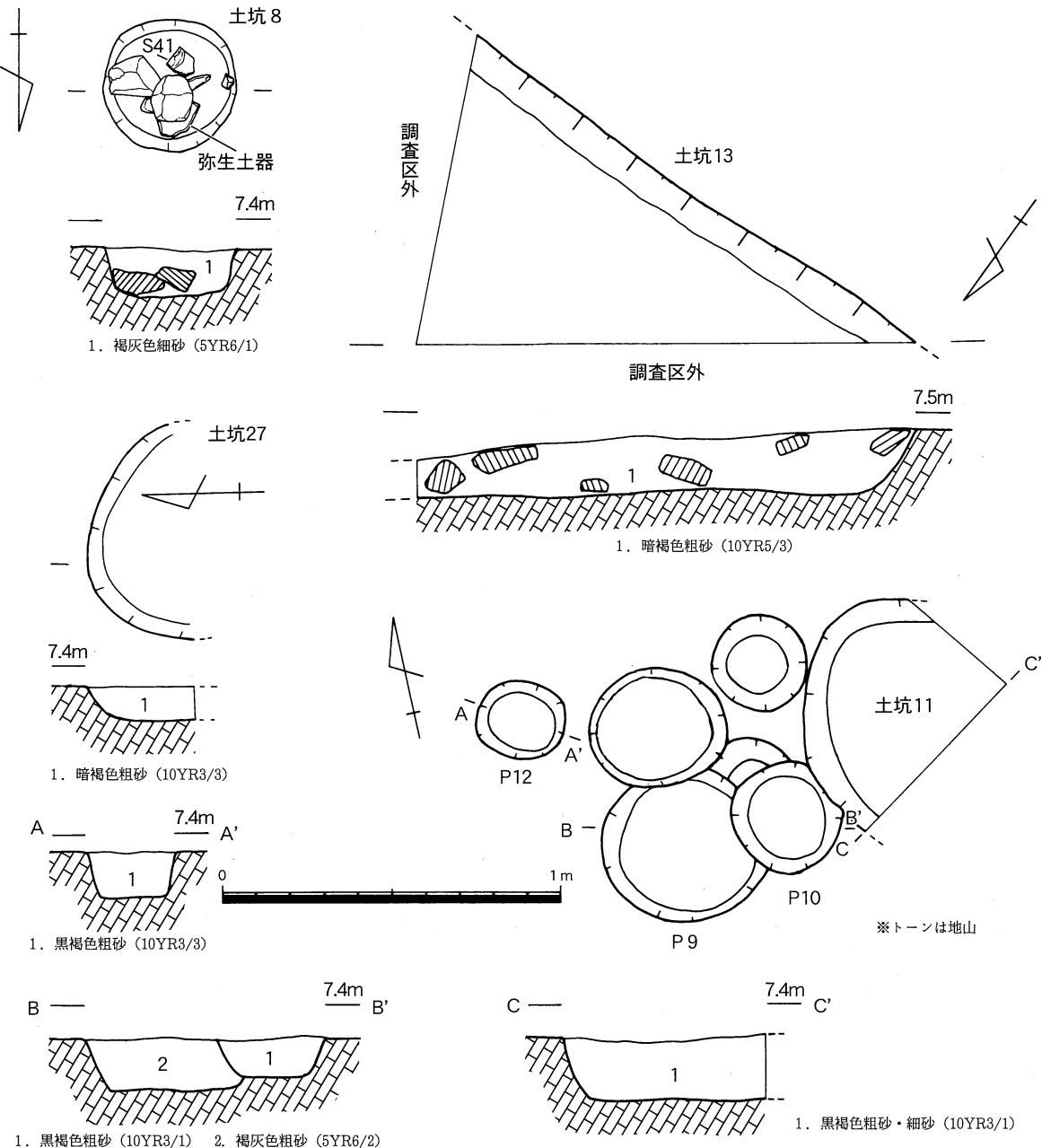
## 3) 土坑（第35図）

## 土坑8

土坑8は、トレンチ北部やや中よりの標高7.32mで検出された。直径約0.45mの円形プランをなし、検出面からの深さ0.15mを測る。底面はやや緩く東側に傾斜するが平坦である。底部では花崗岩と砂岩製の亜角礫が数個検出された。土坑内からは弥生土器の胴部片とサヌカイト剥片(S41)が出土した。中期末頃か。

大変しっかり掘り込まれ、先端は縄文晚期の包含層をくりぬき基盤まで達している。ここまで念入りに造作をするにはやはり目的があったはずである。推測にはなるが北風や湿気等の影響を考慮したのかもしれない。

また、残存する床面は平坦をなすように意識されていることがわかる。しかし、精査したにもかかわらず検出できた遺物は極めて少なかった。わずかに88・89とS31である。土器の特徴から弥生時代中期後葉の仁伍式に並行しようか。また、S31は有茎の石鏃である。両面ともに丁寧に調整が加えられている。サヌカイト製である。



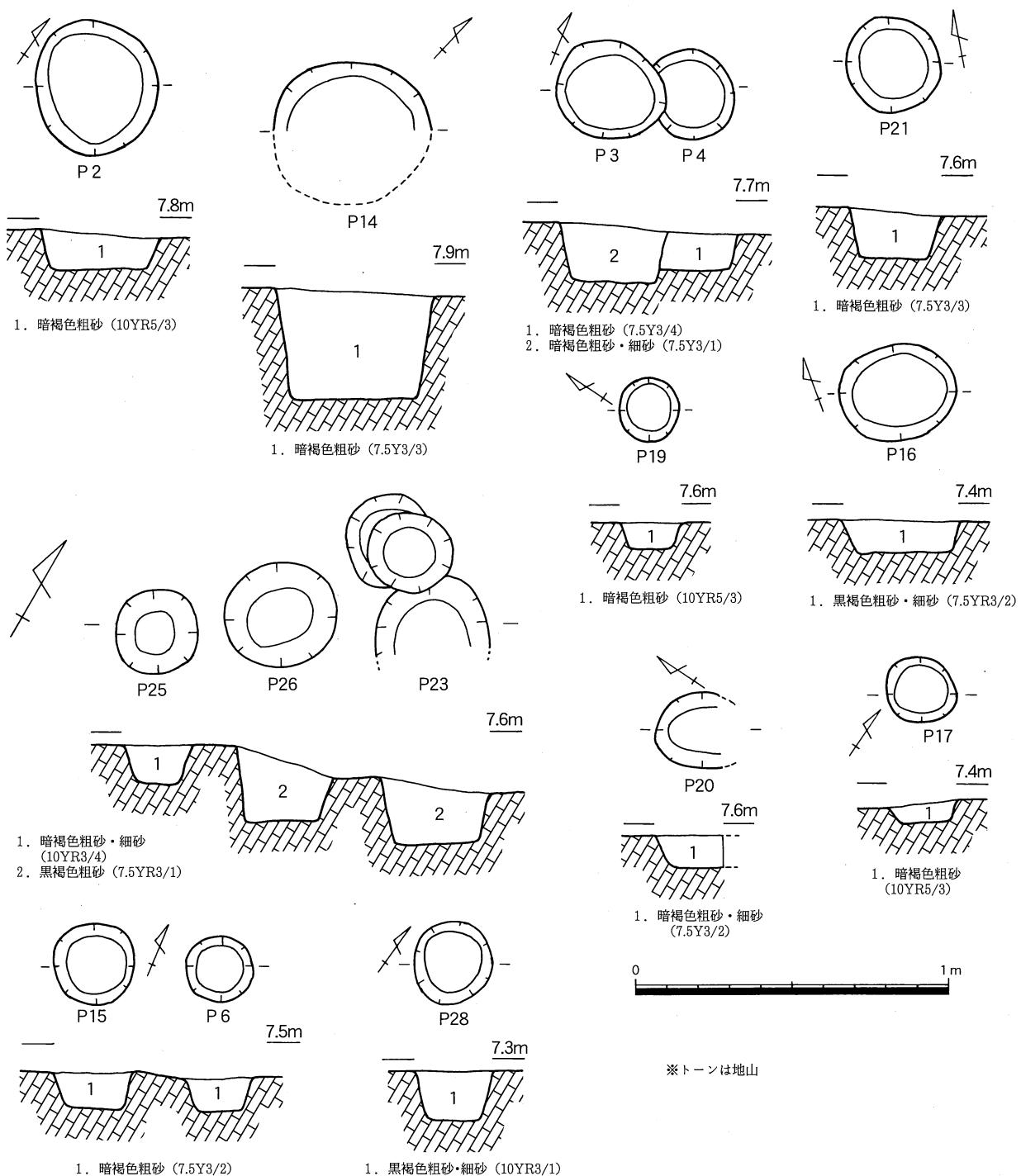
第35図 土坑及びピット平・断面図（1）(S=1/20)

### 土坑11

土坑11は、トレンチの東部端の標高7.31mで検出された。トレンチ外に伸びるがおよそ長楕円形になるものと推定される。検出面では、最大長0.5m、最大幅0.45m、検出面からの深さ0.19cmを測る。底面は若干凹凸する。精査したにもかかわらず遺物は検出されなかった。中期後半に該当しようか。

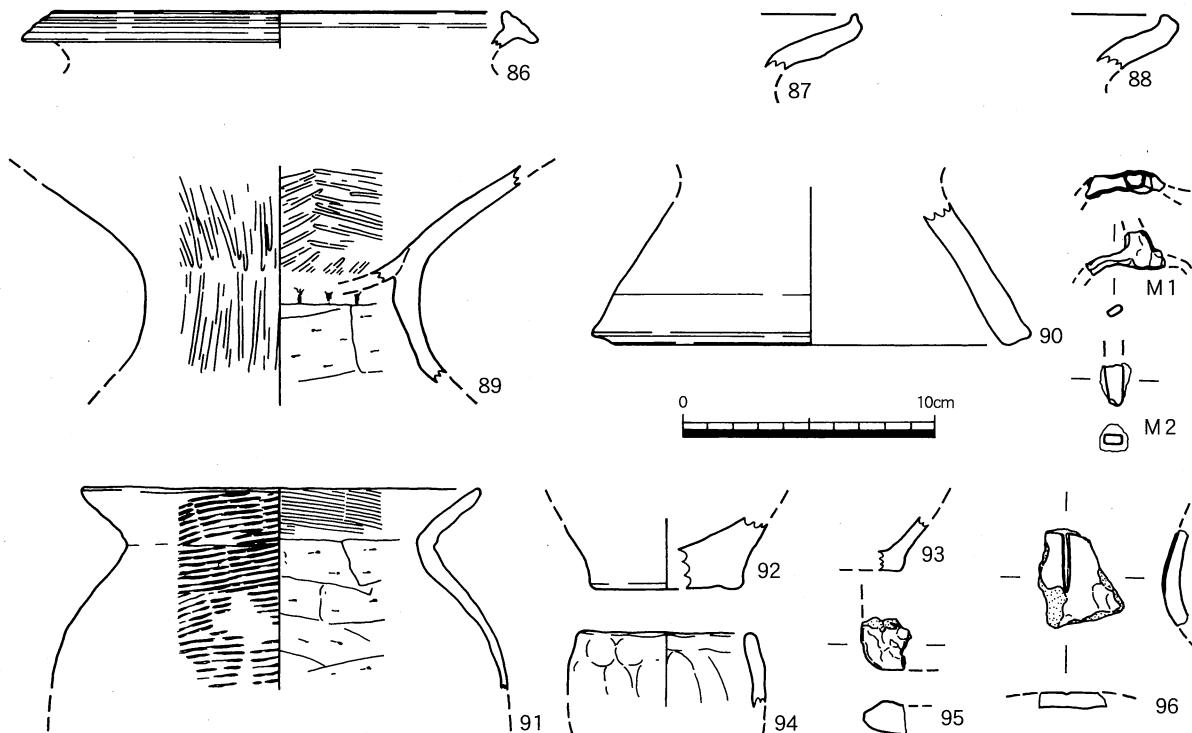
### 土坑13

土坑13は、トレンチの北端部の標高7.45mで検出された。遺構は、調査区外へ伸びるやや大きなものになると推定される。検出面で最大長1.44m、最大幅0.77m、深さ0.17mを測る。土坑内には、花

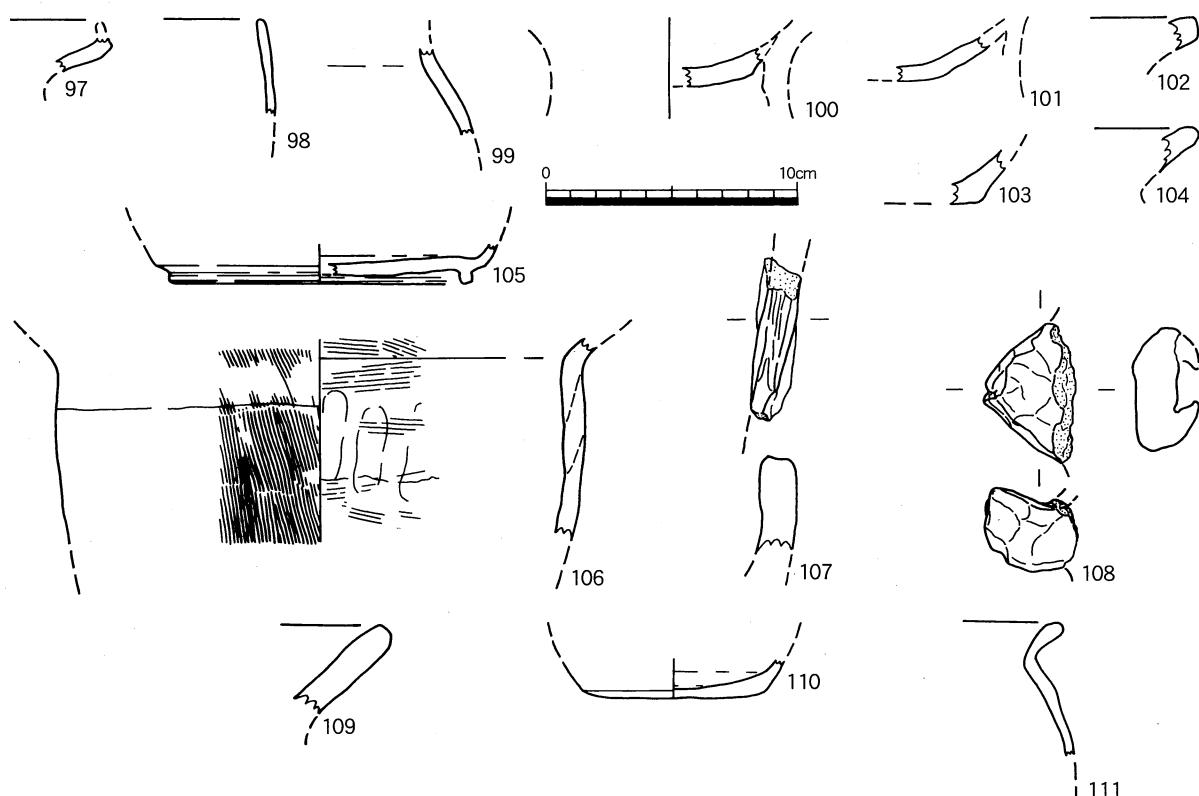


第36図 ピット平・断面図（2）（S=1/20）

嵩岩・砂石製の亜角礫、炭化物を多く含む。底面は平坦ではなく若干凸凹している。遺物は無い。中期後半から末か。



第37図 弥生時代の遺物 (S = 1 / 3)



第38図 弥生時代以降の遺物 (S = 1 / 3)

土坑27は、トレンチ北部のやや南より標高7.35mで検出された。半分を消失しているものの径約0.6m、深さ0.1mの円形か長楕円形になるものと推定される。底面は平坦である。遺物は検出されなかつた。他の遺構と同様の中期後半から終末に比定しておきたい。

#### 4) ピット（第35図・第36図）

狭い調査区ではあったが比較的多く検出された。個別に述べる余裕は無いので大まかな傾向を抑えておく。全体的にトレンチの中ほどから北側で検出されている。南側の山よりでは未検出である。直下に基盤があり成形できにくかったと思われる。

直径は約20cm～約50cm、深さ約10cm～約30cmのものが見られる。掘り込みはやや法をつけてあるものが多いが垂直に近いものもある。掘りこみ面のレベルは、住居2に近いところと住居1に近いところの二者があり、切りあい関係のものもあるが具体的な同一の認定は困難である。ピット内には少量の当該期の遺物を含むものほか、当然であるが縄文時代晚期の包含層をくりぬいているのでその遺物を含むものもある。いずれも弥生時代中期後半から末に比定しておきたい。

#### （B）弥生時代の遺物（第37図）

86～88は甕形土器である。86は大型、87・88は小型のものである。89・90は、台付鉢である。89は大きくラッパ状に開く口縁部を持つタイプである。90は新しい要素をもつ。91は、甕形土器である。外面にタタキ、内面に刷毛目とケズリ調整が施される。92・93は底部である。94は手捏土器である。内外面に指頭圧痕を明瞭に残す。95・96は不明土製品である。両者とも板状を呈している。96の外面にはヘラ状のもので何らかの意匠を表現したもの一部が残っている。いずれも焼成は良好である。M1・M2は不明鉄器である。M2は茎状のもの一部かと思われる。

#### （C）弥生時代以降の遺物（第38図）

97～108は、古墳時代から古代にかけての土器である。97～104は土師器、105は須恵器である。97は、吉備型甕である。103は底部である。105は、古代の高台付杯、106は古代の鍋、107は移動式カマドの鰯の部分、108は甕か把手付鍋の一部である。

109～111は、中世の遺物である。109は土師器鍋、110は土師器の小皿、111は亀山焼の鍋である。

## (D) 弥生時代の石器（第2表・第39図・第40図）

弥生時代の石器は総数19点である。そのうち剥片石器は18点、礫石器は1点である。包含層から出土した土器から、石器の帰属時期は弥生時代中期末と考えられる。ただし、先述のとおり、弥生時代の遺構面は縄文晚期の包含層に掘り込まれているため、一部の石器が縄文時代であった可能性は否定できない。

**石鎌 (S31)** 1点出土した。サヌカイト製である。薄く、茎の広い小型の有茎式である。この形状の石鎌は本地域ではありませんみられない。

**スクレイパー (S32・S33)** 2点出土した。すべてサヌカイト製である。板状剥片を素材とする大型品 (S33) がみられる。

**楔形石器 (S34)** 1点出土した。サヌカイト製である。両側縁に剪断面を持ち、上下両端は潰れている。

**石核 (S35・S36)** 2点出土した。すべてサヌカイト製である。いずれも残核である。小型の剥片素材のもの (S35) と板状剥片素材のもの (S36) がみられる。

**剥片 (S37～S48)** 17点出土した。すべてサヌカイトである。微細な剥離痕をもつもの (S37・S40) や剪断状に折りとられたもの (S40・S43・S44) がみられる。

**叩石 (S49)** 1点出土した。流紋岩製の大ぶりな長楕円礫の一端に敲打痕がつく。上半部は破損している。

## (E) T8・T14出土の石器（第41図）

以下で報告する石器は、平成15・16年度の確認調査時に土壤サンプルとして持ち帰った試料のうち、水洗選別によって得られた資料の一部である。T40出土の遺物ではないが、関連資料のため掲載した。

**石鎌 (S50)** サヌカイト製。凹基式である。T8出土である。彦崎Z1式に帰属する。

**スクレイパー (S51・S52)** 2点ともサヌカイト製である。S51はT8から出土した。時期は彦崎Z2式である。S52はT14から出土した。時期は縄文後期前半と考えられる。

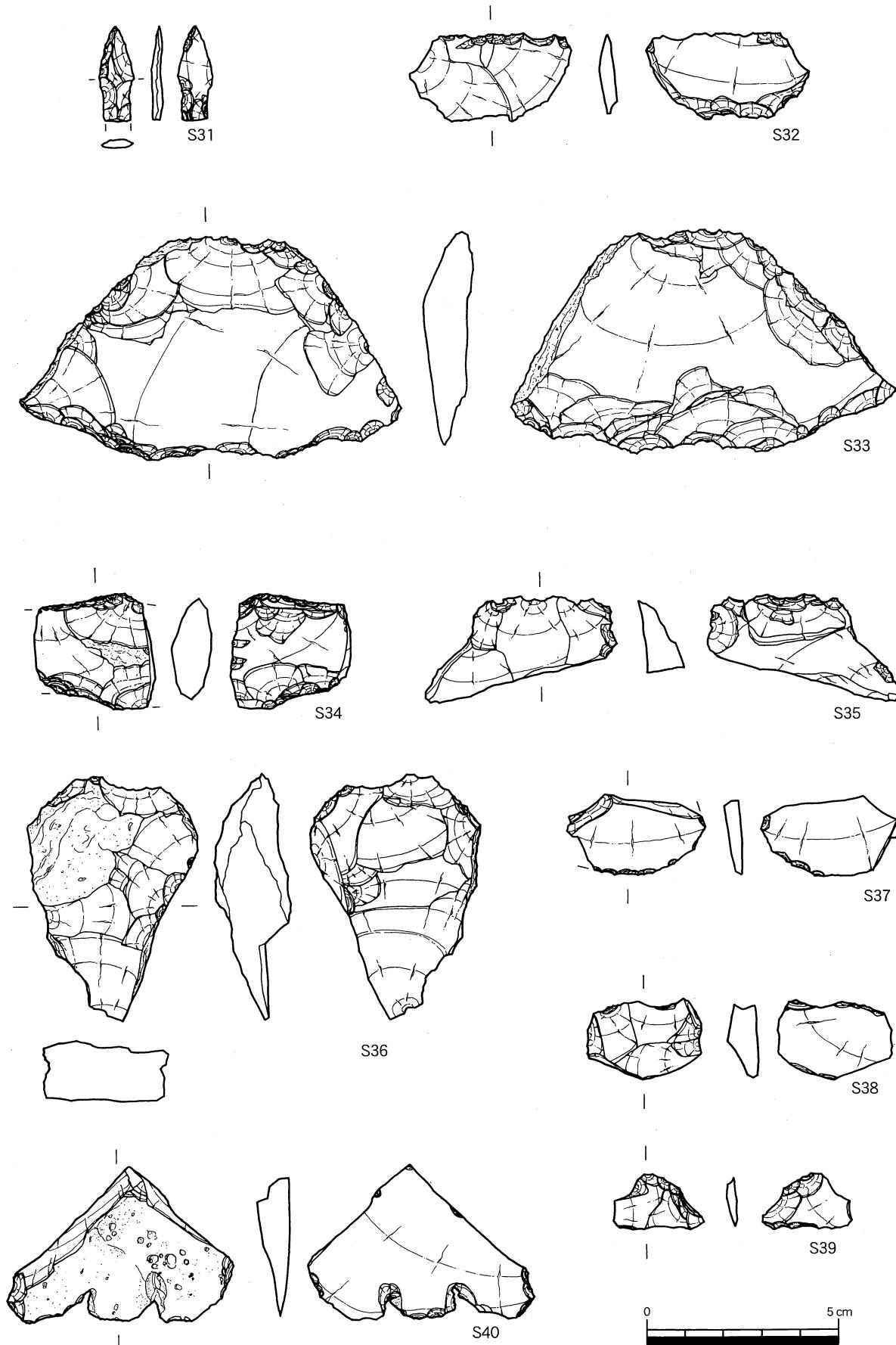
**石核 (S53)** サヌカイト製。T14から出土した。実測図上端は剪断面状を呈し、楔形石器の可能性がある。時期は縄文中期後半と考えられる。

**使用痕ある剥片 (S55)** 石英粗面岩製。T8から出土した。時期は彦崎Z1式である。刃部に使用痕とみられる細かい剥離痕が観察でき、背面には先行剥離面がみられる。大型の石核から連続的に大型の剥片を剥離していた様子が窺える。

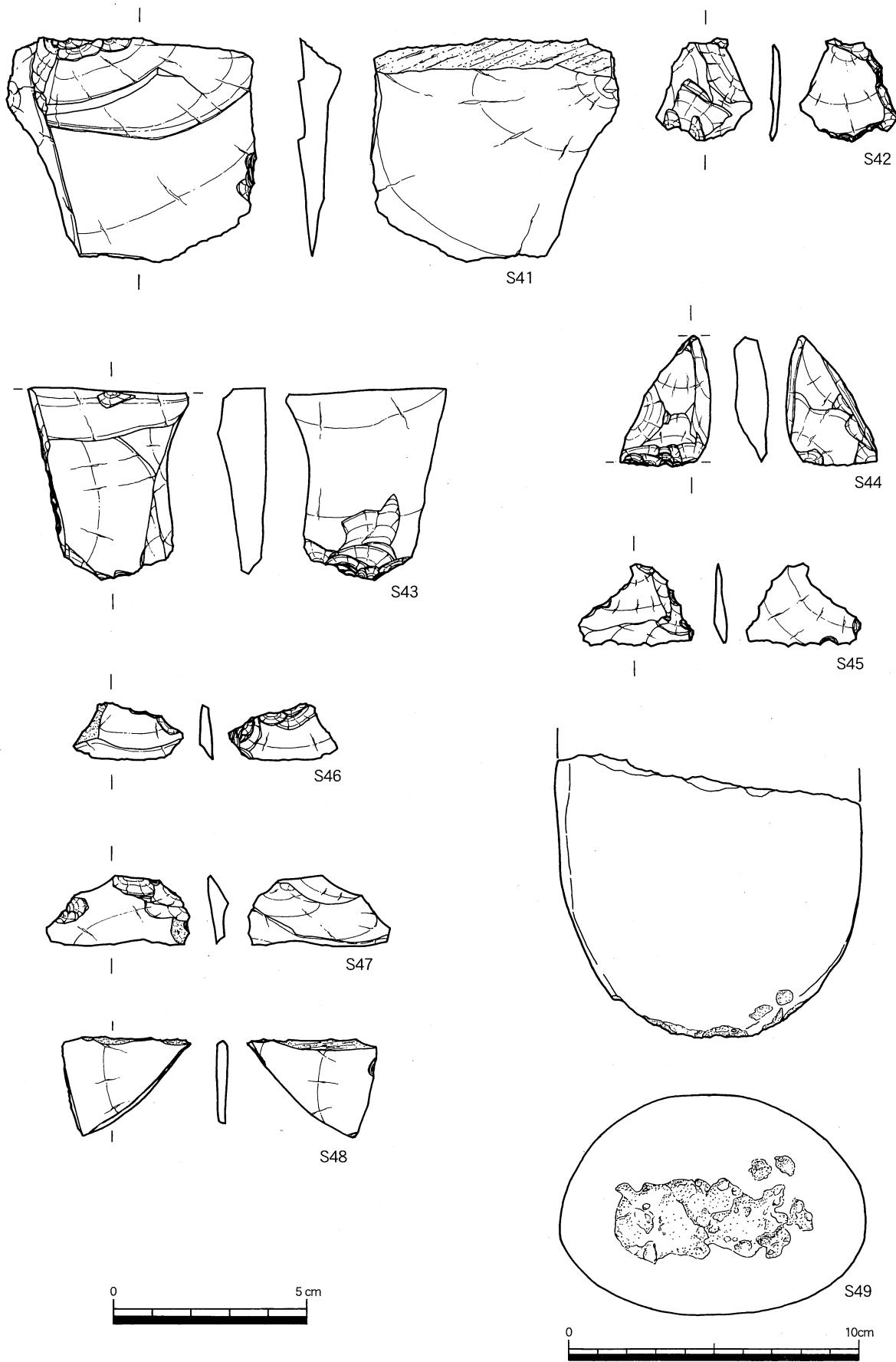
**剥片 (S54)** サヌカイト製。T14から出土した。時期は縄文中期前半である。

第2表 T40出土の弥生時代石器石材組成表

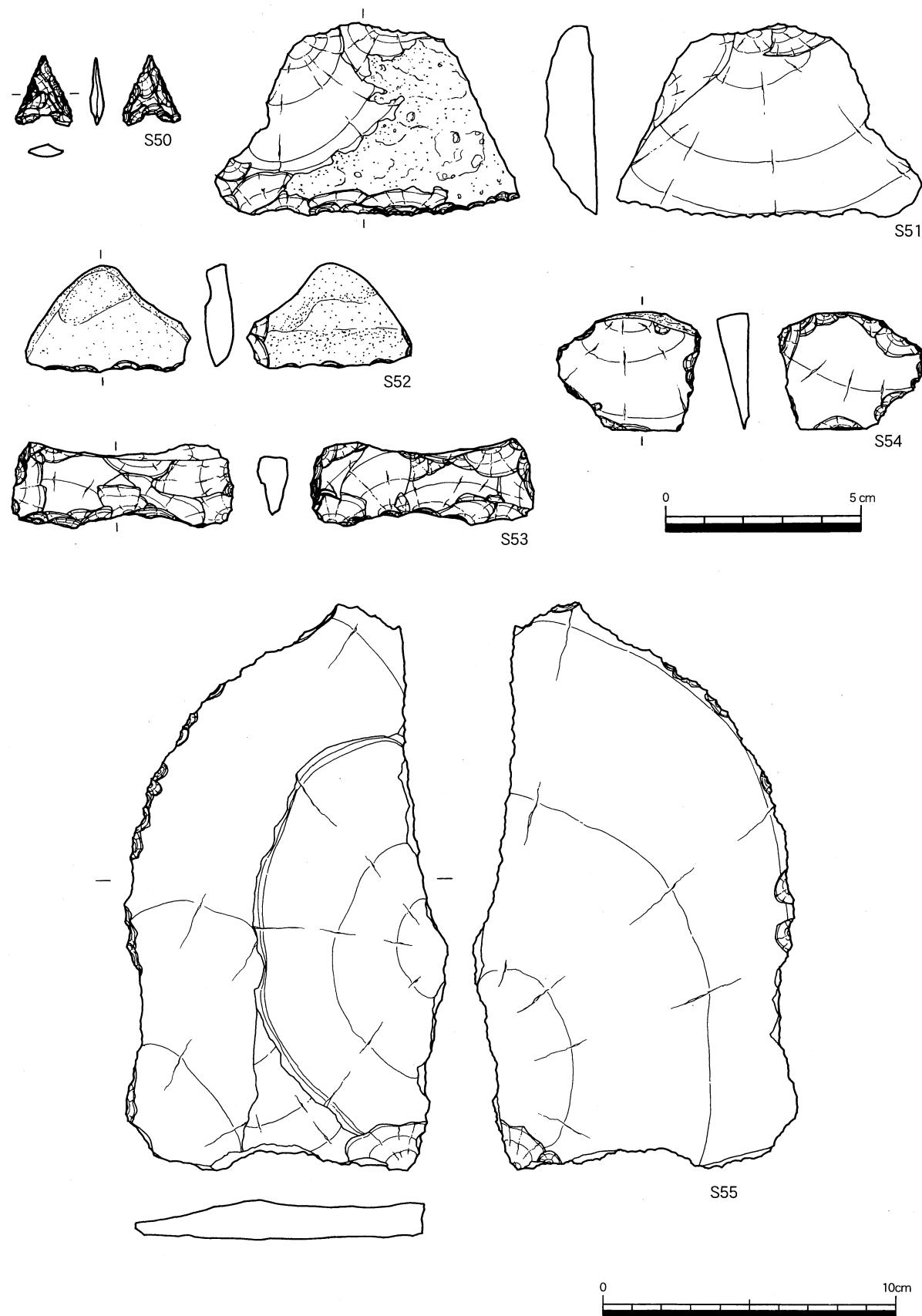
石材 器種	サヌカイト	流紋岩	合計
石 鎌	1		1
スクレイパー	2		2
楔 形 石 器	1		1
石 核	2		2
剥 片	12		12
叩 石		1	1
合 計	18	1	19



第39図 弥生時代の石器 (1) (S= 2 / 3)



第40図 弥生時代の石器(2) (S = 2 / 3 · S49のみ S = 1 / 2)



第41図 T8・T14の石器 (S=2/3・S55のみS=1/2)

## 第3節 小 結

### 1. トレンチ40（T40）の調査成果

今回の範囲確認調査では過去の調査と関連する縄文時代の遺構等の確認という重要な成果が得られた。また、前節までに事実報告を行ったのでここでは、時期ごとに簡潔に再度確認して小結としたい。

T40で最も古い遺物は、縄文前期彦崎Z2式に帰属すると思われる縄紋土器の破片である。晩期前半の包含層中から検出されたものである。貝処理の作業区や埋葬区のある貝塚地点と検出面の比高差は約1mである。距離的には約20m離れている。微地形を見てみると遺跡北東側と南東側でレベルが落ちて行き、東西のラインに平坦部が認められる（第16図・第42図）。これはT40ののる台地と貝塚ののる台地の2枚の海岸段丘面である。レベル的には痩せ尾根自体が南から北へゆるく傾斜しているが狭小な台地を利用する場合には水平を得るためにその都度あるていど面を成形したものと考えられる。また、花崗岩の基盤も長期間をかけ遺跡形成以前に何回か結晶が崩壊・分解していたことがわかっている。それは、ガチガチに硬い花崗岩基盤のみを基盤層として認識するような先入観を持っていて、サブトレンチをかなり深く入れ、崩壊した基盤結晶の微妙な差異を同一の花崗岩基盤と再認識するまでに時間がかかったからである。丘陵部での調査でしばしば基盤の認定を悩まされるのはこうした花崗岩基盤の結晶の自然崩壊・分解による経年経過の実態を見極めることが難しいことに起因していると考えられる。

基盤層に掘り込む形で縄文晩期前半の遺構群（土坑、ピット群、土器溜まり）を確認した。土坑やピットは狭い調査区末端で検出されており、周辺に遺構が拡張することが予想される。特に、土器溜まり1では深鉢、浅鉢、石器などが複数個体投棄された状態で検出され、若干レベルが西むかって高くなることから今回の調査区のやや西側に居住空間が存在する可能性が高い。その仮定は、晩期包含層中から検出される遺物の中にさまざまな器種の石器製品以外に石核や多くの剥片、碎片等の製作工程で必ず生ずる遺物が含まれていることからも肯定される。遺構面検出レベルは標高約7m付近である。また、縄文晩期の遺物包含層も良好な残存状況を示し、最も厚い部分で50cmを測る。下水道工事の立会時に包含層に当たらなかったことが今回の範囲確認調査で理解できた。それは、縄文晩期の包含層がGLより-1m以上も下位に形成されていたからである。しかも、土器の表面が磨耗していないことから投棄・廃棄されてから後に激しいローリング等の二次的作用を受けていないこともその状態の良さを示している。包含層中には、炭化材や炭化物、焼土片等も多く含まれていた。このことも周辺での火の使用を示していると考えられる。このように今回の範囲確認調査では、遺跡地の最も南よりの端である丘陵裾部の平坦地に縄文時代晩期前半の居住区と想定される空間が確認されたことにより、平成15・16年度に実施した範囲確認調査によって初めて確認していた晩期貝塚（ハイガイ主体）とその遺構群が集落として相互一体的・有機的関係を有する遺構であることが明確になった。また、先に述べたが花崗岩基盤の露出地点は後世の土取りによるものではなく、縄文時代あるいはそれ以前からの花崗岩結晶の自然崩壊・分解が作用して形成されたものであることも確認された。

彦崎貝塚における縄文晩期の集落構造として居住区、廃棄区、作業区、貯蔵区が推定されたことは今回の調査の最大の成果である。また、縄文時代前期の土器片も検出されていることから、当該期の居住空間も付近に存在する蓋然性が高いと考える。また、生業形態としては、狩猟、採集、漁撈等が主

体であったことが石器組成と動物遺存体の分析から推定される（田嶋編2006）。漁撈については、台地上の貝塚本体での調査面積が狭小であったこととT40まで貝層が伸びていないことにより直接的な証拠である石錘や釣針、ヤス等漁撈具の検出に至っていないが、動物遺存体分析によって魚類遺体が検出されており、操業形態は不明ではあるものの捕獲活動を行っていたことは確かであろう。

また、同様の構造をもつと考えられる遺跡に、彦崎貝塚から西に約3kmに位置する舟津原貝塚と舟津原遺跡がある（鎌木1986、下澤1988）。当該遺跡では、台地上に貝塚が形成され、低位部に貯蔵穴や土坑、ピット群が形成されている。しかし、詳細にみると同じ晩期の範疇でも主体となる時期に若干の時間的隔たりが認められる様相である。

また、遺構は検出されていないが砂州上に形成された福田貝塚や広江・浜遺跡でも晩期の各時期の土器が検出されており、主体となる時期が若干異なる様相を示す。このように晩期における児島北西岸の諸遺跡群は拠点となる集落がほぼ同様の構造をとりながら集落経営を行っていたことがわかる。ただし、晩期後半になると拠点的集落が限定される現象をみせ、その兆候は弥生前期へもつづく。

弥生前期中後半から中期中頃まで児島では集落の痕跡が薄くなる様相である。それは、彦崎貝塚でも同様である。遺跡の利用場所が全体的に時期が新しくなるにつれ西側に移動する傾向が認められることは、前面に展開する内海の浅海化（沖積化）と気候変動の影響も多分にあったと推測される。

弥生時代前期～中期中頃までは彦崎貝周辺では集落として利用されないようである。中期の後半から末になって竪穴住居が出現し初めて集落の存在が認められる。過去の調査でも弥生時代後期の土器が出土しているがそれを遡る時期の遺物は無いようである（田嶋2007）。竪穴住居は、縄文時代晩期の遺物包含層を整地して構築している。住居形成以前にも溝やピット群、土坑などが認められる。基盤自体が南西から北東に向かって緩く傾斜しているので、縄文晩期の包含層は北側で残りがよい。そのことは土層断面を観察するとよくわかる。2棟の竪穴住居は同時期ではなく時期差が考えられる。そのことは、住居1が住居2の廃棄後整地して形成していること、後期の住居のように同地点で何回もの拡幅や改築が行われた形跡が全く無いこと、検出される遺物が少ないとなどから移動の際にはごとく生活道具を持ち去っていると考えられることからも肯定される。

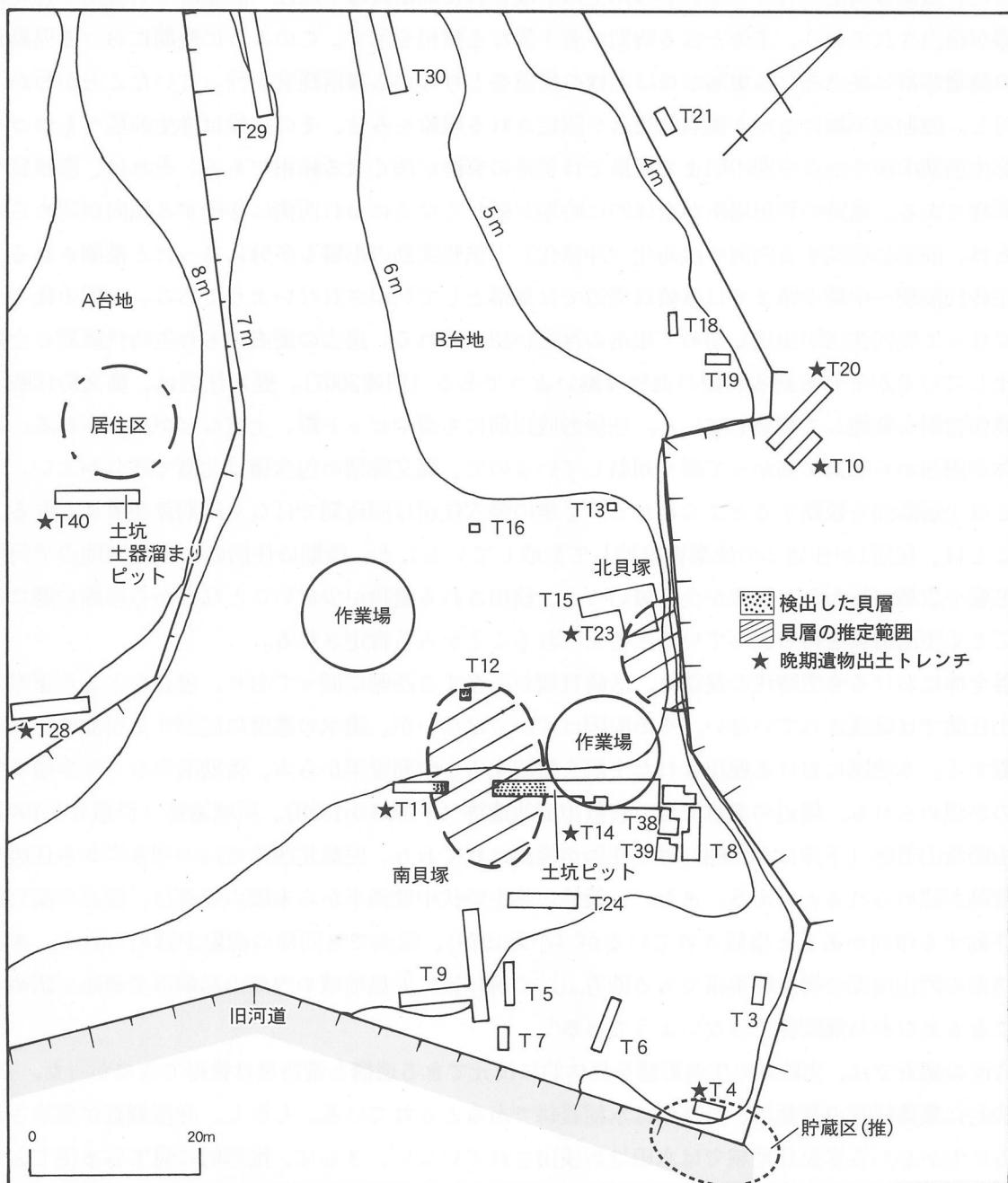
谷全体における弥生時代の遺跡は、彦崎貝塚が所在する西側に偏っており、現在のところ東岸の明石山丘陵では確認されていない。その原因は定かではないが、湧水の温度に起因する可能性があると推測する。本遺跡における検出された土器を概観すると中期後半から末、後期前半から後半頃までのものが認められる。周辺の遺跡では、倉敷市菰池遺跡（下澤ほか1988）、同城遺跡（伊藤ほか1977）、同山際紫山遺跡（下澤ほか1988）等で住居が検出されており、児島北西岸では中期後半から住居をもつ遺跡が認められるといえる。また、一般的に弥生時代中期後半から末頃の集落は、標高の高い地点に移動する傾向があると指摘されているが（小野1979）、県南でも同様の現象が認められる。さらに当該期の岡山南部の拠点的集落である南方遺跡の解体後に児島地域や内湾の島嶼部で遺跡が認められることもあながち無関係ではないようである<sup>(4)</sup>。

今回の調査では、当該期の生業形態を具体的に復元できる遺構と遺物量は獲得できなかった。また、一般的に集落経営の基盤は、当該期は水稻農耕であるとされている。しかし、発掘調査が実施されているにもかかわらず児島地域では水田址が検出されていない。さらに、地形的に見て谷水田であろうと推測は可能なもの的具体的な存在を示す遺構の検出は現在まで皆無である。地形的な制約を受けた地域に形成される集落の経営基盤は何なのかを考えさせられる調査でもあった。また、集落の中心部

は若干移動はするものの弥生時代以降も同じ台地が集落として利用されたことが確認できたも重要な成果であった。今後は、谷全体に遺構確認作業等を広げるなど、遺跡の性格をより総合的に把握する必要もあるう。

## 2. 縄文晩期前半の彦崎貝塚（第42図・第43図）

縄文時代晩期前半の彦崎貝塚について過去の調査成果を含めてその土地利用を考えてみたい。先ず、標高5、6mの緩く南西方向から傾斜するB台地にハイガイを主体とした晩期貝塚が2地点に形成さ



第42図 縄文晩期前半の彦崎貝塚 (S = 1/800)

れる。北側の貝塚の大半は、酒屋の拡張工事の際に全て失われた。しかし、広島大学の池田次郎の調査や灘崎中学校の池葉須藤樹の試掘調査時に当該期の土器が検出されていることとT10・T20で掘削された貝層が井戸の造成に使用されていることを確認していることから北東側にも形成されていたことは間違いない<sup>(5)</sup>。そして、後期の貝層に掘りこむ形で土坑やピットが検出されていることから、貝塚を挟んだ東西のラインに作業場を想定することが可能である。このラインを境に南北に緩く地形が落ちてくる。そして、その落ちの先にはT4・T25の丘陵のラインにそった旧河道があり、T4では後晩期の遺物と共に後期の貯蔵穴群が狭い範囲で確認されていることからやや地点をたがえたところに晩期の貯蔵穴が存在する可能性が高い。次に標高約8m～8.5mのA台地上には前節で述べたが土器溜まり、土坑、ピット等が検出されていて、やや西側の狭い平坦部に居住区を想定可能である。また、A台地とB台地の比高さは1m～1.2m程度である。T40北西へ数十メートルの地点でA台地とB台地は連続する地形となる。また、縄文時代の遺構はこの中区を中心に検出されているが東区は旧河道であるとしても西区の台地上の利用痕跡が薄いことが調査当時から気にかかっていた。また、背後の丘陵と段丘を挟んで内湾（干潟）との距離が近いということもこの地を選択した理由のひとつと考えられる。この特色はひとえに本遺跡だけの特色ではなく児島や島嶼部にあって同じくする地形の遺跡に当てはまると思われる。遺跡周辺で可能な生業を推定してみたものが第43図である。狩猟、漁撈、採集を中心とした土地利用の様子が推定される。また、当該期には打製石斧が2点出土している（田嶋2006）。石材は各々サヌカイト（打製石斧①）と片岩系（打製石斧②）である。大きさは前者が10cm未満、後者が10cm程度で形態的には撥形である。前者の刃部部分は刃先から1～1.5cmほど破損して折れているが両面とも表面はなめらかで擦痕が認められる。後者は刃部先端部分に細かい剥離面がいくつも形成されており、研磨された部分もあるが擦痕が観察される。両者共に刃部を下にした時に両側縁上部に刃潰しや緩い抉りが施されている。柄に装着した時に緊縛するための工夫であると考えられる。

一般的にこの打製石斧は、縄文時代前期から認められるもので鋤（A）と鍬（B）の両方の機能が想定されている石器である（鈴木1988）が、それがどちらから分化したものかあるいは当初から同居していたのかは地域的差異が認められるところもあるけれども具体的ではない。彦崎貝塚出土の打製石斧は2点でその一方は状態が良くないけれども肉眼観察からでは用途差が推定される。すなわち①がAの鋤もしくは打鍬、②がBの引鍬であろうと考えたい。また、当該期には大型のサヌカイト製のスクレイパーも検出されており、中には10cmを超えるものも認められる（田嶋2006）。このスクレイパーには両面に使用による磨耗が見られ、剥離面の稜も光沢を帯びている部分も観察される。一般的にこうした石器は石包丁状石器として弥生時代の打製石包丁との形態的な類似性から呼称されているものである。また、その機能は穂摘具としての側面を併せ持つが、定型化した弥生時代の打製石包丁とは基本的に一線を画するものと認識をされているようである（高田2002）。つまり、縄文時代のそれは、検出される遺跡が少ないと定型化した弥生時代の打製石包丁と同じくする属性を持つものが少ないとされるから、体系的な技術があって目的的に製作されたものではなく機能としては未分化であるとされている（高田2002）。それは、その初現が縄文後期の彦崎K2式の時期に認められても（中越1993）晩期まで発展的に系譜がたどれる器種でないことを意味すると思われる。つまり、弥生代前期以降の定型化したものとには断絶が認められるのである。しかし、こうした打製石斧と石包丁状石器がセットとなって組成するのは本遺跡では当該期だけである。

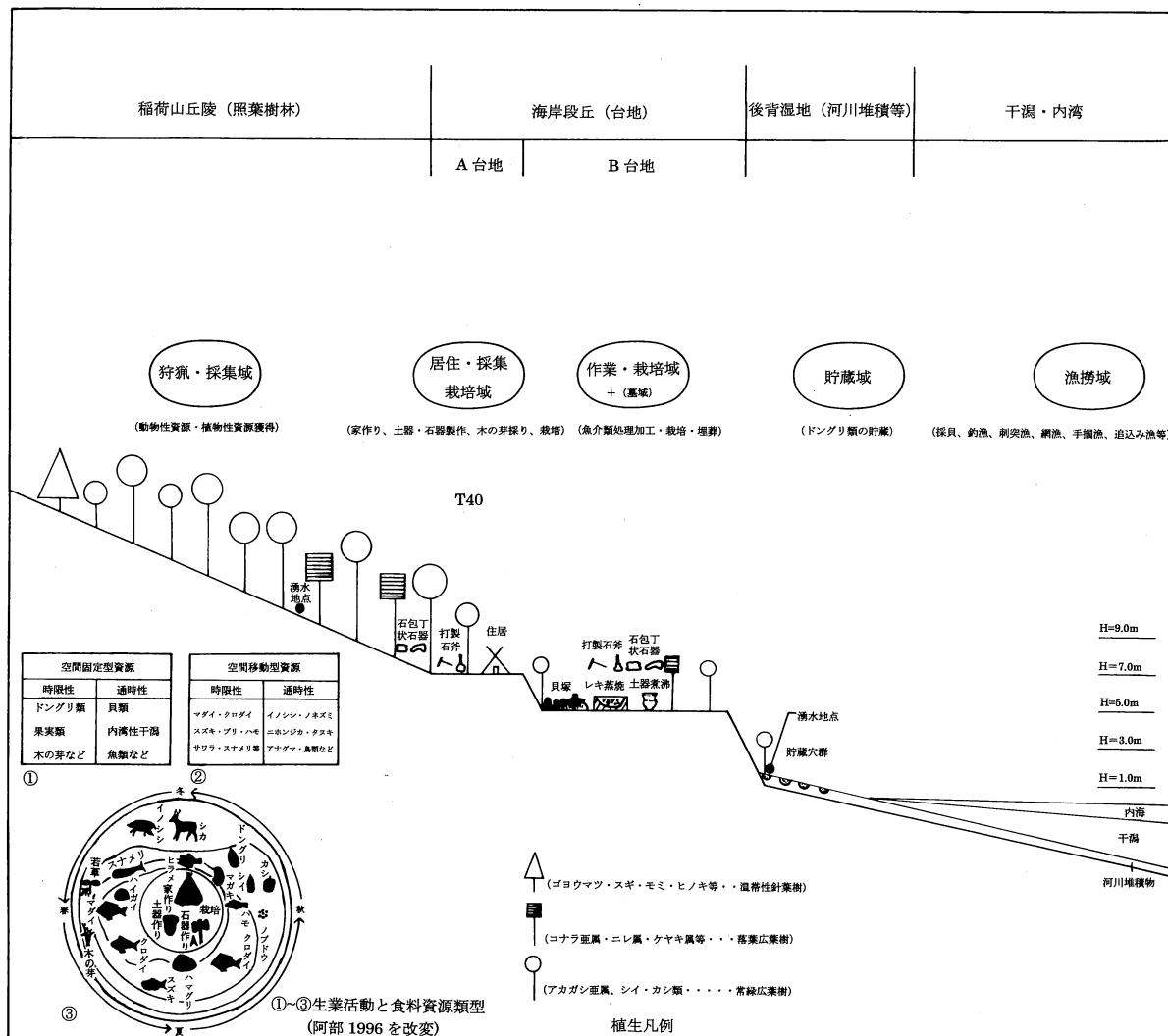
それでは、こうした石器を使用していったい何を行っていたのであろうか。石器の使用痕観察という状況証拠から推理することが許されるならば、先に見た打製石斧の二者は、打鍬や鋤、引鍬としての機能を推定することができる。それは、選択された石材の差としても現れているからもある。また、使用による光沢のある大型のスクレイパー類（広義の石包丁状石器）は、穂摘具としての機能を想定することができた。こうした状況証拠から推定できる生業は、栽培であろう。それでは、何を栽培したのか。石器の使用痕分析からイネ科植物の可能性が高くなるが、立地的に水稻農耕は難しいだろう。そうすると選択肢的には焼畑が残る。当該期には、磨製石斧が出土しているので周辺を拓いていたことは間違いない。一般に水稻農耕以前の農耕としては焼畑が想定されている（佐々木1971）。しかし、具体的に証明されたわけではない。それは、本遺跡でも同じである。また、本遺跡では、粉食用の石器と想定されている石皿・台石、敲石、磨石類が縄文時代前期から認められる。特に叩石と磨石は全ての時期で認められるものである。さらに、当該期には、深鉢や浅鉢の内外面、底部に種子類の圧痕があるものが多量にあり（例えば第29図74、田嶋2007第8図など）、中には種子そのものが断面に見えるものもある。ただ、現在も分析が継続中であり、より慎重でなければならないがイネ科のものも含まれている蓋然性が高い（田嶋2006）。それでは、こうした生業活動は台地のどの部分を利用して行われていたのであろうか。少なくとも中区は日常的に多くの時間を費やす場（居住区、作業場、墓地）、東区は旧河道のため貯蔵域が想定される。そうすると積極的ではないが西区あるいはより丘陵に近い場所、丘陵上の狭小な緩斜面と平坦地等がその候補として想定される。そこは、磨製石斧が出土していることからも居住区周辺を拓くような伐採（ここでは規模の大小は問わない）が行われた場所となる。そう考えれば居住区ではない西区の台地と周辺に当該期の遺物が少ないこともあながち的を外れた推測ではないと思われる。そのことは、彦崎貝塚に近接するがやや丘陵によった地点（標高10～13m）で調査が行われた左古谷遺跡（田嶋2001）で、縄文土器が検出されていないのにもかかわらず石器だけが検出されている事実からも指示される。ただし、先に見たライフサイクルの中では主体的とはなりえておらず補完的な割合であったと考えられる。それは石器組成（第5表）や動物遺存体の分析からも肯定される（石丸・富岡2006）。こうした、あり方は何を示しているのであろうか。それは、沿岸部という立地条件にあって瀬戸内海沿岸をつたって段階的に飛び石的に入ってきた西からの最新の情報とそれに伴う技術をいち早く試験的に実践した可能性を示しているのはなかろうか。また、既に、九州地方との交流は本遺跡では縄文前期から始まっているが、より密接になるのは、後期VI期、すなわち彦崎K1式期以降と考えている。児島西岸の当該期の倉敷市溝落遺跡では、東北九州姫島産の黒曜石剥片が出土しているし<sup>(6)</sup>、瀬戸内市大橋貝塚では同材の石鏸が出土している<sup>(7)</sup>。本遺跡でも過去の調査で黒曜石が検出されている<sup>(8)</sup>。ましてや、当該期の黒色磨研土器自体が九州を発信源として西日本の広範囲に定着・採用させるのであって、九州地方からの影響は相当なものであったことが予想される（家根1981、山崎・島津1981）。つまり、それは、生業的に有効であれば継続して採用されたであろうが、本遺跡では当該期で明確な土地利用が終わっていることは暗示的である。そして、外的要因（生態系や環境の変化）に加え、内的要因（集落内での婚姻に由来する葛藤・瓦解）も移動の原因として大きく作用したと推測される。また、先にも述べたが、臨海性という立地と本遺跡程度の台地（平坦部）をもつことが重要であると考えているが、その条件を満たす遺跡が児島湾北岸の沖積地の遺跡でも確認されている。

岡山市吉備津の標高約2.5mの足守川東岸の微高地上に形成された吉野口遺跡では、晚期前半の堅

穴式住居3棟を始め、土坑、屋外炉等が検出されている（草原1997）。土器の時期は本遺跡T40の土器溜まり1出土の土器と近接しているもので参考になる。当時は、この遺跡の近くまで内湾（いわゆる吉備の穴海）が入り込んでおり交通の便は良かったと考えられる。この遺跡からは、短冊形打製石斧（結晶片岩）、撥形打製石斧（サヌカイト）が検出されている。包含層出土ではあるが発掘所見から判断して当該期に帰属するもの考えてよいだろう。また、その使用痕分析から形態差と機能差があり、すなわち、前者が引鍬、後者が打鍬、鋤として使用されたのではないかと推定されている。さらに、堅穴住居16からは所謂石包丁状石器が出土しており（草原1997）、ここでも両石器のセット関係が認められる。さらに、堅穴住居14からは玉砥石が検出されており、そこからやや北西に3mの地点にある炉状遺構1周辺では、黒曜石剥片、石核と管玉が出土している（草原1997）。玉砥石は凝灰岩製、黒曜石は佐賀県腰岳産と推定されている（白石1997）。また、管玉の分析では、石材名と産地の特定に至っていないが（白石1997、綾野・草原2001）、奥津町の久田原遺跡の堅穴住居4と土坑20から出土した南方前池式段階とされる管玉（弘田ほか2004）と色調と形態がよく似ているようである（綾野・草原2001）。久田原遺跡出土事例の分析によれば、結晶片岩様緑色岩と呼ばれる軟質の原材料であるとされていて、鹿児島県加世田市の玉造遺跡である上加世田遺跡等で多量に出土している事例から南九州産の可能性があると指摘されている（藁科2004）。また、島根県益田市イセ・ヨレ遺跡（矢野ほか1993）、大阪府阪南市向出遺跡（小林ほか2000）においても検出されている。こうしたことから吉野口遺跡への黒曜石（腰岳産）と管玉の搬入ルートは、南九州→西北九州→中国山地あるいは沿岸→吉野口遺跡（中部瀬戸内地域）という経路（瀬戸内海北岸ルート）が想定される。吉野口遺跡では、こうした広域ネットワーク網を背景にした大系化以前の農耕が想定されている（草原1997）。

一方、児島地域への黒曜石の搬入経路は、西南四国の事例（木村1988）、四国北岸の高縄半島西側にある江口貝塚の事例（宮本編1993）等から、原産地から離れるにつれて黒曜石の保有個体数が減少することと高縄半島と四国西南部を結ぶラインがサヌカイトと姫島産黒曜石の交易における結節点で、その交通手段として河川を利用した内陸経路と沿岸経路の二者の重要性が指摘されている（木村1987）。すなわち遺跡立地、潮目や地形といった文化生態的観点からその分水嶺が高縄半島付近にあるとされている（宮本編1993）。こうしたことから東北九州原産地（姫島産）→西南四国→四国北岸→児島・牛窓（中部瀬戸内）という経路（瀬戸内海南岸ルート）が想定されるのである。また、先に想定した西→東のルート以外にも東日本系土器の流入に見られるように東→西のルートも確実に存在したであろう。そのような遺物を出土する遺跡は必ず水陸両交通の利便性の高い立地（結節点）にあり、媒介者・仲介者としての集落の姿が浮かぶ。さらに中部瀬戸内あっては、サヌカイトや結晶片岩の交易経路として両沿岸部と児島を基点とした本土と四国地方を結ぶ南⇒北のルートも存在した。そうしたことは、大型の剥片素材である板状剥片とよばれる石材をもつ遺跡の分布からも想定されている（竹広1988）。すなわち、児島地域では、倉敷市の広江・浜遺跡（間壁ほか1979）、溝落遺跡がそれに該当する<sup>(9)</sup>。また、平成15年度の範囲確認調査では、彦崎貝塚からは板状剥片の残核が多く出土している（田嶋編2006・2007）。こうした遺跡群を形成した集団が、地の利を活用した媒介者となってネットワークを強化していくものと推定される。このように縄文時代晚期前半は、これまで見たように広域間ネットワークが機能していたことは間違いないであろう。それは中部瀬戸内に限った場合でも、瀬戸内海北岸ルートと瀬戸内海南岸ルート、南北縦断・沿岸部互換東西ルートがみてとれるのである。それは、一定の領域をもつ複数の集落で構成されると考えられる。また、中部瀬戸内にかぎれば、同じ

黒曜石であっても児島地域（児島湾南岸）と沖積地（児島湾北岸）では異なる産地のものが各々の集団によって選択されていた可能性がある。こうした広範囲な地域間ネットワーク作用によって農耕の情報と技術はもたらされたものと推定される。ただ、それは技術の体系化、労働力の集約化という観点から見た場合、縄文時代晚期と弥生時代前期のそれは、岡山市津島江道遺跡（神谷1988）と同津島遺跡（山磨・中野1984）の事例に明らかなようにそこに断絶がある。しかし、重要なことは体系化される以前の縄文時代晚期前半ころにはその試金石として地の利を活かした遺跡＝集団のいくつかが、段階的にもたらされる情報をいち早く受容して試験的に実践していたであろうということを考えられるということである。このことは、当該期における遺跡及び集落の内容が後半期に比較して明確でないこともそうした選択性があった結果を反映しているのではないかと思われる。「試験的」と「本格的」は、その背後にある社会そのものが本質的に異なるのであるが素地としては前者の一部が選択されて知性の軌跡（経験・体験による記憶）として遺存したと考える。



第43図 縄文晚期前半における彦崎貝塚周辺の生態系と生業活動

### 3. 土器だまり1出土の土器について

土器だまり1から出土した土器は、口縁部径が復元を含めたわかるものだけで粗製の深鉢が10点、浅鉢が5点であった。個体数的には、ややすくないが比較的まとまった資料として考えられるが、紙幅の都合もあり詳細は後日ゆだねることとして本節では見通しだけを述べておきたい。したがって、今回は細かい分類はしないこととする。話を進める上で、器形、口縁部の形態、口縁部外面の稜（浅鉢は沈線）、口唇部の形態、キザミ目の有無、内外面の調整、色調・焼成に注目してみてみたい。

#### ①深 鉢

##### 1) 器形

底部から緩やかに立ち上がり胴部上半で緩く頸部で内傾し直線的に口縁部が開くもの（A類）、外反するもの（B類）、胴部から短く外開きに口縁部が立ち上がるるもの（C類）、内傾するもの（D類）がある。深鉢のほとんどが最大径を口縁部にもつが、1点だけ胴部にもつものがある（第23図24）。個体数的にはC類が一番多い。

##### 2) 口縁部の形態

平口縁が基本であるが1点だけ大振りの波状口縁がある（第24図28）。

##### 3) 口縁部外面の稜

全体的に口縁部外面に強いナデ調整による明瞭な稜は認められないが、やや退化した感じのものが2点認められる（第23図22、24）。

##### 4) 口唇部の形態

丸くおさめるもの（A類）、端部もしくは内外面のどちらかに面をもつもの（B類）、肥厚するもの（C類）がる。A類のものが多い。

##### 5) キザミ目の有無

口唇部にキザミが施されるものは1点もない。

##### 6) 内外面の調整

外面はほぼ全ての個体で最終調整は二枚貝条痕調整であるが、隣り合う条痕間の幅に広いもの（第23図22、第24図28・30等）と狭いもの（第23図23・25・26等）が認められる。

内面には二枚貝条痕調整のもの（第23図23、第24図29・31）、二枚貝条痕をナデ消すもの（同24・25・27）、ケズリ・指頭圧のもの（同22・26・28・30）がある。

##### 7) 色調・焼成

全体的に焼成は良好で、明黄褐色（10YR 6/6）や鈍い黄橙（10YR 7/4）のように明るい色調を呈するものがおおい。胎土には、石英、長石、金雲母、黒雲母、角閃石等を多く含む。

## ②浅鉢

### 1) 器形

大きく開く口縁部をもつもの（A類）（第25図33・34・37）、ボール状のもの（B類）がある。

### 2) 口縁部の形態

全て平口縁である。

### 3) 口縁部外面の沈線

器形A類には認められないが、B類に認められる。

### 4) 口唇部の形態

まるくおさめるもの（A類）とやや尖るもの（B類）がある。

### 5) キザミ目の有無

施されたものは1点もない。

### 6) 内外面の調整

内外面とも丁寧なミガキである。

### 7) 色調・焼成

焼成は良好であるが、黒色研磨土器としては炭素の吸着量が少ないので発色が薄く、黄灰（2.5Y 4/1）を呈するものや赤化部分をおおく残し、鈍い黄橙（10YR 6/3）ものが多い。

最後に、これまで着目した点を当該期の土器を比較検討した草原の成果（草原1997）に照らしてみてその大まかな位置づけをしておきたい。まず、深鉢からみてみよう。本資料は、①-1）では、吉野口遺跡よりも南方釜田遺跡に近い様相である。しかし、南溝手河道2よりは古い様相である。①-2）では、吉野口遺跡に近い様相である。①-3）では、南方釜田遺跡より新しい様相である。①-4）では吉野口遺跡に近いものと南溝手遺跡河道2に近いものがある。①-5）では、南方釜田遺跡に近い。①-6）では吉野口遺跡に近い。①-7では、そう大きな違いがない。

次に浅鉢を見てみよう。②-1）では、吉野口遺跡に近いものと南溝手遺跡河道2に近いものがある。②-2）では、吉野口遺跡に近い様相である。②-3）では、吉野口遺跡より新しく南溝手遺跡河道2に近い。②-4）では、南溝手遺跡河道2に近い。②-5）では吉野口遺跡に近い様相である。②-6）では大きな違いは認められない。②-7）では、吉野口遺跡に近い様相と南溝手河道2に近い様相がある。以上大雑把に見ていくと明らかなことが1点だけある。それは南方釜田遺跡よりは新しいということである。では、吉野口遺跡と南溝手遺跡河道2とではどうなのか。各々に近い様相が認められることから、少なくともどちらかと完全に一致するものではない。それは、両遺跡の資料がそれぞれ細分できる可能性を残していることを示すものである。したがって、本資料は、現時点では縄文晩期前半の中では後葉から末に位置付けられると考える。

## 第3章注

- (1) ただし、貝塚が生ゴミの集積という一側面を併せ持つことをかんがえると当然生活していて気になるのがその腐敗臭である。こうしたことを防ぐ目的で土壤等を散布した可能性は十分ありえる。実際に彦崎貝塚でも各時期の貝層と貝層の間には厚さ数ミリの全く異質な土壤が堆積していて、このことからも十分可能性がある。
- (2) 岡山理科大学小林博昭先生のご教示による。
- (3) 極めて狭小なトレンチ調査での成果であった。台地上のトレンチでその面まで下げたものがないため周辺に広がることが予想される。
- (4) 草原孝典氏のご教示による。
- (5) 広島大学大学院文学研究科古瀬清秀先生のご好意で池田次郎先生の資料を実見させていただいた。
- (6) 倉敷埋蔵文化財センター福本 明氏のご教示による。
- (7) 濑戸内市教育委員会馬場昌一氏のご教示による。
- (8) 佐藤美津夫1935『昭和十年十二月 備前児島郡灘崎村大字彦崎貝塚調査概報』(私家版)
- (9) 注6に同じ

## 参考文献

- 阿部芳郎1996「縄文時代のなりわいと社会」『季刊考古学』第55号雄山閣
- 綾野早苗・草原孝典2001「岡山市吉野口遺跡出土管玉の科学調査」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999(平成11年度)』岡山市教育委員会
- 池葉須藤樹1971『岡山県児島郡灘崎町大字彦崎貝塚調査報告』(私家版)
- 石丸恵利子・富岡直人2006『彦崎貝塚出土の動物遺存体』『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会
- 伊藤晃ほか1977『城遺跡発掘調査報告』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』19岡山県教育委員会
- 小野忠熙編1979『高地性集落の研究(資料編)』学生社
- 鎌木義昌1986「18 舟津原貝塚」『岡山県史』第18巻考古資料岡山県
- 神谷正義1988「津島江道遺跡」『日本における稻作農耕の起源と展開』日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡考古学会
- 木村剛朗1987『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研
- 草原孝典1997『吉野口遺跡』岡山市教育委員会
- 小林義孝ほか2000「向出遺跡」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書』第55集財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 佐々木高明1971『稻作以前』NHKブックス 日本放送出版会
- 下澤公明ほか1988「舟津原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘報告』71岡山県教育委員会
- 白石 純1997「吉野口遺跡出土黒曜石製剥片の産地及び管玉の石材について」『吉野口遺跡』岡山市教育委員会
- 鈴木道之助1991『石器入門事典 縄文』柏書房
- 高田浩司2002「縄文時代中部瀬戸内の「石包丁状石器」」『第13回中四国縄文研究会 生業をめぐる諸問題—瀬戸内の縄文と弥生—』中四国縄文研究会
- 竹広文明1988「中国地方縄文時代の剥片石器—その粗製・剥片技術—」『考古学研究』第35巻1号考古学研究会
- 田嶋正憲2001「左古谷遺跡」『灘崎町埋蔵文化財発掘調査報告』1岡山県灘崎町教育委員会
- 田嶋正憲編2006『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会
- 田嶋正憲編2007『彦崎貝塚2－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会
- 中越利夫1993「縄文時代後期の瀬戸内—打製石器を中心として—」『考古論集—潮見 浩先生退官記念論文集—』潮見浩先生退官記念事業会
- 弘田和司ほか2004「久田原遺跡 苦田ダム建設に伴う発掘調査2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184岡山県教育委員会
- 間壁忠彦ほか1979「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』第14号倉敷考古館
- 宮本一夫編1993『江口貝塚I—縄文前・中期編—』愛媛大学法文学部考古学研究室
- 家根祥多1981「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』雄山閣
- 矢野健一ほか1993『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』島根県邑智町教育委員会
- 山崎純男・島津義昭1981「九州の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』雄山閣
- 山磨康平・中野雅美1984「弥生水田」『えとのす24—吉備の考古学—吉備世界の成立と衰退—』新日本教育図書株式会社
- 藁科哲夫2004「奥津町久田原遺跡出土の結晶片岩様緑色管玉、碧玉製剥片の産地分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184岡山県教育委員会

## 第4章 まとめ

### 第1節 3次（平成15・16・18年）にわたる彦崎貝塚範囲確認調査のまとめ

#### はじめに

行政と地元が一体となって国指定等による恒久的保存と地域的活用を目標とした濫觴が本遺跡の調査であった。ここで3次にわたる範囲確認調査によって詳らかになった本遺跡の特性を簡潔に項目別にまとめておきたい。ただし、行政による範囲確認調査は3次にわたるが、過去に実施された東京大学理学部人類学教室や池葉須等による調査成果もあわせて評価して適宜具体的な理解の助けとした。

#### 1. 遺跡の保存状態

昭和23年・24年に実施された東京大学理学部人類学教室等による発掘調査は、正式報告書の刊行はないものの多大な成果を収め、標識遺跡・基準資料として既に人口に膾炙している（酒詰1951、池葉須1971、山崎・高橋2007）。東大が実施した調査の実面積は明確ではないが、岡山市教育委員会による再調査によって当初設定された調査区が完掘されておらず、前期以降の貝層が相当残存することが確認された（田嶋2006）。また、東大調査地点から約30m南の地点でこれまで未確認であった晩期の貝塚が新規に確認された（田嶋2006）。こうしたことから、彦崎貝塚が最大規模を縄文前期後半にもつ早期から晩期にわたる貝塚であることが判明した。貝塚は、地点によって貝層の厚薄がみとめられるものの概ね100m四方以上に散布するものと推定される。このことは、酒造工場による偶発的既掘削部分を除いても貝層と遺構群の残存状態がきわめて良好であることを示している。

#### 2. 検出された遺構

トレンチ調査という制限はあったものの、第3表のような多くの遺構が検出された。なお、遺構が

第3表 彦崎貝塚縄文時代遺構一覧表

時期	貝塚形成	検出遺構名
早期	×	包含層
前期	○	ピット群、土坑群、炉址群、灰面群、祭祀遺構、土壙墓群
中期	○	ピット群、土坑群、炉址群（石匂炉含む）、土壙墓群
後期	○	ピット群、土坑群、炉址群、祭祀遺構、貯蔵穴群、土壙墓
晩期	○	ピット群、土坑群、土器溜まり

帰属する時期と遺跡内での有機的関係の詳細は、（田嶋編2006・2008）を参照されたい。遺構は、大別するとT40で検出された晩期の遺構群（A台地）以外は全て貝塚本体のある台地（B台地）で検出されたものである。また、トレンチ間の標高と土層の関係は本書29頁の第17図を参照されたい。

注目されるのは、T40で検出された晩期前半の遺構群である。B台地上に形成された晩期ハイガイ層からの比高差は、約1mである。上層の弥生時代の遺構面では中期後半から末の竪穴住居2棟を検出していることとこの縄文晩期の遺構群の本体が、遺物の量と土器の磨耗が認められること及び土層観察からT40のやや西に存在する蓋然性が極めて高く、縄文時代晩期前半の居住区を想定でき得るものと考えている。さらに、縄文前期と後期の土器片も若干検出されていることも注意される。

時期ごとの遺構のあり方をみてみると前中期では、貝層が形成された場所には、土壙墓以外の遺構が比較的少なく、貝層が形成されていない平坦部には、ピット群や土坑、炉址群等の日常的な遺構が形成されていることからもこの平坦部周辺に居住区の存在が予想される。また、前期と中期の土壙墓群（墓域）に切りあい関係が認められないこと（土壙墓群間でも比較的切り合い関係が少ない）と墓域周辺は意図的に遺構分布が少ない空閑地に規定していることも注目される。

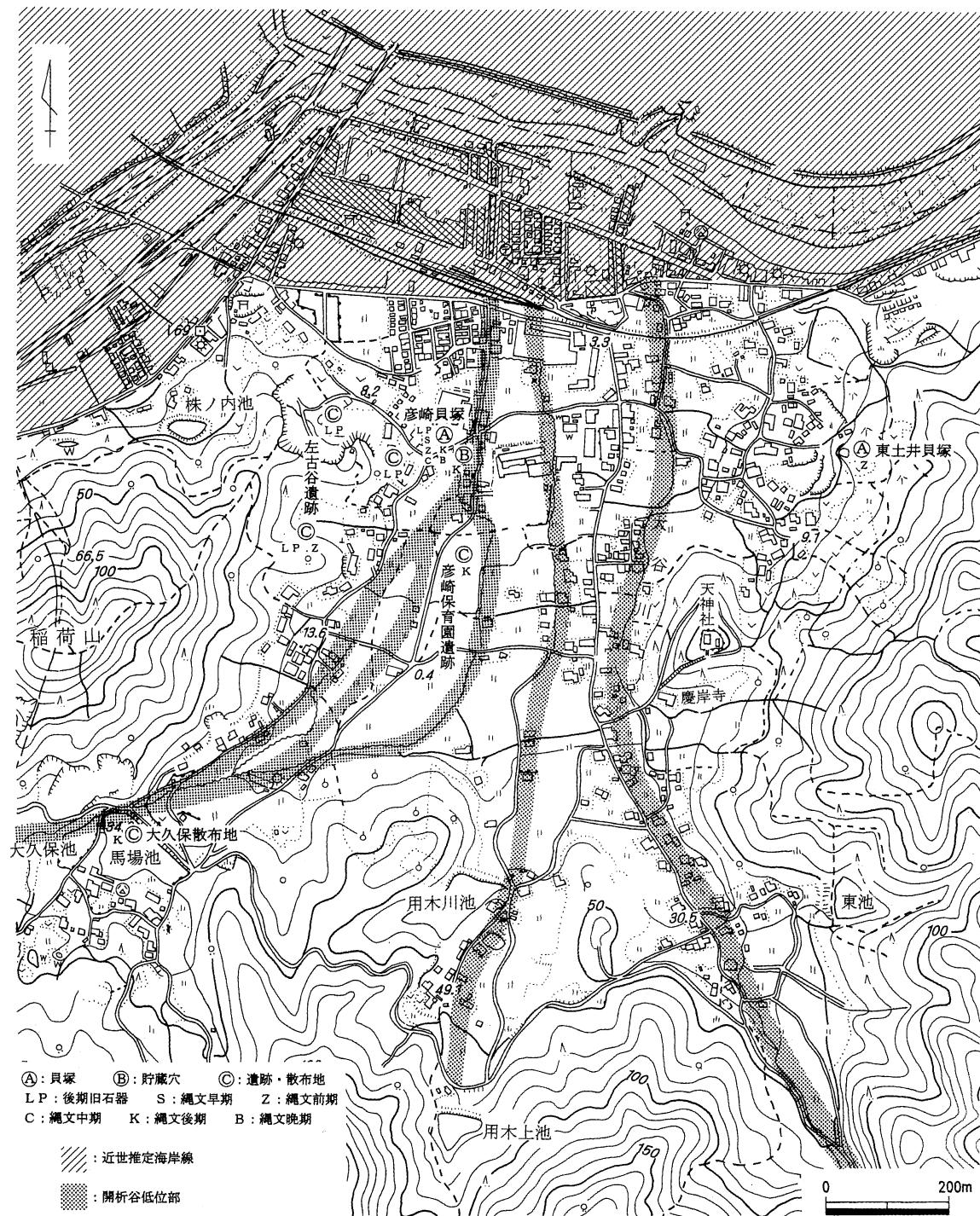
後晩期においても同様の傾向が窺えるが、墓域に関しては、東大の調査では確認されたが今回の調査では全て二次的作用を受けているので不明確である。また、当該期は人口の増加と比例するように彦崎貝塚周辺に遺跡の拡大傾向が認められる（第44図）。貯蔵穴群が出現することからより計画的な土地利用と自然への働きかけを実践していたことが推定される。また、本遺跡は長期型であり、時期によって拠点的集落様相と狩猟・漁労・採集前線基地的様相を示すことが遺構と遺物の検討から判明している。しかし、地理的・地形的に有望な土地は先天的に限定され、選択肢は基本的に少なかった。

### 3. 継続して取り組むべき課題

多大な成果を収めた確認調査ではあったが、トレンチ調査という制約から継続して取り組むべき課題－集落・居住形態・生業形態等の解明－もまた、明確になった。

現在、確認できた遺構群は、第3表の通りである。しかし、遺跡が立地する谷には時期のことなる縄文時代の遺跡も確認されていることと他の大規模な貝塚の調査事例から、水場遺構や貯蔵穴群などの貝層以外の集落としての関連遺構群の存在が予想される。このことの解明には、谷全体を対象とした継続的な確認調査が最善であると考える。

関連する項目であるが、居住形態の解明も本遺跡を理解するうえで重要である。つまり、定住していたのか移動が多かったのかという従来からの見解に対してより具体的な遺構を検出して確認する作業が必要である。さらに貝塚、墓域、竪穴住居のセットが定住の指標とされるが（岡村2000）、それが凡日本的な現象なのかという確認作業も必要と考える。担当者自身は、地域性や地理的・地形的要因も大きく作用したと考える。また、本遺跡では、究明すべき問題として生業問題も挙げられる。特に縄文時代前期の問題である。大変デリケートな問題もあり、現時点では結論が出ていない。しかし、各種分析は継続しており、終了した時点の最善の時期に分析結果を公開したい。そのためにも、分層して持ち帰った約1,000箱のサンプリング試料のフローテーションも実施しなければならないし、既に検出しているイネ、コムギといった炭化種子等の検出点数を増やさなければ次の段階には進めないと考える。それは、行政に科せられた保存と公開という重要な義務であると考えるからである。



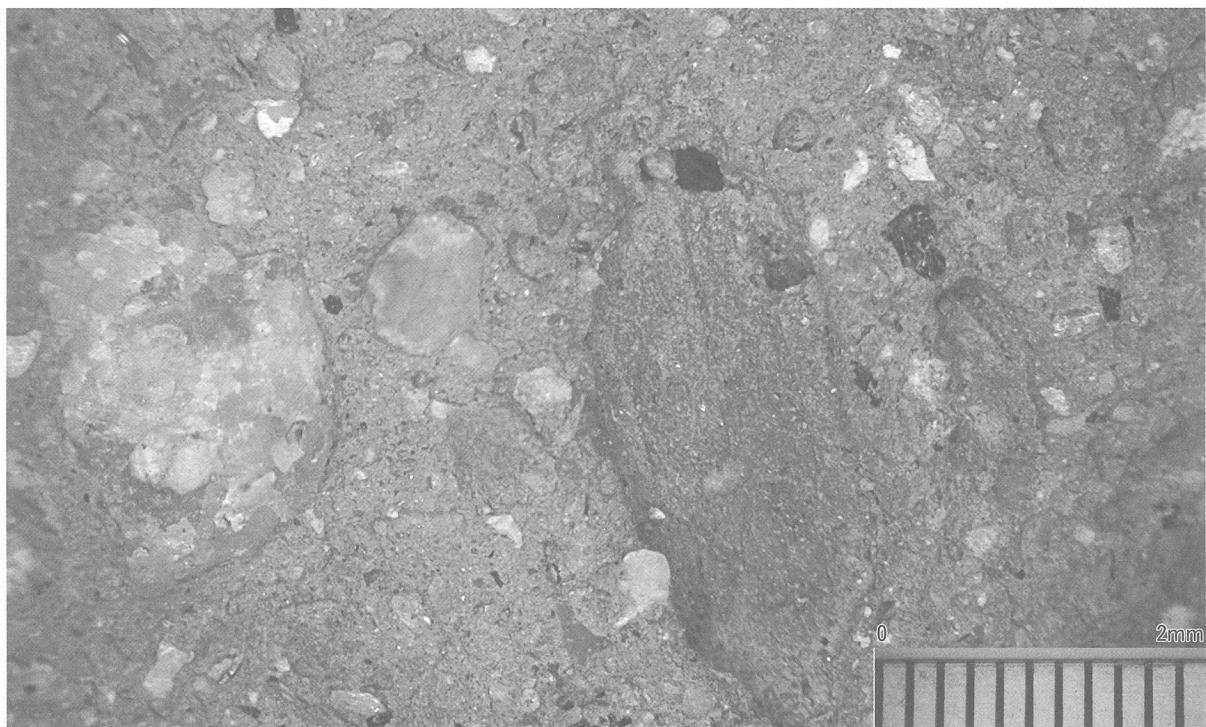
第44図 彦崎貝塚時期別遺構分布及び旧海岸線推定図 ( $S=1/10.000$ )

## 第2節 土地利用と遺跡構造の変化

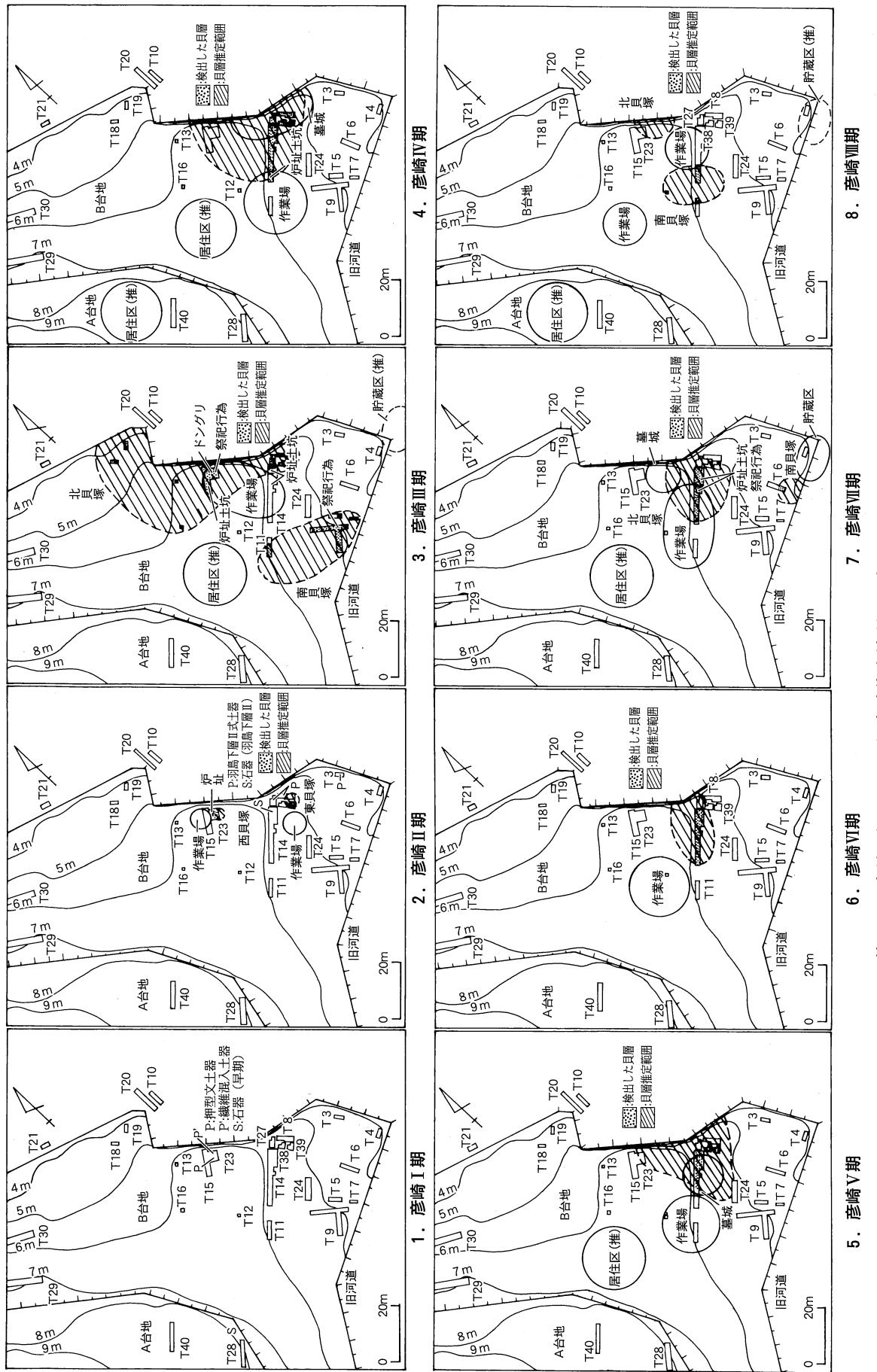
ここではT40の調査によって得られた成果を加え、前回提示したもの（田嶋2006）を若干修正した（第46図）。次に各期を再度概観してみたい。

### 彦崎Ⅰ期：縄文時代早期後半から前期初頭（高山寺式～羽島下層Ⅰ式）（第46図1）

当該期は、A、B両台地で遺構は検出されていない。遺物として、粗大な楕円押型紋土器、山形紋土器及び纖維混入土器（以上T23から出土）、石核、剥片（以上T28から出土）が出土したのみである。調査面積が限られ全体的な様相を述べるには材料が乏しいが、長期間とどまって生活をしたとは考えられない。ただ、そうした中で纖維混入土器の出土は注目される。この土器は以前から早期押型文土器と前期羽島下層Ⅰ式をつなぐ土器として注目されていたが県南では事例がなかった（平井1987）。県南での検出例は管見では倉敷市玉島の道口遺跡で粗大な楕円押型紋土器と山形紋土器とともに2点出土しているだけである。2点とも二枚貝条痕調整であるが、外面に縄文を施している点で本遺跡例と異なる（正岡1988）。こうした纖維混入土器は、野原遺跡群早風B地点（安藤1973）など県北での事例が多いようである。また、県南では当該期の遺跡の多くが現在の沖積地の下部や瀬戸内海中に没していると推定されている（間壁1955・松本編2007）ことを考えるとこの事例は、中国山地を介した人と物の流れを探る上で極めて重要であると考える。なお、本遺跡の土器には第45図のように種子圧痕が認められた<sup>(1)</sup>。このように当該期は、現時点では遺構の検出がないことと遺物が少ないと長期的な利用は考えづらい。少なくとも纖維土器群の時期内には移動しているので利用形態は、不定期的（遊動的）であったと考える。



第45図 彦崎貝塚出土纖維土器の種子圧痕



第46図 彦崎貝塚における縄文時代土地利用の変遷 (S=1/2,000)

### 彦崎Ⅱ期：前期前葉から中葉（羽島下層Ⅱ式～磯の森式）（第46図 2）

当該機は、B台地で遺構と遺物が検出されている。ただ、羽島下層Ⅱ式の遺構は検出されていない。遺物は土器と石器であるが、B台地中央部の平坦面が東側へ傾斜する変換点（標高約4.65m）にあたる部分で検出されている。基本的に北よりのトレンチでのみ確認される。T3の地山面（標高約3.4m）で検出された土器もあることからやや東～東南に掛けて広がりをもつものと考えられる。また、この面の未調査の部分では遺構が検出される可能性が高い。本遺跡では、土器と石器以外に、サメ・エイ椎骨製の小玉が1点出土している（第4表）。一般的に、羽島下層式期には干潟や海水の塩分濃度等が安定していなかったため貝塚は形成されないとされる（間壁1996）。そのためか出土する遺物の中でも漁撈具は少なく、もっぱら狩猟具や処理具の占める割合が高いようである（第5表）。ただ、こうしたことから漁撈活動が全く行われなかっただというのではなく、山陰地方や中国山地の事例から見てみると日本海沿岸部や中国山地の内水面では、早期後半から前期前葉の段階でヤス等の刺突漁具、石錘などの網漁具が一定程度検出されている（渡辺1973、江坂・渡辺1988）ことから、当該期に瀬戸内が低調であっただけで、その後一段階ほど遅れて当地では受容が広がるようである<sup>②</sup>。また、釣漁についても同様に瀬戸内は一段階から二段階ほど遅れるが、彦崎Z1式期には日本海沿岸・中国山地経由や東海西部・近畿・四国沿岸ルート経由で確実に入っている（田嶋2007）。

磯の森式期では、径3～4m未満の小型のハイガイとマガキを主体とした貝塚がB台地平坦部北よりの標高約4.8mの地点とやや東よりの標高約4.9mの傾斜変換点付近の二地点で検出された。前者の貝層上面では、径50cm弱の炉が1基検出されている。したがって、近接して前者では西側あたりの平坦部、後者ではやや南よりの地点に作業空間を想定できる。この時期も遺構や遺物が台地北よりの地点に集中する。また、貝層中には土器や石器といった遺物が極めて少ない特徴がある。このことは、彦崎Z1式以降の本遺跡でのあり方と大変異なる。県内では、後期の岡山市竹原貝塚の事例に類似している<sup>③</sup>。また、動物遺存体の分析でも、貝層が薄いのを反映して魚類遺体や獸骨類が少ない傾向である。岡山県内では、現在のところ管見にふれる限り確実に磯の森式期の貝塚が形成されているのは、彦崎貝塚と磯の森貝塚（池田・鎌木1951）だけである。磯の森貝塚は本遺跡から北西に約3kmにある（第2図）。貝塚の規模は約30m×10mと推定されている。埋葬人骨、多量の土器、石器、骨角器が出土している（鎌木1986）。こうした内容を比較してみると磯の森式期の彦崎貝塚と磯の森貝塚は同一集団によって経営されていた可能性が高く、後者が集落の本体である。

このように彦崎Ⅱ期は、この台地を利用した人間活動の痕跡が初めて遺構として確認された。彦崎Ⅰ期に比較すると滞在期間も長かったであろうと推測されるが基本的な利用形態は、羽島下層Ⅱ式が狩猟、磯の森式が魚介類の採捕及び現地処理加工のためであったと考えられる。つまり、秋～冬（羽島下層Ⅱ式）、春～夏（磯の森式）の最適期を選択した生業上の季節限定的な土地利用であったと考える。

### 彦崎Ⅲ期：前期後葉①（彦崎Z1式）（第46図 3）

当該期は、B台地で遺構と遺物が検出された。B台地中央部20m幅の平坦部の東西ラインを頂点とした微地形の平坦部が落ち始める地点にマガキを主体とした貝塚が形成されている。すなわち、台地の北側と反対の南側である。貝層は、概ね平坦部で厚さ約60cm、斜堆部で1.8mを測る。

第4表 彦崎貝塚出土骨角貝製品組成表（田嶋2007）

器種 時期	貝 刃	貝 輪	刺 突 具	釣 針	垂 飾	鹿 角 製 品	そ の 他	合 計
羽島下層	0	0	0	0	1	0	0	1
彦崎 Z1	8	10	2	1	1	1	1	24
彦崎 Z2	1	6	2	1	6	0	1	17
中期前半	0	11	1	0	8	0	1	21
後期前半	0	1	0	0	5	1	0	7
後期後半	1	3	1	3	26	2	0	36
晚期前半	0	0	0	0	10	0	0	10
時期不明	0	1	1	0	7	0	0	9
総 計	10	32	7	5	64	4	3	125

層位と出土遺物の検討から、両貝塚とも新古の段階が考えられている（田嶋編2006）。また、磯の森式期の貝層の上位に形成されていることから時間的差は明確であった。南北の両貝塚に挟まれた貝層の無い空間には、東寄りの地点で炉址群、土坑、ピット群（円形に並ぶ可能性があるが無理に報告書ではつなげていない。田嶋編2006参照）を検出していることから作業区であると考えられる。南西側には貝層は続かず、したがって両貝塚は連結しないものと推定される。この点は微地形を含めて検討しなおした点であり（第15図・第16図）、今回をもって修正したい。そして、標高が一段高い約8.5mのA台地との境までのやや広い標高約6mの平坦部の一角に居住区を想定しておきたい。また、当該期は、貯蔵食料のドングリ類（イチイガシ）等が両貝塚で出土しており、B台地東側から北東に掛けての旧河道沿いに低湿地型貯蔵穴群の存在が予想される。なお、現時点では中部瀬戸内では前期の事例はなく、最古のものは後期前葉である（山本2004）。

土地の利用状況としては、B台地の全面に展開しているが、よくみるとA台地に近い側に居住区を構えそれより北側に作業場（採捕した魚介類の加工処理）を設け、その両側（南北）に廃棄区としての貝塚を形成している状況がわかる。また、東側から北東側にかけて低湿地型の貯蔵穴が設定されたことと推測される。

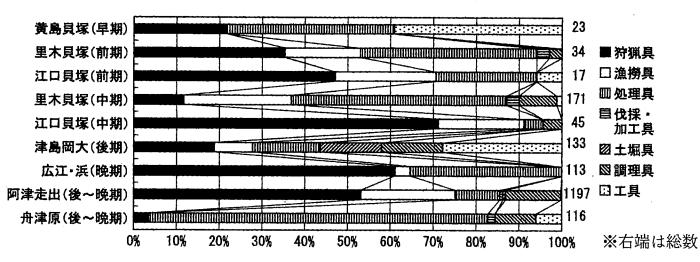
当該期は、貝塚の規模が本遺跡で最大になること、出土遺構と遺物が増加すること、石器製作においてほぼ全ての器種の石器が揃う（第5表）こと、動物遺存体の分析から主要な動物性食料資源であるニホンジカとイノシシの全身に近い部位の骨や魚類遺体が検出され、解体痕が認められること（石丸・富岡2006・2007、第50図）、ドングリ類（イチイガシほか）が検出されていること、他地域の土器及びキメラ土器が存在すること、遺跡周辺に無い石材を使用した石器が存在すること（田嶋編2006）等の理由から、狩猟、採集、漁撈活動を通年定住で実践していたと考える。さらに、集落内で骨角貝器（貝製・鹿角製・四肢骨製・猪牙製・魚椎骨製・魚尾棘製）を製作していること（第4表）、顔料の付着した作業用石器も出土しており、赤色顔料の原材料を入手し、遺跡内で塗料化したのち厳選した粘土で作った「ハレの彦崎Z1式土器」に塗布してイノシシ祭祀専用に使用している（田嶋編2006）ことも先の想定を支持するものである。赤色顔料を塗布することは磯の森式からの伝統である。したがって、当該期は、本土と四国をつなぐ南北ルートの結節点としての機能を有する拠点的な集落構造に転換したと考える。その現象は彦崎Z1式土器の分布としても具現化する（第3図）。ただ、山田も指摘しているように（山田2007）墓域の問題が残る。現時点では、調査区内及び当該期試料のフローテーション作業でも人骨片は検出されていないことから今後の検討課題である。また、集落経営における協業性と分業性の定着は当該期から具現化したと考える。

彦崎IV期：前期後半②（彦崎Z2式）（第46図 4）

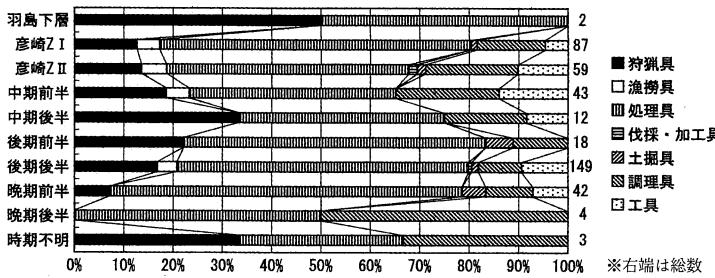
当該期は、A、B両台地で遺構と遺物が検出されている。B台地では、彦崎Ⅲ期の北貝塚よりやや東にふった地点に一ヶ所当該期の貝塚が形成される。彦崎Ⅲ期の貝層の上位に形成されるものである。貝層範囲は南までやや延びる。貝層の末端部分（南）から酒造会社によって掘削された部分（北）に向かって微地形の標高が標高5.2m～5.0mと緩く傾斜しているので後者に向かって貝層が厚くなる。最も厚いところでは50cmを測る。また、貝塚中央部から東端部にかけての地点に墓域が形成される。B台地での活動域の北端部にあたる。貝層南端部の背後には、炉址や土坑が集中することから作業場的空間が想定できる。墓域と作業場の間の空間にはピット群が認められる。やはり地形の規制から東西ラインが強く意識されているようで同じく有効ラインの西端部にT40がのるA台地があたる。ここでは僅かではあるが当該期の縄文土器が出土している。この場所とB地点の作業場のラインの間に居住区（①・②）を想定したい。

第5表 彦崎貝塚出土の縄文時代石器組成表（田嶋2006、2007・田嶋・西田2008より作成）

時期	石鏃	石槍	石錐	石匙	刃器類	RF	UF	板状剥片	剥片	石核	打製石斧	磨製石斧	砥石	楔形石器	石皿・台石	敲石	凹石	磨石	異形石器	石錐	石棒	その他	小計
羽島下層	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
彦崎Z1	12	0	3	4	13	19	19	0	245	1	1	0	0	1	3	5	0	4	0	4	1	0	335
彦崎Z2	7	1	1	3	7	12	6	1	184	0	1	1	0	5	0	6	0	4	1	3	1	1	246
中期前半	8	0	2	3	2	9	4	1	98	1	0	0	0	4	4	2	0	3	1	2	0	0	144
中期後半	4	0	0	0	2	3	0	0	21	2	0	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0	35
後期前半	5	0	0	2	4	5	1	1	48	0	1	0	0	0	0	1	0	2	1	0	0	0	71
後期後半	26	0	8	5	15	52	20	5	478	5	2	1	0	7	1	4	1	7	0	6	0	1	644
晩期前半	9	0	0	3	6	16	8	1	179	9	2	2	0	3	0	2	1	3	0	0	0	0	244
晩期後半	0	0	0	0	1	1	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	11
時期不明	1	0	0	0	0	1	0	0	17	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	21
総 計	73	1	14	21	50	119	58	9	1276	18	7	4	1	21	8	21	3	27	3	15	2	2	1750

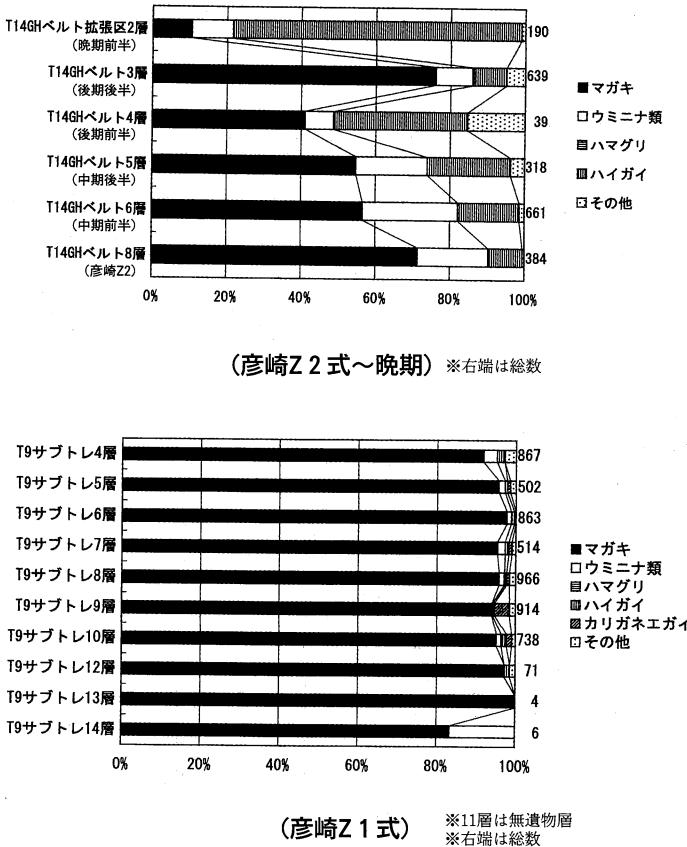


第47図 周辺遺跡の時期別石器組成（田嶋編2006）



第48図 彦崎貝塚の時期別石器組成（田嶋編2006）

当該期は、貝塚はB台地上には一ヶ所に形成される。しかし、同時期に彦崎貝塚の谷の反対側にある明石山丘陵裾部に東土井貝塚が形成される（第44図）。このことから東土井遺跡周辺の干潟の状態が魚介類の成育に適していたことがわかる。すなわち、採捕地の拡大を図っている。貝塚を構成する貝種にもこの時期からやや変化が見られ始める（第49図）。すなわち、マガキの比率がやや減少し、ハイガイが増加傾向を示し始める。このことは先の採捕地の拡大と符合する。この時期になると県内の遺跡の中には、彦崎貝塚以



第49図 彦崎貝塚の貝種組成の変化（田嶋編2006）

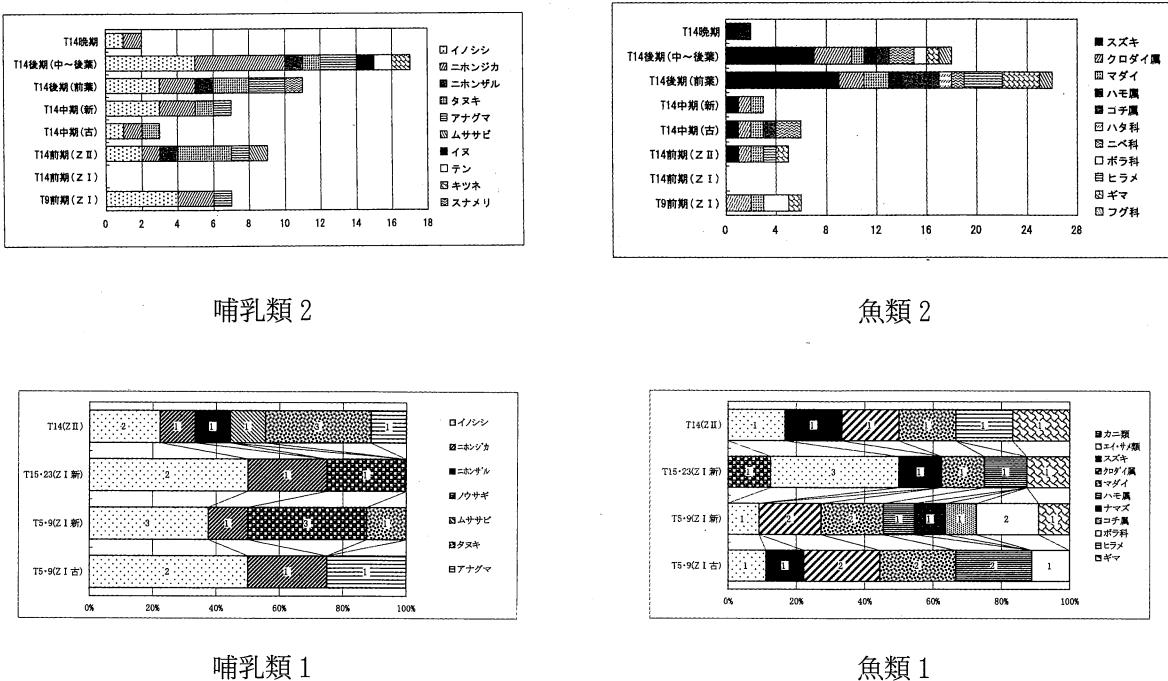
ことである。ただ、検出された埋葬人骨全てを当該期に帰属させる考えには、慎重な意見もある（間壁1987、田嶋編2006）さらに、製作工程が復元可能な100点以上の貝製腕輪が出土しているにもかかわらず、埋葬人骨の中に一点も装着された事例が無かったことから、貝輪＝装身具という単純な構図では理解できないと指摘されている（山崎・高橋2007）。つまり、別の用途、例えば「交換財」としての認識があった可能性がある。また、その素材に使用された貝にはある程度の選択性が窺われ、そうしたことから採捕した食用貝以外に砂浜に打ち上げられた貝の利用もあったものと考えられる（田嶋2007）。前章で貝塚の生ゴミの腐敗臭防止のために土壌を散布した可能性を述べたが、B台地中央部から北側にかけては、彦崎Z 1式貝層と彦崎Z 2式貝層間に無遺物層が認められる。ちょうど当該期貝塚の分布範囲と重なり、この土壌も候補となる。彦崎貝塚では、当該期以降、中期初頭までの間の活動の痕跡がほとんど見られない。既定の土器型式で言えば、田井式と大歳山式に相当する時期である。僅かに前者に相当する土器が数点検出されているだけで、第二次広域分布を示す大歳山式期には、当遺跡では土地利用が皆無となる。

#### 彦崎V期：中期初頭～中葉（鷹島式～船元IV式）（第46図 5）

当該期はB台地で遺構と遺物が確認されている。また、彦崎IV期とほぼ同じ遺構配置が認められるものの貝塚の規模は若干縮小し、標高5.3mあたりを最高所とする地点から北側へ緩く傾斜して貝塚

外でも船倉貝塚（小野ほか1996）では土壌墓群が形成され、羽島貝塚（藤田ほか1975）、里木貝塚（間壁ほか1971）では一遺跡での遺物量が増加傾向を示すようになる。また、土器の分布も中期初頭土器群成立の嚆矢となる第一次広域分布を示す（高橋1981）。このように、貝塚を2地点に形成すること、墓域を形成すること、ほとんどの器種の石器が組成する（第5表）こと、赤色顔料を遺跡内で精製して、土器に塗布していること、集落内で前時期同様に骨角貝製品を製作していること及び動物遺存体の分析（石丸・富岡2006・2007）から狩猟・採集・漁撈活動を主体とした定着性の高い定住型の居住形態であったと推定される。

また、注目されることは、墓域には、血縁者関係による埋葬原理が存在しており、10体前後の埋葬小群が存在する可能性が高いと考えられている（山田



第50図 彦崎貝塚における動物遺存体の時期別最小個体数変化（石丸・富岡2006、2007）

が形成されている。この時期もB台地の貝層は東と北側に厚かったと考えられる。また、貝塚も南よりの地点では、中期初頭から前半の遺物が多く出土し、北側の酒屋に近いほうでは、中期前半から中葉の土器が多く出土している。その貝塚の南東端あたりに墓域が形成されている。この墓域は、前IV期の墓域と重なることはなく、その間には空閑地帯が設けられている（田嶋編2006）。これは、計画的な配置と考えてよいだろう。基本的に墓の形態は、土壙墓である。このうち4号土壙墓は、鷹島式に帰属するもので壮年の女性が埋葬されていた。その埋土の最上層は、合貝のマガキで被覆するなどあまり類例が無いような仕掛けがなされており、集団内の特別な配慮を見る。さらに装身具として垂飾の一つである小玉も出土している。このような小玉は当該期より増加傾向が認められる（第4表）。さらに、当該期も埋葬人骨には貝輪が一点も装着された事例がないにもかかわらず貝輪を保有する量は他の時期より多い。このことも先に考えたように「交換財」としての有効性を指示するものである。また、貝塚南端部から南よりの地点のやや標高の高い平坦部と墓域の縁辺に土坑等が存在することから作業区が想定できる。そして、二次的に被熱した礫が土坑から出土しているので炉址も存在していると考えられる。また、当該期も基本的にB台地の東西ラインが重視されている。

土坑からは、赤色顔料（ベンガラ）の原材料等の遺物も出土していることから当該期も集落内でそうした作業が実践されていたことが窺われる。ただ、現時点では赤色顔料が付着した土器は当該期は検出されていない。また、北西へ約4kmの地点にある、船元式の名残遺跡である倉敷市粒江の船元貝塚でも墓域が形成される（清野1969）。墓域の形成時期は、土器をみると本遺跡より若干遅れるようであるが、両事例のように近接した地域に墓域が形成されることは領域を考えるうえで重要な資料となりうる。

また、当該期は、石器組成もほぼ出揃っていることと動物遺存体の分析から狩猟、採集、漁撈活動が行われていたことが確認されている（第5表・第49図）。したがって、墓域、作業区、居住区をか

まえた通年型の定住集落であったと想定できる。ただ、後半期になると貝層の規模と出土遺物が貧弱になる（第4表、第5表、第48図、第50図）ことから日常的な活動は行われる頻度が少なかったと考えられる。ただ、船元IV式期の土壙墓がトレンチの端部で検出されているため、調査区外に遺構が残る可能性を明確に否定はできない。つまり、後半期に墓地としての機能のみ有する土地利用の可能性をもっていると考える。

#### 彦崎VI期：後期前葉（彦崎K1式）（第46図 6）

当該期は、B台地上で遺構と遺物が検出された。すなわち台地中央部東よりの平坦部がやや傾斜変換する地点に南北に長い貝塚が形成されている。貝塚の南端はT14あたりである。調査範囲の規制から貝塚を除き、遺構等に恵まれなかつたためこの時期の土地利用の様相は他の時期に比べれば証拠が弱い。しかし、石器組成、骨角貝製品組成と動物遺存体の分析から大よそ推定された（第4表・第5表・第50図）。すなわち、石器組成（第5表）をみると中期後半と同様に欠落する器種が多い。しかし、石鏸、石匙、刃器類、叩石、磨石等総数は少ないながら一定程度の目的をもった利用を行ったことを示している。また、骨角貝製品の組成（第4表）でも、少ないながら貝輪、垂飾（小玉）等が検出されている。そして、特に注目されるのが動物遺存体の分析結果である。第50図の魚類2を見てみると遺物量で圧倒的に凌駕している後期後半期より、その最小個体数が多いのである。勿論、統計処理上の問題点はつき物であるが、その点を考慮しても明らかに他の時期と組成に違いが認められるのは確かである。一方、哺乳類では、出土部位と最小個体数に大きな違いは認められない。

こうしたことは、何を示すのか。すなわち、哺乳類の動物遺存体の組成は、イノシシ猪、ニホンジカ猪の最適期に基地として利用したこととし示しているものと考える。そのことは、一定程度の狩猟具と処理具が伴うことから肯定的である。また、魚類の組成からは、貝類の採捕と魚類の捕獲の最適期にその基地として利用したことを示しているものと考える。それは、個人具としての釣針や刺突具及び集団漁具としての石錐が組成していないことからも支持される。すなわち、そうした道具は別地点、つまり本拠地かその周辺で重要な道具として管理されていたことを推測させる。したがって、当該期の本遺跡は、目的の生業活動を行うための季節的前線基地として利用されたと考える。また、東大の調査では赤色顔料が付着した彦崎K1式土器が出土していることから（山崎・高橋2007）、狩猟や漁撈活動に際しての何らかの行事的行為が行われたことを推測させる。

また、当該期は、所謂縁帶紋土器群と呼ばれる土器型式が西日本一帯に強い個性をもって地域性を形成していた時期であり、中国地方に限れば、大規模発掘調査が実施された山陰では、当該期から集住化傾向が見られ始め、環状に遺構群が配置される遺跡も認められるようである（稻田2008）。また、中国地方では個性的な土器型式が認められることと貝塚を形成する遺跡が限定されることは対外接触を含めて相關関係があると思われる。しかし、集落やそこから出土する遺構、遺物の時期比定には個人差が認められる。このことは、基準資料による土器編年の再整備作業が急務であることを示す。

#### 彦崎VII期：後期中葉（彦崎K2式）（第46図 7）

当該期は、B台地で遺構と遺物が検出された。まず、貝塚が二ヶ所に形成される。すなわち、前時

期貝塚を覆う形で台地中央部ややより東側に北貝塚が形成される。また、台地東端部には、小規模な南貝塚が形成される。北貝塚の南よりの地点には、炉址、土坑、ピット群が形成されることから作業空間が考えられる。さらに、北貝塚の東端部には、小規模な墓域が形成される。これは、東大の調査時に検出されたものである（池葉須1971）。岡山市教育委員会による再調査では、明確な当該期の埋葬人骨は検出されていないが、土坑埋土や貝層中で頭蓋片や四肢骨片、歯等が検出されており（田嶋編2006）二次的な移動がなされているが、墓域が形成されていたこと示す間接的な証拠と考える。

台地東端部、南貝塚の北よりの台地傾斜部に旧河道に沿う形で貯蔵穴群が形成されている。検出面は標高1.8mである。イチイガシを中心としたドングリ類であった（松谷2006）。また、上部を河川氾濫等で失っていたが、下端部はU字形に残存していた。そこでは、編み物の断片や枝葉が粘土でパックされた状態で出土している（田嶋編2006）。また、マメ科の炭化種子も出土している。

また、台地中央部の平坦部に付近には居住区を想定できる。当該期も東西のラインの地形に沿って遺構が集中する傾向を示す。さらに、谷全体にも、散布地や遺跡が広く認められるようになる（第44図）。次に出土遺物の傾向を見てみると数量的には前時期より増加する（田嶋編2007・山崎・高橋2007）。全体的に人口が増加した様相を見ることができる。

石器の組成を見てみるとほぼ全ての器種が検出されており（第5表）、遺跡内で石器製作を行っていると考えられる。また、骨角貝製品においても他の時期に比べ多く保有している。さらに、個人漁具である釣針、刺突具、集団漁具と考えられる石錘も保有している。動物遺存体においても主要な動物資源であるイノシシやニホンジカのほぼ全身骨が検出され、魚類遺体も彦崎VI期に告ぐ最小個体数である（第50図）。精神面での新しい行事的行為の存在を示す遺構として粗製の深鉢と鉢の中にそれぞれイノシシの頭骨とニホンジカの頭骨を入れ火にかけたあと廃棄したと考えられるものが2ヶ所で確認された。また、その周辺では、小型の土製品（形象不明、釣針形、男根形）が検出されている（田嶋編2006）。

このように、当該期は狩猟、漁撈、採集等の活動を当該地に通年定住して実践していたものと考えられる。当該期は、沖積地の利用も進み津島岡大遺跡はやや古く中期中葉から（光本2003）、百間川沢田遺跡は当該期から利用が始まり、やはり貝塚や貯蔵穴群を伴うようである（平井1993）。また、児島含めた瀬戸内沿岸部でも貝塚を伴わない遺跡が出現する。そして、当該期の彦崎K2式土器を最後に装飾としての縄文が土器面から消失する。土器に見られるように再編成が進むようである。

また、人口の増加は、食糧の安定的な確保という側面において、集落経営に大きく影響を及ぼしたと考えられる。こうしたことでも当該期における遺跡が新興集落あるいは、分村として沖積地や低位部へ進出することを促進した要因の一つであったと思われる。さらに、同族認識レベルにおいて閉鎖的であったと推定される集落内では、婚姻に由来する生命倫理的限界（血が濃すぎること）も表面化したはずで、こうした問題を自助努力や外来者あるいは媒体者を好意的に受容して解決できた集落は継続経営されたであろうし、できなければ瓦解して移動を余儀なくされた場合もあったと思われる。このように、土地利用の痕跡が全く無くなる背景には、遺跡周辺の環境の変化（外的要因）に加え、集落内での変化（内的要因）も作用した可能性があると考える。

#### 彦崎Ⅳ期：縄文晩期前半（黒土B I式から舟津原式）（第46図 8）

内容は、本書第3章 第3節 小結 3 縄文晩期前半の彦崎貝塚と同じであるため割愛。参照のこと。

#### 第4章注

- (1) 岡山理科大学白石純先生に撮影をして頂きました。ただ、種子圧痕の同定は今後の検討課題としたい。
- (2) ただ、明確に羽島下層式期の漁撈具であると考えられる遺物が出土した遺跡は、現段階では羽島貝塚以外に見られないようである。  
藤田憲司ほか1975「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第11号倉敷考古館参照。
- (3) 高橋 譲氏のご教示による。

#### 参考文献

- 安東 信1973「野原高原採集の縄文土器」『倉敷考古館研究集報』第8号倉敷考古館  
池田次郎・鎌木義昌1951「岡山県磯の森貝塚発掘報告」『吉備考古』81・82合併号吉備考古学会  
池葉須藤樹1971『岡山県児島郡灘崎町大字彦崎貝塚調査報告』(私家版)  
石丸恵利子・富岡直人2006「彦崎貝塚出土の動物遺存体」『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会  
石丸恵利子・富岡直人2007「彦崎貝塚における動物資源の利用－彦崎Z1式からZ2式にかけての様相－」『彦崎貝塚2－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会  
稲田陽介2008「山陰地方における縄文時代後・晚期の集落」『考古学研究会岡山例会第12回シンポジウム 西日本の縄文集落－その実像と研究の到達点－』考古学研究会岡山例会  
江坂輝彌・渡辺 誠1988『装身具と骨角製漁撈具の知識』東京美術  
岡村道雄2000「縄文の生活誌」『日本の歴史』01講談社  
鎌木義昌1986「11 磯の森貝塚」『岡山県史』第18巻考古資料岡山県  
清野謙次1969「第3篇 備前国児島郡粒江村大字粒江船元字原崎貝塚」『日本貝塚の研究』岩波書店  
酒詰仲男1951「岡山県児島郡彦崎貝塚」『日本考古学年報』1 (昭和23年度) 日本考古学協会  
高橋 譲1981「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成』2 中期 講談社  
田嶋正憲編2006「彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－」岡山市教育委員会  
田嶋正憲2007「瀬戸内地方における縄文時代の釣針について」『彦崎貝塚2－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会  
田嶋正憲編2007「彦崎貝塚2－範囲確認調査報告書－」岡山市教育委員会  
田嶋正憲・西田和浩2008「彦崎貝塚3－範囲確認調査報告書(縄文晩期)－」岡山市教育委員会  
平井 勝1987「第三章縄文時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館  
平井 勝1993「百間川沢田遺跡3 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査VII」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84岡山県教育委員会  
会  
間壁忠彦1955「瀬戸内地方の早期縄文遺跡の分布と立地について」『遺跡』22号岡山県学生考古学会  
間壁忠彦1996『新修 倉敷市史』考古 倉敷市  
間壁蘋子1987「考古学から見た女性の仕事と文化」『女性の力』古代の日本第12巻中央公論社  
正岡睦夫1988「道口遺跡 山陽自動車道に伴う発掘調査3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69岡山県教育委員会  
松本直子編2007『出崎船越南遺跡発掘調査報告書』岡山大学文学部考古学研究室  
松谷暁子2006「彦崎貝塚から出土した植物遺残の識別について」『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会  
光本 順2005「津島岡大遺跡15－第26次調査－(事務局本部棟新宮)」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第20冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
山崎真治・高橋 健2007「彦崎貝塚の考古学的研究」『東京大学総合研究博物館研究報告』第43号東京大学総合研究博物館  
山田康弘2007「中国地方における縄文時代の墓制－彦崎貝塚出土例を墓制論上に位置づけるために－」『彦崎貝塚2－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会  
山本悦世2004「集落から見た山地域と沿岸域－岡山県の場合－」『日本考古学協会2004年度広島大会研究発表資料集』日本考古学協会2004年  
度広島大会実行委員会  
渡辺 誠1973『縄文時代の漁業』雄山閣考古学選書7雄山閣

土器観察表（1）

掲載番号	実測番号	出土地	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	焼成	調整	備考	時期	
					口径	底径	胴部最大絶	ソマミ径							
1	な	灘小寄贈 伝彦崎貝塚	弥生土器	壺	—	8.8	—	5.3	—	外：浅黄(2.5Y7/6) 内：灰黄(2.5Y7/2)	0.5~1mmの長 石英多	良好	外：ヘラミガキ後ナデ 内：ヘラケズリ	弥生後期	
2	と	灘小寄贈 伝彦崎貝塚	弥生土器	高杯	—	—	—	—	3.2	—	外：鈍い澄(7.5YR7/4) 内：鈍い澄(7.5YR7/3)	0.5mmの長石。 赤色土粒混	良好	外：ヘラミガキ後口縁ヨコナデ、下半ナデ 内：ヘラケズリ	弥生後期
3	た	灘小寄贈 伝彦崎貝塚	土師器	甕	16.9	—	17.6	5.6	—	外：鈍い黄澄(10YR7/3) 内：鈍い黄澄(10YR7/3)	0.5~1mmの長 石英	良好	外：胸部ハケメ。後口縁から肩部ヨコナデ。 内：口縁部ハケメ後ヨコナデ。胸部ヘラケズリ	古墳時代前～中期	
4	ち	灘小寄贈 伝彦崎貝塚	土師器	甕	23.8	—	—	—	3.7	—	外：浅黄澄(7.5YR8/3) 内：灰白(7.5YR8/2)	0.5mmの長石	良好	外：口縁ヨコナデ。胸部調整不明 内：口縁ヨコナデ。胸部調整不明	古墳時代前～中期
5	つ	灘小寄贈 伝彦崎貝塚	土師器	椀	12.9	—	—	—	3.5	—	外：鈍い黄澄(10YR7/3) 内：鈍い澄(5YR7/3)	精良	良好	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	古墳時代前～中期
6	て	灘小寄贈 伝彦崎貝塚	土師器	椀	14.8	—	—	—	4.2	—	外：鈍い澄(5YR7/4) 内：鈍い澄(5YR7/4)	精良	良好	外：ヘラミガキ後ヨコナデ 内：口縁ヨコナデ。ヘラミガキ後ヨコナデ	古墳時代前～中期
7	あ	灘小寄贈 伝彦崎貝塚	須恵器	杯蓋	9.8	—	11.5	2.65	1.6	外：灰(7.5Y5/1) 内：灰(7.5Y6/1)	0.5~1mmの長 石英	良好	外：ツマミ部、口縁ロクロナデ天井部ヘラケズリ 内：ロクロナデ、天井部仕上げナデ有り	古墳～奈良	
8	い	灘小寄贈 伝彦崎貝塚	須恵器	杯蓋	10.3	—	12.3	1.25	—	外：灰(7.5Y5/1) 内：灰(7.5Y5/1)	0.5mmの長石	良好	外：口縁ロクロナデ 内：口縁ロクロナデ	古墳～奈良	
9	お	SE0524玉野市相賀 氏サイロ工事	須恵器	杯蓋	—	5.3	—	—	3.2	—	外：淺黄(2.5Y7/3) 内：鈍い黄(2.5Y6/3)	0.5~1mmの長 石英	良好	外：底部ハケメ後ヘラミガキ。底面ヘラミガキ後ナデ 内：ロクロナデ。端部ヘラケズリ	弥生後期
10	う	吉原徳良氏寄贈 彦崎天神社	須恵器	平瓶	6.2	6.25	14.05	14.25	—	外：灰(7.5Y7/1) 内：灰白(N7/0)	0.5~1mmの長 石英	良好	外：口縁から胸部ロクロナデ。底部ヘラケズリ 内：口縁ロクロナデ	古墳時代後期	
11	え	天王池	須恵器	円面鏡	—	23.4	—	4.6	—	外：灰白(5Y7/1) 内：灰白(5Y7/1)	0.5mmの長石	良好	外：脚部ロクロナデ 内：脚部ロクロナデ	奈良	
12	こ	追川大池北西ブド ウ畑下法面	土師器	高台付碗	—	6.05	—	1.95	—	外：浅黄(10YR8/3) 内：灰白(10YR8/2)	0.5~1mmの長 石英	良好	外：底部ユビオサエ。高台部ヨコナデ 内：底部ヨコナデ後ナデ	13～14世紀	
13	さ	追川大池北西ブド ウ畑下法面	土師器	高台付碗	—	6.2	—	1.25	—	外：灰白(10YR8/2) 内：灰白(10YR8/1)	0.5~1mmの長 石英	良好	外：底部ヨコナデ。高台部ヨコナデ 内：底部ヨコナデ後ナデ	13～14世紀	
14	し	追川大池北西ブド ウ畑下法面	土師器	高台付碗	11.8	—	—	—	2.6	—	外：浅黄(10YR8/3) 内：灰白(10YR8/2)	0.5~1mmの長 石英	良好	外：口縁ヨコナデ後ナデ。下半ユビオサエ 内：口縁ヨコナデ後ナデ	13～14世紀
15	す	追川大池北西ブド ウ畑下法面	土師器	高台付碗	—	—	—	—	—	外：灰白(2.5Y8/2) 内：灰白(2.5Y8/2)	0.5~1mmの長 石英	良好	外：口縁ヨコナデ。下半ヘラケズリ後ナデ 内：ヨコナデ後ナデ	13～14世紀	
16	せ	追川大池北西ブド ウ畑下法面	土師器	高台付碗	—	—	—	—	—	外：灰白(10YR8/2) 内：灰白(2.5Y8/2)	0.5~1mmの長 石英	良好	外：口縁ヨコナデ。下半ユビオサエ 内：ヨコナデ	13～14世紀	
17	か	追川大池北西ブド ウ畑下法面	青磁	碗	6.7	—	—	2.8	—	内外：暗オリーブ灰 (2.5GY7/1)	堅縮	良好	外：ヘラケズリのちナデ 内：ナデ	13～14世紀	

土器観察表(2)

掲載番号	実測番号	出土地	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	焼成	調査	整備	参考	時期
					口径	底径	胸部最大径	器高							
18	き	迫川大池北西ゾド ウ烟下法面	青磁	皿	—	—	—	—	内外:オリーブ灰 (2.5GY6/1)	堅締	良好	外:ヘラケスリのちナデ 内:ナデ		13~14世紀	
19	く	迫川大池北西ゾド ウ烟下法面	青磁	皿	—	—	—	—	内外:灰白(7.5Y7/1)	堅締	良好	外:ナデ。 内:ナデ。	貫入りあり	不明	
20	そ	迫川大池北西ゾド ウ烟下法面	備前系	鉢	—	—	—	—	内外:灰(7.5Y6/1)	堅締	良好	外:ヘラケスリのちナデ。 内:ナデ	一部自然釉	不明	
21	け	迫川大池北西ゾド ウ烟下法面	青花	碗	—	—	—	—	内外:灰(7.5Y6/2)	堅締	良好	外:ナデ。 内:ヘラケスリ	外面花卉文	不明	

土器観察表(3)

掲載番号	実測番号	出土地	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	調査	整備	参考	時期
					口径	底径	胴部 最大径							
22	2	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	27.4	—	26.6	外：鈍い黄褐色(10YR5/4) 内：鈍い褐(10YR6/4)	0.5~1mmの長石石英	良好	外：二枚貝条痕後ナデ 内：条痕後、指頭圧ナデ			縄文時代晚期 前半
23	4	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	27.9	—	—	外：鈍い黄褐色(10YR5/3) 内：仄黄褐色(10YR4/2)	0.5~1mmの長石石英。 金雲母含む	良好	外：二枚貝条痕後ナデ 内：二枚貝条痕、部分ナデ			縄文時代晚期 前半
24	5	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	32	—	31	外：鈍い褐(7.5YR6/3) 内：褐灰(7.5YR4/1)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：二枚貝条痕後ナデ 内：条痕後ナデ			縄文時代晚期 前半
25	7	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	35.2	—	—	外：鈍い黄褐色(2.5Y5/3)	0.5~1mmの長石石英	良好	外：二枚貝条痕後ナデ 内：条痕後ナデ			縄文時代晚期 前半
26	6	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	—	—	25.6	外：鈍い黄褐色(10YR7/4) 内：鈍い黄褐色(10YR6/4)	0.5~1mmの長石石英	良好	外：二枚貝条痕後ナデ 内：胸部ヘラケズリ後ナデ			縄文時代晚期 前半
27	10	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鈍い黄褐色(10YR7/4) 内：褐灰(10YR4/1)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：二枚貝条痕後ナデ 内：ナデ			縄文時代晚期 前半
28	1	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	39.6	—	32.5	外：鈍い黄褐色(10YR5/3) 内：鈍い褐(7.5YR5/4)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：二枚貝条痕後ナデ 内：指頭圧ナデ			縄文時代晚期 前半
29	9	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	29	—	—	外：鈍い黄褐色(10YR7/3) 内：浅黄褐色(10YR8/3)	0.5~1mmの長石石英	良好	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕、部分ナデ			縄文時代晚期 前半
30	3	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	—	16.1	—	外：明黄褐色(10YR6/6) 内：仄黄褐色(10YR4/2)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：二枚貝条痕 内：条痕後ナデ			縄文時代晚期 前半
31	8	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：暗黄褐色(7.5YR6/6) 内：褐灰(7.5YR4/1)	0.5~1.5mmの長石石英 多	良好	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕、部分ナデ			縄文時代晚期 前半
32	11	T40土器留まり1	縄文土器	深鉢	—	10.7	—	外：鈍い黄褐色(10YR6/3) 内：仄黄褐色(10YR5/2)	0.5~1mmの長石石英 多	良好	外：胸部ヘラミガキ後ナデ。底部ミガキ後ナデ			縄文時代晚期 前半
33	53	T40土器留まり1	縄文土器	浅鉢	33.7	—	—	外：鈍い黄褐色(7.5YR7/4) 内：鈍い黄褐色(10Y6/3)	0.5~1mmの長石石英	良好	外：胸部ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
34	13	T40土器留まり1	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外：鈍い黄褐色(2.5Y5/2) 内：褐灰(10YR5/1)	0.5~1mmの長石石英 多	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
35	12	T40土器留まり1	縄文土器	浅鉢	16.1	—	—	外：黄褐色(2.5Y4/1) 内：鈍い黄褐色(10YR6/3)	0.5~1mmの長石石英多。 角閃石含む	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
36	14	T40土器留まり1	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外：仄(5Y4/1) 内：仄(6Y4/1)	0.5~1mmの長石石英	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
37	15	T40土器留まり1	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外：仄黄褐色(10YR5/2) 内：褐灰(10YR4/1)	0.5~1mmの長石石英。 黒雲母含む	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
38	22	T40P10	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：明黄褐色(10YR7/6) 内：暗(7.5YR7/6)	0.5~1mmの長石石英	良好	外：二枚貝条痕、ナデ。 内：二枚貝条痕、ナデ。口縁端部キザミ			縄文時代晚期 前半

## 土器観察表 (4)

掲載 案測 番号	出 土 地	種 別	器 種	法量 (cm)			調 胎 土	燒 成	整	備 考	時 期
				口徑	底径	脣部 最大盛 器高					
39	45 T40・26層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：褐灰(10YR4/1) 内：褐灰(10YR4/1)	0.5～1mmの長石石英	良好	外：二枚貝条痕後ナデ。 内：二枚貝条痕、部分ナデ。	縄文時代晚期 前半
40	42 T40・26層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：褐灰(10YR4/1) 内：浅黄(2.5Y7/3)	0.5～1mmの長石石英多	良好	外：ヘラケズリ後ナデ。 内：二枚貝条痕、部分ナデ。	縄文時代晚期 前半
41	16 T40P4	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い澄(7.5YR6/4) 内：鋸い澄(7.5YR7/4)	0.5～1.5mmの長石石英 多	良好	外：条痕 内：ナデ	縄文時代晚期 前半
42	44 T40・26層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い黄澄(10YR7/4) 内：鋸い黄澄(10YR6/3)	0.5～1mmの長石石英	良好	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕後ナデ	縄文時代晚期 前半
43	57 T40・26層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い澄(10YR5/3) 内：鋸い澄(10YR6/3)	0.5～1mmの長石石英多	良好	外：調整不明 内：ナデ	縄文時代晚期 前半
44	81 T40・14層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：明貴鳩(10YR6/6) 内：鋸い澄(6YR6/4)	0.5～1mmの長石石英多。 金雲母含む	良好	外：ヘラケズリ後ナデ。 内：二枚貝条痕、ナデ。	縄文時代晚期 前半
45	43 T40・26層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：澄(7.5YR7/6) 内：黒鳩(10YR3/2)	0.5～1mmの長石石英多	良好	外：ヘラケズリ後ナデ。 内：二枚貝条痕、ナデ。	縄文時代晚期 前半
46	56 T40・26層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い黄澄(10YR7/4) 内：鋸い黄澄(10YR7/4)	0.5～1mmの長石石英多	良好	外：ヘラケズリ 内：ナデ	縄文時代晚期 前半
47	23 T40P13	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：褐灰(7.5YR4/1) 内：灰鳩(10YR5/1)	0.5～1mmの長石石英多。 金雲母含む	良好	外：条痕 内：ナデ	縄文時代晚期 前半
48	21 T40P10	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い黄澄(10YR6/4) 内：褐灰(10YR4/1)	0.5～1mmの長石石英多	良好	外：ヘラケズリ後ナデ。 内：条痕？後ナデ。口縁と脣部の境ユビオサエ	縄文時代晚期 前半
49	25 T40P14	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い黄澄(10YR7/3) 内：鋸い黄澄(10YR6/3)	0.5mm位の長石	良好	外：一枚貝条痕？ 内：卷貝条痕？後ナデ	縄文時代晚期 前半
50	26 T40P14	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い黄澄(10YR7/3) 内：鋸い黄澄(10YR6/3)	0.5mm位の長石石英	良好	外：条痕 内：卷貝後ナデ	縄文時代晚期 前半
51	40 T40・26層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い澄(7.5YR6/4) 内：鋸い澄(10YR6/4)	0.5～1mmの長石石英多	良好	外：二枚貝条痕 内：卷貝条痕後ナデ	縄文時代晚期 前半
52	20 T40P9	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い黄澄(10YR6/4) 内：灰貴鳩(10YR5/2)	0.5～1mmの長石石英多	良好	外：ヘラケズリ後ナデ 内：ナデ	縄文時代晚期 前半
53	34 T40・14層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い澄(7.5YR7/4) 内：鋸い澄(7.5YR7/4)	0.5～1mmの長石石英多	良好	外：二枚貝条痕 内：二枚貝条痕後ナデ	縄文時代晚期 前半
54	19 T40P8	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：灰貴鳩(7.5YR5/2) 内：灰貴鳩(10YR5/2)	0.5～1mmの長石石英多	良好	外：上側条痕横向き下側斜め。後上側ナデ 内：条痕後ナデ	縄文時代晚期 前半
55	24 T40P13	縄文土器	深鉢	—	—	—	外：鋸い澄(7.5YR6/4) 内：灰貴鳩(10YR5/2)	0.5～1mmの長石石英。 金雲母含む	良好	外：条痕継向き後横 内：条痕後ナデ	縄文時代晚期 前半

土器観察表（5）

掲載番号	実測番号	出土地	種別	器種	法量(cm)				色	調	胎土	焼成	整	備考	時期
					口径	底径	胸最大径	器高							
56	89	T40・26層	縄文土器	底部	-	4.6	-	2.15	外：橙5YR6/6 内：褐灰5YR5/1)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：胴底部付近ヘラケズリ後ナデ後ユビオサエ。 内：調整不明			縄文時代晚期 前半
57	33	T40P24	縄文土器	底部	-	5.5	-	3.15	外：橙7.5YR7/6 内：鈍い黄澄10YR6/4)	0.5~1.5mmの長石石英 多	良好	外：胴部ヘラケズリ底部ナデ。			縄文時代晚期 前半
58	41	T40・26層	縄文土器	底部	-	7.4	-	2.65	外：鈍い澄(7.5YR7/4) 内：鈍い黄澄10YR7/2)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：胴部ヘラケズリ底部ナデ。			縄文時代晚期 前半
59	49	T40・26層	縄文土器	底部	-	3.6	-	3.5	外：鈍い黄澄(10YR7/4) 内：褐灰10YR5/1)	0.5~1.5mmの長石石英多	良好	外：胴部ヘラケズリ底部ナデ。			縄文時代晚期 前半
60	75	T40・26層	縄文土器	底部	-	7.4	-	1.8	外：鈍い黄澄(10YR7/4) 内：褐灰10YR5/1)	0.5~1.5mmの長石石英多	良好	外：調整不明			縄文時代晚期 前半
61	87	T40P24	縄文土器	深鉢	-	10.9	-	5.5	外：鈍い黄澄(10YR4/1) 内：褐灰10YR4/1)	0.5~2mmの長石石英多	良好	外：胴底部付近巻貝条痕後ナデ。底面ナデ 内：素振orヘラケズリ後ナデ			縄文時代晚期 前半
62	29	T40P21	縄文土器	浅鉢	-	-	-	-	外：鈍い黄澄(10YR6/3) 内：黒褐10YR3/1)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。 内：ヘラミガキ後ナデ			縄文時代晚期 前半
63	17	T40P5	縄文土器	浅鉢	-	-	-	-	外：鈍い黄澄(10YR6/3) 内：褐灰10YR4/1)	0.5~1mmの長石石英	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
64	30	T40P23	縄文土器	浅鉢	-	-	-	-	外：黒褐(10YR3/1) 内：褐灰10YR4/1)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
65	50	T40・26層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	-	外：黒褐(10YR3/1) 内：褐灰10YR4/1)	0.5~1.5mmの長石石英 多	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
66	46	T40・26層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	-	外：灰黄褐(10YR5/2) 内：鈍い黄澄(10YR6/3)	0.5~1mmの長石石英。 金雲母含む	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
67	85	T40P3	縄文土器	浅鉢	-	-	-	-	外：黒R(2.5Y5/6) 内：赤澄10YR6/6)	0.5~1mmの長石石英	良好	外：ヘラミガキ後ナデ			縄文時代晚期 前半
68	83	T40・14層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	外：鈍い黄澄(10YR7/4) 内：鈍い黄澄10YR6/4)	0.5~1mmの長石石英	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
69	38	T40・26層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	-	外：鈍い黄澄(10YR6/4) 内：灰黄褐(10YR5/2)	0.5~1mmの長石石英多。 黒雲母含む	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
70	52	T40・26層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	外：鈍い黄澄(10YR6/4) 内：鈍い褐(10YR5/3)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
71	84	T40・14層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	外：鈍い黄澄(10YR6/4) 内：褐灰10YR4/1)	0.5~1.5mmの長石石英 多	良好	外：ヘラケズリ。 内：ナデ？			縄文時代晚期 前半

土器観察表(6)

掲載番号	実測番号	出土地	種別	器種	法量(cm)			色	調	胎土	焼成	整備	参考	時期
					口径	底径	胴部最大径							
72	48	T40・26層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外:褐色(7.5YR5/1) 内:褐色(7.5YR4/1)	0.5~1mmの長石石英多。 金雲母含む。	良好	外:二枚目条痕。 内:ヘラミガキ後ナデ			縄文時代晚期 前半
73	47	T40・26層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外:純い黄澄(10YR6/3) 内:純い黄澄(10YR6/3)	0.5~1mmの長石石英多。	良好	外:二枚目条痕。 内:ヘラミガキ後ナデ			縄文時代晚期 前半
74	37	T40・26層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外:灰褐(7.5YR5/2) 内:褐色(7.5YR4/1)	0.5~1mmの長石石英	良好	外:二枚目条痕。 内:ヘラミガキ後ナデ			縄文時代晚期 前半
75	32	T40P24	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外:黒褐(2.5Y3/1) 内:黒褐(2.5Y3/1)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外:ヘラミガキ後ナデ。 内:ヘラミガキ後ナデ			縄文時代晚期 前半
76	18	T40P5	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外:純い黄澄(10YR6/4) 内:純い黄澄(10YR6/4)	0.5mm位の長石石英	良好	外:ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
77	27	T40P16	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外:純い黄澄(10YR6/3) 内:灰黄褐(10YR5/2)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外:ヘラミガキ後ナデ。 内:ナデ。焼成後穿孔あり			縄文時代晚期 前半
78	28	T40P18	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外:純い橙(7.5YR6/4) 内:純い橙(7.5YR6/4)	0.5~1mmの長石石英	良好	外:卷貝条痕。 内:ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
79	39	T40・26層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外:純い黄澄(10YR6/3) 内:純い黄褐(10YR5/3)	0.5~1mmの長石多	良好	外:ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
80	82	T40・14層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外:明黄褐(10YR7/6) 内:純い黄褐(10YR6/6)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外:ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
81	88	T40・26層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外:褐色(10YR4/1) 内:褐色(10YR4/2)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外:口縁端部ヘラミガキ、ナデ。			縄文時代晚期 前半
82	35	T40・14層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外:褐色(10YR4/1) 内:褐色(10YR4/1)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外:ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
83	36	T40・14層	縄文土器	浅鉢	—	—	—	外:純い黄澄(10YR7/3) 内:純い黄澄(10YR6/3)	0.5~1mmの長石石英多	良好	外:ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
84	31	T40P24	縄文土器	浅鉢	16.1	—	—	外:灰黄褐(10YR6/2) 内:褐色(10YR4/1)	0.5~1mmの長石石英。黒雲母含心	良好	外:ヘラミガキ後ナデ。			縄文時代晚期 前半
85	51	T40・26層	縄文土器	深鉢	—	—	—	外:橙(7.5YR7/6) 内:純い橙(7.5YR6/4)	0.5~1mmの長石石英	良好	外:纈文。			彦崎Z2
86	58	T40・7層	弥生土器	甕	17.9	—	—	外:純い黄澄(10YR7/4) 内:純い橙(7.5YR7/4)	0.5~1mmの長石石英多。 黒雲母含む。	良好	外:ヨコナデ	口縫端部凹 線三條		弥生時代中期 末
87	69	T40・14層	弥生土器	甕	—	—	—	外:橙(7.5YR6/6) 内:橙(7.5YR6/6)	0.5~1mmの長石石英多。 黒雲母含む。	良好	外:ヨコナデ			弥生時代中期 末
88	67	T40・26層	弥生土器	甕	—	—	—	外:橙(7.5YR6/4) 内:橙(7.5YR6/4)	0.5~1mmの長石石英。金雲母含む。	良好	外:ヨコナデ			弥生時代中期 末

土器観察表(7)

掲載番号	実測番号	出土地	種別	器種	法量(cm)				色調	胎土	焼成	調整	備考	時期
					口径	底径	胴部最大径	器高						
89	62	T40・7層	弥生土器	合付鉢	—	—	—	8.6	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR6/6	0.5~1mmの長石石英	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。 内：杯部ヘラミガキ後ナデ。脚部ヘラケズリ	弥生時代中期末	
90	63	T40・7層	弥生土器	合付鉢	—	17.4	—	5.6	外：鉛い澄7.5YR6/4 内：橙7.5YR7/6	0.5~1mmの長石石英多。 角閃石含む	良好	外：ナデ。脚部ヘラケズリ後ナデ。 内：脚部ヘラケズリ後ナデ。脚部ヨコナデ	弥生時代中期末	
91	54	T40・7層	弥生土器	甌	15.6	—	—	8.05	外：鉛い黄澄10YR7/4 内：浅黄2.5Y7/4	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：平行タタキ後ナデ 内：口縁ハケメ。脣部ヘラケズリ後ナデ	弥生時代後期	
92	68	T40・7層	弥生土器	甌	—	6.1	—	2.8	外：鉛い黄澄10YR7/4 内：浅黄2.5Y7/4	0.5~1mmの長石石英	良好	外：平行タタキ後ナデ 内：口縁ハケメ。脣部ヘラケズリ後ナデ	弥生時代後期	
93	74	T40・7層	弥生土器	底部	—	—	—	—	外：鉛い澄7.5YR6/4 内：橙6YR6/6	0.5mm位の長石	良好	外：脣部板状工具？ナデ。 内：ナデ	弥生時代後期	
94	64	T40・7層	弥生土器	手づくね土器	6.5	—	7.8	2.95	外：浅黄澄10YR8/4 内：鉛い澄7.5YR6/4	0.5~1mmの長石石英。 黒雲母含む	良好	外：ナデ 内：ナデ	弥生時代後期	
95	90	T40・7層	弥生土器	土製品	—	—	—	—	外：鉛い黄澄10YR7/4 内：鉛い黄澄10YR7/4	0.5~1mmの長石石英	良好	外：ナデ 内：ナデ	弥生時代後期	
96	86	T40P12	弥生土器	土製品	—	—	—	—	外：鉛い澄10YR6/4 内：鉛い澄7.5YR7/4	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：ナデ 内：ナデ	弥生時代後期	
97	76	T40・6層	土師器	甌	0	—	—	—	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6	0.5~1mmの長石石英。 金雲母含む	良好	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	古墳中期	
98	71	T40・6層	土師器	甌	—	—	—	—	外：鉛い黄澄10YR7/4 内：鉛い黄澄10YR7/4	0.5~1mmの長石石英	良好	外：ヘラミガキ後ナデ。	古墳中期	
99	70	T40・6層	土師器	甌	—	—	—	—	外：鉛い黄澄10YR7/4 内：鉛い黄澄10YR6/4	0.5mm位の長石石英	良好	外：ナデ？ 内：ナデ	古墳中期	
100	72	T40・6層	土師器	高杯	—	—	—	—	外：— 内：鉛い澄7.5YR6/6	0.5~1mmの長石石英多	良好	外：— 内：ヨコナデ	古墳時代前～中期	
101	73	T40・6層	土師器	高杯	—	—	—	—	外：— 内：橙6YR7/6	0.5~1mmの長石石英	良好	外：— 内：ナデ	古墳時代前～中期	
102	78	T40・6層	土師器	甌	—	—	—	—	外：橙7.5YR6/6 内：橙7.5YR6/6	0.5~1mmの長石石英多。 金雲母含む	良好	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	古墳時代前～中期	
103	77	T40・6層	土師器	底部	—	—	—	—	外：橙5YR6/6 内：褐灰10YR4.1	0.5~1.5mmの長石石英 多	良好	外：調整不明 内：ナデ	古墳時代前～中期	
104	79	T40・6層	土師器	甌	—	—	0	—	外：橙5YR6/6 内：橙6YR6/6	0.5~1mmの長石石英多。 金雲母含む	良好	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	古墳時代前～中期	

土器観察表 (8)

掲載番号	実測番号	出土地	種別	器種	法量 (cm)				色調	胎土	焼成	整備	参考	時期
					口径	底径	脛部 最大絶	器高						
106	55	T40・6層	土師器	甕	—	—	21	8.95	外：純い黄澄(10YR6/4) 内：純い澄(7.5YR6/4)	0.5～1mmの長石石英	良好	外：ハケメ後口縁から肩部ナデ 内：ハケメ。後口縁ヨコナデ。胴部ナデ		古代
107	66	T40・6層	土師器	カマド	—	—	—	—	外：澄(5YR6/6) 内：澄(7.5YR6/6)	0.5～1mmの長石石英。 金雲母含む	良好	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ		古代
108	80	T40・6層	土師器	ナベ	—	—	—	—	外：純い澄(7.5YR6/4) 内：純い澄(7.5YR6/4)	0.5～1mmの長石石英多。 黒雲母含む	良好	外：ナデ 内：—		古代
109	65	T40・6層	土師器	ナベ	—	—	—	—	外：純い澄(7.5YR6/4) 内：純い澄(7.5YR7/4)	0.5～1mmの長石石英多	良好	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ		古代
110	61	T40・4層	土師器	小皿	—	7.2	—	1.55	外：純い黄澄(10YR7/4) 内：純い黄澄(10YR7/4)	0.5～1mmの長石。赤色 土粒混	良好	外：ヨコナデ。 内：ヨコナデ後ナデ		中世
111	60	T40・4層	龜山焼	甕	—	—	—	—	外：灰(7.5Y4/1) 内：灰(7.5Y5/1)	0.5～1mmの長石石英。 金雲母含む	良好	外：口縁ヨコナデ。胴部ナデ 内：口縁から肩部ナデ		中世

鉄器観察表

掲載番号	実測番号	遺構ほか	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	整備	参考	時期
M1	M-1	T40・7層	不明	鉄	13.0	31.0	3.0	3.66			弥生時代か
M2	M-2	T40・7層	不明	鉄	15.8	7.7	3.6	2.54			弥生時代か

石器観察表（1）

掲載番号	実測番号	トレンチ・区	出土遺構・層位	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	現存重量(g)	時期	備考
S1	3	T 40	26層	石鏃	サヌカイト	20.8	19	5	1.42	縄文晩期前半	
S2	15	T 40	土器溜まり 1	石鏃	サヌカイト	15.2	12	2.5	0.36	縄文晩期前半	
S3	36	T 40	26層	石鏃	サヌカイト	21.5	16	3	1.19	縄文晩期前半	
S4	6	T 40	土器溜まり 1	石鏃	サヌカイト	20.5	15	2.5	0.56	縄文晩期前半	
S5	14	T 40	26層	石鏃	サヌカイト	33.4	19	5	2.37	縄文晩期前半	
S6	2	T 40	26層	スクレイバー	サヌカイト	27.5	24.7	6	4.02	縄文晩期前半	
S7	1	T 40	26層	スクレイバー	サヌカイト	84.8	32.11	7	24.89	縄文晩期前半	
S8	28	T 40	26層	石核	サヌカイト	35.5	30.5	12	13.33	縄文晩期前半	
S9	18	T 40	26層	石核	サヌカイト	45	45.5	14.5	27.55	縄文晩期前半	
S10	29	T 40	26層	石核	サヌカイト	40.8	30.8	7.5	9	縄文晩期前半	
S11	33	T 40	26層	石核	サヌカイト	31.8	47	11	15.36	縄文晩期前半	
S12	12	T 40	26層	石核	サヌカイト	48.5	45	9	21.58	縄文晩期前半	
S13	16	T 40	26層	剥片	サヌカイト	30	50	4.5	7.63	縄文晩期前半	
S14	20	T 40	26層	剥片	サヌカイト	57.5	9.5	7	3.98	縄文晩期前半	
S15	32	T 40	土器溜まり 1	剥片	サヌカイト	44.5	33	5.6	12.12	縄文晩期前半	
S16	39	T 40	26層	剥片	サヌカイト	31	51	6	12.47	縄文晩期前半	
S17	30	T 40	土器溜まり 1	剥片	サヌカイト	26.5	49	8.5	12.68	縄文晩期前半	
S18	21	T 40	26層	剥片	サヌカイト	29.6	43	7.8	10.37	縄文晩期前半	
S19	27	T 40	26層	剥片	サヌカイト	55.4	33.4	6	11.54	縄文晩期前半	
S20	37	T 40	26層	剥片	サヌカイト	46.5	53	9	13.3	縄文晩期前半	
S21	35	T 40	26層	剥片	サヌカイト	32.1	28.5	8	9.7	縄文晩期前半	
S22	34	T 40	埋め戻し堆土	剥片	サヌカイト	41.5	62.35	9	21.8	縄文晩期前半	

石器觀察表(2)

掲載番号	実測番号	トレンチ・区	出土遺構・層位	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	現存重量(g)	時	期	備考
S23	43	T40付近	田嶋表採	剥片	サヌカイト	57.5	30	9	17.93	縄文晩期前半		
S24	42	T40	26層	剥片	サヌカイト	42.5	21.5	4	4.25	縄文晩期前半		
S25	40	T40	26層	剥片	サヌカイト	18.5	24	2	1.02	縄文晩期前半		
S26	53	T40	26層	剥片	サヌカイト	20	30	8	5.6	縄文晩期前半		
S27	45	T40	26層	石斧未製品?	石英ヒン岩	153	49	22	162.61	縄文晩期前半		
S28	46	T40	26層	石斧未製品?	石英ヒン岩	144	61.4	34	470.65	縄文晩期前半		
S29	44	T40	26層	凹石	流紋岩	128	102	62	1461.51	縄文晩期前半		
S30	47	T40	26層	不明	凝灰岩	92	50	21	99.36	縄文晩期前半		
S31	38	T40	7層	石鏃	サヌカイト	24.5	9	2.5	0.46	弥生中期末		
S32	8	T40	P23	スクレイバー	サヌカイト	22.5	42	4	4.34	弥生中期末		
S33	4	T40	13層	スクレイバー	サヌカイト	100.5	58.7	11.5	77.79	弥生中期末		
S34	9	T40	P18	楔形石器	サヌカイト	30.1	31.2	10.2	12.51	弥生中期末		
S35	24	T40	7層	石核	サヌカイト	27.5	49.5	9.5	9.91	弥生中期末		
S36	10	T40	P23	石核	サヌカイト	64.5	44	13.8	43.03	弥生中期末		
S37	5	T40	P9	剥片	サヌカイト	21	36	4	2.96	弥生中期末		
S38	19	T40	P24	剥片	サヌカイト	21	30	8	5.32	弥生中期末		
S39	13	T40	P18	剥片	サヌカイト	14.5	23.4	2.8	0.95	弥生中期末		
S40	11	T40	P18	剥片	サヌカイト	41	59	8	14.21	弥生中期末		
S41	7	T40	P8	剥片	サヌカイト	58	64	11	38.59	弥生中期末		
S42	22	T40	14層	剥片	サヌカイト	26.5	24.7	2	1.42	弥生中期末		
S43	17	T40	P24	剥片	サヌカイト	50	41.8	12.5	31.55	弥生中期末		
S44	23	T40	14層	剥片	サヌカイト	33.6	23.2	8.6	6.58	弥生中期末		

石器観察表（3）

掲載番号	実測番号	トレンチ・区	出土遺構・層位	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	現存重量(g)	時	期	備考
S45	26	T40	7層	剥片	サヌカイト	21.5	29.5	3.5	1.73	弥生中期末		
S46	25	T40	14層	剥片	サヌカイト	14.8	28	3.2	1.2	弥生中期末		
S47	31	T40	7層	剥片	サヌカイト	18.2	37	5	2.57	弥生中期末		
S48	41	T40	14層	剥片	サヌカイト	25.6	33	3	3.1	弥生中期末		
S49	54	T40	P26	叩石	流紋岩	98	104.5	96	1001.91	弥生中期末		
S50	50	T8	10層	石鏃	サヌカイト	17.5	15	3	0.44	彌Z1		
S51	48	T8	2層	スクレイバー	サヌカイト	49.5	78	12.5	50.38	彌Z2		
S52	51	T14-GHベルト	4層	スクレイバー	サヌカイト	56.2	36	10	23.2	縄文後期前半		
S53	49	T14-GHベルト	5層	楔形石器？	サヌカイト	22	57	7.5	10.97	中期後半		
S54	52	T14-D区	6層	剥片	サヌカイト	30.4	37	8	7.8	縄文中期前半		
S55	55	T8	10層	使用痕ある剥片	石英粗面岩	108.5	195	14	442.5	彌Z1		
S56	56	追川大池ゾウ ウ畑下法面		剥片	サヌカイト	51.6	78	11	44.47	後期旧石器？	表面風化	

石器観察表(4)未掲載分1

整理番号	トレンチ・区	出土遺構・層位	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	現存重量(g)	備考	時代	期
1	T40	土器溜まり1	剥片	サヌカイト	11.1	23.9	3.7	1.31		縄紋時代晩期前半	
2	T40	土器溜まり1	剥片	サヌカイト	24.8	32.7	3.5	2.59		縄紋時代晩期前半	
3	T40	土器溜まり1	剥片	サヌカイト	12.6	17.4	3.2	0.94		縄紋時代晩期前半	
4	T40	土器溜まり1	剥片	サヌカイト	25.6	20.1	5.2	2.65		縄紋時代晩期前半	
5	T40	P3	剥片	サヌカイト	12.8	18.7	3.3	0.61		弥生時代中期末	
6	T40	P3	剥片	サヌカイト	11.9	23.7	2.2	0.56		弥生時代中期末	
7	T40	P5	剥片	サヌカイト	13.1	19.7	2.8	0.69		弥生時代中期末	
8	T40	P5	剥片	サヌカイト	17.7	26.8	3.7	1.82		弥生時代中期末	
9	T40	P6	剥片	サヌカイト	15.3	19.6	2.4	0.59		弥生時代中期末	
10	T40	26層	剥片	サヌカイト	10.8	19.8	2.4	0.51		縄紋時代晩期前半	
11	T40	P11	剥片	サヌカイト	24.6	34.4	5.9	4.67		弥生時代中期末	
12	T40	P14	剥片	サヌカイト	28.6	17.1	3.8	1.91		弥生時代中期末	
13	T40	P18	剥片	サヌカイト	18.2	8.9	2.4	0.31		弥生時代中期末	
14	T40	P19	剥片	サヌカイト	23.2	23.2	2.3	1.41		弥生時代中期末	
15	T40	14層	剥片	サヌカイト	14.9	20.8	2.5	0.81		弥生時代中期末	
16	T40	14層	剥片	サヌカイト	8.7	10.6	1.4	0.11		弥生時代中期末	
17	T40	14層	剥片	サヌカイト	8.4	13.7	1.8	0.19		弥生時代中期末	
18	T40	26層	剥片	サヌカイト	27.9	17.9	5.7	3.81		縄紋時代晩期前半	
19	T40	26層	剥片	サヌカイト	19.2	20.8	4.6	2.7		縄紋時代晩期前半	
20	T40	26層	剥片	サヌカイト	10.8	17.3	1.8	0.41		縄紋時代晩期前半	
21	T40	13層	剥片	サヌカイト	22.7	33.2	5.9	3.58		弥生時代中期末	
22	T40	13層	剥片	サヌカイト	10.4	21.1	1.8	0.44		弥生時代中期末	

石器観察表（5）未掲載分 2

整理番号	トレンチ・区	出土遺構・層位	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	現存重量(g)	備考	時期
23	T40	土器溜まり1	剥片	サヌカイト	18.7	37.9	5.3	2.6	繩紋時代晩期前半	
24	T40	26層	剥片	サヌカイト	17.3	36.6	6.6	3.5	繩紋時代晩期前半	
25	T40	26層	剥片	サヌカイト	11.1	20.3	4.6	0.94	繩紋時代晩期前半	
26	T40	26層	剥片	サヌカイト	17.5	28.9	4.1	2.16	繩紋時代晩期前半	
27	T40	26層	剥片	サヌカイト	12.3	13.2	2.2	0.31	繩紋時代晩期前半	
28	T40	7層	剥片	サヌカイト	19.4	16.2	2.5	1.21	弥生時代中期末	
29	T40	7層	剥片	サヌカイト	22.6	20.8	7.3	3.28	弥生時代中期末	
30	T40	7層	剥片	サヌカイト	12	17	2.7	0.54	弥生時代中期末	
31	T40	7層	剥片	サヌカイト	11.7	17.1	1.9	0.41	弥生時代中期末	
32	T40	7層	剥片	サヌカイト	10.6	21.7	1.9	0.47	弥生時代中期末	
33	T40	7層	剥片	サヌカイト	4.9	11.7	2.1	0.07	弥生時代中期末	
34	T40	7層	剥片	サヌカイト	24.8	36.7	5	3.96	弥生時代中期末	
35	T40	26層	剥片	サヌカイト	18.9	29.6	6.7	3.01	繩紋時代晩期前半	
36	T40	26層	剥片	サヌカイト	14.4	14.2	1.6	0.36	繩紋時代晩期前半	
37	T40	26層	剥片	サヌカイト	10	20.6	2.2	0.46	繩紋時代晩期前半	
38	T40	26層	剥片	サヌカイト	23.3	27.3	6.2	4.35	繩紋時代晩期前半	
39	T40	26層	剥片	サヌカイト	1.01	12.2	1.3	0.15	繩紋時代晩期前半	
40	T40	26層	剥片	サヌカイト	12.6	13.9	1.8	0.31	繩紋時代晩期前半	
41	T40	26層	剥片	サヌカイト	15.3	29.2	4.5	1.61	繩紋時代晩期前半	
42	T40	26層	剥片	サヌカイト	8.5	13.1	1.4	0.15	繩紋時代晩期前半	
43	T40	26層	剥片	サヌカイト	24.6	23.7	4.4	2.43	繩紋時代晩期前半	
44	T40	26層	剥片	サヌカイト	14.9	17	2.5	0.51	繩紋時代晩期前半	

石器観察表 (6) 未掲載分 3

整理番号	トレンチ・区	出土遺構・層位	器種	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	現存重量(g)	備考	時 期
45	T40	26層	剥片	サヌカイト	11.7	15.8	1.8	0.44	縄紋時代晚期前半
46	T40	26層	剥片	サヌカイト	13.7	21.5	9.1	1.53	縄紋時代晚期前半
47	T40	26層	剥片	サヌカイト	19.3	17.1	4.3	1.94	縄紋時代晚期前半
48	T40	26層	剥片	サヌカイト	13.3	10.9	4.6	0.88	縄紋時代晚期前半
49	T40	26層	剥片	サヌカイト	14.1	18.9	2.3	0.59	縄紋時代晚期前半
50	T40	26層	剥片	サヌカイト	19.1	21.2	3.6	1.81	縄紋時代晚期前半
51	T40	26層	剥片	サヌカイト	10.2	17.6	2.2	0.31	縄紋時代晚期前半
52	T40	26層	剥片	サヌカイト	8.7	11.3	2.2	0.21	縄紋時代晚期前半
53	T40	26層	剥片	サヌカイト	13.6	17.8	3.6	0.94	縄紋時代晚期前半
54	T40	26層	剥片	サヌカイト	9.5	11.6	1.6	0.14	縄紋時代晚期前半
55	T40	26層	剥片	サヌカイト	6.6	11.9	2.9	0.18	縄紋時代晚期前半
56	T40	26層	剥片	サヌカイト	5.4	16	1.7	0.09	縄紋時代晚期前半
57	T40	26層	剥片	サヌカイト	19.7	37.8	6	4.02	縄紋時代晚期前半
58	T40	26層	剥片	サヌカイト	12.9	18.5	1.9	0.39	縄紋時代晚期前半
59	T40	26層	剥片	サヌカイト	21.5	24.9	4.8	2.02	縄紋時代晚期前半
60	T40	26層	剥片	サヌカイト	21.4	20.1	3.4	1.52	縄紋時代晚期前半
61	T40	26層	剥片	サヌカイト	12.8	18.4	2.3	0.52	縄紋時代晚期前半
62	T40	26層	剥片	サヌカイト	11.5	16.1	2.6	0.37	縄紋時代晚期前半
63	T40	26層	剥片	サヌカイト	15.1	28.1	3.2	1.03	縄紋時代晚期前半
64	T40	26層	剥片	サヌカイト	14.3	31.2	4.7	2.34	縄紋時代晚期前半
65	T40	26層	剥片	サヌカイト	36.7	9.6	7.2	2.17	縄紋時代晚期前半
66	T40	26層	剥片	サヌカイト	6.7	9.9	1.1	0.07	縄紋時代晚期前半

# 附章1 彦崎貝塚出土の動物遺存体

## －水洗選別によって得られた資料について－

石丸恵利子（京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程）

### 1. はじめに

彦崎貝塚は、岡山県岡山市灘崎町に所在し、多くの縄文貝塚が分布する旧児島湾に位置する縄文時代早期から晩期の貝塚遺跡である。2003年から2004年に実施された範囲確認調査によって出土した動物遺存体は、これまで各トレンチで調査時に現場で取り上げられた資料の報告と、縄文時代前期（彦崎Z I式期からZ II式期）の動物資源の利用についての考察が行われている（石丸・富岡2006, 2007）。本稿では、6 mm、4 mm、2 mm、1 mm、0.5 mmメッシュのフルイを用いた水洗選別によって採集した微細な動物遺存体の一部について整理を行ったので、その概要を報告する。水洗選別は、各トレンチの縄文時代の遺構と包含層が残っている部分のすべての土壤を対象として実施され、また、トレンチ14においては、50cm×50cmのコラムサンプリング資料が確保されている。ここでは、トレンチ14の縄文時代後期の6mmメッシュによる採集資料と、トレンチ9の縄文時代前期の4mmおよび2 mmメッシュの採集資料の内容を中心に、同定された脊椎動物（貝類以外）の種類について報告する<sup>(1)</sup>。

### 2. 出土動物遺存体の種類

彦崎貝塚の範囲確認調査では、これまでに報告したものと今回新たに確認できたものを加えると6綱31科の39種類である（第1表）。1948年と1949年に東京大学が主体となって行われた発掘調査の出土資料には、これ以外にブリとサワラが報告されている（池葉須1971）。今回報告する資料は、発掘調査で持ち帰った土壤の一部ではあるが、採集総点数（NISP）1015点のうち、部位の判別可能な資料を対象に、魚類377点、両生類2点、爬虫類1点、鳥類1点、哺乳類62点の合計443点を同定した<sup>(2)</sup>。ただし、魚類には比較する現生標本不足のため未同定の資料も含まれており、今後新たな種が明らかになる可能性がある。以下、その概要について記述する。

#### ① 軟骨魚綱

##### エイ・サメ類

軟骨魚綱は、これまでにトビエイ上科（アカエイ科・トビエイ科など6科を含む）の尾棘、トビエイ科の歯（歯板）、エイ類の椎骨、ネズミザメ科の椎骨、サメ類の椎骨が確認されている。椎骨には、弓溝が浅く不明瞭な窪みを呈すエイ類の椎骨と、椎体の硬骨化がよく進み、椎体側面が平滑で神経・血管棘の痕が深く明瞭な孔をなし、弓溝内に隔壁がないサメ類の椎骨が確認されているが、6 mmおよび4 mmメッシュのフルイ採集資料において弓溝内に薄く明瞭な隔壁がある椎骨を確認することができた。この特徴は、ドチザメの現生標本と同一の形態を呈しており、現在の瀬戸内海においてもド

第1表 彦崎貝塚出土動物骨種名一覧

軟骨魚綱 Chondrichtyes	
ネズミザメ目 Lamniformes	フグ目 Tetraodontiformes
サメ科の一種 <i>Lamnidae</i> gen. et sp. indet.	ギマ科 Triacanthidae
エイ目 Rajiformes	ギマ <i>Triacanthus biaculeatus</i>
アカエイ科の一種 <i>Dasyatidae</i> gen. et sp. indet.	フグ科の一種 <i>Tetraodontidae</i> gen. et sp. indet.
ヒビエイ科の一種 <i>Myliobatididae</i> gen. et sp. indet.	
エイ目の一一種 <i>Rajiformes</i> fam., gen. et sp. indet.	
板鰓亜綱の一一種 <i>Elasmobranchii</i> ord., fam., gen. et sp. indet.	
硬骨魚綱 Osteichthyes	両生綱 Amphibia
ウナギ目 Anguilliformes	無尾目 Anura
ハモ科 Muraenesocidae	無尾目の一一種(カエル類) <i>Anura</i> fam., gen. et sp. indet.
ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.	
ニシン目 Clupeiformes	
ニシン科 Cluperidae	爬虫綱 Reptilia
ニシン亜科 Clupeinae	有鱗目 Squamata
ヒラ <i>Ilisha elongata</i>	ベビ亜目の一一種(ヘビ類) <i>Serpentes</i> fam., gen. et sp. indet.
サンパ <i>Sardinella zunasi</i>	
コノシロ亜科 Dorosomatinae	
コノシロ <i>Kinosirus punctatus</i>	
カタクチイワシ科 Engraulidae	
カタクチイワシ <i>Engraulis japonicus</i>	鳥 綱 Aves
コイ目 Cypriniformes	タカ目 Falconiformes
コイ科 Cyprinidae	タカ科の一種 <i>Accipitridae</i> gen. et sp. indet.
コイ <i>Cyprinus carpio</i>	キジ目 Calloformes
ナマズ目 Siluriformes	キジ科の一種 <i>Phasianidae</i> gen. et sp. indet.
ナマズ科 Siluridae	スズメ目 Passeriformes
ナマズ <i>Silurus asotus</i>	カラス科の一種(カラス類) <i>Corvidae</i> gen. et sp. indet.
ボラ目 Mugiliformes	
ボラ科の一種 <i>Mugilidae</i> gen. et sp. indet.	
ダツ目 Beloniformes	
サヨリ科 Hemiramphidae	哺乳綱 Mammalia
サヨリ属の一種 <i>Hyporhamphus</i> sp.	霊長目 Primates
カサゴ目 Scorpaeniformes	オナガザル科 <i>Cercopithecidae</i>
コチ科の一種 <i>Platycephalidae</i> sp.	ニホンザル <i>Macaca fuscata</i>
スズキ目 Perciformes	ヒト科 Hominidae
スズキ科 Percichthyidae	ヒト <i>Homo sapience</i>
スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>	ウサギ目 Lagomorpha
ハタ科の一種 <i>Serranidae</i> gen. et sp. indet.	ウサギ科 Leporidae
タイ科 Sparidae	ノウサギ <i>Lepus brachyurus</i>
クロダイ属の一種 <i>Acanthopagrus</i> sp.	齧歯目 Rodentia
マダイ <i>Pagrus major</i>	リス科 Sciuridae
タイ科の一種 <i>Sparidae</i> gen. et sp. indet.	ムササビ <i>Petaurista leucogenys</i>
ニベ科の一種 <i>Sciaenidae</i> gen. et sp. indet.	ネズミ科の一種 <i>Muridae</i> gen. et sp. indet.
カレイ目 Pleuronectiformes	食肉目 Carnivora
ヒラメ科 Paralichthyidae	イヌ科 Canidae
ヒラメ <i>Paralichthys olivaceus</i>	イヌ <i>Canis familiaris</i>
	タヌキ <i>Nyctereutes procyonoides</i>
	キツネ <i>Vulpes vulpes</i>
	イタチ科 Mustelidae
	テン <i>Martes melampus</i>
	アナグマ <i>Meles meles</i>
	偶蹄目 Artiodactyla
	イノシシ科 Suidae
	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
	シカ科 Cervidae
	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
	クジラ目 Cetacea
	ネズミイルカ科 Phocoenidae
	スナメリ <i>Neophocaena phocaenoides</i>

\*下線を引いたものが今回新たに報告する種を示す。

チザメ科のホシザメやドチザメが生息していることから、この科に属するものの可能性がある。さらに、2 mmメッシュのフリイ採集資料でアカエイ科と科不明のエイ目の遊離した歯を確認することができた。エイ類の歯板1点と椎骨1点で、火を受けて部分的に黒色を呈するものを確認した。

## ② 硬骨魚綱

### ハモ属の一種

前上顎骨-篩骨-前鋤骨板の破片を6 mmメッシュのフリイ採集資料で確認した。全長62cmの現生骨格標本より大きく、100cm前後の大型個体のものと考えられる。

### ニシン科

現在瀬戸内海で漁獲される小型のイワシ類には、ウルメイワシ、キビナゴ、ヒラ、マイワシ、サッパ、コノシロが含まれるが、第1椎骨と第2椎骨の形態から、以下の3種を確認することができた。また、マイワシ、サッパ、コノシロの第1椎骨と第2椎骨以外の椎骨の形態は、明確な区別が困難であるためニシン科として一括した。ただし、ニシン科のすべての種において現生骨格標本との比較が行えていないため、以下の種類以外の形態を持つ魚種が、未同定資料のなかから今後新たに確認できる可能性がある。

### ヒラ

角骨、腹椎、尾椎を4 mmおよび2 mmメッシュのフリイ採取資料で確認した。ヒラは、本州中部以南の外海に分布し、九州周辺に比較的多いとされる。浅海の砂泥底の中層付近に生息し、産卵期の5～7月に内湾や汽水域に来遊して産卵する。全長は30から40cm程度であるが、60cmに達するものもある。いずれも破片のため、正確な体長復元はできていないが、大きくとも30cm大と推測される。

### サッパ

第2椎骨を2 mmメッシュのフリイ採集資料で確認した。サッパは、北海道以南に分布し、暖海から内湾性で、沿岸の浅い砂泥域や河口域に群れをなして生息し、冬は深みに移動する。産卵の盛期は5～7月頃で、全長15cmに達する。瀬戸内海では、古くから「ママカリ」と呼び、特に岡山では現在でも珍重され、初夏と秋に多く漁獲されている。

### コノシロ

第1椎骨を2 mmメッシュのフリイ採集資料で確認した。コノシロは、新潟県および松島湾以南から南シナ海北部にかけて分布し、沿岸から内湾の浅海域に生息する。瀬戸内海では全域に分布し、産卵期の4～6月には汽水域にも移動する。全長は25cm前後に達し、秋に多く漁獲される魚種である。

### カタクチイワシ科

#### カタクチイワシ

第1椎骨を2 mmメッシュのフリイ採集資料で確認した。カタクチイワシは、日本全域の沿岸域に分布し、表層付近を大きな群れで遊泳し、瀬戸内海では春と秋に産卵の盛期がある。イワシ類の中で

は小型種で、全長10から15cm程度であるが、35mm程度の稚魚・幼魚から成魚まで、しらす干しや煮干し、あるいは加工原料や鮮魚として瀬戸内海では水産業上の重要魚種である。周年通して漁獲可能な魚であるが、瀬戸内海においては主に夏と秋に多く漁獲される。

### コイ

下咽頭骨を6mmメッシュのフリイ採集資料で確認した。その破片の大きさから、全長30cm以上の個体のものと考えられる。瀬戸内海沿岸域に位置する縄文時代の遺跡では、これまで矢部奥田貝塚（岡山県倉敷市：縄文時代中期後半～後期前半）でコイの咽頭歯や棘が報告されている（金子1993）。コイは、日本各地の河川の中・下流の緩流域や池沼などの淡水域に生息し、東北地方から九州の縄文時代の遺跡で出土が報告されている。

### ボラ科の一種

ボラ科の涙骨を、6mmメッシュのフリイ採集資料で確認した。ボラの現生骨格標本と比較したところ、やや形態が異なることから、ボラ科の別種であると考えられる。現在の瀬戸内海沿岸および汽水域には、ボラ、セスジボラ、メナダが多く確認される。全長48cmのボラの涙骨と同大であることから、50cm前後の個体であったと考えられ、メナダの可能性が高い。

### サヨリ属の一種

サヨリ属の腹椎を、4mmメッシュのフリイ採集資料で確認した。サヨリの現生骨格標本と比較して、同様な形態を呈するが、サヨリ属の他種との比較が行えていないため、サヨリ属の一一種とした。全長29.5cmの現生骨格標本と同大である。サヨリは、北海道南部以南の日本各地の沿岸および内湾に生息し、表層を群をなして泳ぐ魚で、全長30cmに成長する。瀬戸内海では、5～6月に流れ藻や藻場に産卵し、春と秋に多く漁獲されている。

### コチ科の一種

コチ科の歯骨、主上顎骨、前鋤骨を確認した。いずれも6mmメッシュのフリイ採集資料である。コチは、これまでにも前鰓蓋骨や角舌骨などの部位を確認しており、新たな部位を検出することができた。いずれも全長31.5cmのマゴチの現生骨格標本より大型である。

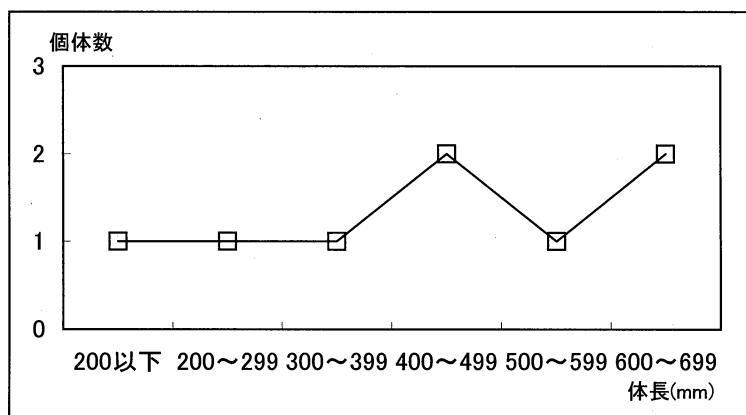
### スズキ属

スズキ属の歯骨、主上顎骨、前鰓蓋骨、椎骨など多くの部位を、6mmと4mmメッシュのフリイ採集資料で確認することができた。椎骨以外の多くの部位が欠損した状態であるが、これまでに現場で採集された個体は全長50cmと大型のものであった一方、今回採集された資料は、より小型のものが含まれている。現生骨格標本より体長を復元すると、15cm前後のもの1個体、30cm前後2個体、40cm前後1個体、60cm以上2個体を確認することができた。これまで報告した資料と合わせてみると、幅広い大きさが漁獲されていることが分かる（第1図）。スズキは、成長とともに呼び名が変わる魚として知られているが、全長30cm位までをセイゴやセイ、50cm位までをフッコ、ハネ、ナツバネ、それ以上をスズキやオオマルタなどと呼び、セイゴにあたる小型のものも漁獲対象となったことが明らか

かとなった。スズキ属には、スズキとヒラスズキが含まれるが、主鰓蓋骨以外の部位形態では区別が困難であり、出土した主鰓蓋骨はすべてスズキであったことから、他の骨格もスズキである可能性が高い。

#### ハタ科の一種

歯骨を6mmメッシュのフリイ採集資料で確認した。大きさは、全長28cmのキジハタの現生骨格標本よりやや大型の個体である。

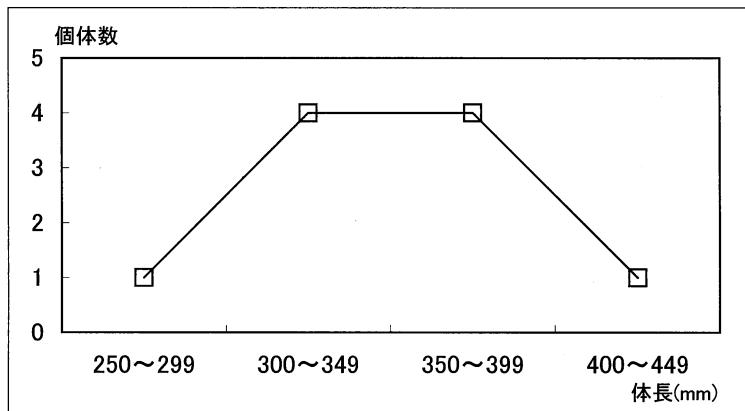


第1図 彦崎貝塚出土スズキ属の復元体長組成

#### クロダイ属

歯骨と主上顎骨を6mmメッシュの採集資料で確認した。いずれも欠損した骨片であるが、個体の大きさを復元すると、いずれも30cm大のものであり、これまでに報告したものと同様の大きさである(第2図)。スズキ属とは異なり、小型のものは確認できなかった。

瀬戸内海に生息するクロダイは、4~7月が産卵期で、沿岸浅場で産卵する。成魚は水深50m以浅の泥底や岩礁に生息するが、稚魚は河口付近や藻場に生息する。



第2図 彦崎貝塚出土クロダイ属の復元体長組成

#### マダイ亜科

マダイに似る前上顎骨と腹椎を6mmメッシュ採集資料で確認した。今回の分析資料では、種を特定できる前頭骨や上後頭骨が共伴していないためマダイ亜科とした。前上顎骨と腹椎は、ともに全長47cmの現生マダイの骨格標本よりやや大きく、50cm前後のものと考えられる。

#### ニベ科の一種

ニベ科の一種と考えられる前上顎骨を6mmメッシュ採集資料で確認した。シログチの現生骨格標本と比較して類似していたが、これまでにオオニベと考えられる大型の歯骨や主上顎骨も出土していることから、オオニベやニベの可能性もある。大きさは、全長31cmのシログチよりやや大きいものである。

### フグ科の一種

6 mmメッシュ採集資料で、大型の歯骨を、また4 mmメッシュ採集資料で小型の角舌骨や後頭骨の破片を確認した。歯骨は、トラフグやマフグなどのように全長40cm以上になる種のものと考えられるが、角舌骨や後頭骨は、全長20cmのコモンフグの現生骨格標本と同大であった。フグ科の多くは、沿岸域から沖合の岩礁域や砂泥質の海底に生息する。

### ③ 両生綱

6 mmメッシュ採集資料でカエル類の腸骨1点と、2 mmメッシュ採集資料で上腕骨を1点確認した。種は不明であるが、腸骨はヒキガエル大、上腕骨は、アマガエルなどの小型種のものと考えられる。

### ④ 爬虫綱

2 mmメッシュ採集資料でヘビ類の椎骨を1点確認した。種は不明であるが、小型種のものと考えられる。

### ⑤ 鳥 綱

6 mmメッシュ採集資料で、カラス類の脛足根骨の遠位の破片を1点確認した。

### ⑥ 哺乳綱

本報告の哺乳類は、トレント14のコラムサンプリング土壤の6 mmメッシュのフリイ採集資料が主体であり、トレント9の2 mmメッシュ採集資料においてネズミ科の寛骨を、また4 mmメッシュ採集資料で鹿角の破片を確認した。採集した約470点の多くは、種を特定することのできない四肢骨や椎骨などの小さな骨片であり、種および部位を同定できたのは60点余りである。

### ニホンザル

晩期前半の層で遊離歯（上顎後臼歯M2もしくはM3）を1点確認した。これまでの報告においても、前期と後期の層において下顎骨や上腕骨などの頭部から四肢骨にいたる複数の部位を確認している。

### ネズミ科の一種

寛骨を1点確認した。種は不明であるが、その大きさからヒメネズミやアカネズミなどの頭胸長10cm前後のものと考えられる。

### タヌキ

後期前半および後半の層で、下顎骨、下顎犬歯、下顎後臼歯、尺骨を確認した。タヌキは、これまでにも前期から後期の複数の包含層で椎骨や踵骨なども出土しており、哺乳類の中ではイノシシとニホンジカに次いで多くの点数および最小個体数が確認されている。

### アナグマ

中期後半の層で上腕骨の遠位端を、また後期後半の層で下顎骨の関節突起部分の破片を確認した。これまでの報告においても、前期から後期の複数の包含層で橈骨や尺骨などのその他の四肢骨も確認している。

その他に、種は不明であるが、6mmメッシュ採集資料でイヌやタヌキ、アナグマなどと同大の末節骨を1点確認した。

### イノシシ

後期前半および後半の層で、基節骨、中節骨、手根骨、遊離歯などの複数部位を24点確認した。その多くは四肢骨先端部や関節部分の小さな部位、または四肢骨骨幹部の破片ではあるが、最小個体数を左右するような下顎犬歯や距骨なども含まれており、哺乳類においても水洗選別作業の成果があることを示している。人為的な痕跡としては、第2もしくは第5基節骨の遠位が、火を受けて全体的に黒色を呈するものを1点確認した。

### ニホンジカ

前期（彦崎Z I式期）の層の4mmメッシュ採集資料で鹿角の破片を確認したほか、後期前半および後半の層で、イノシシ同様に基節骨、手根骨、足根骨、中足骨などの複数部位を21点確認した。火を受けて黒色を呈する鹿角破片1点、白色を呈する中足骨の近位端1点と中手もしくは中足骨の骨幹部破片1点を確認した。

## 3. 考察

彦崎貝塚では、これまで調査時に現場で取り上げた採集資料の報告を行い、当時の狩猟および漁労活動の様相について考察した。今回、水洗選別によって得られた微細資料の分析を行った結果、アカエイ科などエイ目の歯、コイの咽頭骨、ヒラ、サッパ、コノシロ、カタクチイワシ、サヨリ属の一種などの小型魚種など、これまでに確認されていない部位や複数の新たな魚種の存在を確認することができた。また、魚類以外にも、ヘビ類の椎骨、ネズミ類の寛骨などの小型種も確認することができた。特に、イワシ類などの小型魚種が確認されたことによって、これまでの現場で採取した資料だけでは当時の生業復元が不十分であったことを改めて認識するとともに、縄文時代の前期段階から、小型魚種を含めた瀬戸内海の豊富な水産資源が利用されたことを示す証拠を得ることができた。

土壤中には発見が困難な微小骨片が含まれており、フルイを使用することによってそれらを採集できることは古くから指摘されており（Kishinouye1911、酒詰1939）、得られた資料を数量化し（西村・金子1956、金子・和田1958）、さらに従来の発掘調査の成果と比較することによって、小型魚種のものれを指摘し、漁労活動の実態を分析するには、フルイを用いた資料採集が必要であることが唱えられている（鈴木・小宮1977）。しかし、これまで中国・四国地方の縄文時代の遺跡において、フルイを用いた水洗選別の実施によって小型魚種が報告されているのは、船倉貝塚（岡山県倉敷市：縄文前期～後期）、江口貝塚（愛媛県越智郡波方町：現今治市：縄文前期～晩期）、平城貝塚（愛媛県南宇和郡御荘町：現愛南町：縄文後期）、佐太講武貝塚（島根県八束郡鹿島町：現松江市：縄文前期）などと、近年のごく一部の調査に限られており（第2表）、瀬戸内海の水産資源の利用あるいは漁労活動の様

相を知るには、明らかに情報不足な状況である。しかし、今回複数種のイワシ類や小型魚種を確認することができ、瀬戸内海沿岸における小型魚種を対象とした漁労活動も重要な生業のひとつであったことを示す証拠が得られたといえる。

漁獲対象となった魚種の数量的な判断は、今後さらに水洗選別資料を増やすことによって検討する必要があるが、瀬戸内海の水産資源の利用は、マダイ、クロダイ属、スズキ属などの成魚の漁獲に加えて、イワシ類やスズキ属の未成魚などの小型魚種も対象とされていたことを踏まえて、彦崎貝塚における縄文時代前期の漁労活動について考察してみたい。なお、その他の時期についても、今後各時期の4mmメッシュ以下のフルイ採集資料を分析することによって補いたい。

### 彦崎貝塚における漁労活動

現在瀬戸内海で漁獲される魚の岡山県およびその周辺地域における市場入荷状況や、魚の生息域と生態を参考に、出土

魚類の生息域と漁獲季節を推測すると、その多くが瀬戸内海に生息あるいは回遊してくる魚種であることがわかる（第3表）。現在、水産物の流通や漁獲技術が発達したことにより、周年にわたって食することができる魚が多くなり、その季節性は失われつつあるが、縄文時代においては、現在のような大型の底曳き網や刺し網漁などの大規模な漁獲技術や広域の水産物の流通は存在しなかったと考えられることから、回遊の時期や産卵期に汽水域や浅場または表層に移動する季節を中心に漁労が行われていたと推測される。その時期は、春先から夏場にかけてが最盛期で、初秋までに多くの魚種を対象とした活動が復元できる。また、漁労域については、岸から湾内にかけて、あるいはその沖合で遺跡からそう遠くない範囲であったと考えられる。

さらに、漁労方法については、表層を群れをなして泳ぐイワシ類やサヨリ属などの小型魚種は、網漁により漁獲された可能性が指摘できる。出土した漁撈具と考えられる遺物をみると、縄文時代の前期の彦崎Z I式段階から遺跡形成のほぼ全時期で石錘が存在している（第4表）。錘については、網漁以外の「おもり」としての機能も考慮する必要はあるが、出土地点と出土量より漁網錘の可能性が高く、網漁を証拠づけているといえる。よって網漁は、特に春から初秋にかけて回遊してくる小型魚種の漁獲を主な対象に盛んに行われたと推測される。また、釣漁は、表層から底層まで多くの魚種に対して有効な漁法であったと考えられるが、マダイやニベ科など大型の魚種については、網漁に加え

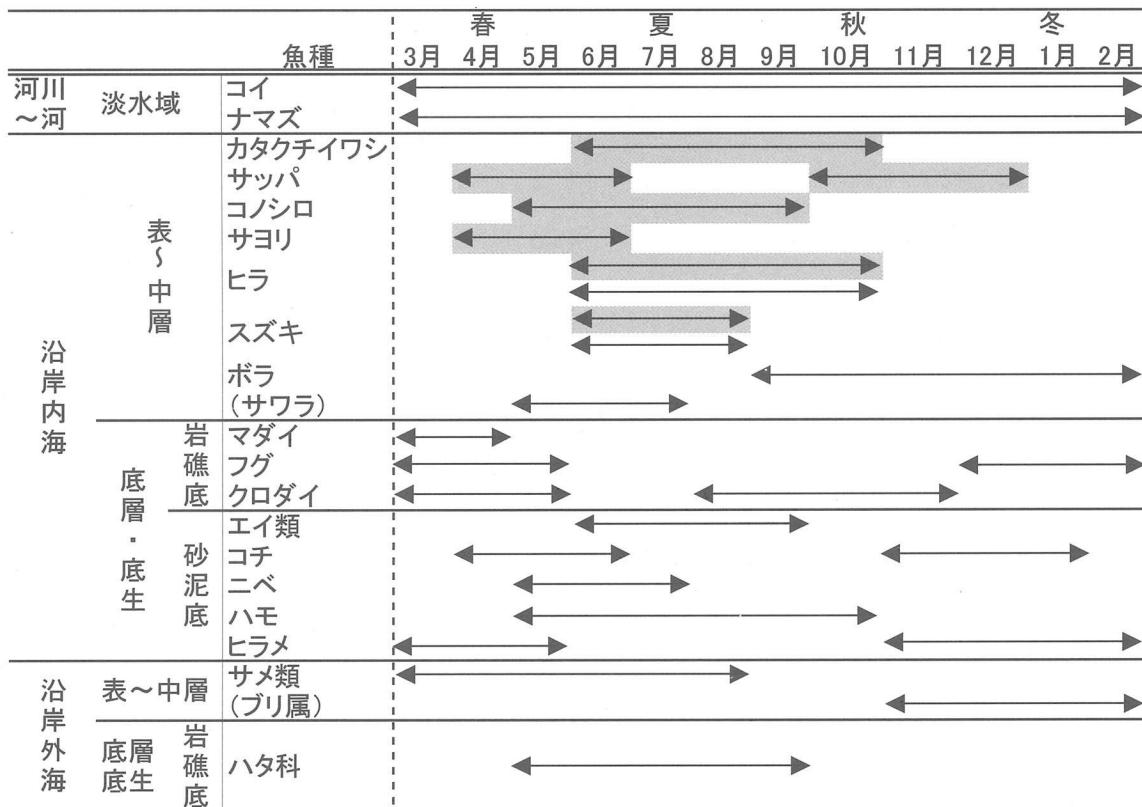
第2表 遺跡出土魚類一覧

	彦崎貝塚	船倉貝塚	江口貝塚	平城貝塚	佐太講武 貝塚
サメ類	○	○	○	○	○
エイ類	○	○	○	○	○
ヒラ	○	○			
マイワシ				○	
サッパ	○				
コノシロ	○				
カタチイワシ	○				
イワシ類			○		○
ハモ属	○				
ボラ科	○	○			
サヨリ属	○				
フサカサゴ科				○	
コチ属	○		○		
アイナメ			○		
スズキ属	○	○	○		○
ハタ科	○	○	○		○
アマダイ属			○		
アジ科			○		
マダイ	○	○	○		○
クロダイ属	○	○	○		
タイ科	○	○	○	○	○
ニベ科		○			
イシダイ属			○		○
コブダイ			○		○
ハゼ科					
カマス科		○	○		
サバ科			○		○
ヒラメ	○	○			
ギマ	○				
カワハギ科		○			
フグ科	○	○	○		
コイ	○				
フナ属					○
ナマズ属	○				○

\* 江口貝塚のタイ科にヘダイ、チダイを含む。

\* 佐太講武貝塚のサバ科にマグロ属、ソウダガツオ属を含む。

第3表 彦崎貝塚出土魚類の生息域と漁獲季節



\* 色塗り部分は、網漁により漁獲されたと考えられる魚種。ヒラとスズキの小型のものを含む。

\* サメ類のうち、ネスマサメ科は外海の表～中層であるが、ドチサメやホンザメは内海の底層・底生。

\* ハタ科は、キジハタ(アコウ)の漁獲期を参照した。

て釣針を使用して釣り上げられた可能性や刺突漁が指摘できる。釣針の出土量は多くないが、前期に出土している釣針は曲げ幅が3～4cm程度あり、大型魚を狙ったものであろうことが分かる。さらに、出土するエイ・サメ類の椎骨の大きさから、それらは非常に大型のものであったことが分かる。全長70cmのアカエイの標本での椎骨幅は、大きなものでも径4mm程度であるが、出土する椎骨幅は、その多くが径10～15mm前後の大きさがあり、小さくても全長1m以上、大きなものは2mに達するエイ類を漁獲していたことがうかがえる。これまでに確認されている刺突具類は豊富ではないが、このような大物のエイ・サメ類は、刺突漁によって捕らえることも可能であったと推測される。刺突漁は、表層から浅瀬の底生の魚に有効であったと考えられる。

以上のように、漁労の季節は、春から夏を最盛期に初秋頃までに多くの魚種が漁獲可能であり、積極的に漁労が行われたと考えられる。さらに、セイゴのような小型のスズキが漁獲されていることを考慮すると、表層魚を対象とした網漁によってイワシ類とともに漁獲された可能性が高い。よって、多くの遺跡で普通に出土が認められるマダイ、クロダイなどのタイ科やスズキの大型魚種を対象とした漁労だけでなく、より小型魚種の豊富な海産資源を複数の

第4表 彦崎貝塚出土魚撈具

時期	石錘	釣針	刺突具
晩期	0	0	0
後期後半	6	3	1
後期前半	0	0	0
中期前半	2	0	1
彦崎Z II	3	1	2
彦崎Z I	4	1	2
羽島下層	0	0	0

\* 釣針、刺突具は骨角製

漁法によって獲得した様相を復元することができる。また、淡水魚はナマズに加えて今回新たにコイを確認することができたが、その出土量は少なく、豊富な海産魚類が重要な水産資源であり、海洋の沿岸部が主な活動の場であった様相がうかがえる。

#### 4. おわりに

水洗選別資料の分析によって、これまで確認されていなかった魚種や部位を報告することができ、彦崎貝塚における瀬戸内海の漁労活動の様相をより明確に示すことができた。一方、現場採集資料だけでは小型魚種をはじめとする微細な遺物の存在が考慮されていないため、これまでの漁労活動の復元が不十分であったことを改めて強調することとなった。よって、これまで調査の行われた瀬戸内海沿岸に位置する縄文時代以降の遺跡においても、イワシ類などの小型魚種の漁獲を含めた漁労活動について再考察する必要があることを指摘しておきたい。さらに、今回整理分析した資料は、遺跡全体で持ち帰られた土壌のほんの一部であるため、今後分析を進めることによって、縄文時代における瀬戸内海沿岸の漁労活動が、クロダイやスズキなどの魚種の漁獲量に対して、イワシ類などの小型魚種がどのくらい役割を占めていたのかなどの漁労の実態を解明することが課題である。また、今後行われるあらゆる時代の遺跡の発掘調査においても、水洗選別による微細な遺物の採集作業が実施されることを希望する。そうすることによって、瀬戸内海の水産資源の獲得と利用の展開について議論がより深められることを期待する。

鳥類の同定においては、江田正毅氏（鳥取大学医学部）の御教示を賜った。また、本報告をまとめに際し、富岡直人先生（岡山理科大学）には多大なるご教示を賜った。末筆ながら厚く感謝申し上げる次第である。

#### — 注 —

- (1) 今回整理を行ったトレント9の同一資料における、1mm、0.5mmメッシュの採集資料には、同定可能な骨片は含まれていなかった。
- (2) 魚類においては種の不明な棘を、また哺乳類においては、四肢骨の骨幹部破片と部位不明な破片を同定対象資料の集計（第5・6表）から除外した。

#### —参考文献—

石丸恵利子・富岡直人2006「彦崎貝塚出土の動物遺存体」『彦崎貝塚1－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会

石丸恵利子・富岡直人2007「彦崎貝塚における動物資源の利用－彦崎Z I式期からZ II式期の様相－」『彦崎貝塚2－範囲確認調査報告書－』岡山市教育委員会

内山純蔵1994「出土動物・植物遺存体」『佐太講武貝塚発掘調査報告書2』島根県鹿島町教育委員会  
 内山純蔵1995「追録 佐太講武貝塚第6調査区出土の動物遺存体」『佐太講武貝塚発掘調査報告書2追録』島根県鹿島町教育委員会  
 金子浩昌・和田 哲他1958『館山鉈切洞窟の考古学的調査』早稲田大学考古学研究室報告第6冊 早稲田大学考古学研究室  
 金子浩昌1993「矢部貝塚出土の動物遺体」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会  
 金子浩昌1999「倉敷市船倉貝塚出土の節足・脊椎動物遺体」『船倉貝塚』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第8集 倉敷埋蔵文化財センター  
 Kishinouye Kamakichi 1911 Prehistoric Fishing in Japan Journal of the College of Agriculture (東京帝国大学農科大学紀要第2巻第7号) Imperial University of Tokyo  
 酒詰仲男1939「微少遺物採集法に就いて」『貝塚』第8号  
 鈴木公雄・小宮孟1977「貝塚産魚類の体長組成復元における標本採集法の影響について—特にクロダイ体長組成について—」『第四紀研究』第16巻第2号 日本第四紀学会  
 濱戸内海水産開発協議会編1997『瀬戸内海のさかな』  
 中坊徹次編2000『日本産魚類検索 全種の同定』第二版 東海大学出版会  
 西村正衛・金子浩昌1956「千葉県香取郡大倉南貝塚」『古代』第21・22号合併号  
 松井 章1991「江口遺跡出土の動物遺存体」『江口遺跡第1次調査』愛媛県越智郡波方町教育委員会・愛媛大学法文学部考古学研究室  
 松井 章1993「江口貝塚第2次・第3次調査出土の動物遺存体」『江口貝塚I－縄文前中期編－』愛媛県越智郡波方町教育委員会・愛媛大学法文学部考古学研究室  
 御荘町教育委員会1982『平城貝塚』愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚第IV次発掘調査報告書  
 望月賢二監修・魚類文化研究会編1997『図説魚と貝の大事典』柏書房  
 渡辺 誠1997「貝層ブロック、サンプリングの調査—食用貝類・魚類の定量的検討—」『平城貝塚』平城貝塚第V次発掘調査報告書II 愛媛県御荘町教育委員会

## — 訂正 —

(石丸・富岡2006) 第2表、(石丸・富岡2007) 第2表

スズキ目 ボラ科 → ボラ目 ボラ科

コチ属の一種 → コチ科の一種

\*マゴチの現生骨格標本と極似するためコチ属としたが、それ以外のコチ科（メゴチ属、イネゴチ属など）の可能性もあるためコチ科の一種に訂正する。

(石丸・富岡2006) 第5表

ハモ属 前上顎骨 → ハモ属 主上顎骨

ハモ属 鋤骨 → ハモ属 前上顎骨-篩骨-前鋤骨板

第5表 出土動物骨の時期別・部位別集計および個体数（魚類）

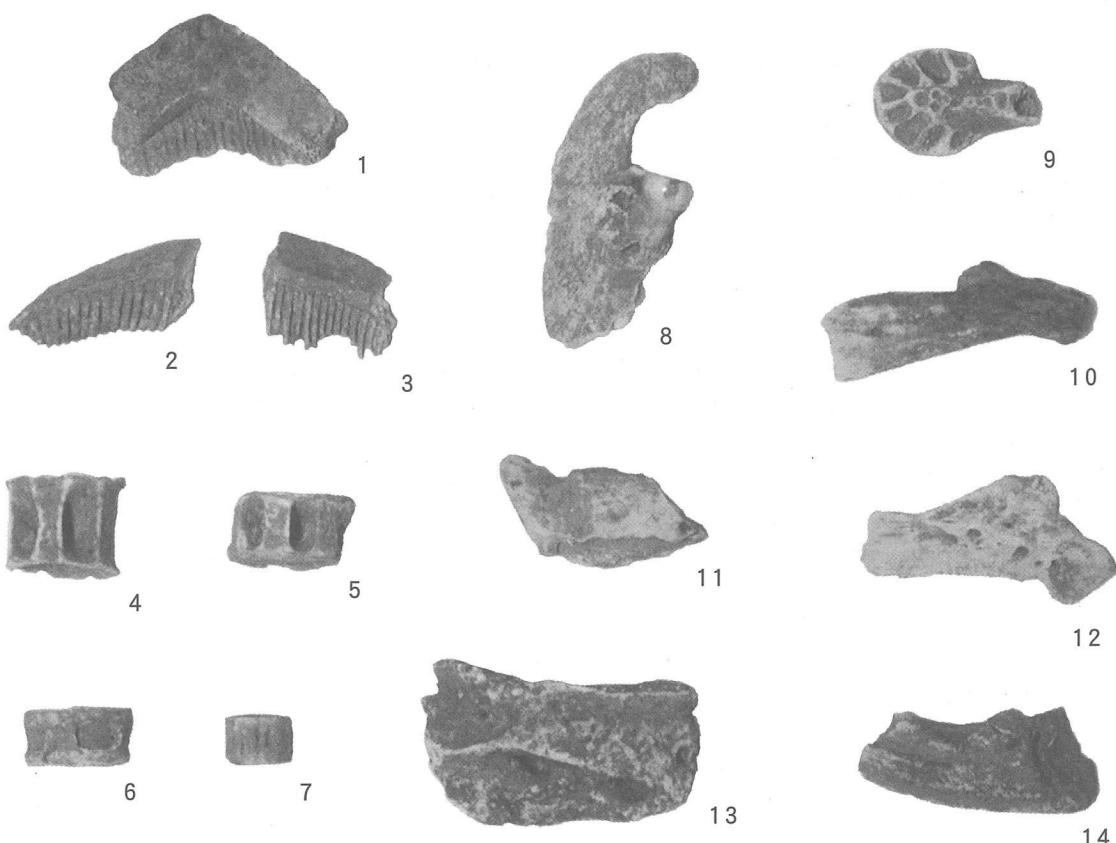
種名	部位	トレンチ		T9		T14	
		時期		前期	Z I 新 4mm 2mm	中期	後期
軟骨魚類	サメ類	椎骨			1		6
	エイ類	歯	1		2		1
		歯板				23	1
硬骨魚類	ハモ属	椎骨	2	9	10	1	9
		前上顎骨-篩骨- 前鋸骨板				1	
		個体数				1	
ヒラ	角骨	1/0		1/0			
	ヒラ?	角骨		1/0			
		椎骨	2	1	13	3	
サッパ	第1椎骨		2				
	サッパ?	第1椎骨			2		
		個体数	2		2		
コノシロ	第1椎骨				1		
		個体数			1		
	カタクチイワシ	第1椎骨	1				
イワシ類	個体数		1				
	第1or2椎骨			3	12	1	
	椎骨	3	39		112		
コイ	咽頭骨					1/0	
	コイ科?	椎骨		3			1
		個体数			1		
ボラ科	涙骨					1/0	
		個体数				1	
	サヨリ属	椎骨			1		
コチ属	個体数				1		
	歯骨					0/1	1/0
	主上顎骨					1/0	
スズキ属	前鋸骨					1	
	方骨					1	
	主鰓蓋骨					1	
スズキ属?	前鰓蓋骨		0/1				
	前鋸骨		1				
	椎骨	4		1		3	2
ハタ科	個体数	1		1		2	2
	歯骨						1
	椎骨			7		1	
クロダイ属	個体数					0/1	1
	歯骨					0/1	0/1
	主上顎骨					1/0	
マダイ亜科	個体数					1	1
	前上顎骨					1/0	
	椎骨					1	1
タイ科	個体数					1	1
	歯	4	8	2	5	1	
	歯骨/前上顎骨					1	
ニベ科	方骨					0/1	
	前上顎骨						0/1
	椎骨					1	1
ニベ科?	個体数					1	1
	歯骨						
	椎骨						
フグ科	個体数						
	歯骨		1/1				
	角舌骨		1				
種不明	後頭骨		1				1
	個体数		1				
	主上顎骨	1/0		1/0			
	前上顎骨	1/0		0/1			
	方骨			2			
	舌顎骨			1			
	椎骨				15	9	3

\* 左右のある部位は、L/Rで示し、数値のみ示したのは、左右のないもの、左右はあるが不明のもの。

第6表 出土動物骨の時期別・部位別集計および個体数（両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類）

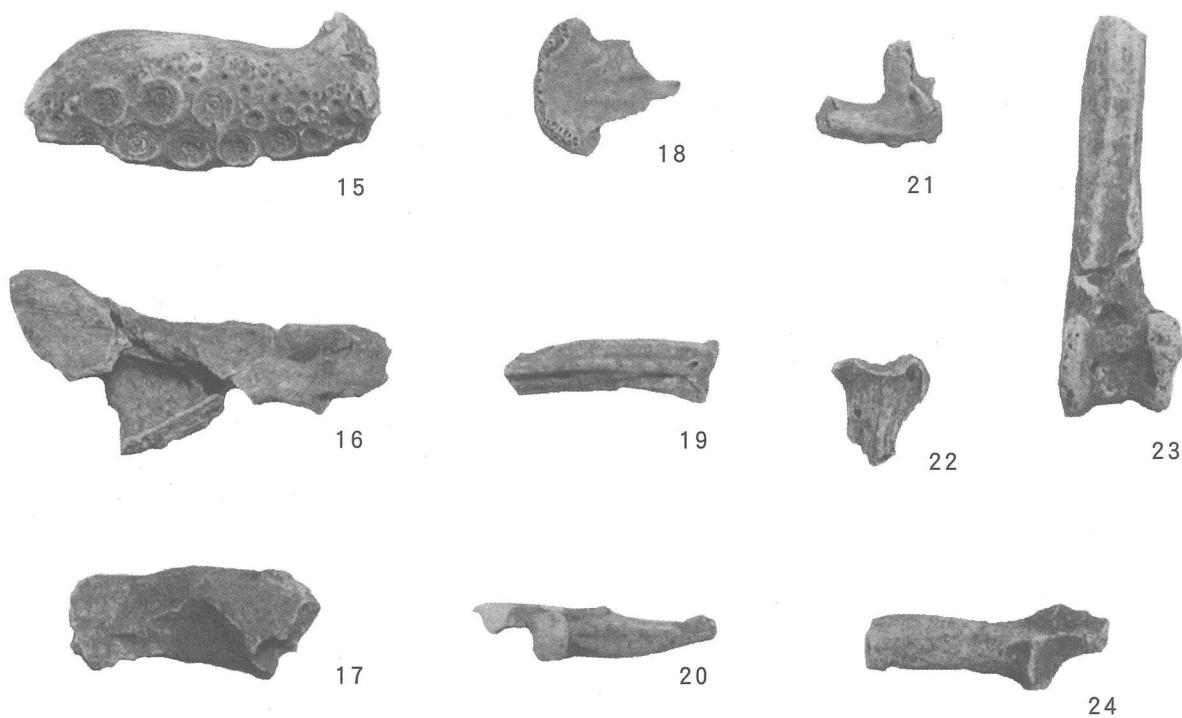
種名	部位	T9		T14			
		Z I	古	中期後半	後期前半	後期後半	晩期前半
		4mm	2mm				6mm
両生類	カエル類 上腕骨		1/0				
	腸骨 個体数				1/0		
	1				1		
爬虫類	ヘビ類 椎骨		1				
	個体数			1			
鳥類	カラス類 脛足根骨				0/1		
	個体数				1		
哺乳類	ニホンザル 遊離歯					0/1	
	個体数					1	
	ネズミ類 寛骨 個体数		1/0				
		1					
タヌキ	下顎骨				0/1		
	遊離歯			0/2			
	尺骨 個体数				1/0		
				1	1		
アナグマ	下顎骨			0/1		0/1	
	上腕骨 個体数		1			1	
イノシシ	下顎骨					1	
	遊離歯			1/0	2/2/(2)		
	肋骨			1			
	尺骨			0/1			
	手根骨				2/0		
	距骨			0/1			
	中手/中足骨				1		
	基節骨			1	1		
	中節骨				2		
	末節骨 個体数				1		
					2		
ニホンジカ	鹿角	1		1	2		
	遊離歯			1	0/1		
	中手骨			2			
	手根骨			0/1	1/1		
	寛骨				1/0		
	脛骨			0/1	1		
	中足骨			0/1		2	
	足根骨				0/1		
	中手/中足骨				1		
	基節骨				2		
	末節骨 個体数	1		1	1		

\* 左右のある部位は、L/Rで区別し、不明のものは( )内に示した。数値のみ示したものは、左右のないもの、左右はあるが不明のものを意味する。



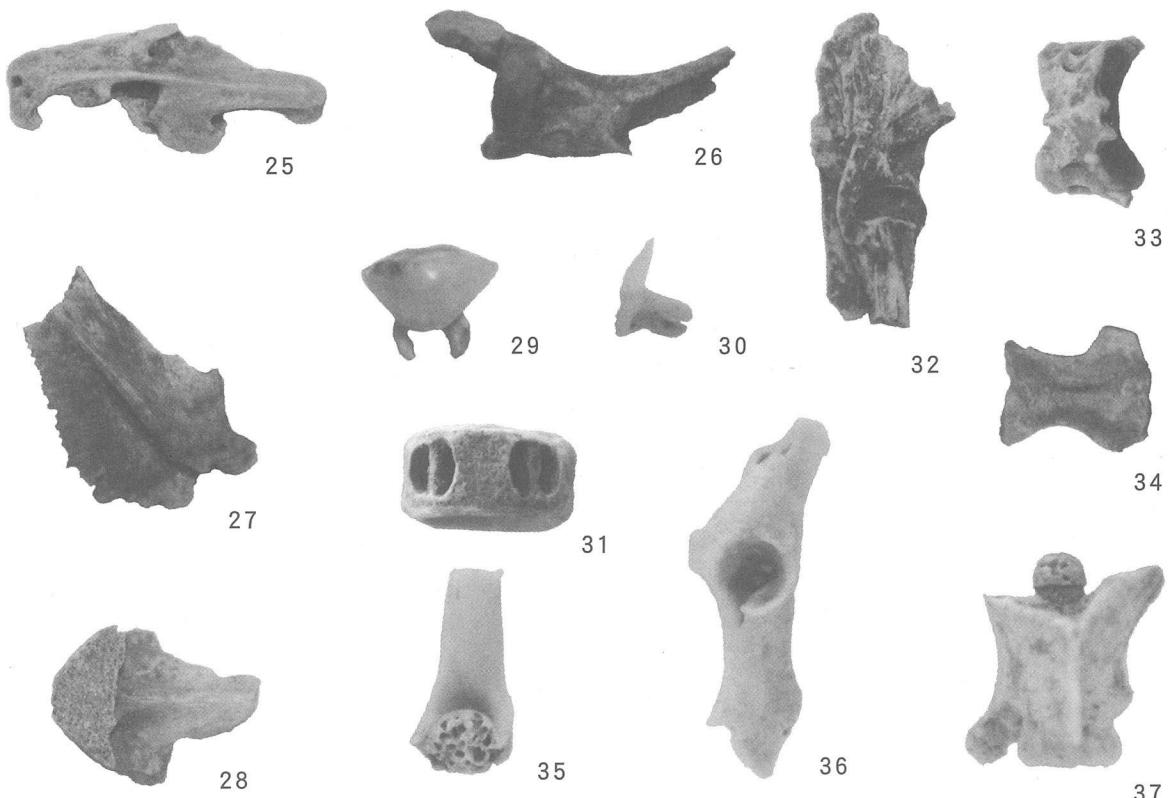
写真図版1

1～3トビエイ科：歯（歯板） 4～7板鰓類：椎骨（4・5サメ類、6・7エイ類） 8コイ：下咽頭骨L 9ハモ属：前上顎骨—篩骨—前  
鋤骨板 10ハタ科：歯骨R 11フグ科：歯骨L 12ボラ科：涙骨L 13・14スズキ属（13歯骨R、14前上顎骨R）（縮尺：約160%）



写真図版2

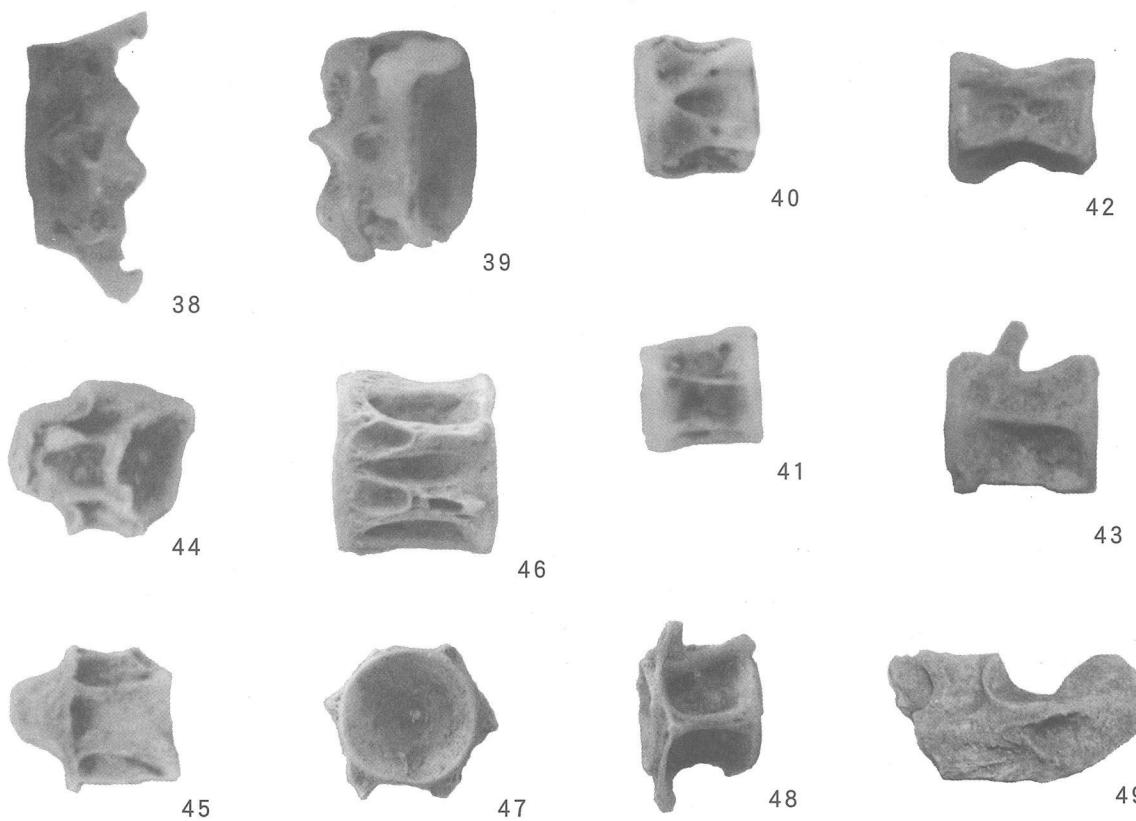
15マダイ亜科：前上顎骨L 16・17クロダイ属（16歯骨R、17主上顎骨L） 18～20コチ科（18前鋤骨、19歯骨R、20主上顎骨L）  
21ハタ科：前上顎骨R 22不明哺乳類：末節骨 23カラス類：脛足根骨R 24カエル類：腸骨L（縮尺：約170%）



写真図版3

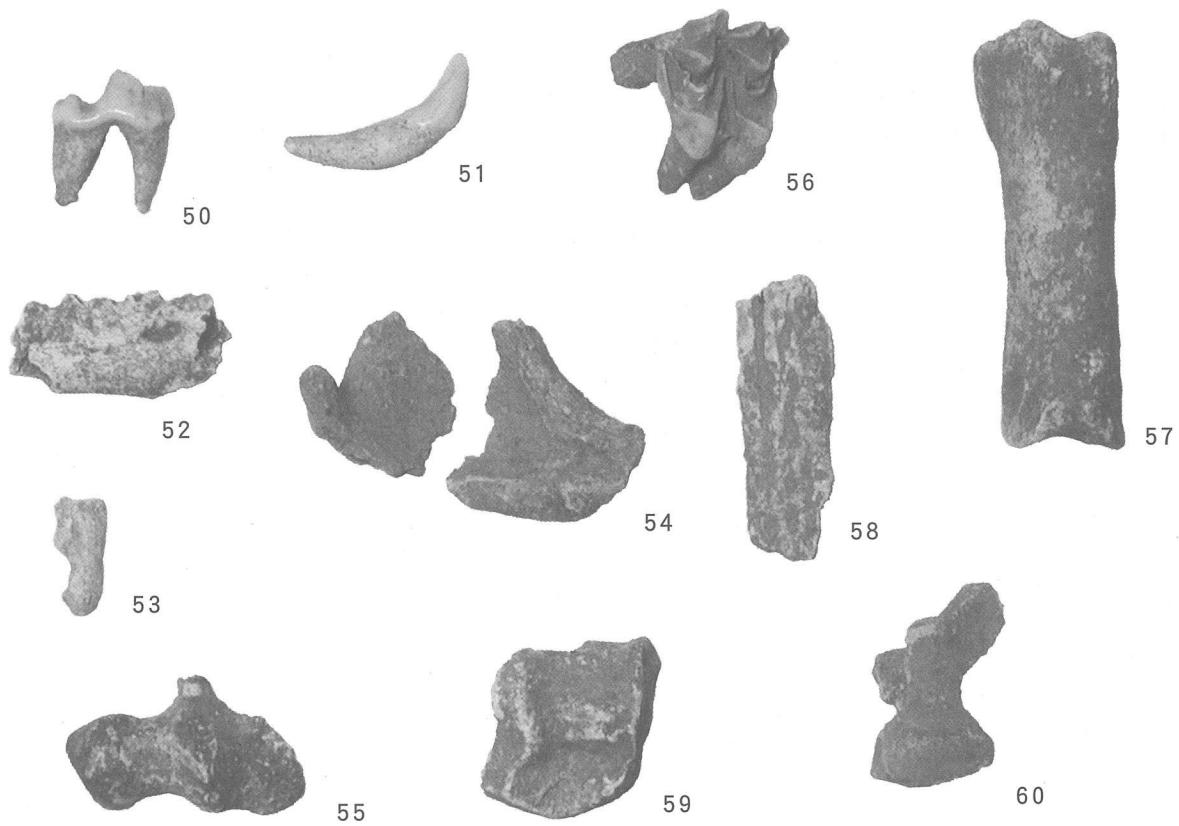
25～28スズキ属 (25歯骨L、26主上顎骨L、27前鰓蓋骨R、28前鋤骨)  
32フグ科：角舌骨L 33コノシロ：第一椎骨 34サヨリ属：腹椎

29アカエイ科：歯 30エイ目：歯 31板鰓類：椎骨（サメ類）  
35カエル類：上腕骨L 36ネズミ類：寛骨L 37ヘビ類：椎骨  
(縮尺：約400%)



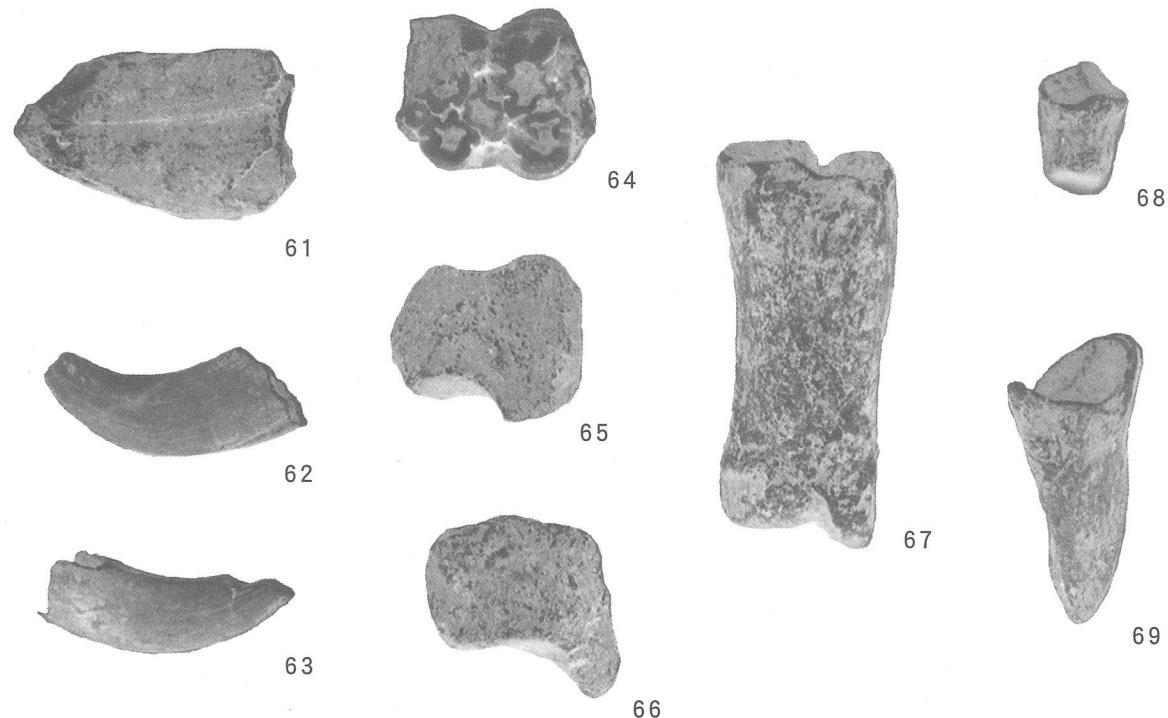
写真図版4

38・39サッパ (38第一椎骨、39第二椎骨) 40～43イワシ類 (40腹椎：背面、41腹椎：側面、42尾椎：背面、43尾椎：側面)  
44・45カタクチイワシ (44第一椎骨：背面、45第一椎骨：腹面) 46～49ヒラ (46腹椎：背面、47尾椎：前面、48尾椎：側面、49角骨L)  
(縮尺：約400%)



写真図版5

50～53タヌキ（50下顎第一後臼歯R、51下顎犬歯R、52下顎骨R、53尺骨L） 54・55アナグマ（54上腕骨R、55下顎骨R）  
ジカ（56上顎第一後臼歯R、57基節骨、58鹿角、59手根骨：舟状骨R、60手根骨：月状骨R） 56～60ニホン  
(縮尺：約140%)



写真図版6

61～69イノシシ（61上顎犬歯、62下顎犬歯、63下顎犬歯、64上顎後臼歯、65手根骨：舟状骨L、66手根骨：有鈎骨L、67第3or4基節骨、68第2or  
5中節骨、69第3or4末節骨） (縮尺：約120%)

## 附章2 彦崎貝塚出土縄文時代早期・前期土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学院

白石 純

### 1. 分析目的

以前報告した前期Ⅲ群（Z I型式）および無文、縄文の土器の胎土分析では、遺跡周辺（在地産）で生産された土器と、搬入された土器があることが推定された。しかしながら、搬入された土器がどの地域から搬入されたものか推定できなかった（白石2006）。

今回の分析では貝塚より出土した早期I群、前期I群・Ⅲ群・Ⅳ群の土器の分析を実施し、搬入された土器が量的にどれくらいあるのか。また、在地で生産された土器に比べてどれくらいの比率で存在するのか。また搬入された土器がどの地域から持ち込まれたのかを検証することを目的とした。分析方法は、非破壊分析のため実体顕微鏡観察法を行った。この分析では土器の表面に観察される砂粒（岩石・鉱物）の種類で胎土の差を検討した。

### 2. 分析試料・結果

#### （1）分析試料

分析した試料は、彦崎貝塚から出土した早期I群（高山寺式と並行）、前期I群（羽島下層式と並行：条痕文）・Ⅲ群（彦崎Z I式と並行：押引、縄文）・Ⅳ群（彦崎Z II式と並行：縄文、無文）の土器298点である。内訳は早期I群3点、前期I群5点・Ⅲ群196点・Ⅳ群94点である。

なお完全な非破壊であるため土器表面の汚れ（貝殻などの付着物など）で観察できない試料もあつたため全部の試料は観察できなかった。

#### （2）実体顕微鏡観察による分析結果

土器の表面を倍率10～30倍で観察した。その結果、以下のように5つの胎土に分類された。

- 1類 ..... 3mm以下の石英(多量)と長石(少量)を含んでいる。
- 2類 ..... 3mm以下の石英(多量)と長石(少量)を含み、0.5mm以下の黒雲母を含んでいる。
- 3類 ..... 3mm以下の石英(多量)と長石(少量)を含み、0.5mm以下の黒雲母と火山ガラスを含んでいる。
- 4類 ..... 3mm以下の石英(多量)と長石(少量)を含み、0.5mm以下の黒雲母と3mm以下の片岩を含んでいる。
- 5類 ..... 3mm以下の石英(多量)と長石(少量)を含み、0.5mm以下の角閃石を少し含んでいる。

なお、黒雲母と火山ガラスの含有量が土器により異なっており、目安的な定量的表記ができなかった。

以上の砂粒分類より、1類、2類には、花崗岩の岩片が含まれているものもあった。従って、1類、2類は花崗岩起源の粘土と考えられることから遺跡周辺で生産されたものと推定される。また、4類、5類は遺跡周辺にはみられない砂粒が観察され、他地域からの搬入と考えられる。3類は、産地は不明であるが火山ガラスが多く含まれている土器である。また貝塚出土土器の時期別などによる砂粒分類の量的な比較に関しては、今回十分に検討することができなかった。ただ砂粒観察した296点のう

ち、3類の土器は72点（24.3%）、4類、5類の土器は4点（1.3%）であった。今後、時期、文様などの違いでどのような胎土比率になるのか再検討する必要がある。以上分析結果のみの報告となつたが、非破壊分析による砂粒観察からも土器の生産地推定が推測できると考えられる。今後は今回観察できなかつた他の時期の試料や3類、4類、5類の土器がどの地域から持ち込まれたものなのか。また他の遺跡出土土器との比較など課題は多く検討していきたい。

この分析の機会を与えていただいた田嶋正憲氏、岡山市埋蔵文化財センターの職員の方々には、大変お世話になった。末筆ではありますが、記して感謝いたします。

—参考文献—

白石 純 2006 「彦崎貝塚出土縄文時代前期土器の胎土分析」『彦崎貝塚－範囲確認調査報告書－』  
岡山市教育委員会.



写真1. 2類(前期Ⅲ群：円弧状刺突)

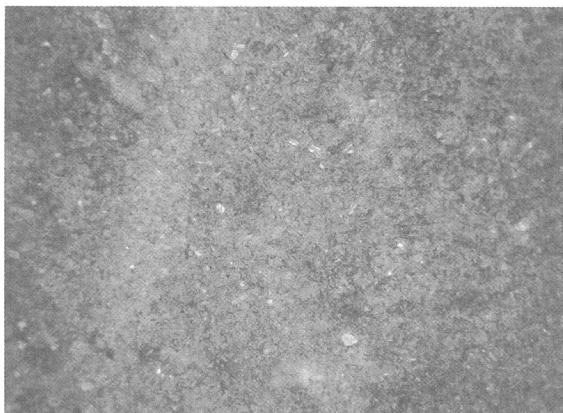


写真2. 3類(前期Ⅲ群：押引)

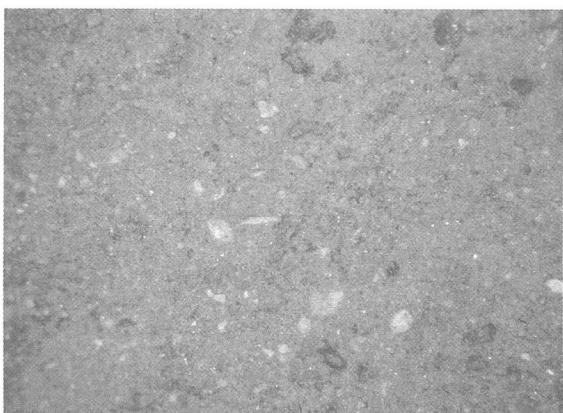


写真3. 4類(前期Ⅲ群：ナデ)



写真4. 5類(早期Ⅰ群)

第1図 実体顕微鏡写真

## 附章3 昭和十年十二月 備前児島郡灘崎村大字彦崎貝塚調査概報

佐藤 美津夫

### (一) 緒言

本貝塚の存在は、早く以前より知られていたが、遺物の採集された量が少ないので、拾ってかえり見たかったのであるが、私は必ず遺物は豊富であると考えて、着手して前後六回にわたって調査して相当の成績を修めた。左記の記録は、私の六回分の調査の概要である。

### (二) 貝塚の位置及び現状

宇野線彦崎駅に岡山方面より列車が入場の際に、車中より右手の山尾より少しく離れたる所にて、「男山若林酒釀場」と記した煉瓦製の煙突と酒倉を見るであろう。本貝塚は、この酒釀場の裏の台地上に築かれたもので、酒釀場も貝塚の一部であって、これら建築場によりて貝塚の主体部は切られている。(口絵参照)

### (三) 調査状況の概要

調査は、九月廿日より十一月十六日まで前後六回にわたって表面採集と発掘を行ったものである。

①貝層の露出部は、酒倉の裏手にあり、地下約一尺六寸にして厚さは、約二尺一、二寸前後ある。この貝層は、多くの小石を含んでいるが、これより採集した遺物は主として弥生式土器及び石鏸であった。

②発掘貝層は、台地最上部で、地下約一尺五寸、貝層の厚さは、約一尺五寸前後で、縄文式を下部に、弥生式を上部に発見した。採集した遺物は、縄文式土器、弥生式土器、土師・祝部類、石鏸、石錐、石槍、獸骨、魚骨等であった。

③貝塚のある一部において、人骨の発見される箇所あり。地表下約一尺にて人骨を得る。十月廿二日発掘の際は、青銅製品を備える人骨を発見した。

### (四) 自然的遺物

#### ①貝類

貝塚を編成する貝類の調査は、先史時代人の文化を考究するに最も関係の深いものであって、更に

又それら貝類の習性分布等によって、これらを食用とした貝塚人の生活状態を推知することができる。採集せられた貝類は、1. ハイガイ 2. カキ 3. ツメタガヒ 4. アカニシ 5. サザエ 6. ハマグリ 7. アサリ等にして、これら貝類中ハイガイが貝塚構成の主体をなしており、カキがこれに次いでいる。

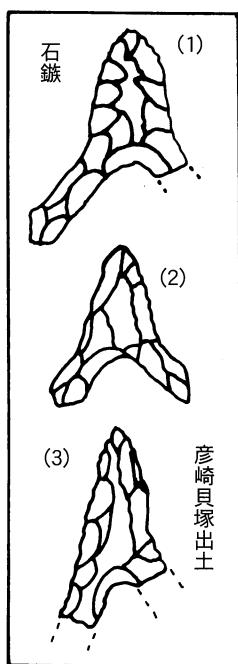
## ②人骨・獸骨・その他

人骨は、貝塚の東部地下約一尺の地点において発掘され、また、付近地表にも散乱しておる。獸骨類は、貝層中や褐色土層中にあり、また、地表面上にも散乱しておる。イノシシ等や魚類もある。

## (五) 人工的遺物 (図版第一参照)

### [I] 石器

a. 石鎌 表面採集、発掘に合わせて採集した完全品は、二十一本、破片五本、未製品・半製品無類で、完全品は、いずれも無柄型で、厚手の縄文系と薄手の弥生系がある。石質は、ほとんど粘板岩であるが、中には少數ながらにも砂岩、サヌカイト質のものあり。



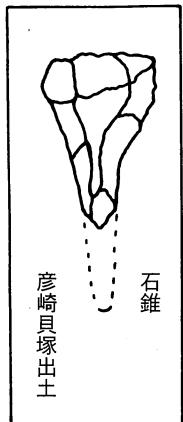
※原寸

特に注意すべきは、図に示したる一例のごとく、二等辺三角形に雁又の発達したのが多いことである。また、中には非常に雁又の大きなものもある。これは、何を物語るのであろうか。この貝塚人の文化のシンボルではなかったであろうか。

b. 石槍 一本有り。本品は製作稚雑なれども、石質は黒曜石たり。これは、珍発見にして県下においては、黒曜石製の石器は、石鎌が数個発見されたのみにして、石槍はこれが最初なり。黒曜石は、県内においては産するところ無し。故にこの石槍は、彦崎貝塚人が外部と交通していたという事を貴重考古品と言わねばならぬ。

c. 石錐 先端は、図のごとく欠損せるもの一本はあり。石質は粘板岩である。

d. 砥石 一個あり。小形なるをもって手砥と思われる。二面摩擦痕あり。粘板岩製なり。



### [II] 土器

#### a. 縄文式土器 (図版第二参照)

土質、色調も一般的縄文式土器異ならず、文様は無文と有文にとわかれ、ほとんど有文のみで、普通縄文・櫛目文である。縄文よりも櫛目文のほうが多く、この点、都窪郡豊洲村羽島貝塚（彦崎貝塚より約三里西方）に似ている。口辺部には、内持文様あり、採集個数六十七個（縄文三十三個・櫛目

文三十四個)。特質すべきは、縄文式土器にある櫛目文様が、弥生式土器、祝部式土器、土師土器に書いてあることであるが、この事柄については、今後の研究に待つとせねばならぬ。

b. 弥生式土器 (図版第三参照)

土質、色調もまた一般弥生式土器と異ならず、一般に薄手にして、文様は、無紋と有文とに別れており、有文は、櫛目文と箇先文のみである。これら弥生式土器は、貝層中、縄文式土器の上部において発見される。採集個数は、全部で百十七個 (内訳、無紋七十八個、有文三十九個) である。

c. 土師土器・祝部式土器 (図版第四参照)

弥生式土器の上部において発見される。両土器の色調、土質ともに両土器の特徴を存しており、両者ともほとんど櫛目文をもっている。ただ、祝部土器中には、格子文をもっているものがある。採集総数二十七個 (土師八・祝部十九個) である。

(III) 石器・土器以外の遺物 (図版第五参照)

a. ガラス

これは、長さ 8 センチ、幅 3 センチ 5 ミリ (最も大きな所) でガラス製作の残物である。遺憾なる事には、本品は表面採集よって得たものであるから、その所属年代は不明なれども、このガラス一面に、貝殻が付着しておる (長年風雨の為か底部にのみ存す) 点よりみて、縄文式あるいは、弥生式時代すなわちこの貝塚構成の時代において、この貝塚人によって、製作されたものと思われる。県下においては、古墳よりガラス製品及び残物類は発見されたことあれども、貝塚より発見されたのはこれが最初である。

b. 青銅製品 一個人骨とともに発見されたるものにして、図版のごときもので、耳飾ではないであろうかと思われる。

c. 貝製品 ハイガイを用いて、口辺部を磨いている、用途不明。

## (六) 結言

今までに、記述してきた事柄中、この彦崎貝塚の特質というものを摘出すれば、

①石鏸中、二等辺三角形に雁又の発達したものが多いこと。

②黒曜石製石槍の発見されたこと。

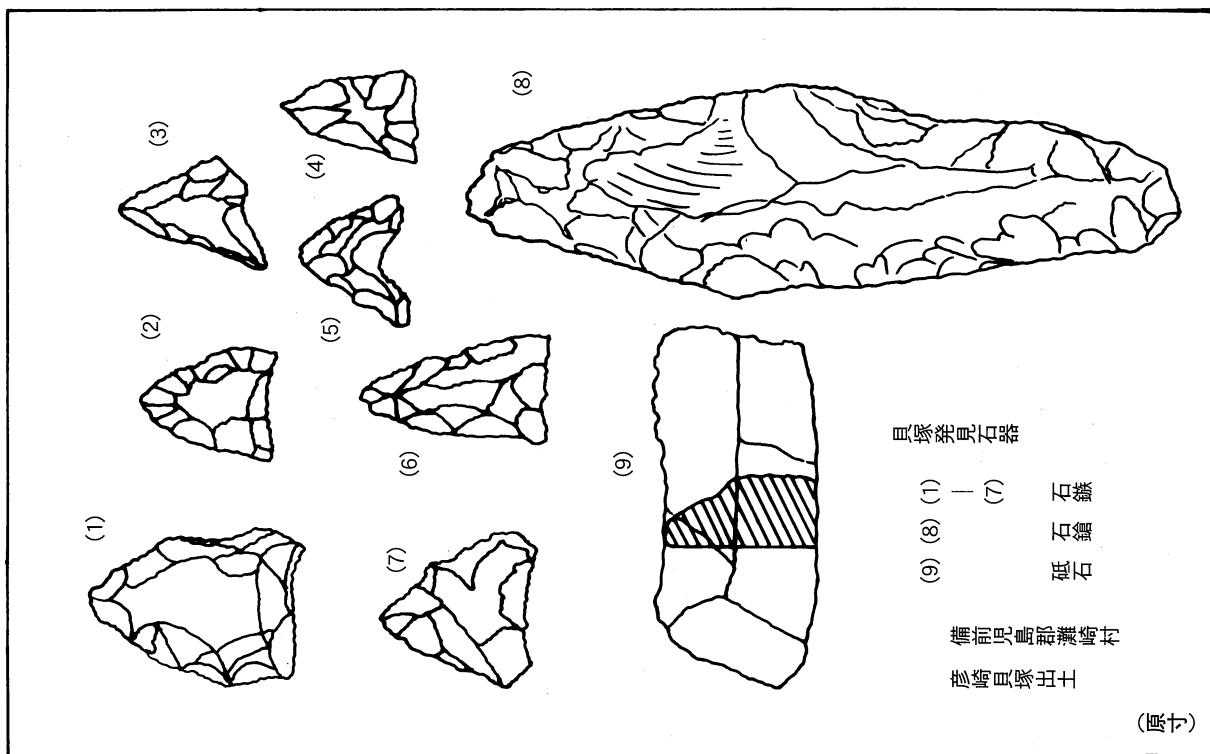
③縄文式土器より祝部式土器の時代まで櫛目文の続いておる事。

④ガラスをこの貝塚人が製作していたこと。

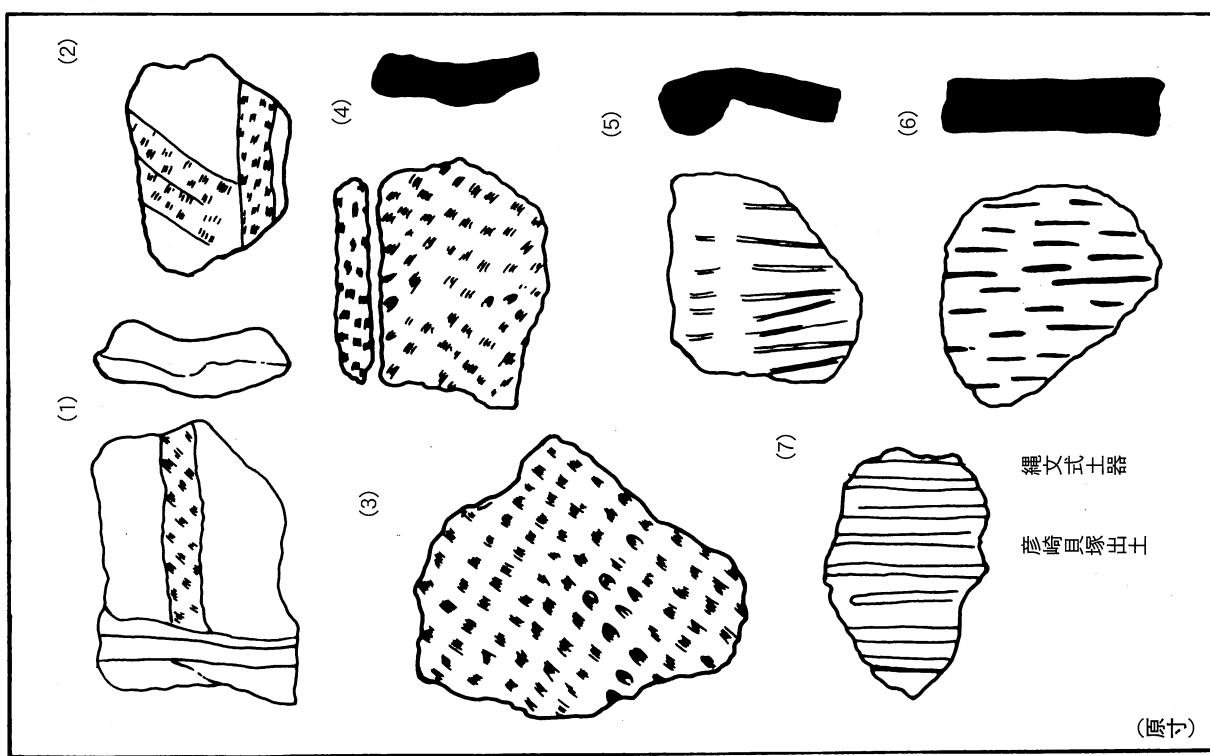
⑤青銅製品の出土し足ること。

で、最後に特質すべきは、①②④⑤によりこの貝塚人の文化及び外部との交通がいかに発達していたかが想像される。

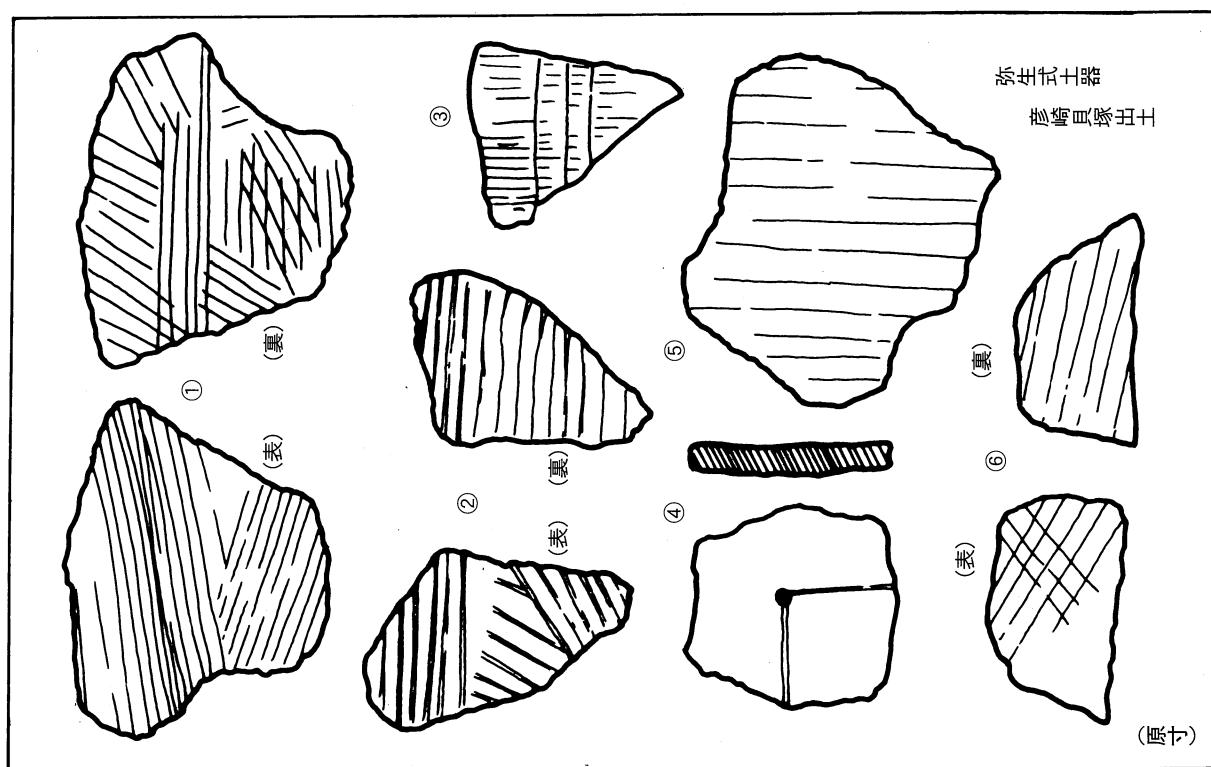
昭和十年十一月二十一日 著す



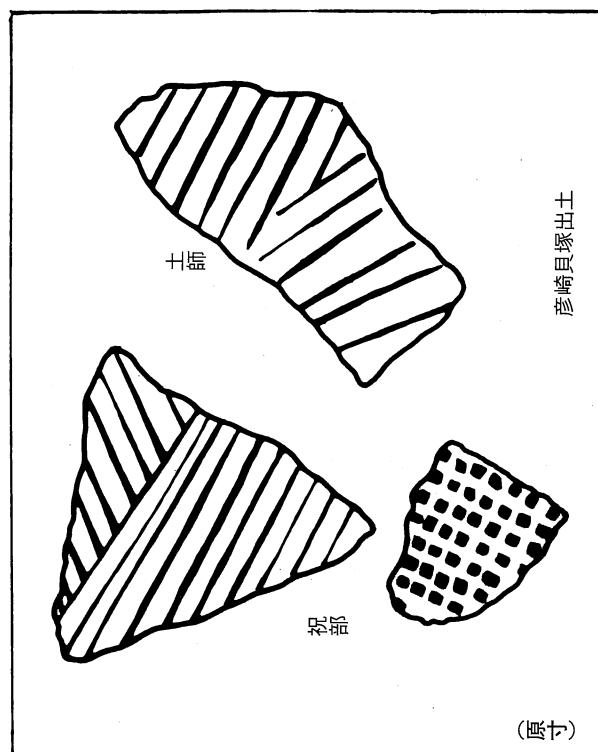
図版第一



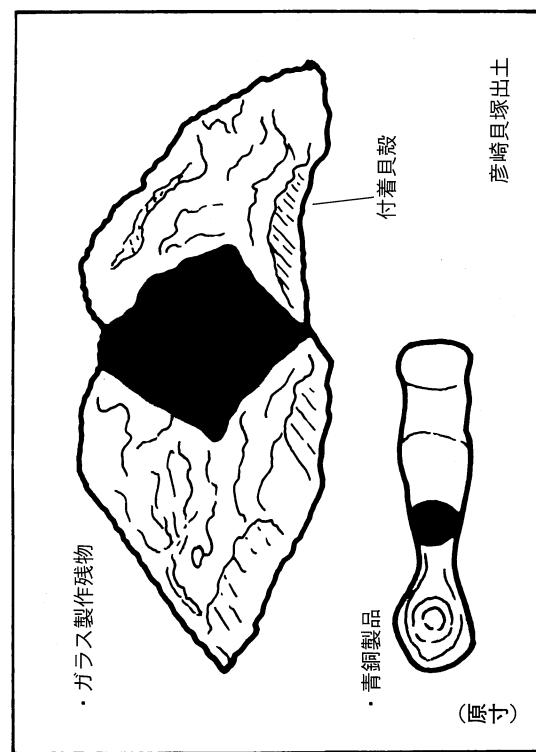
図版第二



図版第三



図版第四



図版第五

## 児島郡石器時代地名表（付録 佐藤美津夫編）

所 在 地	遺 跡	遺 物	備考(田嶋追加)
粒江村大字黒田	貝塚	弥生式土器	現、倉敷市
粒江村大字船元	貝塚	弥生式土器・人骨・縄文式土器	現、倉敷市
粒江村大字西ノ山	貝塚	弥生式土器	現、倉敷市
粒江村大字磯ノ森	貝塚	縄文式土器・石鏃・人骨	現、倉敷市
粒江村大字舟津原	貝塚		現、倉敷市
粒江村大字種松山	貝塚	弥生式土器・土錘・石鏃・石錘	現、倉敷市
灘崎村大字彦崎	貝塚	縄文式土器・弥生式土器・祝部・土師土器 石鏃・石錐・貝類・ガラス・砥石・青銅器 人骨・獸骨・黒曜石製石槍	現、岡山市
灘崎村大字里谷	包含層	土器・石鏃・石錐	現、岡山市
藤戸村大字藤戸	貝塚	弥生式土器	現、倉敷市
藤戸村大字天城	散布	石鏃・石斧・石錘・獸骨	現、倉敷市
藤戸村大字片原	貝塚		現、倉敷市
下津井村大字釜島	散布	縄文式土器・弥生式土器・石鏃	現、倉敷市
下津井村大字六口島	散布	縄文式土器・弥生式土器・石鏃	現、倉敷市
下津井村大字鶴羽山	散布	石斧・石鏃・石包丁・弥生式土器	現、倉敷市
日比町大字和田	貝塚	弥生式土器	現、玉野市
宇野町大字田井	包含層	(十種寺山と) 弥生式土器 弥生式土器(大門) 弥生式土器(城ヶ崎)	現、玉野市
山田村大字沼・出崎	散布	石斧・石槍・石鏃(有柄品)・土錘・鉄塊 弥生式土器・回転押型文・師樂式土器	現、玉野市
甲浦村大字貝殻山	貝塚	弥生式土器・石鏃	現、岡山市
甲浦村大字高島	散布	弥生式土器・銅劍?	現、岡山市

## ※編集者補注

原本は、昭和10年12月15日にB6版紐綴縫書サイズ、ガリ版刷で刊行された。限定15部の非売品であった。入手できたものは、故伊藤忠志氏（玉野市文化財保護委員）の所蔵のものを星島民記氏（旧灘崎町文化財保護委員長）が複写したものである。したがって、複写の過程で口絵は無かったのかもしれない。基本的には誤字・脱字以外は原文をそのまま起して再録した。なお、ガラスや青銅製といった表現があるがそれらはおそらくガラス質の強い黒曜石や鹿角製の腰飾を意味するものだと推定される。

## 写 真 図 版



彦崎貝塚の遠景

池葉須 1971『岡山県児島郡灘崎町大字彦崎貝塚調査概要』(私家版)より転載



埋まり行く吉備の穴海 (S21) (破線は彦崎貝塚、右が北)